

東京大学構内遺跡調査研究年報 6

二〇〇六年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 6

2006年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 6

2006年度

東京大学埋蔵文化財調査室



口絵 1 情報学環・福武ホール地点地下式麴室群



口絵 2 情報学環・福武ホール地点イルカ骨出土状況

例 言

1. 本年報は2006年4月1日から2007年3月31日までに、東京大学埋蔵文化財調査室が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告、および本調査室における研究成果をまとめたものである。
2. 該期に実施した発掘調査の報告は第1部に掲載した。なお工学系総合研究棟立坑工地点は2005年度の調査であるが、年報5の経緯から本年報に掲載した。
3. 各調査地点名に続く（ ）は、調査地点略称である。
4. 遺構の略号は独立行政法人奈良文化財研究所の方式をもとに、各調査地点ごとに通し番号を1から付した。
5. 本文の執筆者名は各文末に明記した。ただし第4部に関しては、各章の冒頭に執筆者名を明記している。
6. 本年報の作成は室員がこれにあたり、大成可乃が編集を行った。
7. 各キャンパスにおける調査一覧は大成可乃が、遺跡地図は香取祐一が作成した。
8. 本書に添付したCD-ROMには、遺構・遺物写真（.jpg形式）、観察表、組成表（.xls形式）、年報電子版（.pdf形式）を収録している。
9. 発掘調査にともなう図面、写真、出土文化財は、東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス・茨城県石岡市柿岡414東京大学工学系研究科附属柿岡教育研究施設内において、運用・保管している。

目 次

口 絵
例 言
目 次

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

東京大学構内遺跡調査一覧	9
工学系総合研究棟立坑工地点 (KOS05)	17
ベンチャープラザ地点 (HVP06)	33
情報学環・福武ホール地点 (HJF06)	41

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

農学部共同溝地点 (NK84)	71
総合研究博物館小石川分館地点 (KI)	151

第3部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

2006年度調査室事業概要	189
1. 発掘調査	189
2. 修復・保存・分析	189
3. 教育・普及	189
4. 資料の活用	190
東京大学埋蔵文化財調査室における遺跡の公開と保存の実践	191
医学部附属病院病棟地点 SD1103 築石の活用	198
2006年度室員活動内容	200
運営委員会規則	203
調査室規則	204
調査室組織表 (2006年度)	205

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要6

東京大学本郷構内の遺跡 薬学系総合研究棟地点 (2002年度) で検出した医学部薬局の基礎 SB10 についての考察	209
縦長の石製印判の用途	213

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

東京大学構内遺跡調査一覧

工学系総合研究棟立坑工地点 (KOS05)

ベンチャープラザ地点 (HVP06)

情報学環・福武ホール地点 (HJF06)

東京大学構内遺跡調査一覧

表 1 本郷地区

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名 (略称)	調査種別	日付	面積 (㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	1	1984	山上会館 (U)	事前	1984.4.1 ~ 85.6.30	1500	西田泰民・ 谷豊信 小川静夫	『東京大学本郷構内の遺跡4 山上会館・ 御殿下記念館地点』
本郷	2	1984	法学部4号館・文学部3号館 (文) (法)	事前	1984.4.1 ~ 85.3.31	2500	大塚達郎	『東京大学本郷構内の遺跡2 法学部4号 館・文学部3号館建設地遺跡』
本郷	3	1985	御殿下記念館 (G)	事前	1985.7.29 ~ 87.6.30	6000	寺島・ 小川静夫・ 倉林真砂斗	『東京大学本郷構内の遺跡4 山上会館・ 御殿下記念館地点』
本郷	4	1984	医学部附属病院 (病中) (エネセン) (給水) (共同溝)	事前	1984.10.1 ~ 87.3.31	7700	藤本強・小川 望	『東京大学本郷構内の遺跡3 医学部附属 病院地点』
本郷	5	1984	理学部7号館 (理D)	事前	1985.2.1 ~ 10.8	750	羽生淳子	『東京大学本郷構内の遺跡1 理学部7号 館』
本郷	6	1986	バス通り上水 (上水)	立会	1986.5.12 ~ 7.20	-	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	7	1987	タンデム棟 (タンデム)	試掘	1988.2.15 ~ 17	28	成瀬・武藤	江戸・古墳
本郷	8	1987	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15 ~ 16	-	武藤	江戸
本郷	9	1985	農学部家畜病院 (VMC)	試掘	1985.8.1 ~ 26	87	西田泰民	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	9	1989	農学部家畜病院 (VMC)	事前	1990.1.31 ~ 3.14	1040	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	10	1990	医学部附属病院外来診療棟 (HG)	事前	1990.6.27 ~ 91.2.21	5500	成瀬・堀内 武藤	『東京大学本郷構内の遺跡5 医学部附属 病院外来診療棟地点』
本郷	11	1991	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12 ~ 13	7	堀内	遺構・遺物なし
本郷	12	1992	農学部図書館 (FAL)	試掘	1992.10.21	4	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	12	1992	農学部図書館 (FAL)	事前	1993.3.9 ~ 3.25	408	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	13	1991	農学部7号館A棟I期 (FA792)	試掘	1991.1.6 ~ 7	8.25	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	13	1992	農学部7号館A棟I期 (FA792)	事前	1992.10.6 ~ 11.16	1170	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	14	1992	工学部14号館 (工14)	事前	1992.11.26 ~ 93.2.23	1785	成瀬・堀内	『東京大学本郷構内の遺跡7 工学部14号 館地点』
本郷	15	1988	薬学部新館 (YS)	試掘	1988.8.3 ~ 5		寺島	江戸
本郷	15	1992	薬学部新館 (YS)	事前	1992.10.21 ~ 12.18	1300	堀内・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	16	1993	農学部7号館A棟II期 (FA792)	試掘	1993.4.27	15	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	16	1993	農学部7号館A棟II期 (FA793)	事前	1993.11.3 ~ 26	1000	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	17	1993	工学部1号館 (FE1)	試掘	1993.5.25	16	武藤	『東京大学本郷構内の遺跡6 工学部1号 館地点』
本郷	17	1993	工学部1号館 (FE1)	事前	1993.12.6 ~ 94.2.10	616	武藤	『東京大学本郷構内の遺跡6 工学部1号 館地点』
本郷	18	1993	総合研究棟 (SK)	試掘	1993.4.28	15	武藤	江戸
本郷	18	1993	総合研究棟 (SK)	事前	1993.11.18 ~ 12.28	1007	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	19	1993	医学部附属病院看護婦宿舎 (HN)	事前	1993.8.4 ~ 94.1.17	746	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	20	1993	総合研究資料館 (TUM)	事前	1994.2.14 ~ 4.8	600	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	21	1993	医学部附属病院MRI-CT棟 (MRI)	事前	1994.1.18 ~ 3.12	400	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	22	1994	山上会館龍岡門別館 (HF)	試掘	1994.4.15	3	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	22	1994	山上会館龍岡門別館 (HF)	事前	1994.8.17 ~ 10.17	593	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟I期 (HW I)	事前	1994.4.21 ~ 11.16	2716	成瀬・原 鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	23	1994	医学部附属病院病棟II期 (HW II)	事前	1995.1.31 ~ 96.5.31	3380	成瀬・原 大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	1994	医学部教育研究棟1次 (医研1)	試掘	1994.5.18 ~ 19	166	武藤・鮫島	江戸
本郷	24	1994	医学部教育研究棟1次 (医研1)	事前	1994.11.17 ~ 95.4.28	1188	堀内・鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	1996	医学部教育研究棟2次 (医研2)	事前	1997.3.10 ~ 4.25	416	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	1998	医学部教育研究棟3次 (医研3)	事前	1998.11. ~ 12.25	180	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	24	2002	医学部教育研究棟4次 (医研4)	事前	2002.9.3 ~ 12.25	631	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	25	1994	医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場 (HND)	事前	1995.1.30 ~ 3.3	45	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	26	1994	法文十字路外灯	立会	1994.9.5	-	成瀬・鮫島	江戸
本郷	27	1994	理学部1号館	立会	1994.10.3～18	-	寺島	遺構・遺物なし
本郷	28	1995	薬学部資料館(FPS)	事前	1995.7.24～9.1	600	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
本郷	29	1995	大型計算機センター電気機室設備(ACC)	事前	1995.7.18～31	78	鮫島	近代・江戸
本郷	30	1995	工学部全径間風洞実験室支障ケーブル移設その他(AFC)	事前	1995.8.22～9.22	63	鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	31	1995	ATMネットワーク施設整備	立会	1995.11.20～24	-	武藤・堀内 鮫島・原	江戸
本郷	32	1994	医学部附属病院看護婦宿舍電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2	-	原	遺構・遺物なし
本郷	33	1995	地震研究所テレメタリング観測施設(EQL)	試掘	1995.10.18	6	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	33	1996	地震研テレメタリング地震観測施設(EQL)	事前	1996.4.15～5.2	360	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	34		野球グラウンド	立会		-	寺島	
本郷	35	1993	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28	-	成瀬	江戸
本郷	35	1994	経済学部前路面陥没	立会	1994.5.14	-	成瀬	江戸
本郷	36	1993	農学部ガス管理設	立会	1993.10.15	-	成瀬	江戸
本郷	37	1994	屋外環境整備等工事籠岡門～附属病院	立会	1994.10.13	-	成瀬・原	江戸
本郷	38	1994	医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	39	1994	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10	-	成瀬	江戸
本郷	40	1996	工学部全径間風洞実験室(AFL)	事前	1996.1.22～3.7	252	鮫島	近代・弥生・縄文
本郷	41	1996	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(ベンチャー)	事前	1996.4.15～6.20	626	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	42	1996	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4	-	成瀬	江戸
本郷	43	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK1)	事前	1996.5.12～5.18	20	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	44	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK2)	事前	1996.5.20～6.28	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	45	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK3)	事前	1996.5.20～6.28	179	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	46	1994	籠岡門門衛所移築	立会	1994.8.24	-	成瀬	江戸
本郷	47	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK4)	事前	1996.5.20～6.28	3	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	48	1996	医学部附属病院看護婦宿舍Ⅱ期(HNⅡ)	事前	1996.11.5～97.1.31	525	原・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	49	1997	外灯整備工事1	立会	1997.4.13～30	-	原	江戸
本郷	50	1997	外灯整備工事2	立会	1997.4.13～30	-	原	江戸
本郷	51	1997	外灯整備工事3	立会	1997.4.13～30	-	原	江戸
本郷	52	1997	農学部(21世紀館)木質ホール	試掘	1997.7.14～18	50	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
本郷	53	1998	工学部強風シミュレーション風洞実験室(AFⅣ)	試掘	1998.12.22～23	30	原	江戸
本郷	53	1998	工学部強風シミュレーション風洞実験室(AFⅣ)	事前	1999.1.7～25	300	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	54	1998	総合研究棟(文・経・教・社研)(HES99)	試掘	1999.1.6～8	28	堀内	江戸
本郷	54	1999	総合研究棟(文・経・教・社研)(HES99)	事前	1999.5.24～11.2	1000	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期(2中Ⅰ)	試掘	1999.7.14	3	成瀬	江戸
本郷	55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅰ期(2中Ⅰ)	事前	1999.10.12～00.2.25	1270	成瀬・原 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	55	2000	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期(2中Ⅱ)	試掘	2000.10.2～16	6	成瀬	江戸・古代
本郷	55	2001	医学部附属病院第2中央診療棟Ⅱ期(2中Ⅱ)	事前	2001.7.23～02.12.19	2747	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	56	1999	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16～17	16	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	57	1999	環境安全センター	立会	2000.1.17	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	58	1999	医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期(YM)	試掘	2000.2.3～4	30	原	江戸
本郷	58	1999	医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期(YM)	事前	2000.2.5～3.31	300	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
本郷	59	2000	共同溝(KK)	事前	2000.7.3～7.12 10.11 ～10.14 01.2.21～2.28	900	原	江戸
本郷	60	2000	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK6)	事前	2000.9.21～11.14	200	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	61	2001	武田先端知ビル(TSA、TSB)	事前	2001.6.4～8.7、 11.28～12.28	740	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	62	2001	農学部総合研究棟(NSK01)	試掘	2001.3.27	100	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	62	2001	農学部総合研究棟(NSK01)	事前	2001.9.21～10.19	1800	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	63	2002	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5～6	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	64	2002	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7	-	成瀬	江戸

東京大学構内遺跡調査一覧

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
本郷	65	2002	法学系総合研究棟(LS03)	試掘	2002.3.18～20	136	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	65	2002	法学系総合研究棟(LS03)	事前	2003.2.17～4.18	946	成瀬・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66	2002	薬学系総合研究棟	試掘	2002.3.17～20	63	原	江戸
本郷	66	2002	薬学系総合研究棟1期(YGS02)	事前	2002.8.1～03.2.28	1260	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	66	2004	薬学系総合研究棟2期1次(YGS04I)	事前	2004.7.26～8.4	90	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	66	2004	薬学系総合研究棟2期2次(YGS04II)	事前	2004.11.17～05.2.4	450	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	67	2002	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9～17	32	堀内	近代・江戸・古墳・弥生・縄文
本郷	68	2002	インキュベーション施設(INC)	試掘	2002.6.17～19	38	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	68	2002	インキュベーション施設(INC)	事前	2003.3.6～6.7	1051	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
本郷	69	2002	地震研仮設建物	立会		-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	70	2003	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28	-	堀内	遺構・遺物なし
本郷	71	2004	地震研究所総合研究棟(HEQ04)	事前	2004.8.30～05.2.28	1474	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	72	2004	理学部1号館前(SC1)	事前	2004.11.29～12.3	32	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
本郷	73	2004	医学部附属病院総合研究棟・疾患生命工学センター	試掘	2004.11.29～12.1	24	成瀬	江戸・古墳
本郷	74	2005	医学部附属病院立体駐車場	試掘	2005.07.12～14	40	堀内	江戸・古墳
本郷	75	2005	工学系総合研究棟立坑(KOS05)	事前	2005.9.13～14	17	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	76	2005	ベンチャープラザ(HVP06)	試掘	2005.12.5～6	36.8	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	77	2005	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5.3	大成	江戸
本郷	78	2005	情報学環・福武ホール(HJF06)	試掘	2006.2.13～15	152	大成・成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	76	2005	ベンチャープラザ(HVP06)	事前	2006.3.6～5.16	760	追川・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	78	2006	情報学環・福武ホール1次(HJF06)	事前	2006.6.5～12.8	1766	大成・成瀬 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	79	2006	農学部コイトロ温室	立会	2007.1.16	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	78	2006	情報学環・福武ホール2次(HJF06)	事前	2007.2.5～23	1766	大成・成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
本郷	80	2006	工学部もの作り実験工房	立会	2007.2.22	-	成瀬	遺構・遺物なし
本郷	81	2006	経済学部学術交流研究棟	試掘	2007.2.27～3.1	50	成瀬・大成	近代・江戸
本郷	84	1984	農学部共同溝(NK84)	事前	1984.7.9～23	50	今村啓爾	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収

表2 駒場I地区

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒場I	1	1992	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	3	1993	数理学研究棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
駒場I	2	1993	教養学部情報教育棟(FGE)	事前	1993.8.10～10.20	940	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
駒場I	4	1994	数理学研究棟擁壁工事	立会	1995.1.20～27	-	武藤	近代
駒場I	5	1994	数理学研究棟関連東電マンホール増設・管路新設工事	立会	1995.1.24～4.12	-	武藤	平安・縄文
駒場I	8	1995	数理学研究棟ガス埋設工事	立会	1995.5.17～18	-	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	8	1995	数理学研究所水道埋設工事	立会	1995.6.27～28	-	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	6	1995	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	7	1995	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	9	1996	数理学研究科II期棟(数理)	事前	1996.12.12～97.2.6	1160	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
駒場I	10	1997	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
駒場I	11	1999	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
駒場I	12	1999	教養学部図書館(KL)	試掘	1999.7.26～8.3	200	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
駒場I	12	2000	教養学部図書館(KL)	事前	2000.7.27～8.30	1778	大成・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
駒場I	13	2001	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～25	60	堀内	遺物・遺構なし
駒場I	14	2002	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～26	53.4	大成	遺物・遺構なし
駒場I	15	2002	教養学部コミュニケーションプラザ	試掘	2002.11.5～15	563	成瀬	縄文
駒場I	16	2002	国際学術交流棟(KGK)	試掘	2003.2.10～2.14	144	追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒場I	16	2003	国際学術交流棟(KGK)	事前	2003.5.16～7.9	620	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
駒場I	15	2002	教養学部コミュニケーションプラザ和館	試掘	2004.12.6～7	80	成瀬	遺構・遺物なし
駒場I	15	2005	教養学部コミュニケーションプラザ(KCP)	事前	2005.4.22～7.21	4327	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

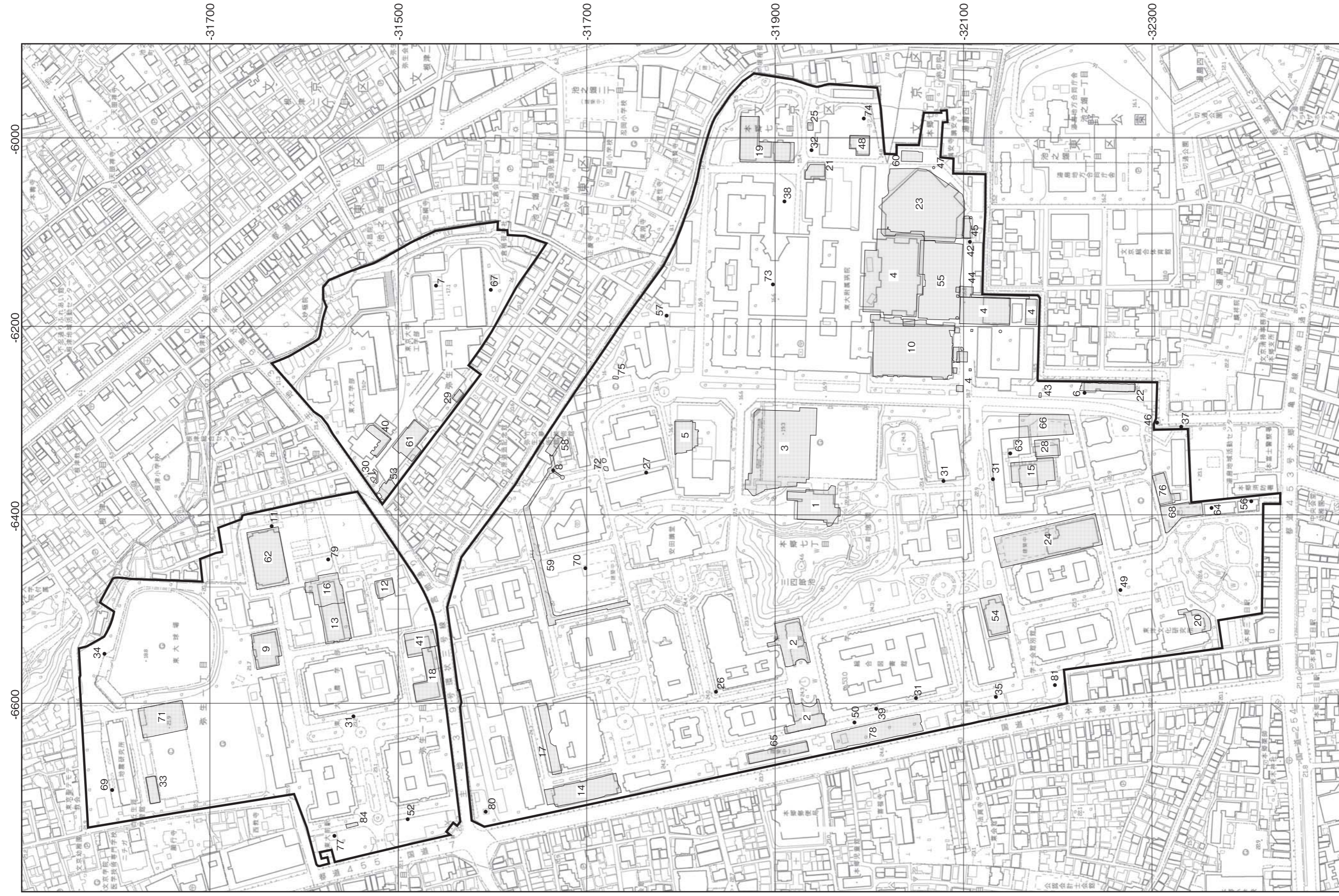
地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
駒場Ⅰ	17	2005	教養学部5号館他改修工事	立会	2005.08.10・17・19	300	大成	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	18	2006	教養学部8号館エレベーター敷設工事	立会	2006.10.20	-	堀内	遺構・遺物なし
駒場Ⅰ	19	2006	教養学部ロッカー棟	試掘	2006.11.13～16	21	堀内	遺構・遺物なし

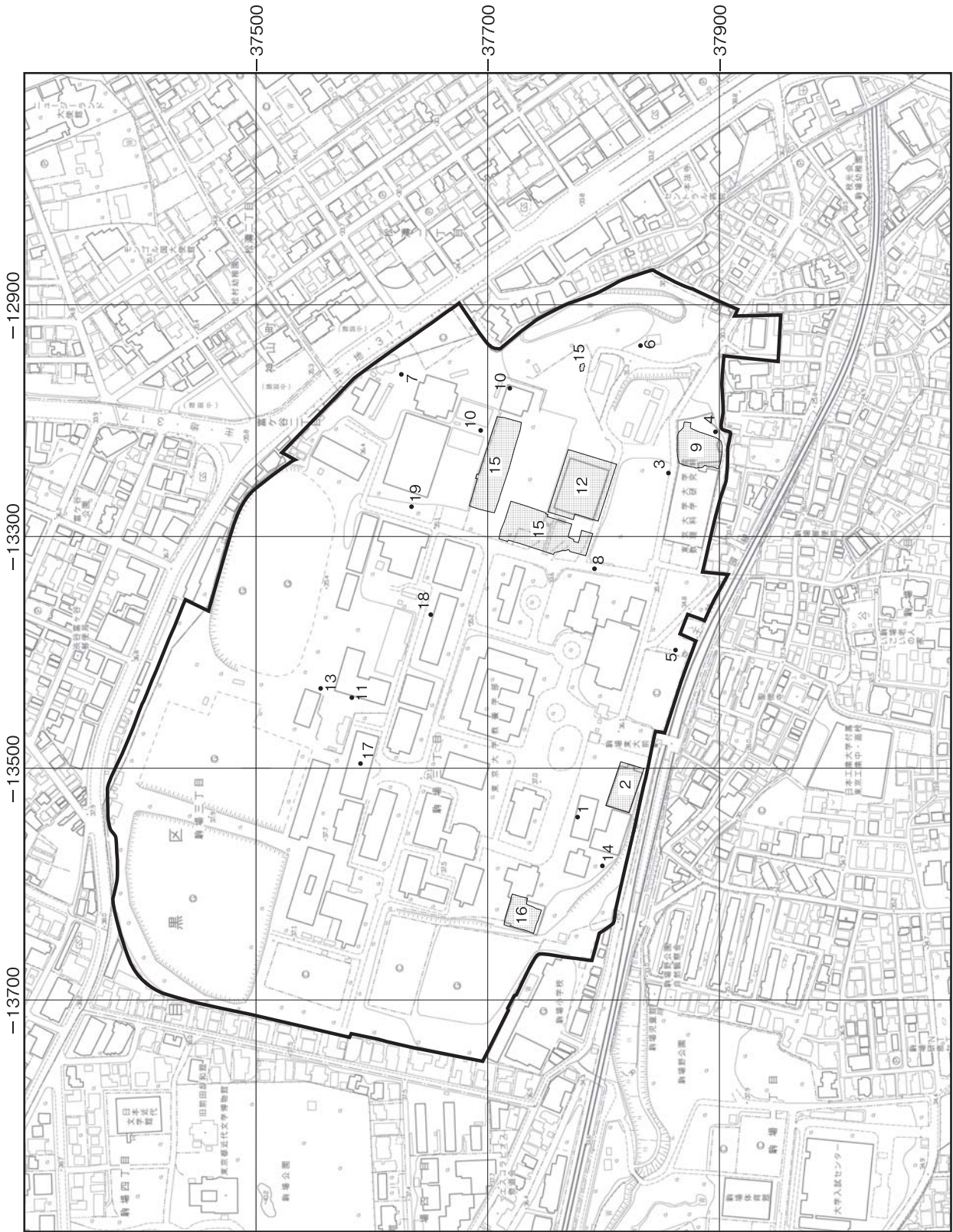
表3 駒場Ⅱ地区

地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	遺構・遺物の年代
駒場Ⅱ	1	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	2	1996	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	3	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～25	20	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	4	1998	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	5	1998	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
駒場Ⅱ	6	1998	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13～15	50	大成	遺構・遺物なし
駒場Ⅱ	7	2002	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
駒場Ⅱ	8	2003	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし

表4 その他の地区

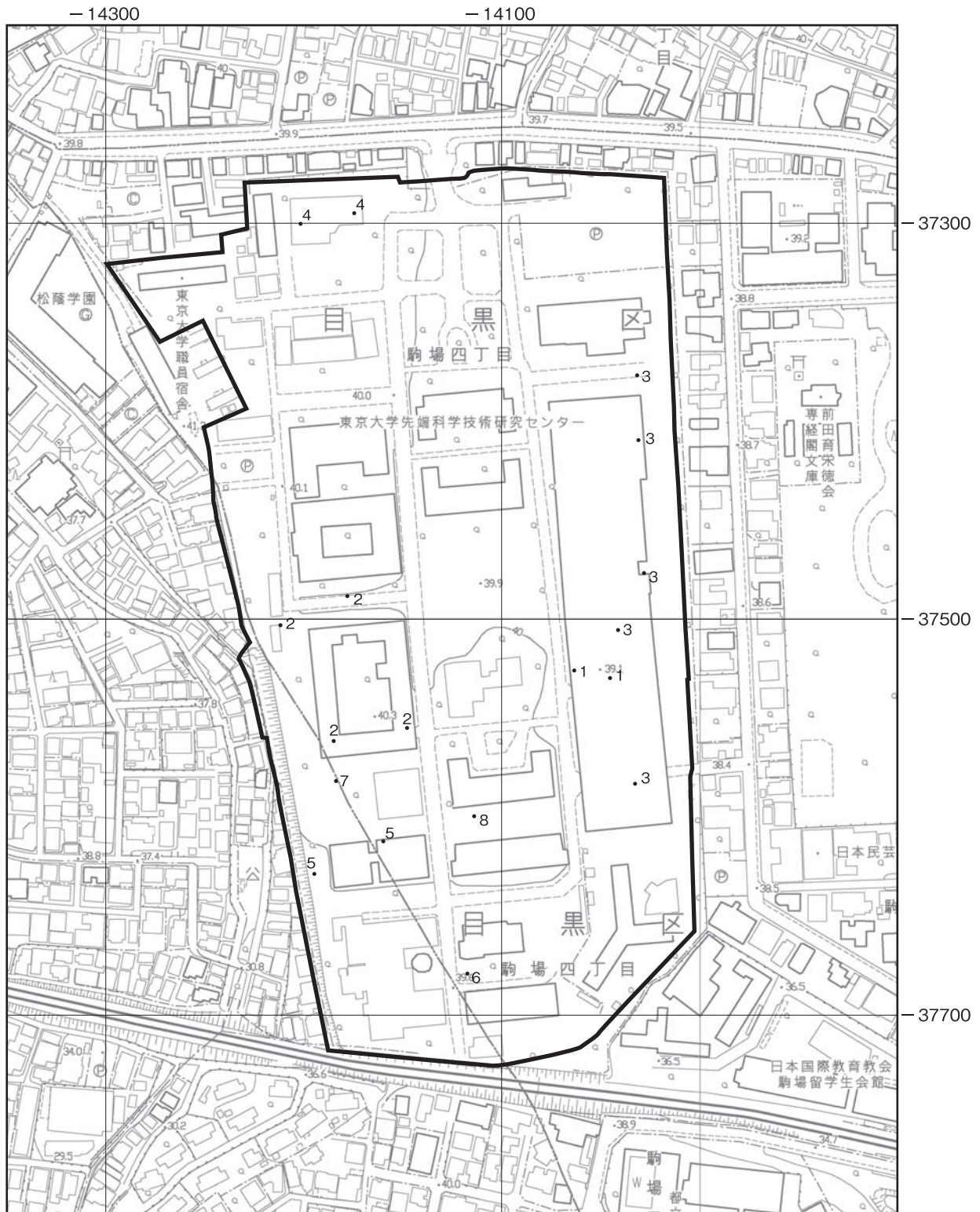
地区	番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
三浦市		1988	理学部附属臨海実験所新研究棟[新井城]	試掘	1988.7.4～8.2	80	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
文京区		1991	理学部附属植物園研究温室Ⅰ期[原町遺跡](BG)	試掘	1991.7.24～25	5	武藤	縄文
文京区		1991	追分学寮	試掘	1991.8.23～24	16	成瀬	江戸
豊島区		1991	豊島学寮	試掘	1991.8.26～30	29	武藤	遺構・遺物なし
三鷹市		1991	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]	試掘	1991.9.15～30	350	堀内・成瀬	旧石器
三鷹市		1991	井の頭学寮	試掘	1991.9.30～10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
港区		1991	白金学寮	試掘	1991.11.25～26	10	武藤	江戸
文京区		1992	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期[原町遺跡](KO)	事前	1992.5.25～6.6	200	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
三鷹市		1992	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅰ期(三广1)	事前	1992.6.29～9.19	2100	堀内・成瀬	江戸・縄文・旧石器
港区		1992	医科学研究所看護婦宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
三浦市		1992	理学部附属臨海実験所新研究棟[新井城](MMBS)	事前	1992.7.20～9.25	1700	武藤・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
三浦市		1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設工事	立会	1993.4.20～23	-	武藤	中世
三浦市		1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築工事	立会	1993.5.7～8	-	武藤	中世
三鷹市		1993	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅱ期(三广2)	事前	1993.5.28～11.8	3280	堀内	縄文・旧石器
三鷹市		1994	三鷹国際交流会館[長嶋遺跡]Ⅱ期(三广3)	事前	1994.5.13～8.17	1950	堀内・鮫島	江戸・縄文・旧石器
千葉市		1994	検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡](GMB)	確認	1994.7.11～18	930	堀内・鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
千葉市		1994	検見川運動場体育セミナーハウス[玄藩所遺跡](GMB)	事前	1994.7.19～8.21	496	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
港区		1994	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
港区		1995	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
柏市		1996	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28～29	125	武藤	遺構・遺物なし
港区		2000	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟(SBS00)	事前	2000.10.27～01.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
文京区		2000	総合研究博物館小石川分館増築(KI)	事前	2000.11.27～12.4	70	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
文京区		2002	農学部生命科学科研究科樹木実験圃場・根圏観察室(KNK)	試掘	2002.9.2	21	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
文京区		2002	農学部生命科学科研究科樹木実験圃場・根圏観察室(KNK)	事前	2002.9.24～10.7	91	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収





日本測地系2000

駒場 I 地区調査地点



日本測地系2000

駒場Ⅱ地区調査地点

本郷 75

工学系総合研究棟立坑工地点（KOS05）発掘調査略報

所在地 東京都文京区本郷7丁目2

調査期間 2005年9月13日～9月14日

調査面積 17㎡

調査担当 原 祐一

整理期間 2005年9月15日～9月30日

発掘調査、整理作業参加者（敬称略）

石塚博康 上野登美子 高木明 土田泰人 寺本実季子 堀内隆人 矢野悦子

本報告は、東京都文京区本郷7丁目2に所在する、東京大学（本郷）工学系総合研究棟新営工事立坑工地点（2005年度）の概要報告である。遺跡の略称は『KOS05』である。

発掘調査は東京大学が予定する東京大学（本郷）工学系総合研究棟新営工事（仕上）（その4）立坑建設に伴うものである。発掘調査は、原祐一（東京大学埋蔵文化財調査室）の指導で、清水・戸田・鴻池特定建設工事共同企業体、機動建設工業株式会社、加藤建設株式会社が行った。整理作業は原祐一の指導で加藤建設（株）が行った。遺物の写真撮影は青山正明（東京大学埋蔵文化財調査室）が行った。本略報は原祐一が編集した。本略報は中間報告であり記載された内容は、周辺遺跡との比較検討、絵図、古文書等の検討によって、修正する場合がある。最終的に年報、小論等を経て本報告書を刊行する。

謝辞

調査にあたり、以下の個人、企業、組織にご協力いただいた。

香取祐一氏・堀内秀樹氏（東京大学埋蔵文化財調査室）、宮崎勝美氏（東京大学史料編纂所）、清水・戸田・鴻池特定建設工事共同企業体、機動建設工業株式会社、加藤建設株式会社、文京区教育委

第1表 調査の概要

遺跡名	本郷台遺跡群	遺跡番号	区 - 47
地点名	東京大学本郷構内の遺跡 工学系総合研究棟新営工事立坑工地点（2005年度）		
略称	KOS05		
1. 所在地	東京都文京区本郷7-3-1		
2. 調査の内容・期間	本調査 2005年9月13日～同年9月14日 整理作業・中間報告作成 2005年9月15日～同年9月30日		
3. 調査主体	国立学校法人東京大学埋蔵文化財調査室室長 今村啓爾		
4. 調査担当者	国立学校法人東京大学埋蔵文化財調査室 原 祐一		
5. 調査面積	17㎡		
6. 遺跡の種類	武家屋敷跡		
7. 調査の原因	東京大学建物新営に伴う発掘調査		
8. 遺跡の立地	台地		
9. 遺跡の時代	近世		
10. 遺構の概要	近世：地下室3基、井戸1基、土坑1基、他3基 計8基		
11. 出土遺物の名称・数量	江戸時代：陶磁器・土器他 12箱		
12. 遺物の保管場所	東京大学構内 埋蔵文化財調査室		
13. 特記事項	加賀藩屋敷跡		
14. 報告書刊行予定	未定 中間報告刊行 2005年9月30日		
15. 64条4項の通知番号	17 教生計理 第904号 平成17年7月26日		

員会、東京大学工学系研究科、東京大学施設部建築課

I. 経緯、方針、安全管理、発掘調査・整理作業の概要

1. 経緯

発掘調査は東京大学が予定する東京大学（本郷）工学系総合研究棟新営工事（仕上）（その4）立坑建設に伴うものである。当初、立会い調査終了後、調査体制を整えて発掘調査を行う予定であったが、立会い調査の時点で、遺構数が少なく短期間で調査を行うことが可能であると判断し、埋蔵文化財調査室、施設部建築課との協議の結果、立会い調査を本調査に切り替え、発掘調査を工事と同時並行で行うことになった。

2. 方針

調査対象は、東京大学史の観点から、明治時代も対象とする。また、明治時代の遺物についても、技術史、産業考古学の観点から出土遺物として取り扱う。

3. 安全管理

発掘調査は、作業員の安全優先で行った。発掘現場内の掘削深度など安全に関する点については、機動建設工業株式会社や加藤建設（株）と協議し進め、やむを得ない場合を除いて、土木工事の安全基準に従った。今回の調査では無事故で調査を終了することができた。

4. 発掘調査・整理作業の概要

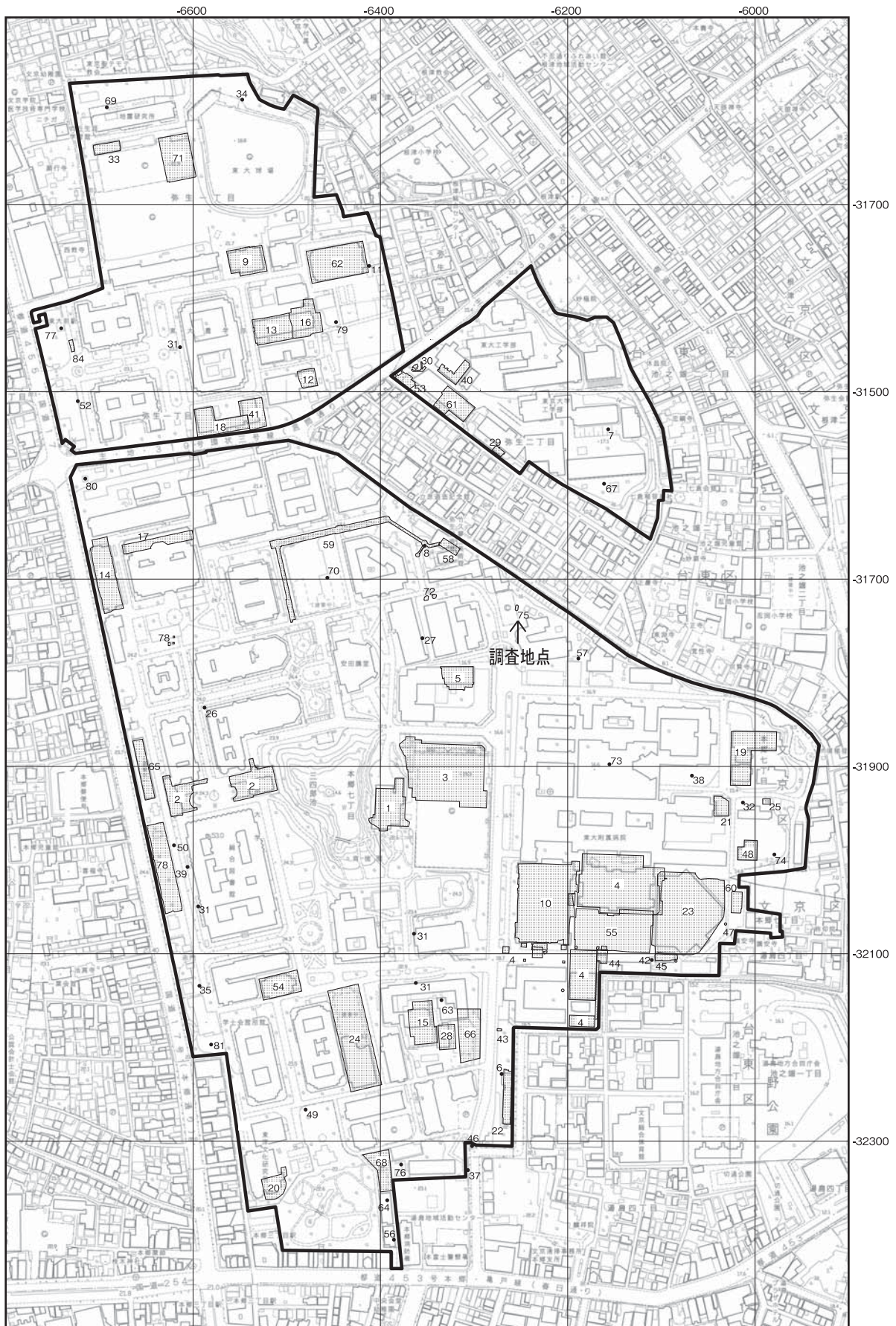
発掘調査、整理作業は以下の工程（第2表）で行った。図面編集作業は現場図面の整理、光波測量図の編集、土層断面図のデジタルトレースが主な作業である。出土遺物は埋蔵文化財調査室で保存している（第3表）。

第2表 発掘調査・整理作業日程

作業内容	9月																	
	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
発掘調査	■	■																
遺跡測量		■																
遺物洗浄								■										
遺物注記									■	■								
遺物接合									■	■	■							
遺物写真																	■	■
図面編集・ 報告書編集									■	■	■	■			■	■	■	■

第3表 遺物収納箱番号一覧

天箱 NO.	遺構番号	内容	天箱 NO.	遺構番号	内容
1	SU01～03	陶磁器、土器他 抽出遺物	7	表土	陶磁器、土器破片
2	SK05	陶磁器、土器他 抽出遺物	8	SK05	瓦破片
3	SK05	陶磁器、土器他 抽出遺物	9	SK05	瓦破片
4	SU01～03	陶磁器、土器破片	10	SK05	瓦破片
5	SK05	陶磁器、土器破片	11	SK05	瓦破片
6	SK05	陶磁器、土器破片			



第1図 本郷地区遺跡地図

II. 事実記載

1. 概要

遺構検出面の標高は15.4m、現地表面から-1.5mであった。地下室、井戸、土坑等、8遺構を検出し、遺物は遺物収納箱11箱分が出土した。調査の結果、2面の生活面を検出した。A面は火災の瓦礫に覆われた硬化面で、砂利を用いて硬く突き固められていた。B面は地山直上で確認された硬化面で、砂利と土を用いて硬く突き固められており、両面とも北方向と東方向へ傾斜していた。

出土遺物については、遺跡の状況から数量による分析を行うことはできないが、陶器の割合が多く、日常雑器の割合が多い傾向が見て取れた。火災の瓦礫層から陶磁器類が出土したが、量が少ないため火災の年代を明確にするには資料不足である。今後、周辺部の遺跡との検討を行い、年代について明確にしていきたい。

2. 遺構

SU01 遺構 SU01 遺構は地下室である。南側をSU02 遺構、東側をSU03 遺構に切られている。北壁に棚状の掘り込みと段を確認した。

SU02 遺構、SU03 遺構 SU02 遺構、SU03 遺構は地下室である。SU01 遺構の埋土崩落を防ぐために板材を用いた壁があったと考えられる。

SU02 遺構の底部、壁面際から、板壁を固定するための柱跡を検出した。柱は15cm（三寸）角の角材で、壁際に柱を配置する土坑を掘削し、柱を壁際に配置し、ローム土で柱と土坑の隙間を固く突き固め柱を固定していた。

SU03 遺構は安全優先したため底部まで掘削を行っていない。そのため、板壁の固定方法は明確でないが、SU02 遺構と異なり、壁面と板材の間にはロームブロックを主体とした土が充填されていた。

SE04 遺構 SE04 遺構は井戸である。遺構の上層は火災の瓦礫を含む覆土であった。安全優先したため底部の遺物採集を行っていないことから、井戸の構築廃絶時期は明確でない。

SK05 遺構 SK05 遺構は土坑である。平面形は不定形で有る事、遺物が多く出土していることから一時的なごみ穴と考えられる。

SD06 遺構 SD06 遺構は溝状遺構で、B面の下層から検出した。

SD07 遺構、SD08 遺構 B面の硬化面に伴う溝状遺構で両遺構は平行して配置されていた。遺構内は空洞であることから角材の跡と考えられる。硬化面の傾斜に直行して硬化面に配置されていること、東壁断面の観察から材の上面は硬化面使用時は地表面に現れていたと考えられる。

3. 遺物

遺構内の遺物をすべて取り上げることが出来なかったため、今回、器種の数量的な分析、廃絶年代を明確にすることはできないが、SE04 遺構を除いて、磁器の割合が少なく、碗、皿、貧乏徳利、植木鉢（底部穿孔の陶器含む）など陶器の割合が多い傾向がある。遺構廃絶年代は、SU01 遺構、SU02 遺構、SU03 遺構、SK05 遺構は、貧乏徳利、瀬戸・美濃系磁器等が出土しており、19世紀代の廃絶と考えられる。

SU01 遺構、SU02 遺構、SU03 遺構 広東碗、仏飯器、皿、貧乏徳利、植木鉢、鉛釉の灯明皿、火

鉢等の器種が出土した。遺構検出面が明確でなかったため、3遺構の主な遺物は一括して取り上げた。

SE04 遺構 肥前系の青磁皿・磁器皿、中国系の磁器皿等の器種が出土した。出土遺物は、火災の瓦礫を含む覆土から出土した。

SK05 遺構 瀬戸・美濃系磁器碗、貧乏徳利、搦鉢、土瓶、火鉢等の器種が出土した。焼成を受けた志戸呂系陶器の徳利が出土している。この他、貝類と瓦破片が4箱出土した。遺構検出面が明確でなかったため瓦礫層の遺物が一部混入した。

第4表 遺構観察表

遺構番号	遺構性格	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
SU01	地下室	—	2.5	1.92	北壁に棚状の掘り込み。
SU02	地下室	—	1.36	2.42	土留めの木枠跡。杭跡。
SU03	地下室	—	0.95	—	土留めの木枠跡。
SE04	井戸	—	—	—	
SK05	ごみ穴	2.68	2.4	0.72	
SD06	溝状遺構	—	0.32	0.2	
SD07	溝状遺構	—	0.1	0.1	横杭跡
SD08	溝状遺構	—	0.1	0.1	横杭跡

※「—」は欠損、調査区外のため計測不可。

第5表 土層観察表

SU01 遺構

層位	土層観察
1	暗褐色。黒ボク土主体。ローム粒少量含む。しまり有り。粘性あり。遺物有り。

SU02 遺構

層位	土層観察
1	暗褐色。黒ボク土主体。ローム粒少量含む。しまり有り。粘性有り。遺物有り。
2	杭跡。空洞。一部材残存。
3	茶褐色。ローム粒主体。しまり有り。粘性無し。

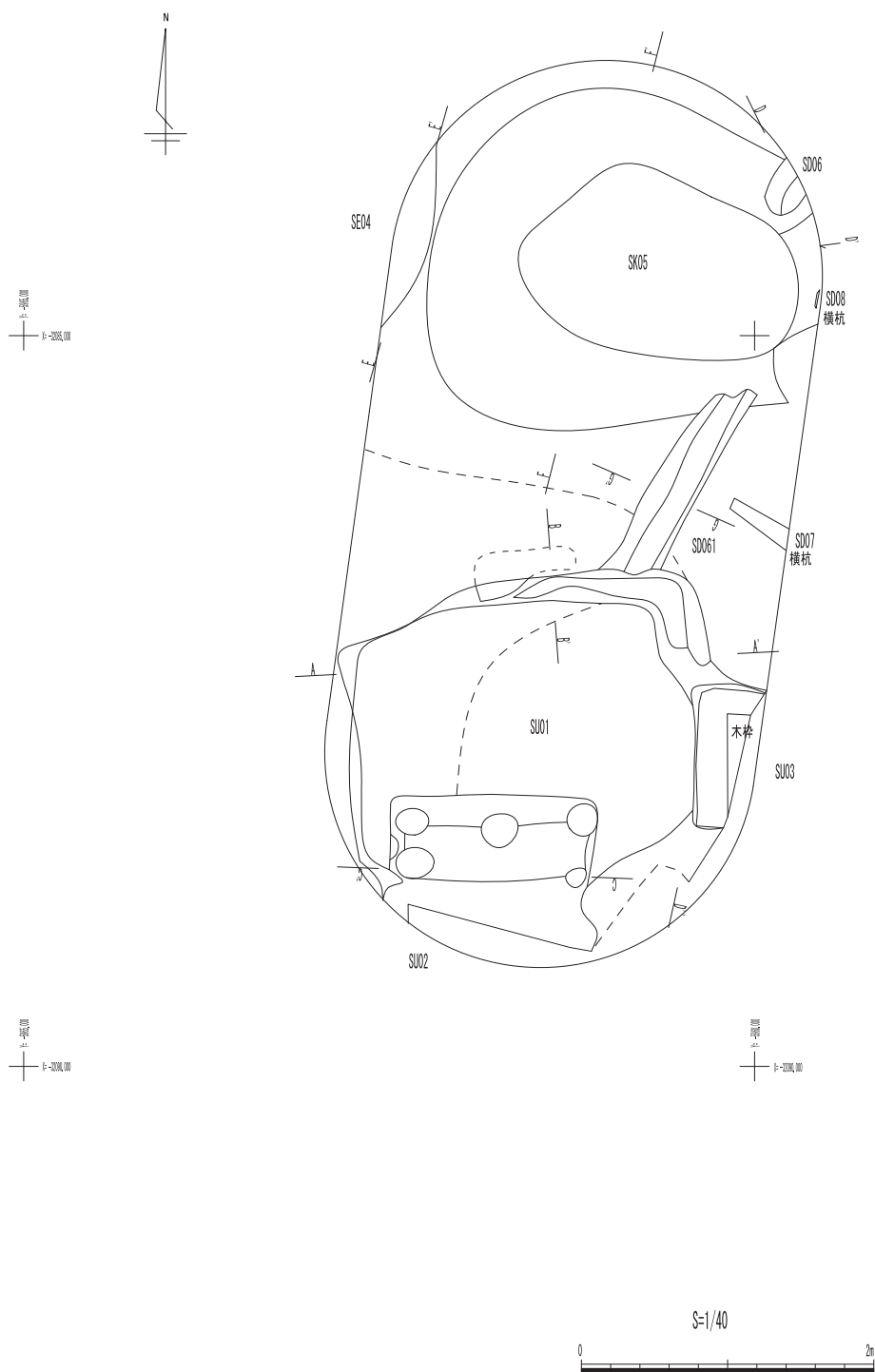
SE04 遺構

層位	土層観察
1	赤褐色。焼土主体、黒ボク土含む。しまり無し。粘性有り。焼成を受けた陶磁器出土。
2	暗褐色。黒ボク土主体。しまり有り。粘性有り。

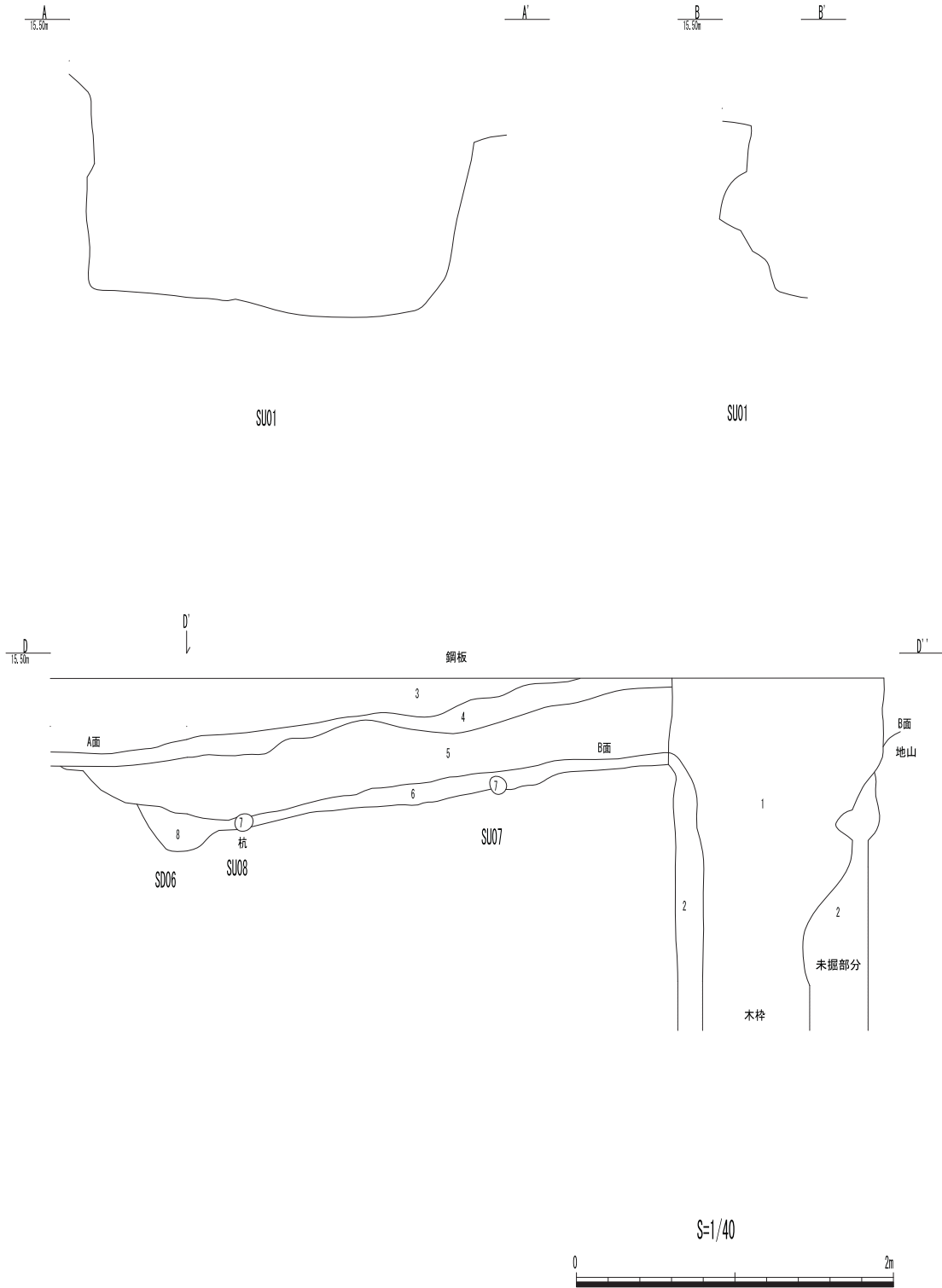
東壁南北 SEC

層位	土層観察
1	SU02 遺構。暗褐色。黒ボク土主体。ローム粒少量含む。しまり普通。粘性あり。遺物有り。
2	SU02 遺構。ロームブロック主体。しまり有り。粘性有り。
1	赤褐色。焼土主体、黒ボク土含む。しまり無し。粘性有り。焼成を受けた陶磁器出土。
2	暗灰色。砂利主体。しまり硬質。粘性有り。路面。
3	灰褐色。黒ボク土主体。しまり有り。粘性有り。盛土。
4	暗褐色。砂、黒ボク土主体。ローム土含む。しまり硬質。粘性有り。
5	SD07、SD08 遺構。横杭跡。空洞。
6	暗褐色。黒ボク土主体。ローム土含む。しまり有り。粘性有り。

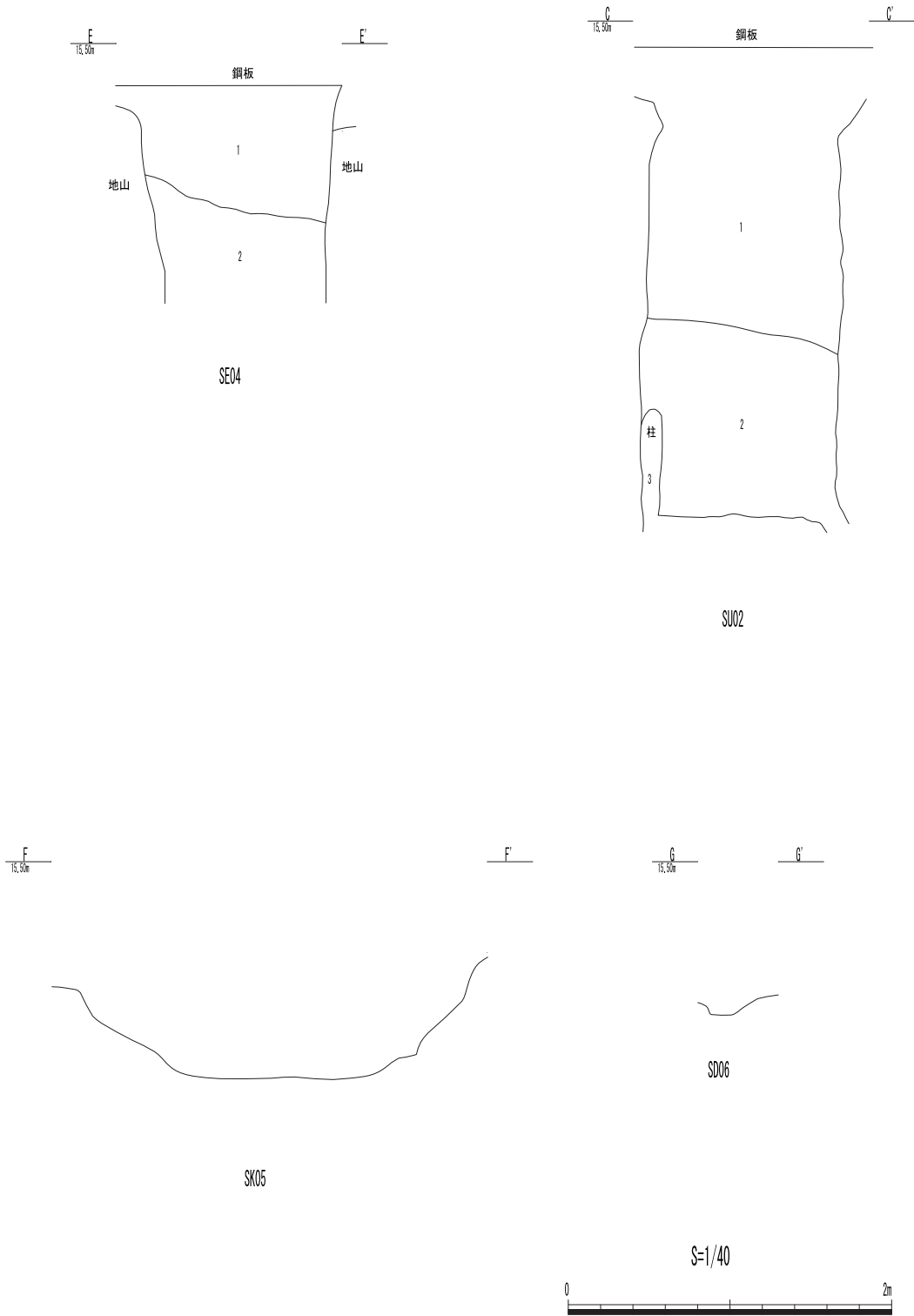
※土層観察表は、色調、内容物、しまり、粘性を主に観察した。



第 2 図 遺跡平面図



第3図 土層断面図



第 4 図 土層断面図

IV. 成果と課題 — 調査地点と「御歩町」長屋、位置関係、地形の検討 —

はじめに

今回調査を行った、東京大学（本郷）工学系総合研究棟新営工事立坑工地点（2005年度）（以下、工学系立坑工地点）は東京大学本郷地区の北東部に位置する。調査地点は江戸時代の加賀藩邸北東部に該当する。調査面積は17㎡で、建物跡を示す遺構は検出していないが、土地利用状況を検討する上で重要な地下室、井戸を検出し、遺物は収納箱で11箱が出土した。本考察では、主に、工学系立坑工地点の加賀藩邸内の位置について、隣接する理学部7号館地点の研究成果を用いて検討する。

1. 理学部7号館地点の成果

理学部7号館地点報告書では、「江戸御上屋敷惣御絵図」（金沢市立図書館蔵 清水文庫）（1840～1845）を用い、絵図と現在の地図との重ね合わせが行われた。重ね合わせのポイントは、赤門、心字池（三四郎池）、「御殿空間」の北端・東端の境（御殿下グラウンドの北端・東端）などで、他の絵図でも検討が行われた。検討の結果、理学部7号館地点は「八筋長屋」の三番、四番の中央付近に該当することが明らかになった。絵図面と検出した井戸の配置を検討した結果、絵図に記載された井戸の一部が、検出した井戸と合致すること、地下室などを検出した遺構密度が高い部分が空地（庭）部分に該当すること、長方形土坑のうち3基が絵図面に記載された「厠」の位置と一致することなどが指摘された^(注1)。

2. 加賀藩本郷邸図（1840～45年頃）と調査地点の位置関係、地形

筆者は、これまで陸軍参謀本部地形図（明治16年）の等高線と遺構検出面の標高等から、江戸時代から明治時代に行われた開発について検討を行ってきた^(注2)。当地点でも同様の検討を行った。

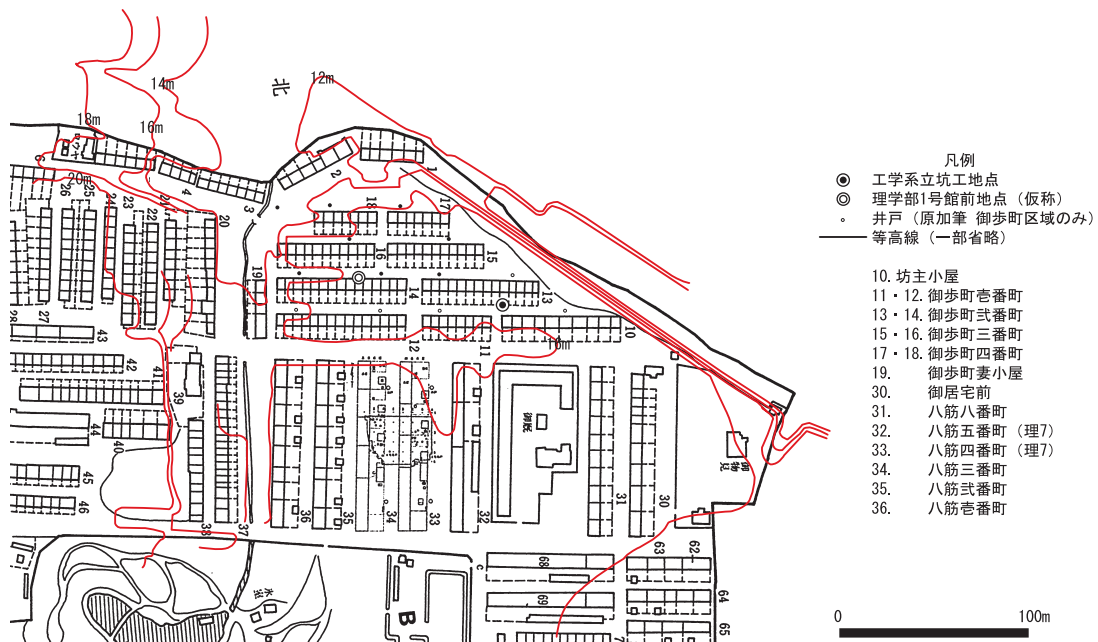
加賀藩の絵図を現在の地図に重ねて遺跡の検討を行うには、成瀬が指摘するように「地境の変化と絵図面の精度問題」^(注3)、作成意図の違いから単純に重ね合わせ検討することができない。本地点でも同様のことが指摘できるが、理学部7号館地点では、上記のように遺跡と絵図との重ねあわせが詳細に行われていることから、理学部7号館地点を基準に絵図との重ね合わせを行った。第5図は、調査地点と理学部7号館地点、「加賀藩本郷邸図」（1840～45年頃）との位置関係を示したものに、「江戸御上屋敷惣御絵図」（金沢市立図書館蔵 清水文庫）（1840～1845）の井戸（理学部7号館地点の成果から）、明治16年『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』^(注4)（以下「参謀本部測量図」）の等高線を加えた図である。以下の作業を経て作成した。

- ① 山上会館報告書の「附図8 加賀藩本郷邸図」に、理学部7号館地点報告書の「図230 1840年代後半の絵図面と理学部7号館地点との対比図」を重ねる。
- ② ①の図に「本郷地区遺跡地図（仮称）」（香取祐一作成）の理学部7号館地点の位置を基準に、工学系立坑工地点と昨年度調査を行った理学系研究科・理学部1号館前地点を重ねる。
- ③ 「江戸御上屋敷惣御絵図」（金沢市立図書館蔵 清水文庫）（1840～1845）には、「御歩町」長屋の道路部分には井戸〔○〕が記載されているため加筆。
- ④ 明治16年『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』を「御殿空間」の北端・東端の境（御殿下グラウンドの北端・東端）によって重ね合わせ、等高線を加筆。

第5図によると、調査地点は、藩主やその夫人、女中らの生活空間である「御殿空間」の北東、「八筋長屋」の北、「御徒町」長屋に位置し、藩邸内の諸用役及び、詰人の居住区である「詰人空間」にあたる。南北に長い形態の「御歩町妻小屋」1棟を除いて、東西に長い形態を示す長屋6棟が道路を隔てて南北に連なる。道路には井戸が配置されている。各長屋の建物の前（南側）には空地（庭）が存在する。御歩町壱番町、御歩町弐番町、御歩町三番町、御歩町四番町の長屋の部屋は、ほとんどが三間もしくは三間半の広さで、「八筋長屋」の長屋の部屋に比べ小さく区画されている。調査地点は、地下室の検出からも長屋の空地（庭）に該当すると考えられる。

「参謀本部測量図」には、調査地点周辺の平坦地には「荒」と記載されている。この部分の等高線を見ると、長屋の西側、標高16mの等高線は、ほぼ長屋、道の配置と重なる。また、「御歩町」と「八筋長屋」の間の道にも等高線が確認できる。この等高線の状況は、自然のもではなく土木工事によるものと考えられ、長屋と道路との関係を示しているといえる。「参謀本部測量図」の調査地点周辺には、標高と等高線が記載されていないため標高による江戸時代から明治時代の開発について検討できないが、遺跡を検出した標高は約15.4m、調査地点南側の等高線16mで、調査地点からは硬化面を確認したことから、明治時代以降、大規模な掘削が行われたとは考えにくく、明治16年以降、盛土が行われ、現在の地形になったと考えられる。『江戸御上屋敷惣御絵図』には「御歩町妻小屋」「八筋長屋」の西側に土手が描かれるが、明治16年ではなくなり平坦地となっている。

調査地点の東、現在の東京大学と弥生町の境界に石垣がある。この石垣は加賀藩の絵図と「参謀本部測量図」の比較から、明治時代以降に作られたものと考えられる。加賀藩の地境は緩やかな曲線であったのに対し、「参謀本部測量図」、現状は直線になっていることから、大規模な土木工事が行われたと考えられる。この地境は、文部省用地、警視局の地境、後に東京帝国大学と向ヶ岡弥生町の地境となる^(注5)。石垣に使用されている石材の加工方法、積み方には、少なくとも3種が確認されている。これらのなかには、地境の変化を反映していると考えられるものがあることから、この件については今後の課題としたい。



第5図 調査地点と理学部7号館地点「加賀藩本郷邸図」（1840～45年頃）との位置関係、地形^(注6)

まとめ

理学部7号館地点を基準に、地形図、絵図との検討を行った。調査の結果、調査地点は1840～45年頃の段階で「御徒町」長屋の一角に位置することが明らかになった。今回は調査面積が狭く、土地利用状況、考古学の成果による文書の再検討などができなかったが、隣接する理学系研究科・理学部1号館前地点の調査では排水溝、道（硬化面）検出しており^(注7)、これらのデータから今後、検討が可能であると考ええる。出土遺物については、遺跡の状況から数量による分析を行うことはできないが、陶器の割合が多く、日常雑器の割合が多い傾向がみられた。

1840～1845年「御歩町」長屋の建物があった区域は、理学部7号館地点で「八筋長屋」の変遷の検討に使用されている「武州本郷第図」（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）元禄元年（1688）12月、「上中下屋敷絵図」（原題「御上屋敷惣絵図」）（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）（1865～1868）他によれば、建物の増改築等が確認できる^(注8)。絵図、文書から読み取れる長屋の変遷、空間構成、下級武士である「御歩」の文書での記述については今後の課題としたい。

本郷構内の長屋の調査（報告書刊行地点）は、理学部7号館地点、本郷福祉施設地点等で行われている。これらの成果と文書の検討を行った上で、土地利用状況の比較、遺物による具体的な中下級武士生活の復元を行う事によって、大名屋敷における「御殿空間」と「詰人空間」についてより明確にしていきたい。

なお、今後の成果については、中間報告の成果を年報に掲載した上で、本報告書の刊行を行う予定である。

注

1. 細川義 1989「第8章 第1節 文献資料から見た理学部7号館地点」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』pp.480-506 東京大学遺跡調査室、山口剛志、羽生淳子
1989「第8章 第2節 考古資料から見た理学部7号館地点」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』pp.506-511 東京大学遺跡調査室、山口剛志、羽生淳子、細川義
1989「第8章 第3節 絵図面と考古資料との対比」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』pp.511-518 東京大学遺跡調査室
2. 原祐一・小泉好延・森本幹彦・堀江武史・石原道知 2004「東京大学工学部武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓—ガラス小玉の材質分析・土器・保存公開・弥生町遺跡と江戸から明治の開発—」『有限責任中間法人 日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』pp.85-88 有限責任中間法人日本考古学協会
3. 成瀬晃司 2000「考古学からみた加賀藩本郷邸「詰人空間」」『東京大学コレクションX 加賀殿再訪』p.167 東京大学総合研究博物館
4. (財)日本地図センター複製 1984 建設省国土地理院所蔵『参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図』
5. 東京都公文書館蔵 明治6年『沽券図』、明治7年『東京大小区分絵図』他
警視庁 1893『警視廳史稿下巻 警視庁史卷十五』pp.15-16
「(明治9年1月)二十四日上野山内元輪王寺宮路射的場用地ヲ還納シ更ニ向ヶ岡彌生町東京府属地ヲ交収ス内務省指令
上野山内元輪王寺宮地ハ早晚公園開設ノ地ニシテ素ヨリ久ク使用シ難キカ如ク 土功経営既ニ成ルノ日ニ至リ俄然還納ノ命アルトキハ従ラニ耗費ニ属スルノミナラス警備上尤モ支障アルヲ以テ該地ヲ還納シ更ニ第四大區六小區向ヶ岡彌生町東京府属地三萬八千九百歩餘ヲ以テ本庁属地三萬八千九百歩餘ヲ以テ本庁用地射的

場用地ニ為サンコトヲ内務省ニ申請シ其ノ允許ヲ得タリ 七年十月九日九年四月二十七日参観]

警視庁 1893『警視廳史稿下巻 警視庁史卷十五』p.17-18

〔(明治9年5月)二十六日向ヶ岡彌生町舊文部省用地ヲ受領ス内務省特達

府下向ヶ岡彌生町舊文部省用地内四千六百歩ヲ第二種官有地ニ属シ本庁ニ下付ス

是ヨリ先キ五月十六日本廳用地向ヶ岡ニ接続スル文部省用地ノ内凹地ニシテ射的場ニ恰當スルモノ四千六百歩アルヲ以テ本廳用地一萬三千歩ヲ以テ之ニ交換センコトを文部省ニ協議シ其肯諾ヲ得更ニ之ヲ内務省ニ稟議セシニ令シテ本廳用地一萬三千歩ヲ東京府ニ還付セシメ文部省用地内需求ノ件ハ更ニ指示ス可ヲ以テ是ニ至テ此令アリ

按スルニ向ヶ岡ノ地所ハ射的演習廃止後即チ明治十八年十月七日一社ヲ營ミ之ヲ弥生社と稱シ廳員ノ事ニ死セシ者ヲ茲ニ祀ス其後明治二十年四月五日該社ヲ芝公園内ニ移シ 舊地所建造物ヲ併セテ之ヲ賣却ス一月二十四日四月二十七日参観]

6. 山口剛志、羽生淳子、細川義 1989「第8章 第3節 絵図面と考古資料との対比 図230 1840年代後半の絵図面と理学部7号館地点との対比図」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』p.515 東京大学遺跡調査室 1990「附図8 加賀藩本郷邸図」(1840～45年頃)『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』、明治16年『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』、『東京大学本郷地区遺跡地図(仮称)』(香取祐一作成)より作成。
7. 堀内秀樹(編)、吉田千沙子 2006「東京大学本郷構内の遺跡 理学系研究科・理学部1号館前地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5 東京大学埋蔵文化財調査室
8. 「武州本郷第図」(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)元禄元年(1688)12月、「前田家本郷御屋鋪図」(三井文庫所蔵)(1761～1771)、「江戸本郷御上屋敷」(金沢市立図書館蔵 加越能文庫)(1802～1825)、「御上屋敷囲并物御小屋割図」(金沢市立図書館蔵 加越能文庫)(1802～1825)、「本郷邸図」(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)(1827～1829)、「江戸御上屋敷惣御絵図」(金沢市立図書館蔵 清水文庫)(1840～1845)、「上中下屋敷絵図」(原題「御上屋敷惣御絵図」)(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)(1865～1868)

【参考文献】

- 宮崎勝美 1990「第1節 加賀藩本郷邸とその周辺」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』第3分冊 考察編 pp.5-23 東京大学埋蔵文化財調査室
- 田中善男、宇佐美美孝、屋敷道明 1989「金沢藩」『藩史大辞典 第3巻 中部編 I 北陸／甲信越』pp.159-184 雄山閣
- 山口恵一郎構成、師橋辰夫、清水靖夫 1984「参謀本部陸軍部測量局「五千分一東京図」測量原図 複製版(36面) 解題」



写真1 全景写真 南から



写真2 SU01、SU02、SU03 遺構 東から



写真3 SE04、SK05、SD06、SD07、SD08 遺構



写真4 SU02 遺構完掘 南から



写真5 SU02 遺構東西セクション



写真6 SU03 南北セクション



写真7 東壁盛土南北セクション



写真8 光波測量作業



写真9 遺構掘削作業



写真10 セクション図作成作業



写真11 図面編集作業



写真12 洗浄作業



写真13 注記作業



写真14 接合作業



写真15 写真撮影



写真 16 SU01、SU02、SU03 遺構出土遺物



写真 17 SE04 遺構焼土出土遺物



写真 18 SK05 遺構出土磁器



写真 19 SK05 遺構出土陶器



写真 20 SK05 遺構出土土器



写真 21 調査地点より浅野地区方向を望む



写真 22 東京大学と弥生町の境 1

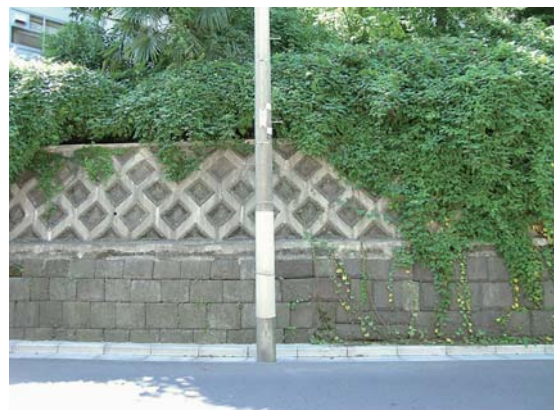


写真 23 東京大学と弥生町の境 2

本郷 76

ベンチャープラザ地点 (HVP06) 発掘調査略報

所在地 東京都文京区本郷 7-3-1

調査期間 2006 年 3 月 6 日～5 月 16 日

調査面積 760㎡

調査担当 追川吉生・堀内秀樹

1. 調査の経緯

東京大学では研究成果の普及と活用を目的とした、起業支援施設を産学連携プラザのアネックス施設（アントレプレナープラザ）として建設することを計画した。予定地は産学連携プラザ（インキュベーション地点として 2003 年に調査実施。以下、INC 地点）の東側に隣接しており、本施設予定地でもこれと同程度の遺構・遺物の存在が予想された。

埋蔵文化財調査室では 2005 年 12 月に試掘調査を実施し、その成果を踏まえた上で 2006 年 3 月 6 日から 5 月 16 日にかけて事前調査を行った。調査面積は 760㎡である。

2. 調査の概要

調査によって文化層を 2 面把握した。しかし調査地点は後代の攪乱や削平が著しいため、同一文化層と捉えた遺構であっても、時期差があることが予想される。このことについては、今後の整理作業において検討する。ここでは (1) 18 世紀代以降、(2) 17 世紀代という大まかな時期毎に、主たる調査成果を報告する。

3. 調査成果

(1) 18 世紀代以降

礎石列

礎石は直径 50cm 前後である。掘り方の平面形態は円形で、直径約 80cm。その深さは約 40cm である。掘り方の覆土はしまりの極めて強い堆積状態で、瓦片を多く含んでいる。写真のように礎石を伴って検出し得た例は SP1204 のみであるが（写真 1）、上記の掘り方と同一構造のピットがおおよそ 1.8m（1 間）の間隔で並ぶことから、建物の礎石と考えた。出土遺物からみた年代は 18 世紀中頃。

ピット列

調査区のほぼ中央で検出された、約 1.8m 間隔で東西に並ぶ。各ピットは平面形態は南北約 1.3、東西約 0.5m の長方形で、深さおおよそ 0.8～0.9m。遺構の軸は前述の礎石列とほぼ平行関係にある。何らかの区画をなしていた塀と思われる。



写真1 礎石の検出状況（左）と掘り方断面（右）



写真2 SU1088 完掘状況（左）と断面（右）



写真3 SU1311 完掘状況（左）と断面（右）

地下室

SU1088 開口部が南北1.5、東西1.34mの長方形を呈した、深さ2.56mの地下室（写真2）。地下室内部はフラスコ状になっており、床面で南北2.15、東西1.67mの規模となる。確認面から60cmの深さまでは攪乱によって壊されているが、そこから床面まで堆積している覆土からは陶磁器・土器が大量に出土したほか、貝・魚骨といった食物残滓も多く認められた。遺物や食物残滓を多く含む土層（遺物層）は、暗褐色土によってバックされており、堆積状況は遺物層と暗褐色土層との互層をなす。

SU1311 開口部が南北0.96、東西0.94mのほぼ正方形を呈している、深さ1.75mの地下室。地下室の本体は開口部の北西よりに拡がっており（南北1.27、東西1.35m）、そこは開口部から30cm低くなっている（写真3）。

本遺構は前述の礎石列に伴う礎石によって開口部の一部が壊されている。このことからこの礎石による建物以前の段階であることがわかる。現状ではそれぞれの段階の年代を比定するまでには至っていないが、SU1311 から出土する遺物はおおよそ 18 世紀中葉～後葉にかけてのものである。

SU1403 調査区南西側に確認された袋状の地下室である。規模は南北 3.69、東西 3.16、深さ 3.14m（写真 4）。

遺構の壁面と床面は、平滑に成形されている。また覆土の観察から、埋める過程で入口部や天井部をなしていたロームを大きく漏斗状に削り落とし、上層は玉砂利を厚く充填するといった特徴的な状況が確認できた。本遺構の埋没後、ここには南北に延びる道が設けられる。この玉砂利の充填は、おそらく道の陥没防止の施策であろう。この他本地点では SU1151 でもこれと同様の状況が確認されている。

土坑

SK1119 調査区の北端で検出された土坑で、大部分は調査区外になると考えられる。現状で南北 7.76、東西 10.48、深さ 2.48m（写真 5）。

遺構は、(1) 複数の土坑が切り合っている様な形状、(2) 壁や坑底は凹凸が顕著である、(3) 大型の土坑であるなど土取穴と理解される諸特徴が確認できる。遺構の覆土は西から東側に傾斜を持ち、西側から埋められていることがわかった。また、覆土からは多量の陶磁器、土器、瓦などの遺物が出土し、埋める際にゴミ穴として利用されていたと推定できる。遺物群の年代は 18 世紀末～19 世紀にかけてのものである。

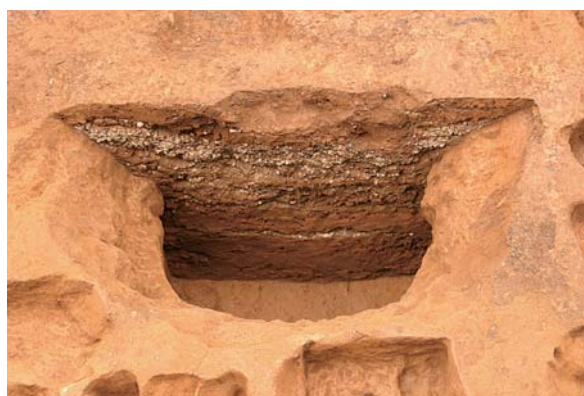


写真 4 SU1043 完掘状況（左）と断面（右）



写真 5 SK1119 完掘状況（左）と断面（右）



図1 検出遺構（18世紀以降）

（2）17世紀代

SD1024 調査区を東西に貫く溝で、幅（南北）1.44m（写真6、7）。溝は東西方向が調査区外に続いており、本来の長さは不詳である（調査区内は35.15m）。溝の深さは確認面からおよそ0.6mで、黒色の覆土には一部焼土を含んでいる。遺物は陶磁器片がごく僅か出土するのみだが、その年代はおおよそ17世紀代前半。

SD1150・SD1154 SD1024同様調査区を東西に貫く溝で、SD1024より4m北側に位置する（写真6、7）。溝は調査区のほぼ中央部で、SD1150は西側が、SD1154は東側がそれぞれ立ち上がる。この立ち上がりが溝の末端であるか、あるいはここが土橋状にせり上がる構造をみせる一連の溝であるかは詳らかではない。覆土はSD1024でみられたような黒色土を主体とする。しかし平面形態がSD1150とSD1154とで異なっているため、現段階では個別の遺構としている。

SD1150の規模は南北4.30、東西15.56、深さ1.16mである（溝は東側が調査区外まで続いているため、東西の規模は調査区内の計測値）。一方、SD1154は南北2.83、東西17.58（同上）、深さ1.38m。SD1154の溝は南北に隣接した2条の溝が認められる。SD1154の造り替えられた痕跡だろう。

遺物はどちらの遺構からも17世紀代前半の陶磁器片が少量出土している。



写真6 調査区東側の溝完掘状況（奥がSD1024，手前がSD1150・1154）



写真7 調査区西側の溝完掘状況（左がSD1024，右がSD1150・1154）

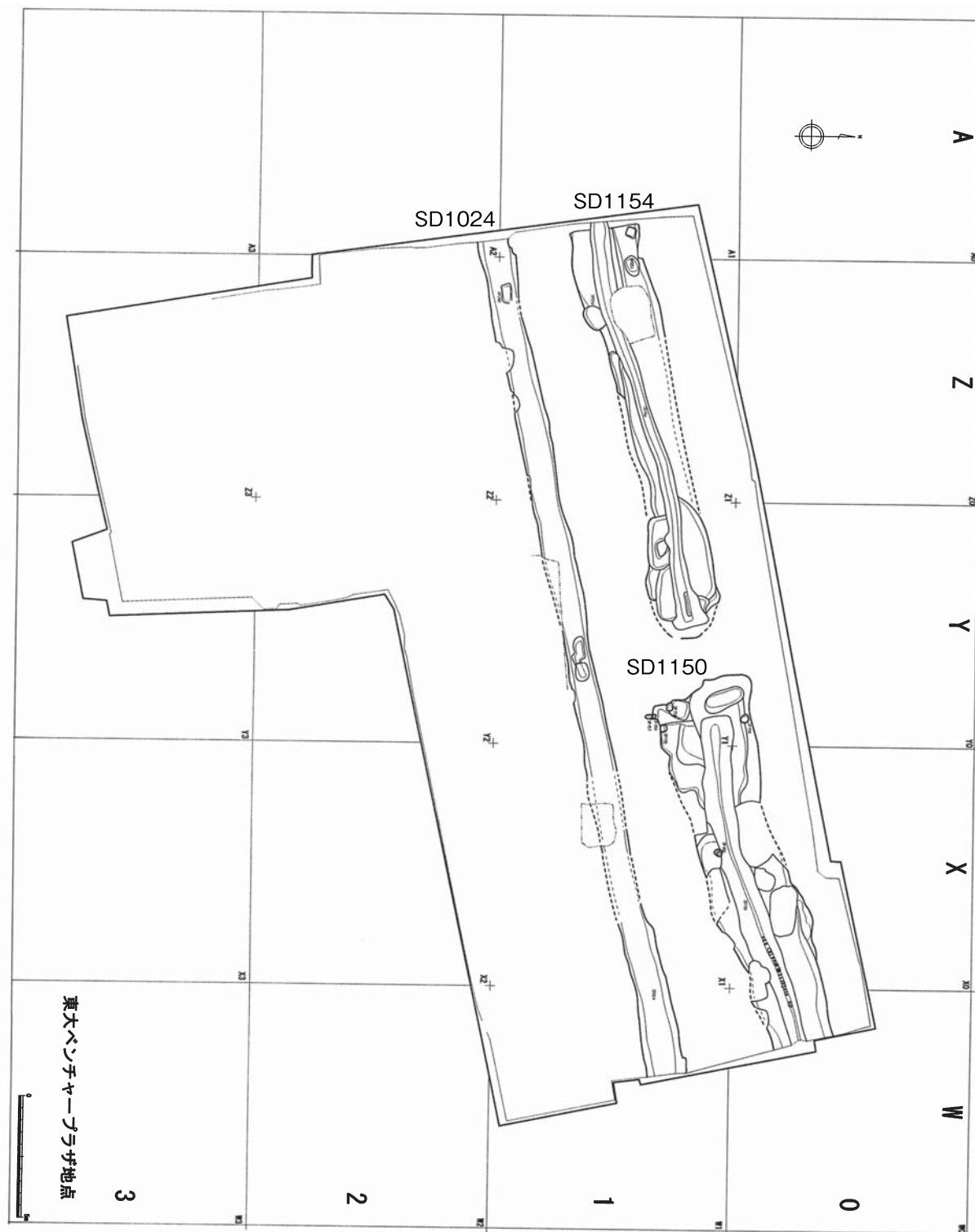


図2 検出遺構 (17世紀)

4. 調査の課題

本地点は加賀藩邸の南側にあたる。この周辺は詰人空間の中でも、中級クラスの家臣が居住していたエリアにあたる。したがって今後の分析では、加賀藩邸における中級家臣の暮らしのあり方を明らかにすることが求められる。その作業にあたっては、本地点の東側に隣接する INC 地点の調査成果との照合と総合化が不可欠である。こうした整理作業上の課題は調査成果全体に及ぶが、ここではその中から特に2つの課題をあげておきたい。

1つ目が前項（1）であげた礎石列と詰人空間の長屋の配置である。本調査で検出したような、掘り方の覆土中に瓦片を含む構造の礎石は INC 地点でも検出されている。INC 地点ではこの礎石列を中心に、雨落ち溝や地下室、便所などの遺構が検出されており、藩邸南側にひろがる詰人空間のあり方を復原する手がかりとなった。その東側にあたる本調査区でも、これと同様の建物の存在を想定しうる礎石遺構を検出したことは、当該エリアの空間構造を解明する上で貴重な手がかりを加えたことになる。

1840年代前半に描かれたと考えられている加賀藩邸の絵図面「江戸御上屋敷絵図」をみると、本調査地点周辺には藩士の長屋建物が建ち並んでおり、その東側に江戸定府の家臣が暮らす一軒家があったことがうかがえる。本地点と INC 地点の分析によって、藩邸南側の空間利用の解明が期待される。

2つ目が前項（2）であげた17世紀代に帰属する2本の東西方向の溝と藩邸の境界である。何れの溝も調査区西側にまで続いており、INC 地点との繋がりが予想される。これらが INC 地点検出の溝とどのように連続するかについては今後の分析で明らかになろう。むしろ注目されるのは、この溝が加賀藩邸の変遷を具体的に示す可能性である。

前述の「江戸御上屋敷絵図」で描かれているように、19世紀の加賀藩邸はその南側を春日通りに接していた。しかし医学部教育研究棟地点の発掘調査において藩邸の門を検出したように、拝領当初（17世紀初め）の加賀藩邸の南限は、現・医学部教育研究棟辺りにあり、そこから春日通りまでは同心屋敷だった。加賀藩が春日通りまで藩邸を拡充したのは、明暦の大火の後のことである。

本調査で検出した2本の溝は、その形態から屋敷境の溝であると考えるのが妥当であろう（何れの溝も水のついた痕跡は認められない）。これが藩邸と同心屋敷との地境をなしていた溝であるならば、加賀藩邸が藩邸南側を藩邸として取り込んだのは、従来考えられていたように火災を契機に一度期になしたのではなく、数度にわたる地境の変更を経ていることも考えられるのである。

現段階では2本の溝の時期差に関しては詳らかではない。しかし SD1154 に造り替えの痕跡がうかがえたことは、この可能性を考える上で興味深い。

その他、御殿空間から廃棄されたとされる多量の遺物や食物残渣が出土するなど、本地点には INC 地点との共通点が多々認められる。今後の分析では本調査地点と INC 地点の調査成果を基に、藩邸南側の空間利用の様相を明らかにすることを目指す（追川吉生）。

【参考文献】

- 堀内秀樹 1999「医学部教育研究棟地点新営に伴う埋蔵文化財調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
 追川吉生 2004「インキュベーション施設建設に伴う埋蔵文化財調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

本郷 78

情報学環・福武ホール地点 (HJF06) 発掘調査略報

所在地 東京都文京区本郷 7-3-1 (東京大学構内)

調査期間 2006 年 6 月 5 日～12 月 8 日 (1 次調査)、2007 年 2 月 5 日～2 月 23 日 (2 次調査)

調査面積 1766m²

調査担当 埋蔵文化財調査室 (成瀬晃司 追川吉生 大成可乃)

1. 調査の経緯と経過

調査地点は法学系総合研究棟と赤門の間の植樹帯内に位置する。北側に隣接する法学系総合研究棟は 2003 年に発掘調査が実施され、主として 18 世紀後半以降の溝、井戸、地下室、土坑などの遺構が約 500 基確認されている (法学系総合研究棟地点、以下、法 03 地点)。

当調査地点も現存する絵図面などと対比すると加賀藩邸と本郷六丁目の町屋との地境、番所や町屋などの建物址、これら建物址に付随する遺構の存在が予想された。東京大学施設部より依頼された東京大学埋蔵文化財調査室では、2006 年 2 月 13 日～15 日に試掘調査を実施し、その結果、現地表面下 1m 前後でローム面 (地山)、その間に江戸時代の整地面が 1 面 (局所的に 2 面) あることが確認された。また加賀藩邸と町屋の地境溝と考えられる石組溝の一部を検出、計 7 箇所設定した試掘坑のほぼすべてにおいて密な遺構分布状況が確認された。この調査結果を受けて施設部と埋蔵文化財調査室が協議後、2006 年 6 月 5 日～同年 12 月 8 日の約 6 ヶ月間で 1766m²の本調査 (1 次調査) を実施し、本調査と同時進行で調査地に植樹されていた樹木の移植先の調査も 4 日間行った。なお 1 次調査で検出された地下式麴室室部の調査は期間や安全面などの問題から、施設部、埋蔵文化財調査室、事業者の 3 者協議をした後、2 次調査として 2007 年 2 月 5 日～2 月 23 日の期間、主として地下式麴室の竪坑計 7 基と各竪坑に伴う室部計 24 室について発掘調査を実施した。また 1 次調査で遺構の壁面全体がオーバーハングしていた井戸 2 基についても同期間に追加調査を実施した。

2. 調査の結果 (図 1、2、写真 1)

調査区内に平面直角座標系 (日本測地系) 第 IX 系を基準とした杭を 5m 毎に設定したが、その杭は北側に隣接する法 03 地点との関連性を考慮し、法 03 地点の基準杭を南側に延長する形で西から東へ D～L のアルファベット、北から南へ 20～39 の数字を合わせたものを各杭の名称とし、北西隅の杭を基準として各グリッドを設定した。

重機により表土掘削を実施したところ、ほぼ調査区全体に現地表面下 - 1m 前後で最初の調査対象面となる江戸時代の生活面が検出され、加賀藩邸、町屋エリアともに生活面が地山まで含めて 3 面あることが確認された。また試掘調査で部分的に確認されていた加賀藩邸と町屋との地境溝と考えられる東西方向に延びる石組溝のほかに、この石組溝にはほぼ直交する形で南北方向に延びる石組溝も調査区南東部分で検出された。検出遺構総数は約 1200 基、主な遺構として加賀藩邸エリアでは町屋との地境の石組溝、千川上水からの引き込みと考えられる溝、大形の廃棄土坑、井戸などが、町屋エリアでは地下式麴室、地下室、井戸、土坑、建物基礎などが検出された。

加賀藩邸エリアで検出された東西、南北方向に延びる石組溝は現存する絵図面と対比するとほぼ絵図面通りの位置にあることが確認され、これにより東西石組溝から北側部分、すわなち本調査区の北側約1/8が加賀藩邸であり、これ以南はすべて本郷六丁目の町屋に該当することが明らかとなった。遺構全体図(図1)の遺構分布状況からも、この東西石組溝を挟み北と南で遺構の分布密度が大きく異なり、また町屋エリアで検出された大半の遺構の主軸が本郷通り(旧中山道)と直行あるいは平行する遺構軸であることも明らかとなった。

1) 加賀藩邸エリア(写真2)

石組溝(写真3～5)

東西方向に延びるSD8と南北方向に延びるSD50の2基が検出されている。遺構の主軸は現在の本郷通り(旧中山道)に平行する軸よりもやや北へ振っている。ともに一辺が30～40cmの間知石を使用し、その間には割栗石が充填され、溝内には粘土と漆喰が敷かれ、漆喰層は厚いところでは7～8cmの厚さで確認された。SD8は加賀藩邸側と町屋側の両側の石組が検出されており、掘り方幅は藩邸側が80～90cm、町屋側が70～80cm、溝内幅は40～50cm、深さ65cmの規模を呈す。なおSD8では溝内幅が拡張された痕跡が確認されており、拡張後の幅は100cm程になっている。掘り方幅が藩邸側と町屋側で異なっていたが、構造上でもいくつか異なる点を確認された。例えば間知石は町屋側のみに残存していたが、その下の栗石は両側で検出され、その高さは町屋側より藩邸側の方が高いことから、藩邸側と町屋側の石組に比高差があり、藩邸側の石組が高い位置にあったことが想定される。SD50は町屋側の間知石が残存していたが、下に地下室がある部分の間知石が全体よりも1段低い位置で凹レンズ状に検出された(写真5)。この部分は他の間知石が検出された高さでは割栗石が敷き詰められ、溝内の漆喰は溝内全体の漆喰が敷かれていた高さより低い位置に、しかも南北方向に凹レンズ状に敷かれているのが確認されている。溝の構築以前に地下室のような深い遺構があったために本来の位置から下へ落ち込んだのか、あるいは意図的にこのような構造にしたのかは検討する必要がある。

上水(写真6、7)

東西に延びる溝が南北に2基確認されている。SD79は南北90～100cm、東西1200cm、深さ200cm、SD135は南北120～140cm、東西1600cm以上、深さ200～250cmの深い溝である。断面形はともに縦長の台形を呈し、埋土はロームブロックが主体である。79は西端で膨らみ、北へ曲がり止まっている。床面は平滑にされるが、壁面の凹凸が著しい。木樋などの痕跡は認められない。135は木樋の痕跡やその両側に犬釘などが確認され、壁面は79よりも丁寧に成形されていた。西端は南方向へやや湾曲し、その中で木樋は「く」の字状に屈曲していたが、木樋部分にはジョイント部分などは認められなかった。なお79は検出状況、木樋などの痕跡も認められないなど、何かの理由で造作の途中で放棄された可能性が高い。

大形土坑(写真8～11)

東西約900cm、南北約500cm、深さ約240cmの大形土坑(SK10)で、西側に不整楕円形の落ち込み、東側に浅い掘り込みが接続するような形状を呈す(写真8)。西側の落ち込みは北壁から西壁にかけてスロープが設けられ、南側の坑底は播鉢状の断面を呈す。東側の掘り込みは南側にテラス状の1段を有し、北側に楕円形の落ち込みが存在する。また南壁には東西方向に杭列が認められた。埋土

には焼土を多量に含み、焼けた瓦、自然遺物、陶磁器などが大量に出土した。これらの中には、屋号と思われる釘書きが底部に確認される直径 60cm を超える大皿 (写真 9)、「御末」などの役所を表すと思われる釘書きが認められる陶磁器類 (写真 10)、軒丸瓦に「劍梅鉢」文と「三つ葉葵」文のあるもの (写真 11) が確認されるなど、御殿との関わりをうかがわせるものも含まれている (大成)。

2) 町屋エリア

地下式廻室 (写真 12～64)

SU145 (写真 12～17) H33～J33 グリッドに位置する。竪坑の主軸は本郷通りと平行である。竪坑からは東西南北の 4 方向に通路が伸び、その先に 1 室ずつ計 4 室の室部 (それぞれ E、W、S、N 室) を有する。ただし E 室は構内の共同溝で東端が攪乱され、S 室の通路部分は建物基礎で攪乱されており形状などは不明である。室部天井は崩落していたが、壁面に天井ラインが確認できた E、N 室では天井は緩やかなアーチ状を呈し、床面から天井までの高さは約 90～100cm であった。遺構確認面での竪坑の規模は東西約 180cm、南北約 200cm、深さ 330cm を測り、床面標高は 19.7m である。平面形は正方形を呈し、四方の壁面は内傾し、断面形状が台形を呈する。壁面は調整され平滑であるが、すべての壁面に直径約 2～3cm のピットが数基認められる。ピットの対応関係は不明であるが、竪坑の付帯施設に伴うものであろうか。竪坑の床面は中央が周囲よりやや高く、その部分を囲むように幅約 10cm、深さ約 3cm の浅い溝状の凹みが観察された。この溝状の凹みがもっとも長く伸びているのは北側の通路からであるが、このような凹みは、長短はあるが各通路から竪坑内へ向かって延びている。竪坑壁面の通路入口は平均幅約 50～70cm、高さ約 80cm、形状は東西壁面のものが台形、南北壁面のものが長方形を呈し、一人がようやく出入り可能な大きさである。南壁の入口は南東隅付近に設置されているが、他はすべて壁面の中央に設けられている。各入口から各室部までの通路の長さはどれも 70cm ほどであり、唯一通路天井の調査を行うことができた E 室への通路は、通路内壁面も比較的平滑に調整され、工具痕などは認められない。通路中程で天井が僅かに落ち込んだ状態で確認されたが、通路内天井の高さは平均約 70～80cm で、入口部分の高さと変化はない。E、W、S、N 室はいずれも短辺約 200cm、長辺約 300～360cm を測り、平面形はやや長い台形を呈すが、S 室は他に比べてひどく歪である。各室部は竪坑へ向かって緩やかに傾斜している。壁面は 4 室ともに平滑にされ、その壁面や床面には多数のピット (直径 2～4cm 程度) が散漫に穿たれているが、通路入口から奥壁までの直線上の床面にはピットは確認されない。E、W 室壁面のピットは床面上約 40～50cm でほぼ横 1 列に同じ高さで確認されるが、S 室ではそれが床面上約 20～30cm 辺りに確認され、N 室では床面上約 20cm あたりにもう 1 列確認されるなど、室によりピットの位置が若干異なる。なお E 室を除く各室部の床面直上と四方の壁面には密度に違いはあるが、有機物が炭化したような黒色の付着物が確認された。この付着物を除去したところ、通路から奥壁に向かう直線上の床面には何かを引きずったような線状痕が多数確認され、室部床面はこの部分のみが平坦になっている。以上のように 4 室ともほぼ同じような規模や構造を有するものであるが、W 室のみ室部入口付近の床面に長辺 (東西) 160cm、短辺 (南北) 80cm、深さ 6cm 程度の浅い長方形の凹みを有している (大成)。

SU189 (写真 18～24) E22～G23 グリッドに位置する。竪坑は遺構確認面で 1 辺約 2.3m を測る正方形を呈す。壁はハの字状に拡がり床面での規模は 1 辺約 3.3m に達する。床面までの深さは 345cm を測り、床面標高は 19.4m である。床面は壁際を除き、全体的に貼り床が観察された。床面中央北寄りの貼り床上には直径約 30cm を測る円形のピットが、壁と平行に真々で約 60cm 間隔で 2

基並んで存在する。梯子などの昇降施設の固定用と推定される。また南壁には床面上125cmに2基の小穴が約50cm間隔で掘り込まれており、それがほぼ床面ピットの延長上にあることから関連性がうかがわれる。一方、北壁には、床面から165cm上に高さ50cm、幅40cmを測る長方形のピットが掘り込まれていた。床面は平滑に調整されており、棚状施設と推定されるが、天井部、壁面にはスス付着の痕跡は認められなかった。床面には室部へ繋がる通路が各々の壁面から1箇所、合計4箇所検出された。そのうち南壁で検出された通路は本遺構南側約1.5mで井戸にあたり、構築を中断している。それ以外の3箇所は堅坑からの接続部分に長さ約90cm、幅約30cm、厚さ約15cmの切石を両側壁と天井の補強に使用し、幅約60cm、高さ約90cmを測る入口が設けられている。

室部は堅坑北壁からの部屋をN室、西壁からの部屋をW室、東壁からの部屋をE室とした。またE室の調査でさらにその南壁から南に続く部屋を確認し、前者をE1室、後者の南に続く部屋をE2室とした。いずれの部屋も入口部から奥壁に向かい床面中央部が非常に固く締まっており、その部分には入口から奥壁方向にむけて何かを引きずった細かい線状痕が多数観察された。硬化面部分を跨ぐ床面両側壁付近には直径2～3cmの杭痕が多数認められた。奥壁方向に向けては2～3列の規則性が認められるが、1箇所では数基を一つのまとまりとしていることから、複数回の作り替えが行われたことがうかがわれる。また、ピットの中には、ドーナツ状の痕跡で確認されるものも多く、竹材を利用していたことがわかる。E1室では奥壁のピット列の延長に杭穴が並び、ピット上に梁を渡したことが確認される。E1室西側では天井の崩落による大陥没が存在し、そのくぼ地を利用して、廃棄行為が行われていた。このくぼ地をSK177とした。N室は加賀藩邸との地境を意識してか、通路部から室部は90°折れ、東西方向の主軸を有している（成瀬）。

SU265（写真25～36） F23～H25グリッドにかけて位置する。堅坑は1辺約2mを測る正方形を呈する。確認面から床面までの深さは415cmを測り、床面標高は19.5mである。確認面付近では北壁と東壁にテラスが設けられ、その部分にはロームによる埋土が充填されていたことから、補強を目的とした改修と推定される。床面は壁際を除き貼り床が観察された。室部への入口部は北西、北東隅、東壁南端部、南壁やや西寄りの4箇所が確認された。北西の部屋をNW室、北東の部屋をNE室、東壁の部屋をE室、南壁の部屋をS室とした。

NW室上部には方形遺構があり、当初SU347として調査していたが、NW室の天井を貫き、同一の埋土（焼土を含む黒褐色土）によって埋め戻されていたことから、同一遺構と判断される。ただし性格については今後の課題として残される。両側壁には棚を設置するための小穴が床面上35～40cmに穿たれている。前壁入口通路部上部には意識的にロームブロックが詰められており、NW室が閉鎖されたものと推定される。またその直上に天井との境界に堅坑へ抜ける通気孔のような小穴が穿たれている。NE室は天井の崩落による大規模な陥没が存在し、そのくぼ地を利用して多量の遺物が廃棄されていた。このくぼ地をSK230とした。NE室の平面形は基本的には羽子板状を呈しているが、両側壁中央付近に張り出しが存在し、西壁の張り出し部は隣接するSU189-E2室へと接続する。接続部分にはSU189堅坑で認められた切石による補強がなされていた（写真30）。東壁の張り出し部は幅約2mと広く、床面には両壁側に杭穴群、中央に硬化面が認められることから、東側にそのまま室部が接続した形態を呈していたと考えられる。ピットや、補強施設の関連から、これらの部屋は廃絶時まではいずれも機能していたと推定される。前壁には天井部がわずかに残存しており、天井高は中央で100cm、両側で65～75cmを測る。また両側壁と接する隅には床面上と天井際に梁材を固定するためと推定されるピットが穿たれていた。なかには瓦片や破碎礫が詰められたピットも認められる。入口部は幅80cm、高さ70cmを測るが、ローム土によって人為的に閉鎖されていた。その上

部にはNW室同様に竪坑へ貫通する小穴が穿たれている。E室は前壁から奥壁までが2.3mと短く、奥壁には工具痕が顕著に残っていることから、製作途中において、何らかの理由で廃絶された室と推定される。そのため、床面上の使用痕は一切存在しない。その反面、奥壁を除く、側壁、床面は整形されており、室部の製作工程を知る手掛かりを示している。S室にはさらにその南東角より東方向に続く部屋が検出された。そのため前者をS1室、後者をS2室とする。S2室床面はS1室と比較して一段低く、その比高差は25cmを測る。S1室は室部中央の硬化範囲は認められたが、その両側に杭穴群は存在しない。但し、壁面には床面上約40cmの位置で横方向の杭穴が認められることから、棚状施設が両側壁部に設置されていたことが推定される。S2室では床面上に中央部硬化範囲を挟んで、各3列の杭穴群が確認され、棚状施設が設置されていたことが確認された(成瀬)。

SU661 (写真37～40) G33～G34グリッドに位置する。竪坑の主軸は本郷通りに直交する。竪坑から南西方向に通路が1本伸び、その先に室部を1室(S室)有す。ただし室部の大半は調査区外であり、その形状や規模は明らかではない。遺構確認面で竪坑は長辺(東西)約290cm、短辺(南北)約100cm、深さ約350cmを測り、床面標高は19.3mである。平面形は長方形を呈す。四方の壁面は平滑で、床面からほぼ垂直に立ち上がる。東壁寄りの北壁面、南壁面に足掛け穴が穿たれている。足掛け穴は1つが幅約20cm、深さ約10cmのやや歪なカマボコ形を呈し、北壁に4つ、南壁に5つ、高さを南北壁でわずかにずらし穿たれており、足掛けしやすい工夫がなされている。S室への入口は竪坑の南壁南西隅に設けられ、幅約40cm、高さ約120cmを測り、形状は上部がやや歪なアーチ状の長方形を呈す。通路入口床面と竪坑床面には40cmほどの比高差が確認される(写真39)。通路は幅約40cm、長さ約80cmを測り、床面は平坦であるがS室入口付近はスロープ状になり、室部床面と通路床面の比高差が10cmほどある。S室は東西40cm以上、南北約200cm、確認面からの深さは約50～70cmを測るが、前述のとおり室の大半は調査区外の本郷通り側へ広がっており、平面形状は不明である。確認された東壁面は平滑にされ、床面上約40cmあたりに2～3cmほどのピットが3基横1線に並ぶ。また床面の北東隅と南東隅にも長径約20cm、短径約10cmの楕円形の凹みが確認された。なおSU661でもSU145で確認されたのと同じく、有機物が炭化したような黒色の付着物が東壁面と床面で確認された(大成)。

SU702 (写真41～49) E24～G27グリッドにかけて位置する。竪坑は長方形を呈し、確認面での規模は東西3m、南北2.6mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面までの深さは385cmを測り、床面標高は19.4mである。室部への入口は北壁中央、東壁南寄り、南壁中央、南西角、西壁北端部の5箇所から検出され、北壁中央から続く部屋を1室、東壁南寄りから続く部屋を3室、南壁中央から続く部屋を4室、南西角から続く部屋を5室、西壁北端部から続く部屋を6室とした。1室は南東隅がSE783の陥没によって、南西隅は壁の崩落によって一部不明である。その他の隅には各壁両端にピットが確認された。各隅のピットは左右2基(約25cm間隔)、上下2基(約10cm間隔)の4基で構成されている。下段のピットは床面上55cmを測る。また東西両側壁には隅部のピット群より低い、床面上30～40cmに小穴が認められた。床面中央部は入口から奥壁にかけて硬化している。床面上の杭痕は非常にまばらに分布している。3室は入口部に対して横方向の扇形を呈している。北壁は1室同様SE783の陥没による攪乱によって約1m陥没している。入口から床面中央にかけては固く締まっており、南東隅、南西隅に各壁に2基ずつ(約25cm間隔)の合計4基のピットが各々設置されている。また各壁面には床面上55～60cmで小穴が穿たれている。4室は南に延びる羽子板状を呈しており、入口部から室部中央にかけて硬化面が広がる。南東隅、南西隅には各壁に2基ずつ(25～30cm間隔)の合計4基のピットが各々設置されている。さらに北壁入口部西に1基、

西壁北寄りに1基存在する。また各壁面には床面上50cmで小穴が穿たれている。それに対し床面上の杭痕は散漫に分布している。前壁入口部西側、床面上50cmには灯火具置き場として半円形の坑が穿たれている。室部から観た入口部は幅60cm、高さ60cmを測る。5室は西半分が調査区外に及ぶため、形態、規模など詳細は不明であるが、北東部に張り出しを有し、T字もしくはL字状の室部が推定される。他室同様壁際を除く床面は硬化している。前壁入口通路部両側には補強用施設と推定される長方形のピットが認められる。床面には杭痕が認められるが、その分布は散漫である。6室はほとんどが調査区外に及ぶため、詳細は不明である。前壁際には補強用施設と推定されるピットが、入口部両脇と両隅部分の4箇所認められた。床面は壁際を除き固く締まっている（成瀬）。

SU824（写真50～54） I29～I30グリッドに位置する。竪坑の主軸は本郷通りと平行である。竪坑から北西方向に通路が1本延びるが、その先に室部は確認されなかった。遺構確認面で竪坑は長軸（南北）約260cm、短軸（東西）約200cm、深さ330cmを測り、床面標高は19.5mである。平面形はやや歪な長方形を呈し、壁面は平滑で、床面からやや開き気味に立ち上がっている。なお本遺構の東、南、北には別遺構があったためか、それら遺構の覆土との間にロームを主体とする埋土を版築状にし、壁を補強している様子が確認された（写真52～54）。竪坑の北壁の北西隅に位置する通路入口は、幅約70cm、高さ約160cmで、形状は上部が緩やかなアーチ状の長方形を呈すが、入口より延びる通路は幅約100cm、長さ約200cm、確認面からの深さ約60cmで止まっている。通路内壁面、床面ともに工具痕が顕著である。何らかの理由で室部構築を断念したのか、あるいは本遺構が地下式麴室とは性格を異にする遺構なのかは検討する必要がある。

SU834（写真55～63） G30～J30グリッドに位置する。竪坑の主軸はほぼ真北である。竪坑から東へ1、西へ2、南へ1本それぞれ通路が延び、その先に1室ずつ計4室（E室、W上室、W下室、S室）の室部を有す。遺構確認面で竪坑は長軸（南北）約360cm、短軸（東西）約220cm、深さ約280cmを測り、床面標高は19.3mである。平面形は不整長方形を呈し、四方の壁面、床面ともにやや凹凸が目立ち、壁面にも工具痕が認められる。床面は東から西へ、そして南から北へもわずかに傾斜している。東壁際の床面には長方形のピットが3基検出されたが、規模、位置ともにあまり規則性がなく、うち1基では柱痕と礎石のようなものが確認された。各室部の入口は幅約100cm、高さ約100～150cmで、形状は東壁のものが不整五角形（写真56）、西壁は北西隅のものが不整形、西壁中程のものが不整形（写真57）、南壁のものが縦長の五角形（写真58）を呈する。各通路は幅約60～100cm、長さは約80～100cmであるが、南側通路は約40cmと短く他の通路と規模が異なる。また北西隅の入口以外は、通路入口付近の床面が竪坑側へ緩やかに傾斜し、竪坑床面より通路入口の床面がわずかに高くなっている。南側通路では特にその差が大きく比高差が40cmほどある。S室を除き通路から各室の奥壁へ向かう直線上は床面が非常に硬化し、線状痕が多数観察される。W上・W下室は調査区外へ室部が延びているため、規模、形状ともに明らかでないが、途中で連結した形で検出された。なお連結部分から西側が調査区外に及ぶため、室部同士が通路で連結していたのか重複関係があるものであったのかは判別できなかった。なおこの両室の連結部分付近の床面には一辺約80cm、深さ5cmほどの正方形の凹みがあり、その床面に炭化した板状のものが検出され、周囲には一辺約4cm、深さ約8cmの方形のピットが数基確認された（写真62）。E室は長軸（東西）約1100cm、短軸（南北）約200～240cm、S室は長軸（南北）約840cm、短軸（東西）約200cmを測り、平面形状はともに細長い長方形を呈す。なお1次調査でS室のみ床面から約80～100cmで、緩やかなアーチ状の天井部を確認している。室部全体の調査が可能であったE、S室では他の地下式麴室室部と同じく、平滑に整形された壁面とやや凹凸のある床面にピットが検出された。ピットの規模

は平均直径約 4cm だが、深さは約 5～20cm とばらつきがある。壁面のピットは E、S 室ともに床面上 40～50cm で確認される。室部床面のピットは、E 室では前述した通路から E 室へ向かう直線上の硬化面に沿う形で検出された。なお E 室のみ室部入口付近の硬化した床面部分の両側に、東西約 250cm、南北約 80cm、深さ 10cm 弱の浅い長方形の土坑状のものが検出されたが、その一方の土坑の床面では、W 上・W 下室の連結部分付近で検出されたものと類似する炭化した板状のものが確認された (大成)。

地下室

町屋エリアでは 9 基確認された。規模や形状などに企画性は認められないが、いずれも付帯施設や階段などが無い、いわゆる袋状地下室であり、位置する場所が調査区の東側半部、すなわち本郷通り (旧中山道) というメインストリートからは奥まった位置にあるという点は共通している。また最終的にはいずれも廃棄施設として利用されたのか、自然遺物も含め多量の遺物が出土している (大成)。

井戸 (写真 65～73)

町屋側だけで 23 基の井戸が検出された。出土遺物の年代を確認していないので断言はできないが、非常に隣接して検出されたものもあること、規模に違いがあることなど、23 基が同時期に存在していたとは考えにくい。しかし非常に井戸が多い点もこの町屋の特徴の一つである。いずれも素掘りの井戸であり、足掛け穴を有するものが目立つ。なお 1 次調査で井戸の円筒状の壁面全体がオーバーハング、あるいは崩落していた SE514、783 の 2 基の井戸は 2 次調査でも調査を行った。

SE239 (写真 65) は H25 グリッドに位置し、今回検出された SD8 と SD50 を基準として絵図面と対照すると、番所近くに描かれた井戸に比定される可能性が高い。

SE514 は F29～G29 グリッドに位置する。遺構確認面での掘り方の直径は約 280cm、井戸側の直径が約 140cm を測り、平面形状が円形を呈す (写真 66～69)。1 次調査で確認面から 200cm ほど掘削した付近で壁面全体がオーバーハングしていることが確認され、確認面から約 -270cm で円筒状の壁面全体が崩落している状況が観察された。2 次調査では地下式麴室と同じく地表面から -350cm 掘削したところから南北方向に半截、調査を実施したが、それより -450cm 掘削したところで安全上調査を中止した。

半截したところ断面は写真 68 のように南北に大きくハの字に広がり、2 次調査の確認面から -230cm 辺りで屈曲し、丸底フラスコ形の断面形を呈すことが確認された (写真 69)。屈曲部分はちょうど東京パミス層 (以下、T.P.) にあたる。覆土は凸レンズ状に堆積し、非常に締まりがあり、瓦や漆喰、貝殻などをやや多く含むが、南北に覆土が広がっている辺りでは空洞も確認され、壁面から崩落したと思われる大きなロームブロックが多く観察される。このローム土中に本遺構の覆土は確認されず、建物基礎を打ち込んだ際に充填されたと思われる白色溶剤が流れ込んでいるのが確認された。なお屈曲部分以下では T.P. のブロックを含む大きなロームブロック主体の覆土となっており、そのロームブロックの隙間には本遺構の覆土が流れ込んでいる状況が確認された。この堆積状況からは何らかの理由で井戸の壁が崩落し、ごみ穴として廃棄されたが、その後 2 次的に壁が崩落したことが推測される。なお締まった覆土中から木材が検出されたが、材は未加工で、土と一緒に投げ込まれたのか、あるいは本遺構に伴う何らかの構造材の一部であったのかは判断できなかった。

F25～G25 グリッドに位置する SE783 も半截し、断面観察を行ったが、ほぼ 514 と同じような覆土の堆積状況が確認された (写真 70～72)。

なお E23 グリッドに位置する SE214 (写真 73) は、安全管理上、追加調査は行えなかったが、SU189-N 室床面から SU189-W 室床面にかけて井戸を取り巻くようにクラックが確認されていることから、SE514、SE783 と同様、断面が丸底フラスコ状にオーバーハングする形態の井戸と推定される(成瀬、大成)。

土坑

確認された土坑は壁がほぼ垂直を呈し四隅が比較的明瞭に角を有するもの(以下、方形土坑)、溝状に長いもの(以下、溝状土坑)、不整形なものに大別される。

方形土坑は 90 基ほど確認されたが、規模は長辺が約 150～250cm、短辺が約 100～200cm のものが多く、平面形状が長方形を呈するものが多い。大半が素掘りのものであるが、中には木柱の痕跡のあるもの、床面にピットを有するもの、ステップ状のテラスや水抜き穴、スノコ状の痕跡をもつものもある。このように個々の遺構の特徴をみていくと方形土坑としたものは、さらにいくつかのパターンのものに分類されそうであるが、共通しているのはこれらの位置する場所が先に述べた地下室とは異なり、調査区の西半部すなわち本郷通りに比較的近い側に多く認められるという点である。

溝状土坑は 5 基確認されている(写真 74～77)。SK498 は東西 400cm、南北 135cm、深さ 330cm、SK92 は東西 460cm、南北 100cm、深さ 160cm、SK60 は東西 500cm、南北 70cm、深さ 165～185cm、SK156 は東西 430cm、南北 105cm、深さ 260～390cm、SK957 は東西 500cm、南北 60cm、深さ 30～85cm の規模を呈す。深さは各遺構で異なるが、いずれも東西方向に 400～500cm と非常に長く、幅が 100cm 前後で人の肩幅程度であるという点、壁や床面に非常に顕著な工具痕が認められるという点が共通している。埋土を観察するとロームブロックを主体とし、遺物がほとんど出土しないものと、他の土坑と同じく数度にわたり廃棄行為が繰り返された状況が観察されるものとある。このような非常に狭く長い土坑をどのような目的で構築したのかは現段階では不明であるが、形状などから考えると上水のような施設を構築しようとして放棄したとも考えられる。

建築遺構 (写真 78～81)

建築遺構と考えられるものは 3 基ほど確認されている。残存状態が比較的良好であった SB242 は布堀り基礎で四方が囲まれたものである。基礎内の埋土はローム層とロームブロックを多く含む褐色土が版築状につき固められ、残存状態が良かった東側の布堀り基礎では東西 70cm、南北 360cm、深さ 30～40cm の掘り方に、石面を下にして設置された間知石 3 個がローソク基礎状に南北に並んで検出された(写真 79)。間知石は南側と中央の石の間隔が約 100cm、中央と北側の石の間隔が 200cm であることから、本来は半間間隔で 4 個据えられていた可能性もある。最上層の版築層の下には握り拳大の破碎礫が敷き詰められ、南側と中央の間知石の直下にのみ掘り方坑底に 1 辺 15cm ほどの破碎礫が根石として敷き詰められていた(写真 80)。根石が敷き詰められる状況は、東側以外の布堀り基礎内でも確認されており、西・南・北側の布堀り基礎部分もこのような構造であった可能性もある。西側の布堀り基礎は、基礎の下にあった深い方形土坑(SK338)を切って構築することになった為なのか、他の基礎よりも版築層を増やし、根石を敷き詰めるなどして基礎が沈まないような工夫がされていた(写真 81)。

3. 成果と課題

今回の成果は以下の点が挙げられる。

- 1) 加賀藩邸と町屋の地境の石組溝の検出
- 2) 千川上水と考えられる溝の検出
- 3) 中山道（現・本郷通り）という当時のメインストーリーに面した町屋の様々な遺構と遺物の検出
- 4) 地下式麴室の検出
- 5) 特異な構造の井戸の検出

1) については調査前から予測されていたものであったが、絵図面と同一箇所には地境溝が検出されたことで、加賀藩邸の発掘調査と絵図面などの史料を対比する上で定点とすることが可能となった。これまでの調査成果でも定点となりうる遺構が検出されているが、このような定点が増えることでより厳密な史料比定が可能となる。また町屋と大名屋敷という異なる階層の居住空間の地境がどのような構造であったのかが明らかになったと同時に、境というものがどのように意識されていたのかを考える資料の1つとなる。例えば地下式麴室 SU189 の竪坑は北側へ横坑が延び、地境溝 SD8 の下まで延びるが、室部は藩邸側ではなく西側の中山道側へ90度折れているなど、地境を意識して地下式麴室を構築した様子がかがわれ、地下空間の規制がどの程度あったのかを示すものであろう。

2) の千川上水はこれまで加賀藩邸への引き込みがないとされていたが、今回の調査によって加賀藩邸でも上水を引き込んでいた可能性がある事が明らかとなった。今後はこの引き込んだ上水を藩邸内でどのように切り回していたのかを検証し、藩邸内での上下水のあり方を考える必要がある。

3) については、これまで本郷構内で実施されてきた調査の大半は加賀藩邸という大名屋敷の調査であり、大名屋敷の生活空間や生活様相の復元が調査研究の対象で、その成果の蓄積も進んでいる。しかし今回の町屋の調査は本郷構内では初めてで、検出された遺構、遺物とも大名屋敷のそれらとは異なる点も多い。例えば地下式麴室などは大名屋敷内ではほとんど検出されないものであるし、何より遺構の密度は藩邸内とは異なり極端に高い。やはり限られた居住空間での生活というものが遺構密度の高さの一因となっているのであろう。また出土陶磁器をみると陶器、土器が多く、磁器がかなり少なく、またそれらが貝や骨などの自然遺物などとともに廃棄されているのが目立つことから、日常生活の中で廃棄されたものと推測される。廃棄されている貝の種類をみると加賀藩邸で出土するアワビやサザエなどの高級品とされる大形貝類ではなく、アサリ、ハマグリ、シジミ、サルボウなどの比較的小形の貝類が中心であり、それらが1遺構から多量に出土する例や、数度にわたり廃棄を繰り返している例も確認された。また1遺構にカキ殻のみが多量に一括廃棄された例（写真82）やマグロなどの大形魚が頭から尾まで廃棄されていた（写真83、84）例もある。なお今回イルカの骨も出土（口絵2）しており、当時の食文化や流通経路などを考える上で重要な資料である。

本地点の町屋は文献史料からその下限を溶姫輿が輿入れする前年の文政9（1826）年と確定することができる場所であり、この地点の出土遺物は下限がおさえられる年代基準資料となりうるものである。

4) の地下式麴室については1次調査の際にその分布が大きく南北2つに分かれることが確認されていたが、2次調査ではその構造も南北で異なる事が明らかとなった。すなわち調査区北側に分布する地下式麴室群（口絵1）は竪坑から何本も通路が延び、四方八方に室部が拡がる様子がかが

え、中には室部同士が連結している例（SU189-E1室とSU189-E2室、SU265-S1室とSU265-S2室、SU265-NE室とSU265-E2室など）も認められた。また室部の床面で観察されるピットも密度が非常に高い。しかし南側に分布する地下式麴室群（写真64）は1つの竪坑から多くても4本の通路しか延びておらず、室部同士が連結する例も確認されなかった（ただしSU834W上室・SU834W下室はその可能性もある）。室部床面のピットもSU834の東室は比較的多いが、これ以外は北側の地下式麴室群の室部床面ピットの密度と比較すると散漫である。これらの相異が使用者の違いによるのか、利用の仕方によるのか、あるいは年代差によるものなのかなど今後検討する必要がある。しかし密度の違いはあるが、ほぼ全ての室部で共通して観察されたのは壁や床面のピットである。室部によっては壁のピットとピットの間横方向に浅い溝状の凹みが確認されている例もある。また壁面のピットは概ね床面上40～50cmで認められ、室部床面のピットは入口から奥壁へ向かう直線上の床面を除いて検出され、その部分は非常に硬化し、線状痕が無数に観察される例が多い。これらのことから入口から室部奥へ向かう直線上の床面部分は通路として利用し、壁際は人が中腰で作業する様な棚状施設があったのではないかと推測される。そして壁、床面ともに多数のピットが認められるのは、ピット同士が近接している例も多いことから、度々その施設が作り替えられたことを示唆するのではなからうか。

今回多くの室部で確認された壁や床面に付着していた黒色の物質については、分析を目的としてサンプリングを実施した。地下式麴室の使用方法に関する物質である可能性もあり、分析成果が期待される。

5)の特異な構造の井戸（写真66～73）について文京区教育委員会の池田悦夫氏から、「ママ」と呼ばれる空間を有する井戸と断面形が類似するとの指摘をいただいた。本郷構内ではこのような形態の井戸の検出事例はなく、「ママ」を有する井戸が地域性のあるものであれば本郷六丁目の町屋の居住者を考える上で興味深い。

今後の課題は以下の点が挙げられる。

- 1) 加賀藩邸エリアの天和3（1683）年以前の使用状況
- 2) 本郷六丁目の町屋の復元

1)については史料などをみると、天和2（1682）年12月に八百屋お七の火事で加賀藩邸が全焼する以前は藩邸ではなく組屋敷であったことがわかる。出土遺物を見ると今回検出された遺構の多くは18世紀代に帰属するものであり、17世紀前半に帰属すると思われる遺構はさほど多くない。しかしその少ない17世紀前半に帰属すると思われる遺構をみると、それらの遺構は18世紀代に帰属する遺構の主軸とは異なる主軸を示している。このような遺構は本調査地点北側に隣接する法03地点などでも確認されており、それらの調査成果と合わせて天和3年以前の中山道に面したこの場所の空間復元や居住者の生活様相などを考古学的に復元していきたい。

2)については町屋の上限、居住者、地割、他の町屋跡との違いなど様々な側面から考えられそうである。前述の通り本調査地点の町屋の下限はおさえられるが、上限は現段階では定かではない。今後遺物整理をしていく中で、出土遺物の様相や質的变化などから研究を進めるとともに、詳細な史料調査も必要である。

居住者については、貝や魚骨などの自然遺物がやや特異な出土状況を示すことが手がかりの1つとなると思われる。この町屋のような出土状況が他の町屋でもあるのか否か、自然遺物だけでなく陶磁器など他の遺物も含めて検討した上でこの町屋だけの特殊な状況ということであれば、この町屋の居住者の身分や生業を考える材料の1つとなろう。また出土量の少なかった瓦の中に加賀藩の家紋瓦で

ある「梅鉢文」のある軒丸瓦が含まれている事も注目される点である。出土地点も加賀藩邸寄りの場所だけではなく、町屋エリア全体から出土している。その中には金箔瓦と思われる破片もあり、居住者や利用の仕方を考える際には考慮しなくてはならないだろう。

現段階では町屋内の地割りに伴う溝や塀などは確認できていない。しかし遺構の分布状況、例えば27～29グリッドや34グリッド以南で地下式麴室が散見されず、その部分に建築遺構やピットの集中が認められるなど、遺構の分布状況を細かく精査、検討する事である程度地割りを明らかにできると考える。

江戸時代の町屋の調査はこれまで日本橋をはじめ江戸城外堀周辺部や当時の場末であった染井、巢鴨などを中心に進められてきているが、当調査地に該当する本郷六丁目の町屋の状況を復元した後は、そのような中心部や場末の町屋と中山道というメインストリートに面した本郷六丁目の町屋とを比較検討し、江戸の町屋全体について考えていきたい（大成）。

【参考文献】

大成可乃 2004「法学系総合研究棟地点調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

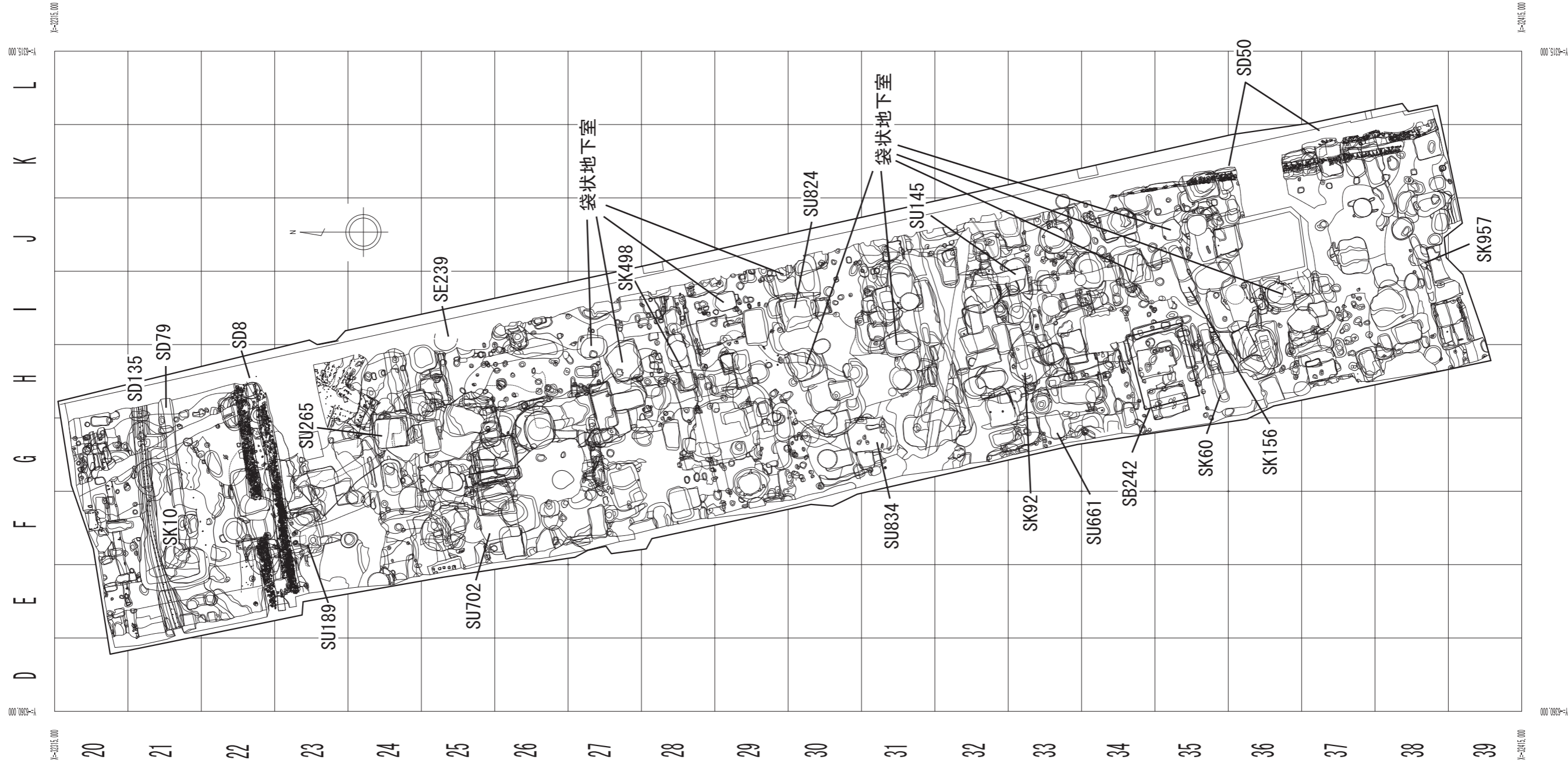


图 1 1次調査全体図 (S=1/300)

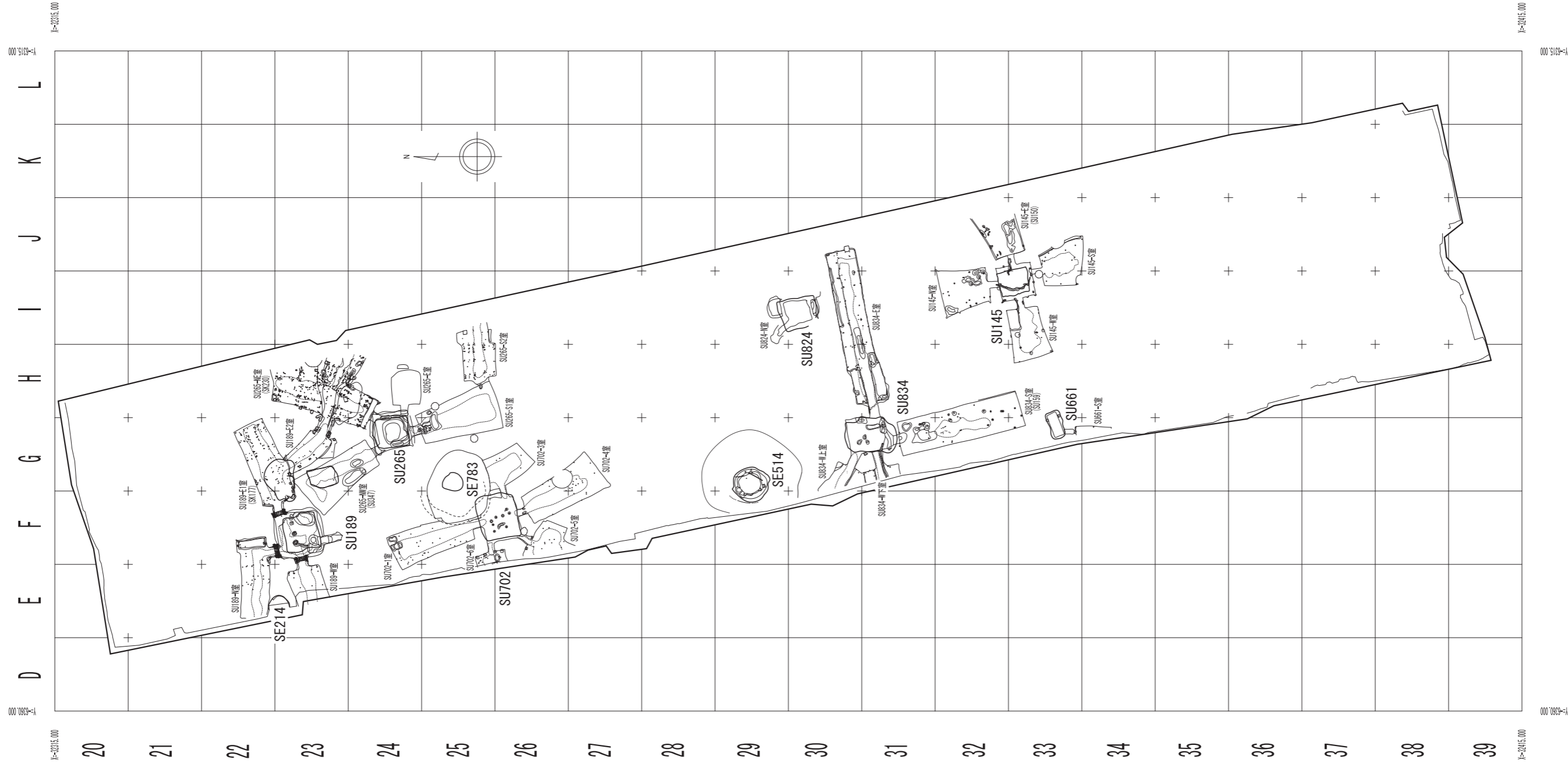


図2 2次調査全体図 (S=1/300)



写真1 1次調査全景 (北から)



写真2 加賀藩邸全景



写真3 SD8



写真4 SD50



写真5 SD50 間知石



写真6 SD79 (左)・SD135



写真7 SD135 木樋・釘検出状況



写真8 SK10 (右が北)



写真9 SK10 出土染付磁器大皿



写真10 SK10 出土磁器皿（「御末」釘書）



写真11 SK10 出土家紋瓦



写真12 SU145 全室



写真13 SU145 豎坑



写真14 SU145-W 室



写真15 SU145-E 室への通路入口



写真16 SU145-W 室

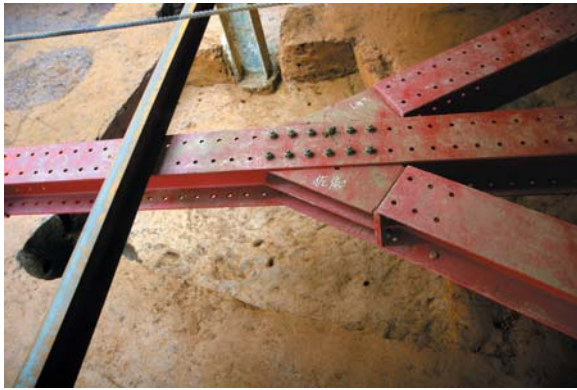


写真 17 SU145-S 室



写真 18 SU189 全室



写真 19 SU189 豎坑・SU189-N 室



写真 20 SU189-W 室



写真 21 SU189-E1 室



写真 22 SU189-E1 室入口天石検出状況



写真 23 SU189 東入口貼り壁断面



写真 24 SU189-E2 室



写真 25 SU265 全室



写真 26 SU265 豎坑



写真 27 SU265-NW 室



写真 28 SU265-NE 室



写真 29 SU265-NE 室入口



写真 30 SU265-NE 室・SU189-E2 室連結部



写真 31 SU265-NE 室床面



写真 32 SU265-E 室



写真 33 SU265-S1 室



写真 34 SU265-S1 室床面



写真 35 SU265-S2 室



写真 36 SU265-S2 室床面



写真 37 SU661 全室



写真 38 SU661 豎坑南壁



写真 39 SU661-S 室通路



写真 40 SU661-S 室東壁



写真 41 SU702 全室



写真 42 SU702 豎坑



写真 43 SU702-1 室



写真 44 SU702-1 室北壁



写真 45 SU702-1 室床面線状痕



写真 46 SU702-3 室



写真 47 SU702-4 室



写真 48 SU702-5 室



写真 49 SU702-6 室

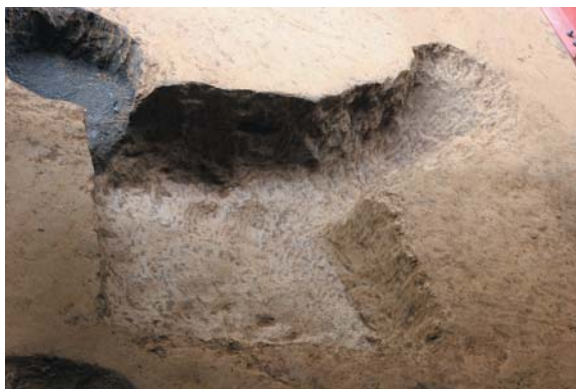


写真 50 SU824 全室



写真 51 SU824 豎坑



写真 52 SU824 豎坑東壁補強部断面



写真 53 SU824 豎坑南壁補強部断面



写真 54 SU824 豎坑北壁補強部断面



写真 55 SU834 全室



写真 56 SU834 豎坑



写真 57 SU834 豎坑西壁



写真 58 SU834 豎坑南壁



写真 59 SU834-E 室



写真 60 SU834-W 上・W 下室



写真 61 SU834-W 上・W 下室床面 (W 上室から)



写真 62 SU834-W 上・W 下室間炭化材



写真 63 SU834-S 室



写真 64 SU145・SU661・SU834 全景 (東から)



写真 65 SE239 完掘



写真 66 SE514 1次調査



写真 67 SE514 1次調査時断面



写真 68 SE514 2次調査時断面



写真 69 SE514 2次調査時断面 2



写真 70 SE783 1次調査



写真 71 SE783 1次調査時断面



写真 72 SE783 2次調査時断面

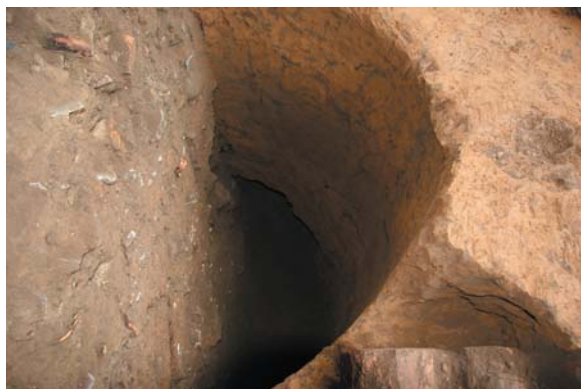


写真 73 SE214 1次調査



写真 74 SK498



写真 75 SK92



写真 76 SK60



写真 77 SK156



写真 78 SB242 検出



写真 79 SB242 東側布堀り基礎



写真 80 SB242 根石



写真 81 SB242 西側布堀り基礎断面



写真 82 カキ層出土状況



写真 83 大形魚骨出土状況



写真 84 マグロ頭骨出土状況

第2部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

農学部共同溝地点 (NK84)

総合研究博物館小石川分館地点 (KI)

東京大学本郷構内の遺跡

農学部共同溝地点発掘調査報告

2008

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本報告は、東京大学農学部内の共同溝新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本地点は、『東京大学構内遺跡発掘調査研究年報』6において、「本郷84 農学部共同溝（略称NK84）」と掲載されている調査地点である。
3. 本地点は、東京都文京区弥生1-1-1 東京大学弥生構内に所在している。
4. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区47 本郷台遺跡群（本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平]住居・[近]礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣 [旧] [縄] [弥] [古] [平] [近]）」内に位置している。
5. 調査整理面積は、50㎡である。
6. 調査整理期間は以下の通りである。
 - 事前調査 1984年7月9日～7月24日
 - 整理作業 2004年6月1日～7月2日（遺物整理）、2005年3月23日～4月13日（遺物写真撮影）、2007年2月28日～6月28日（トレース・図版作成）
 - 報告書編集 2007年12月5日～2008年2月7日
7. 発掘調査は、東京大学考古学研究室が行い、調査担当者は今村啓爾（現埋蔵文化財調査室長）である。
8. 銭貨の分類・鑑定は流山市立博物館の川根正教氏にご教示いただいた。
9. 本報告の編集は、堀内秀樹が行った。
10. 執筆分担は以下の通りである
 - I、II、IV 堀内秀樹
 - III-1 堀内秀樹
 - III-2 阿部常樹
11. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス、茨城県石岡市柿岡414 東京大学柿岡教育研究施設内において、運用、保存、管理している。
12. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々からご教示を得た。記して感謝を表したい。（敬称略、五十音順）

岩淵令治、小川 望、金子 智、金行信輔、川根正教、樋泉岳二、宮崎勝美
東京大学人文社会系研究科文学部考古学研究室、東京大学施設部
13. 発掘調査・整理作業参加者
佐藤文泰・高井佳弘・徳岡暁波・松下理恵・山形真理子（発掘調査時文学部考古学研究室）
青山正昭・安芸毬子・阿部常樹・今井雅子・大貫浩子・香取祐一・北島くりか・坂野貞子・田中美奈子（埋蔵文化財調査室）

凡 例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。
SK：土坑 SU：地下室
2. 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に1／3である。
3. 出土遺物の写真は、基本的に添付したCD-ROMにJPEG形式に圧縮して記録した。
4. 遺物番号は本文、挿図、観察表、CD-ROMの写真で共通の番号を使用した。
5. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
 - ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
 - ・|——|は、口唇部の口銹を表している。
 - ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
 - ・— —は、断面を表している。
 - ・播鉢の◀——▶は、体部播目の範囲を表している。
 - ・口唇部の◀——▶は、敲打痕を表している。
6. 本文中に記載した陶磁器・土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に準拠している。

東京大学本郷構内の遺跡
農学部共同溝地点発掘調査報告書

目 次

例 言
凡 例
目 次

第 I 章 調査の経過と概要	
第 1 節 調査に至る経緯	77
第 2 節 調査の経過	77
第 3 節 調査地点の位置と環境	77
第 II 章 出土した遺構・遺物	83
第 III 章 農学部共同溝地点の成果	
1. 農学部共同溝地点出土陶磁器・土器類について	
— 行人坂火事の一括資料 —	堀内秀樹
	119
2. 農学部共同溝地点出土の動物遺体	阿部常樹
	127
第 IV 章 まとめと今後の課題	145
引用・参考文献	
調査報告書抄録	

第 I 章 調査の経過と概要

第 1 節 調査に至る経緯

昭和 59（1984）年 7 月、農学部正門付近で共同溝敷設を行っていた工事現場から多量の江戸時代の生活遺物が出土した。こうした状況を受け、工事を担当していた東京大学施設部から同文学部考古学研究室に埋蔵文化財の調査に関する照会があった。共同溝工事はいわゆる推進工法が採られており、遺物は掘削用重機搬入の堅坑範囲から出土していた。当時学内では、主に江戸時代の遺跡を対象として山上会館・御殿下記念館地点、法学部 4 号館・文学部 3 号館地点、理学部 7 号館地点などの調査が行われており、当該地点も発掘調査の必要があった。急遽行った施設部との協議の結果、工事を一時ストップして考古学研究室の今村啓爾（現埋蔵文化財調査室室長、当時助手）が中心となって発掘調査を行うことが確認された。

第 2 節 調査の経過

調査は急遽行うこととなったが、共同溝敷設のための堅坑約 50㎡全域を考古学的調査の対象とした。

発掘調査は、7 月 9 日から今村助手および急遽参加した考古学研究室の学生によって行われた。堅坑掘削の工事によって既に後述する SU1 およびそれと切り合い関係にあった SU3、SU4 などの上部は壊されており、調査はその時点からのスタートとなった。限られた期間や深い遺構深度のため調査は手間取ったが、7 月 23 日に確認された 5 基の遺構の調査を終了し、現場での発掘調査は完了した。

第 3 節 調査地点の位置と環境

（1）位置

調査地点は、東京都文京区弥生 1-1-1、東京大学弥生キャンパス正門の北東側に位置している。弥生キャンパスは、現在、東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部校舎が主として利用しているエリアで、弥生キャンパス、浅野キャンパスなどを含めた本郷キャンパスの北側に位置する。本郷キャンパスの地理的様相について概略を記するとキャンパス内は武蔵野台地の東端、南北に延びる本郷台地（神田台）上の M2 面上に存在する。このうち標高約 20～22m の上位面と 15～17m の下位面とが存在し、本地点は上位面に位置する。本郷台地の東は上野台地を挟んで旧石神井川によって開折された谷で、旧石神井川は、従来不忍池から南流して江戸湾に注ぐものであったが、加賀藩下屋敷のある滝野川付近より人為的に東流させ、荒川に流入するように改変されている。また、台地東斜面は小河川による谷が複雑に入り込んでおり、この状況は、東京大学本郷構内の発掘調査によっても確認されている（東京大学遺跡調査室 1990、東京大学埋蔵文化財調査室 2005）。

東京大学本郷構内は、ほぼ全域を「文京区 47 本郷台遺跡群」、一部を「文京区 28 弥生町遺跡群」

として周知の遺跡として登録されている。調査室では1983年以降、事前調査、試掘調査、立会調査など含めて現在までに83地点の調査を行っている。本調査地点が含まれる弥生キャンパスでは、東京都が行った本郷追分（東京大学構内雨水調整池遺跡調査会1994）の他、埋蔵文化財調査室によって9農学部家畜病院地点（東京大学埋蔵文化財調査室1997）、13、16農学部校舎（7号館）地点（同2004）、12農学部図書館地点（同2004）、33地震研究所テレメタリング地震観測施設地点（同2004）、18総合研究棟地点（仮称、未報告）、41ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（仮称、未報告）など6回の事前調査が行われている（I-1図）。また、地下鉄南北線の東大前駅建築に伴って調査された駒込追分町遺跡（地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会1996）が西隣して存在する。これらの地点からは旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物が出土しているが、これらについての詳細は上記の報告書を参考にされたい。

（2）歴史的環境

発掘調査で出土した遺構、遺物は、いずれも江戸時代に構築、使用、廃棄されたものであるため、江戸時代における本地点の歴史的環境について略説したい。

調査地点は幕末の状況を表した万延2（1862）年尾張屋清七版江戸図によると中山道が西折する追分から北方に向かう日光御成道（岩槻街道）の東側にある水戸藩駒込邸方に折れる路地の北側、「御小人」あるいは「西教寺」に位置している（I-8図）。

土地利用が正確に描かれている図は少ないものの、これ以前の当該地付近の地割りは基本的には、これと大きな差異はない。調査区付近の状況を描いたを最も早い絵図は、白杵市教育委員会蔵「寛永江戸全図」である（I-3図）。これによれば、すでに追分のやや北方に水戸藩徳川家下屋敷、安志藩小笠原家下屋敷とそれに続く当該路地が描かれている。これが土地利用が確認できる最古の絵図面で、これによると当該地を含む岩槻街道の両筋は、両側には「牧野金助組」と書かれている。また、これに続く「正保年間江戸図」でも同様であり、明暦の大火以前は組屋敷が存在していたことが判る。

牧野金助は、『寛政重修諸家譜』によれば、推古天皇の時、大和国高市郡田村村に居住したことから「田口」を号する族で、一時、系が不明になるが、応永年間（1394～1427）に足利義持の命により田三左衛門尉成富が三河国宝飯郡牧野村に城を築いたことから、「牧野」と称したことが書かれている。「寛永江戸全図」に描かれた当時の当主は、田三左衛門尉成富より三代目の牧野正成であろうと思われる。正成は天正12（1584）年徳川家康に仕え、関東入国時に供奉し、小人頭をつとむと記されている。代々「金助」あるいは「金蔵」を名乗っている。

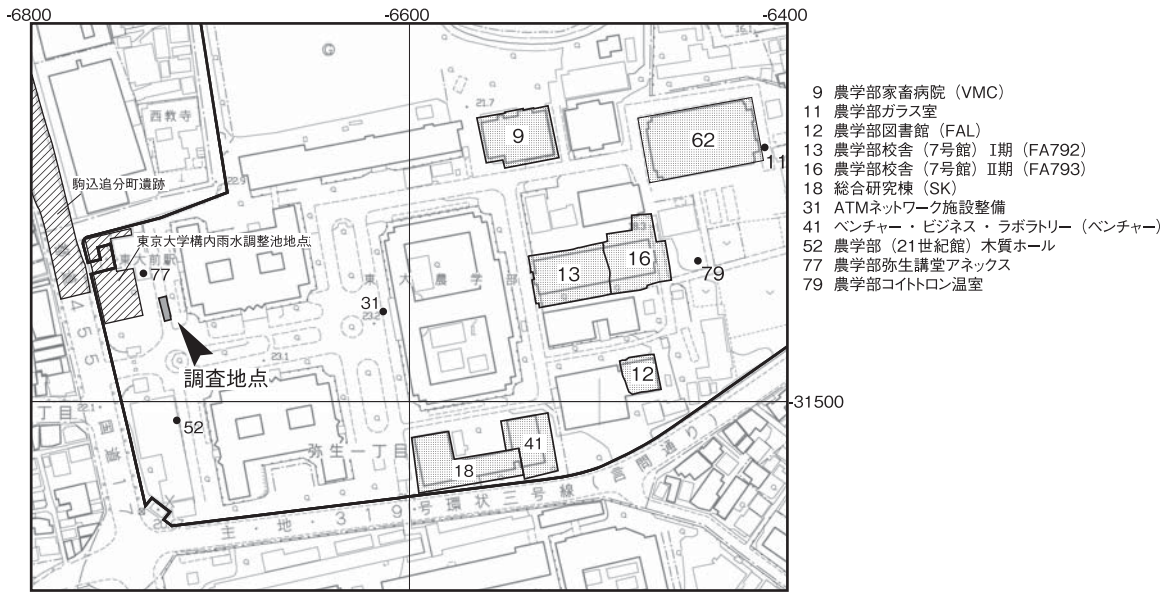
明暦の大火直後の様子を描いたとされる明暦3（1657）年の「江戸大絵図」（三井文庫）では「寛永江戸全図」、「正保年間江戸図」と同様に岩槻街道からクランク状に北に折れる道が描かれている。しかし、重要な点はこれと岩槻街道との間が南北に地割りされ、西を「御小人」、東を「町」と記されている点である。スケールはやや正確さを欠くが、調査地点は「御小人」と記されている中に位置すると推定されるが、明暦大火後の段階で南北に地割りがあったことは重要であり、幕末期の江戸図にも南北の地割りが存在することから、このあたりが明確には記されていない寛文図（I-5図）、宝暦図（I-6図）の頃にも東西で異なる土地利用がされていた可能性がある。この明暦期の「御小人」が誰を指すのかは不明であるが、引き続き牧野家であった可能性もあろう。

寛文11（1671）年の「新板江戸外絵図」（古板江戸図集成刊行会1960）（I-5図）あるいは享保元（1716）年の「分道江戸大絵図」（古板江戸図集成刊行会1960）（I-6図）では、追分周辺の土地利用の記載が不十分であり、拝領者など不明である。

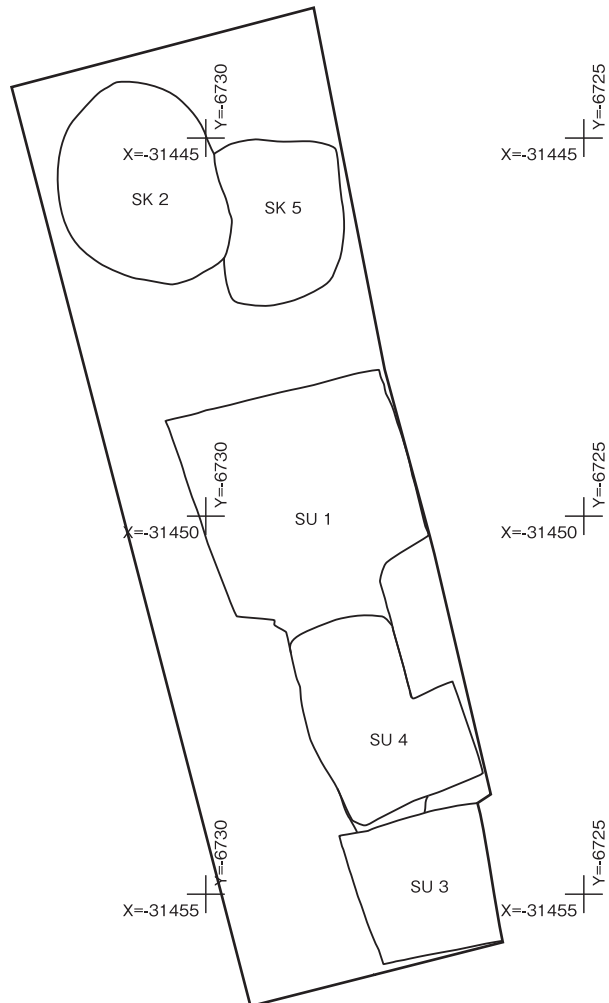
この間、岩淵令治氏の研究によると元和 4（1618）年に街道の東側を小人中間 5 人拝領の後、延宝年間（1673～81）には町場として成立している（岩淵 1996）。

一方、SU1 の廃絶に関係すると推定している行人坂火事は明和九（1772）年に起こっており、それ以前を描いた図は宝暦七（1757）年「分間宝暦江戸大絵図」がある（I-7 図）。これには詳しい記載がなく、当該地点付近には大きく「願行寺」と描かれているのみで、寺地か町地か判別つけがたい。この寛文図、享保図、宝暦図は、明暦図にあった東西の地割りが描かれていないが、絵図や書き込みが簡略であることなどから一概に地割りの有無を論ずることができないと思われる。

幕末期の当該部分は尾張屋板と嘉永 3（1850）年刊行の近江屋吾平板「谷中本郷駒込小石川辺絵図」、「復元江戸情報地図」（朝日新聞社 1994）が異なっており、例えば「西教寺」は、尾張屋板では日光御成道から安志藩の方に向かう筋の最初のコーナーとの間に位置している（I-8 図）が、近江屋板、「復元江戸情報地図」では最初のコーナーを北折し、やや上った西側に描かれている（I-9 図）。一方、明治 16 年測量の参謀本部の地図と照合してみる（I-10 図）と、現況（I-1 図）と同様西教寺はコーナーに存在する。また、江戸図では中山道東側は、工学部 14 号館地点の位置する御先手組屋敷の北端から→加賀藩追分御門→森川屋敷（尾張屋板では金右エ門、近江屋板では富之助）→道→西：駒込追分町、東：尾張屋板では西教寺、近江屋板では駒込片町である。森川金右エ門は 1,137 坪を屋敷地として拝領していることから、参謀本部の地図に描かれたクランク道が間口であると仮定すると明らかに長すぎる。これらから、森川邸は約半分の間口の I-10 図グレーのラインに囲まれた B 部分に該当し、A と B の間に存在していた道は、幕末あるいは明治の早い段階で現在の西教寺より南側部分の道を付け替えていると考えられる。



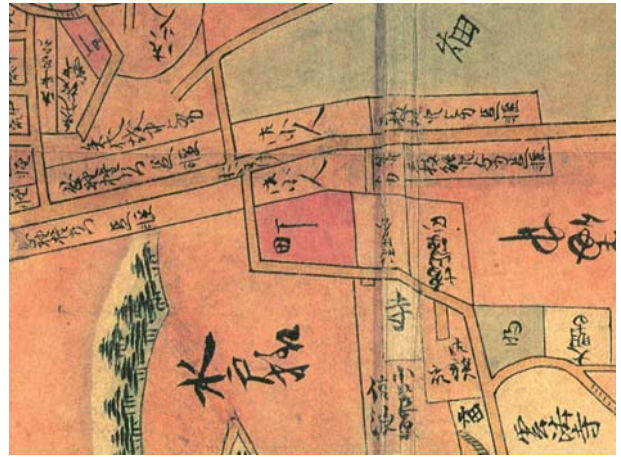
I-1 図 調査地点の位置



I-2 図 農学部共同溝地点全体図



I-3 図 『寛永江戸全図』
(臼杵市教育委員会所蔵) より抜粋



I-4 図 『江戸大絵図』(三井文庫所蔵) より抜粋



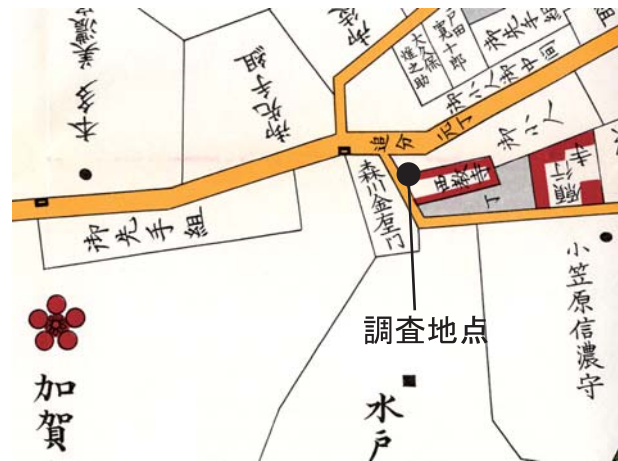
I-5 図 『新板江戸外絵図』
(『古板江戸圖集成』巻三) より抜粋



I-6 図 『分道江戸大絵図』
(『古板江戸圖集成』巻七) より抜粋



I-7 図 『分間宝曆江戸大絵図』
(『古板江戸圖集成』巻七) より抜粋



I-8 図 『小石川谷中本郷絵図』
(尾張屋清七板) より抜粋、一部加筆

第Ⅱ章 出土した遺構・遺物

本地点からは、江戸時代に比定される遺構が5基確認されている。地下室が3基、土坑が2基である。

・SU1（遺構Ⅱ-1、2図、遺物Ⅱ-6～15図）

遺構

調査区中央に位置する地下室で、遺構の主軸は、N-25°Wである。これは本地点の西側に南北に走る日光御成道（現在の本郷通り）と同じ方位である。階段でSU4と重複しており、新旧は本遺構が新である。遺構は確認時には室部、階段上部とも工事のために部分的に削平されていた。

遺構はやや歪んだ方形の室部から南側に階段が延び、羽子板状を呈している。室部の規模は南北290cm、東西290cm、遺存する階段部は南北320cm、東西140cm、深さは確認面から230cmを計測する。階段は南側深度が浅い方がSU4と重複しているため遺存状態が悪いが、6段のステップが確認された。ステップは最下段の比高差が最もあり、坑底から60cm程度高いレベルで構築されているが、大きい高低差から使用時あるいは廃棄時に部屋に突き出したステップを破却した可能性もある。これ以外の各ステップは20～30cmの比高差を持って構築されている。また、ステップの両壁面には、板状の補強材を差し込んだと推定できる鋸歯状のほぞ穴が確認されている。室部南側坑底には南北40cm、東西90cm、坑底からの深さ25cmの小ピットが確認されているが、これの性格は天井の落下防止あるいは階段補強のためと推定している。室部の壁および坑底は平滑に整形されていた。覆土は南階段側から室に向かって傾斜を有し、最上層は地下室の天井が崩落したと考えられるロームブロックが厚く堆積していた。覆土中には焼土が多く混入しており、出土遺物の多くも二次的な火熱を受けている。火災の後片付けであろうと思われる。

出土遺物は、陶磁器・土器類、瓦、銭貨をはじめとする金属製品、ハマグリ、シジミ、サザエなどの自然遺物などが焼土が混入する層を中心に多く出土している。

遺物

本遺構からは、陶磁器・土器類、瓦、金属製品、自然遺物などが多く出土している。遺物の多くは、二次的な火熱を受けており、これらは火災の後片付けと考えられる。

磁器 1～22は肥前系磁器である。1は白磁で、JB-1-dに分類される。器面は細かいロクロ目が観察できる。2～9は染付碗で、2はJB-1-u、3はJB-1-e、4はJB-1-f、5～7はJB-1-g、8はJB-1-l、9はJB-1-eに分類される。2はコンニャク印判と手描きで施文され、高台裏は「大明年製」の崩し銘が書かれている。4は高台脇を金彩している。また、漆継ぎの痕跡が確認できる。7は胎土は灰色、呉須は黒ずんだ発色をしている。口唇部に二次的な敲打痕が確認される。8、9の見込みには手描き五弁花が認められる。10は染付碗の蓋で、JB-00-eに分類される。11は染付坏で、JB-6-bに分類される。器面は二次的な被熱痕が認められる。「大明年製」銘が書かれている。12は白磁端反坏でJB-6-b、13は染付坏でJB-6-aに分類される。14は底部無釉の青磁蛇ノ目釉剥ぎ皿でJB-2-k、15は底部施釉の染付蛇ノ目釉剥ぎ皿でJB-2-mに分類される。15の見込み中央にはコンニャク印判の五弁花が施されている。16は染付皿で、JB-2-eに分類される。高台は畳付脇を一段凹ませている。口唇部には濃茶色の口銹が確認できる。17は染付磁器皿で、JB-2-eに分類される。見込みの菊文はコン

ニャク印判、裏面の松葉文は手描きで施文されている。ヒビもない完形である。18は白磁鉢で、JB-5-bに分類される。ロクロ成形の後、輪花に型打ちしている。裏側面輪花のすじ状になる凹みは、下半を棒状工具で窪ませている。見込みの葉団扇？は型によって浮文を呈している。口唇部は平縁に成形され、薄茶色の口銹が施される。高台はやや幅広で、丁寧に成形されている。色調は典型的な乳白手より灰がかっている。19は染付仏飯器でJB-8-cに分類される。脚畳付外周を内削ぎ状に面取りしている。20は染付瓶で、JB-10-aに分類される。呉須はややくすんだ青色を呈している。21は色絵油壺で、JB-12に分類される。胴部下半や内面は二次的な被熱によって表面が剥落している。赤、緑の絵の具で上絵付けされている。22は白磁蓋物で、JB-13-bに分類される。表面は二次的な被熱の痕跡が認められる。

陶器 23～52、54は陶器である。23は京都・信楽系呉須絵碗で、TD-1に分類される。畳付を除く全てに白土が塗布され、文様はその上に描かれている。24～26は瀬戸・美濃系陶器碗で、24が柳茶碗でTC-1-g、25が刷毛目碗でTC-1-s、26が平碗でTC-1-nに分類される。24は鉄絵の具でやや薄く柳文が描かれている。25は内外面ともいわゆる打ち刷毛目である。26は見込みに鉄と呉須で文様が描かれており、また、底部には「八」の下に「万」が墨書されている。27は瀬戸・美濃系灰釉緑釉流しのいわゆる菊皿で、TC-2-lに分類される。全体は大きく歪んでいる。見込みには3箇所の特チ痕が確認される。底部には「つるかめ」と墨書されている。28、29は瀬戸・美濃系灰釉摺絵皿で、TC-2-eに分類される。見込みは鉄で、摺絵で草花文様が施されている。共に全体に二次的な被熱痕が認められる。29の底部には「八」と墨書されている。30は瀬戸・美濃系褐釉皿で、TC-2に分類される。把手は確認できないものの、碁笥底で18世紀前半の灯明具であろう。見込みには3箇所の特チ痕が認められる。31は瀬戸・美濃系の摺絵型皿で、TC-2-eに分類される。底部は輪高台で、ロクロ成形の後、型打ちしたものである。底部は無釉である。32は京都・信楽系皿で、TD-2に分類される。口唇部4箇所を内側に凹ませることによって、4単位の輪花に成形されており、各凹みの間には逆ハート形の透かしを入れている。堅緻な薄茶褐色の胎土を呈している。33、34は瀬戸・美濃系灯明皿で、TC-2-oに分類される。33はヒビも確認されない全くの完形である。共に見込み中央に輪状の積み跡が確認される。35はいわゆる肥前京焼風陶器鉢で、TB-5-cに分類される。見込みは呉須で山水文が、描かれている。底部は無釉で、右方に「富永」の刻印が押されている。36は肥前系陶器灰釉鉢で、TB-5-dに分類される。胎土・成形の特徴から内野山窯の製品であろうと思われる。見込み蛇ノ目釉剥ぎの後、鉄漿が施されている。製品は蛇ノ目釉剥ぎ部にさらに胎土目を置き、重ね焼きしている。37、38は瀬戸・美濃系香炉・火入れで、37がTC-9-c、38がTC-9-bに分類される。38は内面も施釉されており、口唇部には敲打痕が密に確認できる。共に二次的な被熱痕が確認される。39は京都・信楽系香炉・火入れで、TD-9-aに分類される。白土に灰釉が掛けられており、その上から竹文が上絵付けされている。上絵具の色調は剥落のため、確認できない。底部には「木」？が墨書されている。やや焼成は不良である。40～42は瀬戸・美濃系壺で、TC-15に分類される。40は灰釉、41は尾呂風の褐釉藁灰釉流し、42は柿釉が施されている。40の口唇部、内面には鉄分が付着しており、お歯黒壺などの用途に使用した可能性もある。42、43の内面は鉄釉で化粧掛けされている。43は壺の蓋で、TC-00-aに分類される。内外面は鉄釉で薄く化粧掛けされている。44は瀬戸・美濃系灰釉香炉・火入れで、TC-9-aに分類される。45は瀬戸・美濃系甕で、TC-15-bに分類される。胴張り状を呈しており、胴部上位に最大径を有する製品と比べやや遡るタイプであろうか。46、47は瀬戸・美濃系灰釉徳利で、46が五合入りでTC-10-d、47が二合半入りでTC-10-aに分類される。46の胴部上位には「長」の釘書きが確認できる。47は釘書きは確認される

ものの欠損部分が多く、判読できない。内面は鉄分が多量に付着している。お歯黒道具に使用していたのだろうか？48は胴部に縦のシノギが連続して彫られている鉄釉灰釉流し土瓶で、TZ-34-Iに分類される。内面には柿釉が施されている。注口には4箇所小さな茶葉止めが確認できる。底部にはススが付着している。49は瀬戸・美濃系灰釉片口鉢で、TC-23-bに分類される。体部下半には二次的な被熱の痕跡が認められる。50～52は志戸呂の油受け皿で、TF-40に分類される。受けから油が入る孔が50、51が3箇所、52が1箇所開けられている。51は他と比較して焼きが甘い。52はヒビも確認されない完形である。54は瀬戸・美濃系播鉢で、TC-29に分類される。内面は使用による摩耗が著しい。

土器 53、55～83は土器である。53は透明釉が施されたひょうそくで、DZ-44-bに分類される。口唇部に灯明の痕跡が確認できる。ヒビも全くない完形である。55はかわらけで、DZ-2に分類される。表面には銀彩が施されている。二次的な被熱の痕跡が認められる。56～70はかわらけで、DZ-2-bに分類される。56は裏面から底面に火襷状の焼ムラが認められる。56、60、63、67はヒビもなく全くの完形である。57、58、66は二次的な被熱の痕跡が認められる。67、68は口唇部に灯明の痕跡が確認される。69は底部中央に径4mm程度の孔が穿たれている。71、72は土師質無釉の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。二次的な被熱によって表面の一部が剥落している。71の口唇と受けの一部に灯明の痕跡が確認できる。73は土鈴で、DZ-58に分類される。胎土は堅緻で、白がかった褐色を呈している。ヒビも入っていない完形である。74はいわゆる釜形土製品で、DZ-5-cに分類される。外面鏝より上には、銀彩されている。75～78は丸底のほうろくでDZ-47-aに分類される。76には「○」、77、78には「○」の中に「一」が刻印されている。器形の形態より76は17世紀末頃、その他は18世紀後半頃の製品であろうと思われる。79はロクロ成形「御壺塩」の刻印を有する塩壺で、DZ-51-rに分類される。80は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が明瞭に認められる。81は土師質風炉で、DZ-31-hに分類される。口唇部から器面にかけて赤彩されている。82は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。口唇部は丁寧に研磨されており、体部下端は横方向のナデが施されている。脚は欠損している。83はドーム形のいわゆるボウズと称されるもので、DZ-38に分類される。器面には丁寧な研磨され、銀彩が施されている。

瓦 84は軒丸瓦で中央に巴、その周囲に珠文が巡っている。85は平瓦である。狭端面には4箇所の寛永通宝銭の押圧痕が並んで確認できる。

金属製品 最も多く出土している金属製品は、銭貨である（Ⅱ-2表）。表に示した様式は、川根正教氏の分類によった（川根1995、1996、2001など）。40枚が銭種が判読でき、内訳は寛永通宝が38枚、元豊通宝が2枚である。後述するとおりSU1は明和9（1772）年の行人坂火事を契機に廃棄されたと考えられるが、寛永通宝にはいわゆる古寛永、文銭、四ッ宝銭、萩原銭など17～18世紀初めに鑄造された銭種が主体的に構成されており、遺構の年代的下限に近い時期の銭種が少ないことが確認される。この状況は陶磁器・土器類とは異なる様相を示している。

126、127はキセルの吸口、128は雁首である。火皿は碗形を呈し、脂返しの湾曲は小さい。129は真鍮製で、断面や頭部の形態は頭巻き釘状を呈するが、26cmを超えるものであり、火箸として使用したと考えられる。130は真鍮製の灯心押さえで、断面円形を呈する。131は真鍮製のかんざしである。頭部には搔きが付いている。132は真鍮製の板状製品で、器種は不明である。133は真鍮製のひしゃくで、柄部は欠損している。すくい落とす方向に張り出しが認められる。134は銅製の釣り針状の掛け金具である。

石製品 135、136は硯である。135は形態、石材から高島硯であろうと推定される。色調は濃

緑色を呈し、各角を丁寧に面取りしている。136の石材は中砥石として出土するものに類似しており、135などと比較すると粗である。正面左の海の一部を切り欠いて再調整している。137は温石である。表裏面には数条の条痕が付けられている。

骨角製品 138、139は先端の尖る角製品で、138の断面は長方形、139は円形を呈している。

・SK2（遺構Ⅱ-5図、遺物Ⅱ-15～18図）

遺構

調査区北側に位置するやや不整な楕円形を呈している土坑である。東側でSK5と切り合い関係にあり、本遺構が新である。また、東壁付近には大型の平石と砂利が混入する攪乱に切られている。規模は南北270cm、東西210cm、確認面からの深さは最大100cmを計測する。坑底はやや凹凸を有するが比較的フラットで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、10層に分層されるが、全体に遺物を多く包含している。最も多い遺物は貝であるが、この他陶磁器・土器類、瓦、金属製品、石製品などが出土している。

遺物

磁器・陶器・土器 1、2は肥前系磁器底部無釉の蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2kに分類される。1は染付、2は青磁である。3は瀬戸・美濃系陶器天目碗で、TC-1-aに分類される。小振りで扁平である。4は長石釉の水注で、TC-27に分類される。内面には鉄分が多く付着している。5は鳥形をしている瀬戸・美濃系灰釉水滴で、TC-19に分類される。灰釉はやや青みがかり、御深井風に発色している。羽などは棒状工具によって施文されている。6は瀬戸・美濃系の五合徳利で、TC-10-dに分類される。胴部釘書きなどは確認できない。7～20まではかわらけで、DZ-2-bに分類される。7はヒビも確認できない全くの完形である。12は判読はできないが、見込みに墨書が確認できる。13、14は口唇部に灯明の痕跡が確認できる。19は表面が二次的な被熱によって剥落している。20は中央を二次的に穿孔され、燭台などに転用しているものと考えられる。21、22は丸底のほうろくで、DZ-47-aに分類される。口縁部の形態から17世紀後葉～18世紀前葉の製品であろうと考えられる。23は土師質の丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。口唇部には敲打痕が顕著に確認できる。24は箱庭道具の塔、25は飯事道具の釜蓋でDZ-61に分類される。

瓦 26は軒棧瓦の瓦当部である。巴文が型作りされている。27は丸瓦である。中央には「○」の刻印が認められる。

金属製品 最も多く出土している金属製品は、銭貨である（Ⅱ-2表）。28～39は寛永通宝である。表に示した様式は、川根正教氏の分類によった（川根2005）。

40は真鍮製の火箸である。中央横位三条の沈線を挟んで、上位は断面方形、下位は円形を呈している。上位には連続した弧状文が刻まれている。41は銅製の球である。42は鉄製の頭巻き釘である。錆による腐食が著しい。

石製品 43、44は硯である。43は角を丸く取っている。陸中央部が使用により大きく凹んでいる。44は海部が欠損しているため、全体の様子は伺えないが、陸から縁部の立ち上がりや裏面の両側縁が突帯状に成形されている状況は、江戸遺跡から多く出土する例とは異なっている。陸部には墨の跡が観察される。

・SU3 (遺構Ⅱ-1、3 図、Ⅱ-18～23 図)

遺構

調査区南東隅に位置する方形の地下室である。東側は調査区域外のため遺構全体の様子は伺えなかった。SU1 および SU4 と重複関係にあり、土層の堆積状況から本遺構が新である。SU1 との重複部分は、攪乱されていたため詳細は不明であるが、本遺構の覆土の上層が、遺構の北壁より北側から流れ込んでおり、上部は張り出し状の付属施設を持っていたと考えられる。規模は、南北 190cm、東西最大 230cm、確認面からの深さは 120cm を計測する。壁や坑底は平滑に整形されており、各コーナーはほぼ垂直に折れている。覆土は、北側から南側に向かって傾斜を有し、南壁付近では上層に天井の崩落土と考えられるロームブロックが認められた。

遺物は、陶磁器・土器類、銭貨をはじめとする金属製品が多く出土している。特に銭貨は坑底付近より多く確認された。

遺物

磁器 1～4 は肥前系磁器で、1、2 は染付、3 は白磁、4 は色絵である。1 はいわゆるくらわんかで JB-1-v、2 は JB-1-e に分類される。3、4 は坏で、JB-6-a に分類される。4 は型作りで、口唇は平縁を呈し、体部は相対して桃形状に凹、凸が認められる。器面には羽子板と羽根が上絵付けされ、紅皿として使用されていたと思われる。

陶器 5、6 は京都・信楽系陶器せんじ碗で、TD-1-i に分類される。5 の見込みには 3 箇所 of ピン痕が確認できる。6 は松文? を銹絵染付されている。7～9 は瀬戸・美濃系陶器のせんじ碗で、7、8 は TC-1-l に分類される。7 は鉄絵で、斜格子文が描かれている。8 は灰釉、9 は鉄釉灰釉掛け分けで TC-1-v に分類される。10 は瀬戸・美濃系錆釉碗で、TC-1-q に分類される。11 は瀬戸・美濃系御室碗で、TC-1-d に分類される。体部の一部に呉須絵が描かれている。12 は瀬戸・美濃系平碗で、TC-1-n も分類される。見込みには鉄、呉須で文様が描かれている。ヒビも認められない完形である。13 は瀬戸・美濃系摺絵皿で、TC-2-e に分類される。見込みには呉須で、花文が摺り絵されている。14、15 は志戸呂系灯明皿で、TF-2 に分類される。15 の口唇部には灯明の痕跡が顕著に認められる。15 は口唇部の一部がわずかに欠損している他は完形である。16、17 は瀬戸・美濃系徳利、16 は一升徳利で TC-10-e、17 は五合徳利で TC-10-d に分類される。16 の底部には判読できないが、墨書されている。また、底部中央は穿孔されているが、墨書部分も穿孔されているため、時期差を持って墨書→穿孔加工がされていると観察できる。17 の胴部にはカギ内に「久」字が釘書きされている。18 は志戸呂系徳利で TF-10 に分類される。肩部には窯積みの際の変形が認められる。

土器 19 は透明釉が掛かったそろばん玉状のひょうそくで、DZ-44-e に分類される。胴部上半には灯明の痕跡が認められる。20 はミニチュアで、DZ-61 に分類される。飯事道具の土瓶あるいは鍋の下半であろうと考えられる。21～24 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。21 の口唇部には灯明の痕跡が認められる。25 は中央部にふくらみを有する円盤状の土製品である。中央が穿孔され、片面には同心円の沈線文が施される。コマであろうと思われる。26 は丸底ほうろくで DZ-47-a に分類される。内面はススが付着している。

金属製品 銭貨は 54 枚出土した (Ⅱ-2 表)。80 が雁首銭の他は全て寛永通宝である。表に示した様式は、川根正教氏の分類によった (川根 1995、1996、2001 など)。

81～83 は真鍮製のキセルで、81、82 は吸口、83 は雁首である。83 は火皿は碗形を呈し、脂返しは小さい。84 は銅製の継ぎ金具である。出土状況は平板状であったが、おそらく中央で直角に折れていたものと思われる。85 は銅製の杓子である。柄の先端は直径 3mm の孔が穿たれており、

柄と皿部との接合は縦方向に2箇所打ち込まれ、固定されている。

石製品 86は円盤形の石製品で、形態、大きさから基石として利用したものと考えられる。表面は丁寧に研磨されている。

・SU4（遺構Ⅱ-1、4図、遺物Ⅱ-23図）

遺構

調査区南側に位置する地下室である。SU1の階段部分と重複して南北に主軸を有する土坑の南側ではほぼ垂直に折れ、平面形「L」字状を呈する。東側は調査区域外であるため、遺構全体の様子は見えなかった。SU1とSU3と重複しており、両者より旧である。特にSU1は北壁を大きく削平している。遺存している規模は、南北260cm、東西200cm、確認面からの深さは最大180cmを計測する。坑底や壁面は比較的丁寧に整形されている。また、性格は不明であるが、西壁付近坑底に径25cm、深さ15cm程度の2基の円形を呈する小ピットが確認されている。遺構の覆土は、ほぼロームを主体とした土が充填されており、

遺物は少量しか出土しておらず、切り合いよりSU1やSU3よりは古いと判断されるが、遺構廃棄年代は不明である。

遺物 実測図にあげたのは、銭貨が1点である。

・SK5（遺構Ⅱ-5図、遺物Ⅱ-23図）

遺構

調査区北側に位置するやや歪な隅丸方形の土坑である。西側でSK2と重複しており、新旧は本遺構が旧である。遺構の規模は、南北220cm、東西160cm、確認面からの深さは最大60cmを計測する。坑底、壁面は凹凸が多く、緩やかに傾斜している。覆土は中層に焼土を多く含む層が確認され、この中から遺物が多く確認されている。

遺物は、陶磁器類を中心に17世紀中葉～18世紀中葉の製品が出土している。

遺物

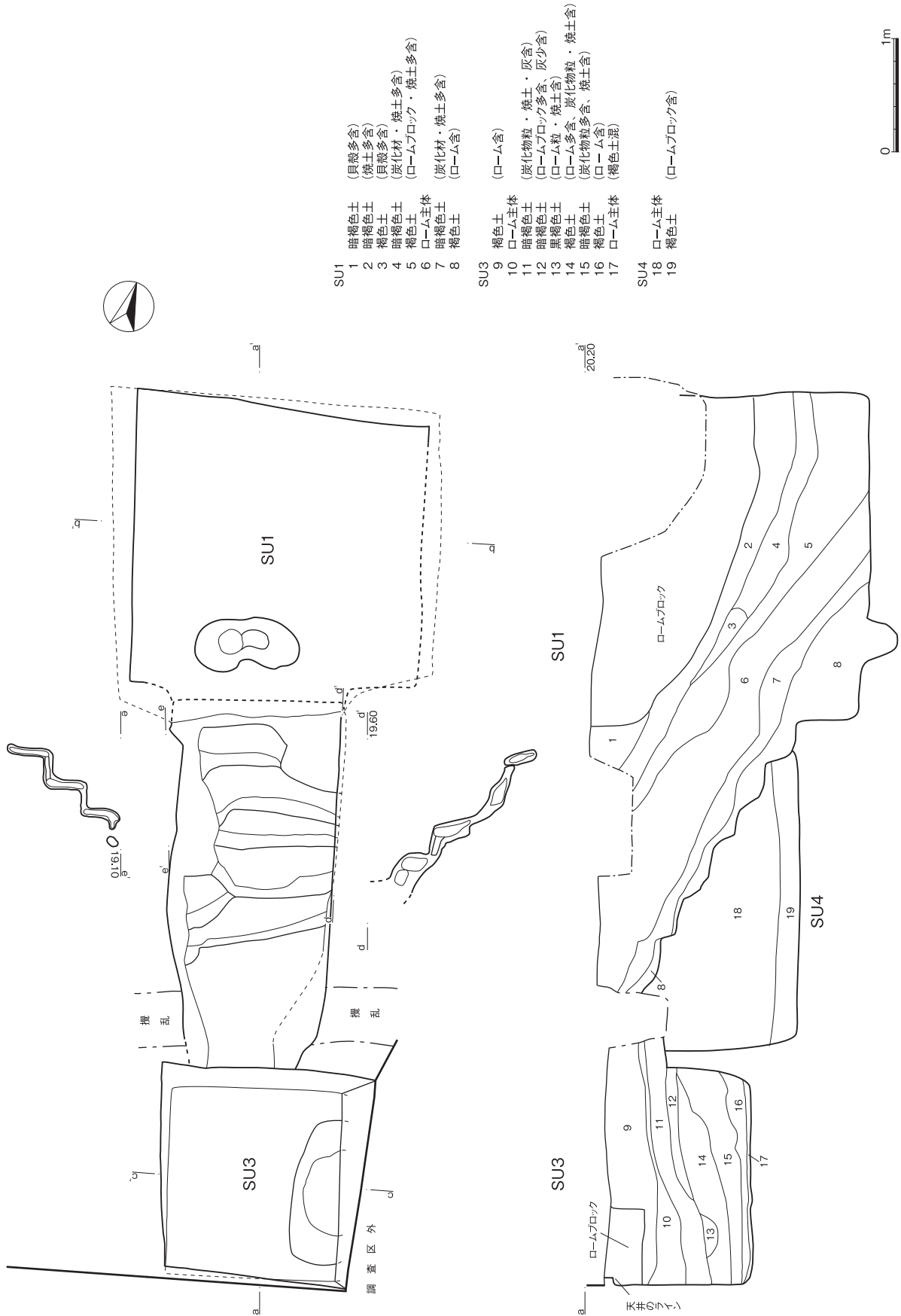
1、2は肥前系染付磁器碗で、1はJB-1-v、2はJB-1-eに分類される。1はいわゆるくらわんか碗で、2と対比すると胎土の色調、呉須の発色共に悪い。2は二重角枠内に渦福銘が書かれている。3は肥前系染付磁器仏飯器で、JB-8-bに分類される。4は瀬戸・美濃系陶器灰釉香炉・火入れで、TC-9-aに分類される。口唇部は二次的な敲打痕が顕著に認められる。5はいわゆる泥面子でDZ-55に分類される。6は軒平瓦である。瓦当部には唐草状の文様が確認できるが、江戸遺跡での類例は少ない。駒込浅嘉町遺跡に確認される。同遺跡は岩槻街道（本郷通り）に沿って1kmほど北方に位置する。

7、8は寛永通宝である（Ⅱ-2表）。

・遺構外出土遺物（Ⅱ-24図）

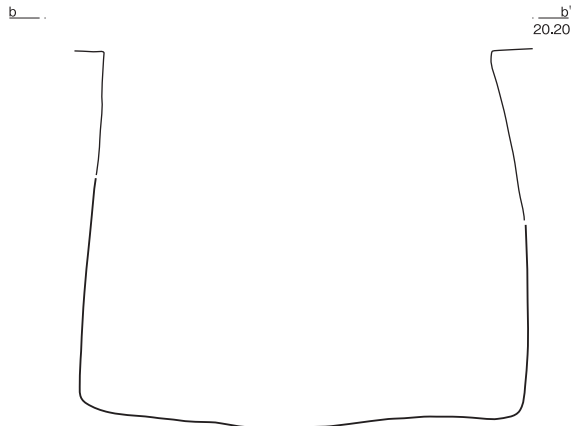
磁器 1～5は肥前系磁器である。1は筒形碗で、JB-1-lに分類される。薄造りで、主文様や高台脇の文様などに初期の広東碗などとの共通点が認められる。おそらく18世紀の製品であろうと思われる。2は蓋物で、JB-13-bに分類される。器面は褐釉に巴文の染付、内面は透明な釉を掛けている。底部無釉で、いわゆる初期伊万里である。3、4は染付皿で、3はJB-2-e、4はJB-2-lに分類される。3の見込み五弁花はコンニャク印判で描かれている。4は見込み蛇ノ目釉剥ぎされている。5は染付御神酒徳利で、JB-11-bに分類される。器面は二次的な被熱を受けている。

陶器 6は長石釉の坏で、TC-6に分類される。高台は明瞭な形でケズリ出されていない。7は瀬戸・美濃系陶器天目碗で、TC-1-aに分類される。扁平で、18世紀まで降る製品か。8は瀬戸・美濃系陶器灰釉皿でTC-2-bに分類される。見込みには縁圈状の積み重ね痕が確認できる。9は肥前系陶器灰釉皿で、TB-2-dに分類される。見込みには砂目の痕跡が確認できる。嬉野の内野山窯の製品と思われる。10は瀬戸・美濃系陶器褐釉片口鉢で、TC-23-bに分類される。体部下半から底部にかけては、鉄釉が化粧掛けされている。全体の器形は著しく歪んでいる。見込みにはピン痕が3箇所認められる。11は瀬戸・美濃系陶器壺の蓋で、TC-00-bに分類される。器面は柿釉に灰釉を散らしている。裏面は無釉である。

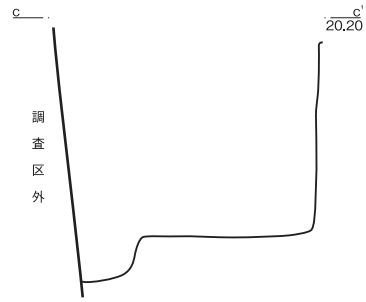


- | | | | |
|-----|----|-------|------------------|
| SU1 | 1 | 暗褐色土 | (貝殻多含) |
| | 2 | 暗褐色土 | (焼土多含) |
| | 3 | 褐色土 | (貝殻多含) |
| | 4 | 暗褐色土 | (炭化材・焼土多含) |
| | 5 | 褐色土 | (ロームブロック・焼土多含) |
| | 6 | ローム主体 | (炭化材・焼土多含) |
| | 7 | 暗褐色土 | (ローム含) |
| | 8 | 褐色土 | (ローム含) |
| SU3 | 9 | 褐色土 | (ローム含) |
| | 10 | ローム主体 | (炭化物粒・焼土・灰含) |
| | 11 | 暗褐色土 | (ロームブロック多含、灰少含) |
| | 12 | 暗褐色土 | (ローム粒・焼土含) |
| | 13 | 黒褐色土 | (ローム多含、炭化物粒・焼土含) |
| | 14 | 褐色土 | (ローム多含、炭化物粒・焼土含) |
| | 15 | 暗褐色土 | (ローム含) |
| | 16 | 褐色土 | (褐色土混) |
| | 17 | ローム主体 | |
| SU4 | 18 | ローム主体 | (ロームブロック含) |
| | 19 | 褐色土 | |

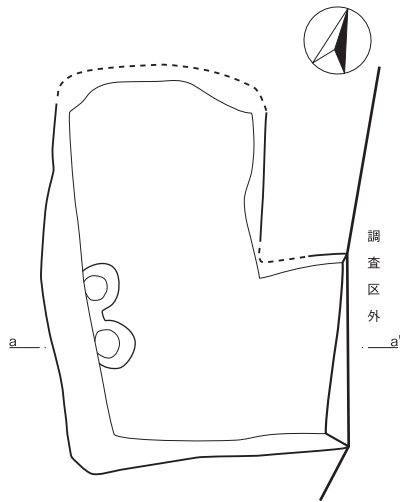
II-1 Ⅱ SU1・SU3・SU4



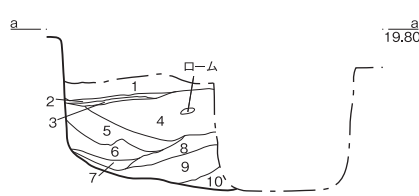
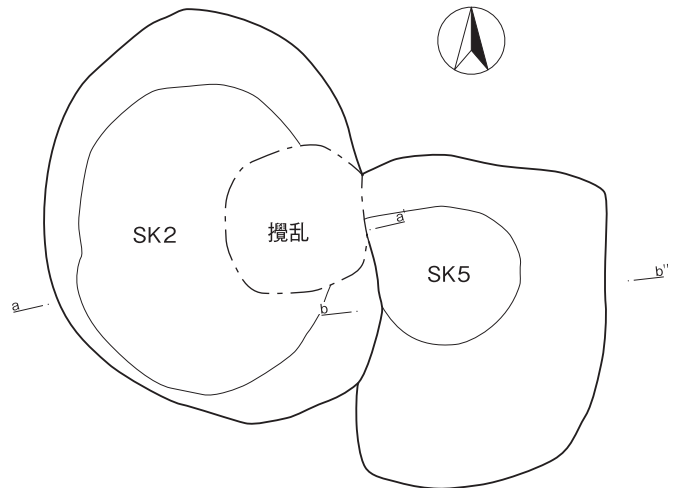
II-2 図 SU1



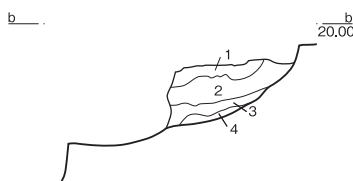
II-3 図 SU3



II-4 図 SU4



- SK2
- 1 褐色土 (ローム含)
 - 2 暗褐色土
 - 3 ローム主体
 - 4 黒褐色土 (遺物・貝殻多含)
 - 5 暗褐色土 (ローム含)
 - 6 暗褐色土 (6層よりやや暗い、貝殻多含)
 - 7 褐色土 (ローム粒含)
 - 8 褐色土 (8層よりやや暗い、焼土・貝殻含)
 - 9 暗褐色土 (遺物・貝殻多含、ローム粒含)
 - 10 黒褐色土 (焼土含)



- SK5
- 1 ローム主体
 - 2 褐色土 (ローム・炭化物粒・焼土・灰色粘土・遺物・貝殻片含)
 - 3 褐色土 (ローム多含)
 - 4 暗褐色土 (ローム粒多含)



II-5 図 SK2・SK5



II-6 図 SU1 出土遺物 (1)



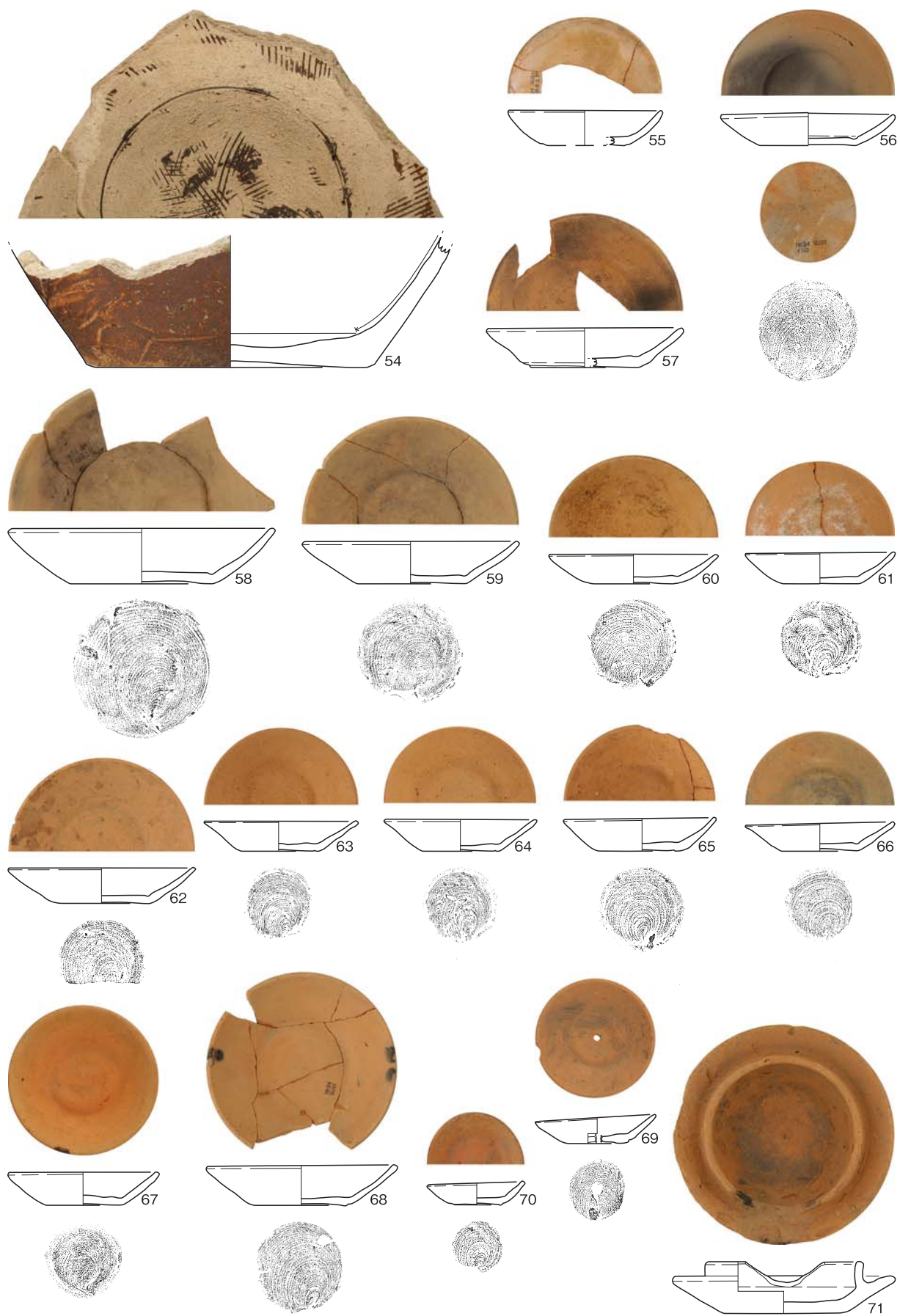
II-7 図 SU1 出土遺物 (2)



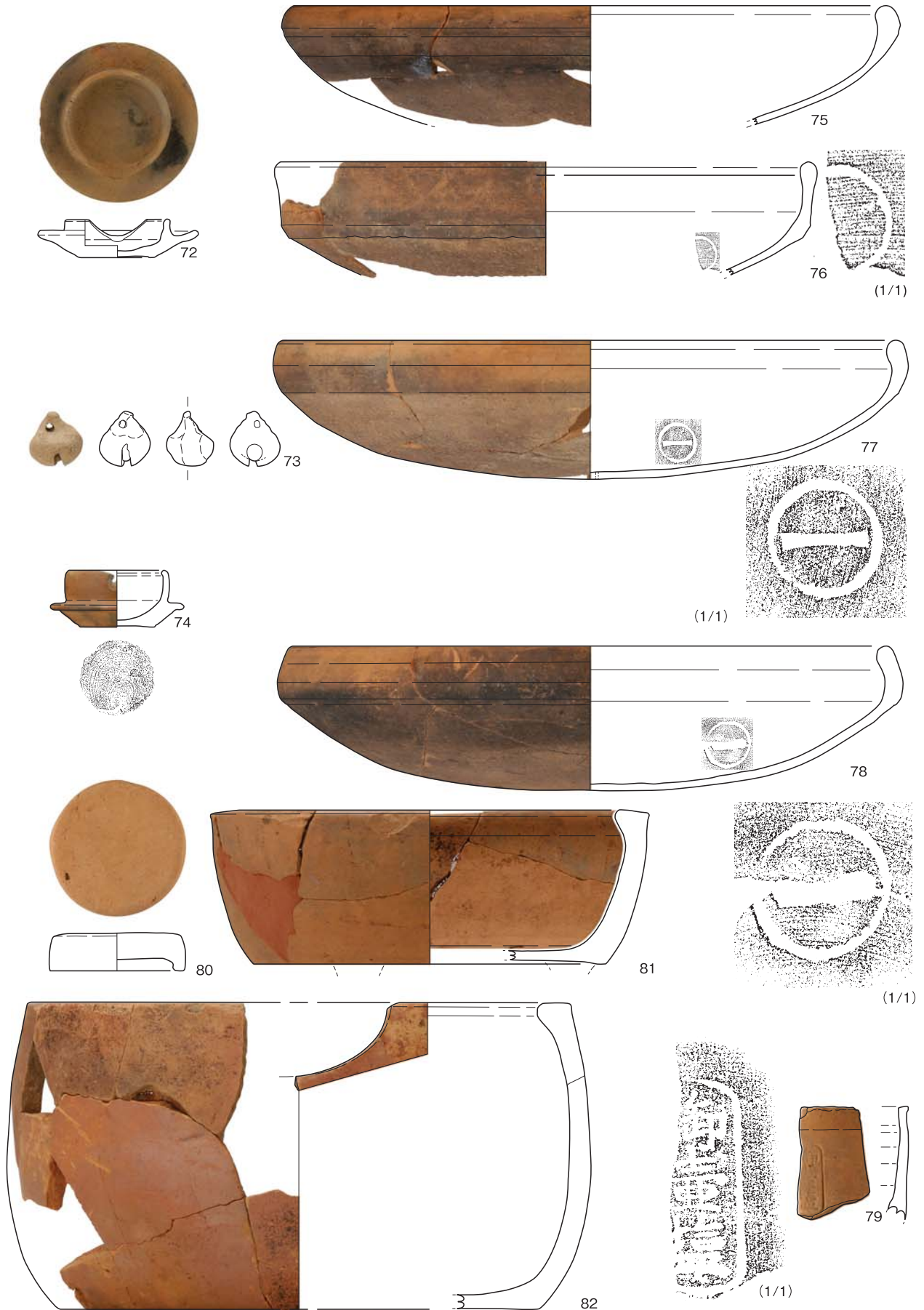
II-8 図 SU1 出土遺物 (3)



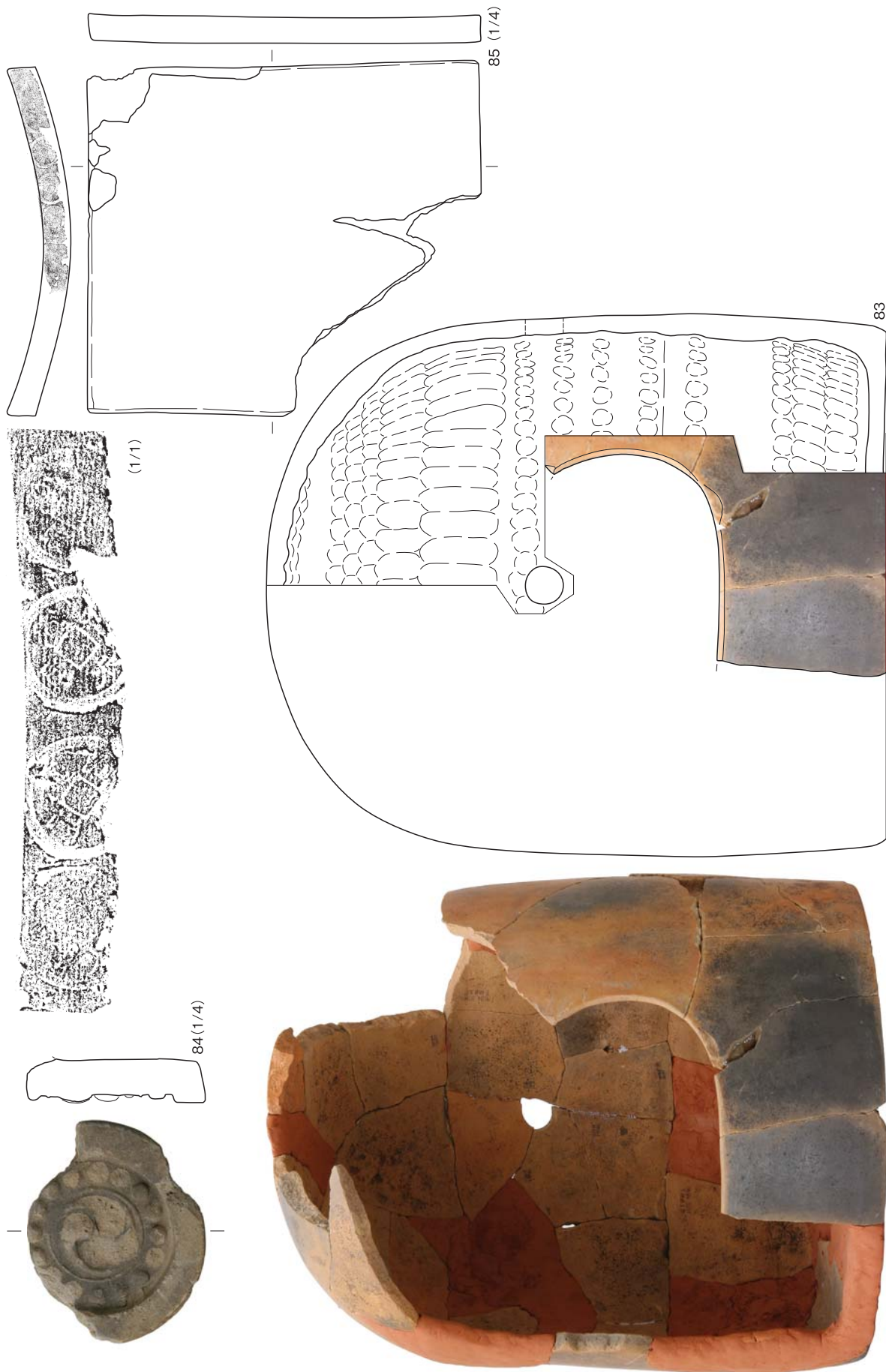
II-9 図 SU1 出土遺物 (4)



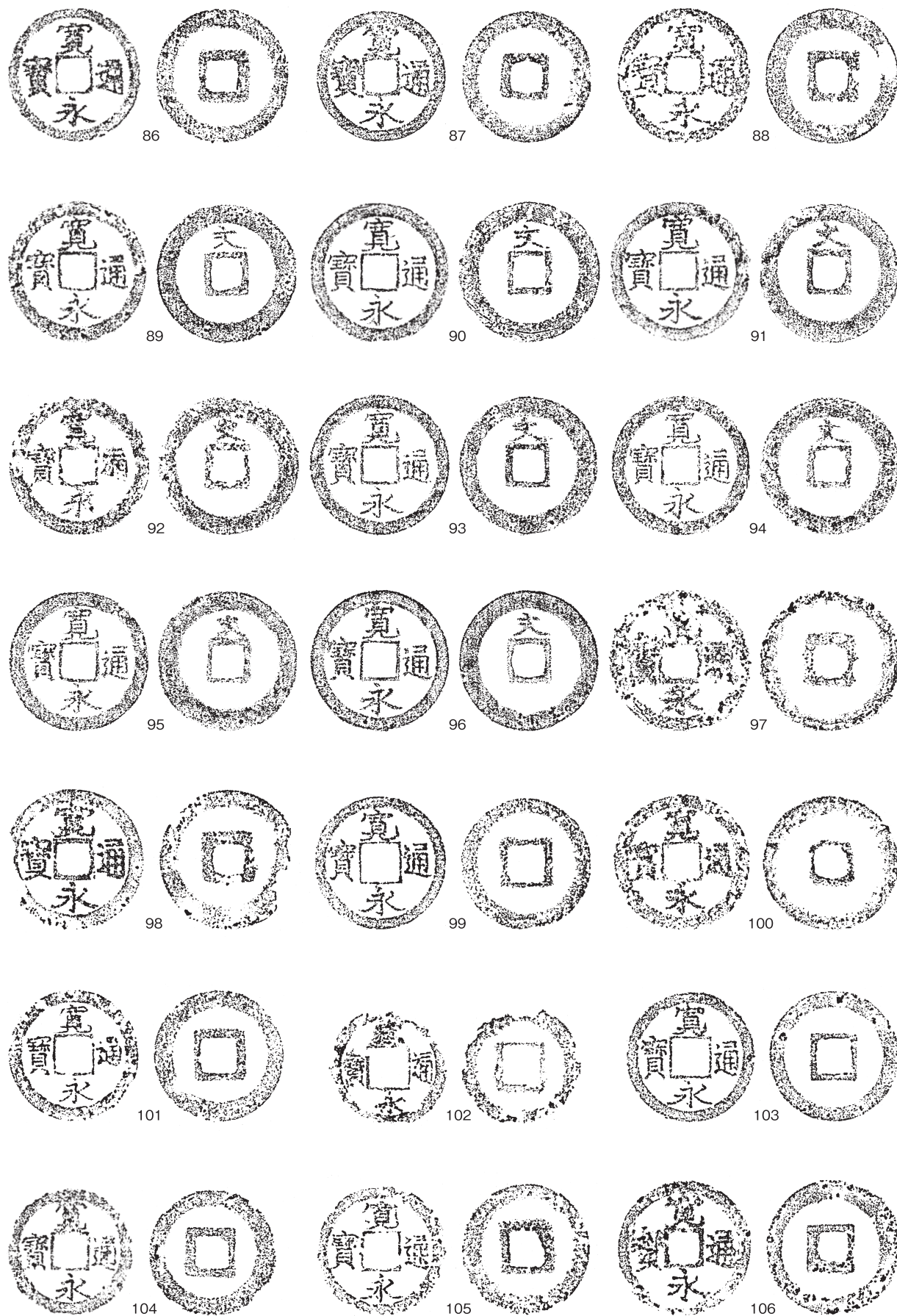
II-10 図 SU1 出土遺物 (5)



II-11 図 SU1 出土遺物 (6)

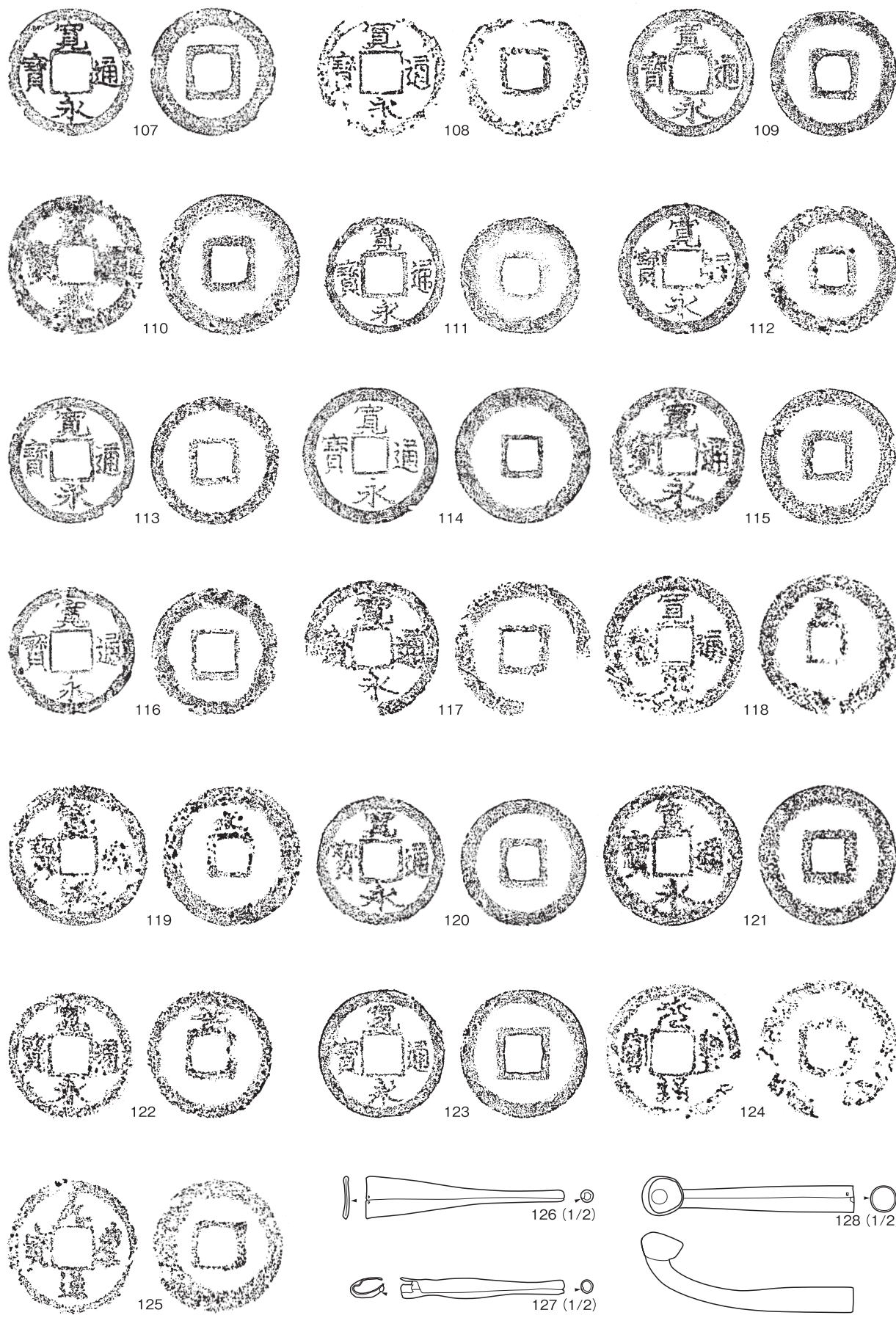


II-12 図 SU1 出土遺物 (7)

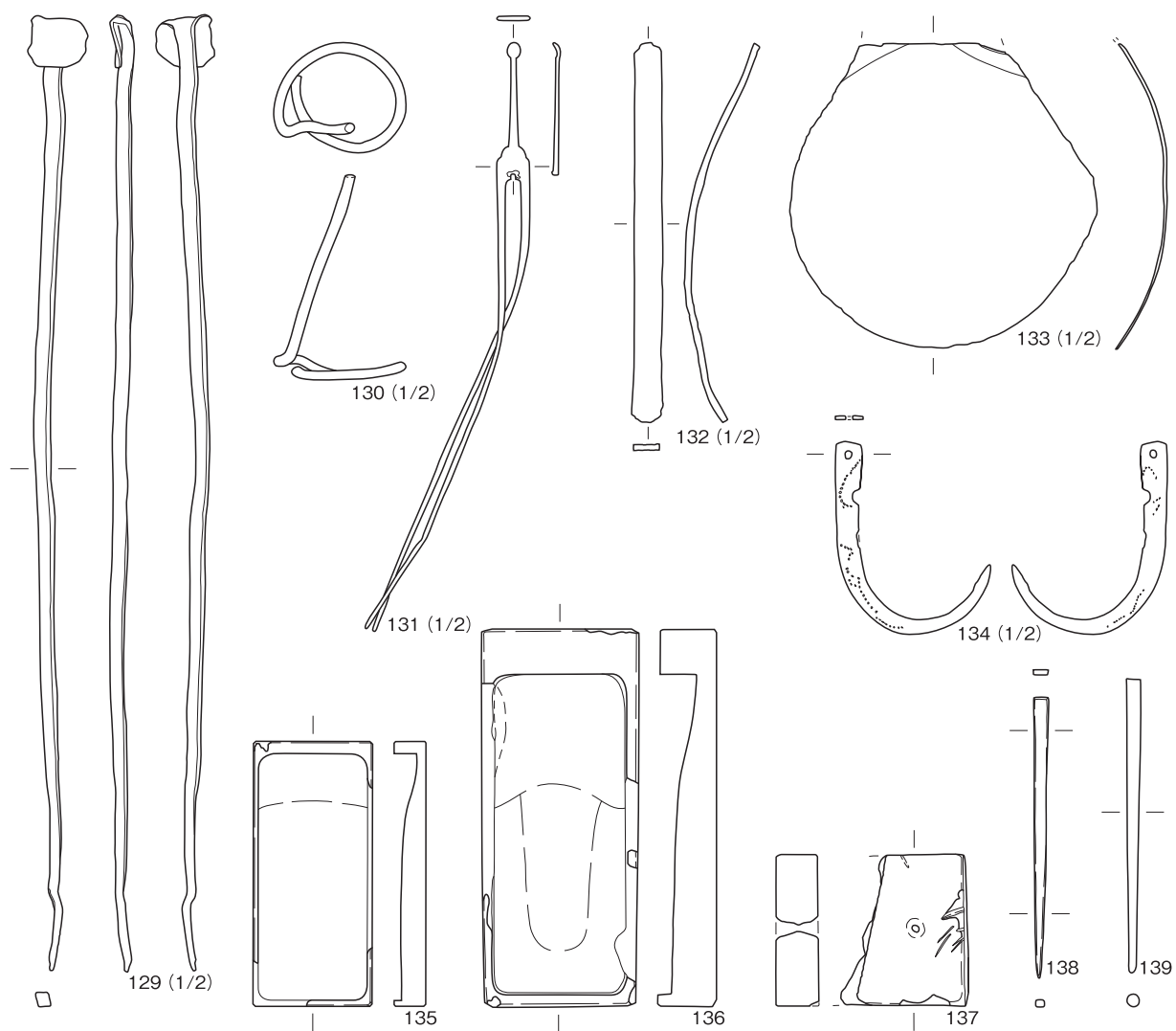


(S=1/1)

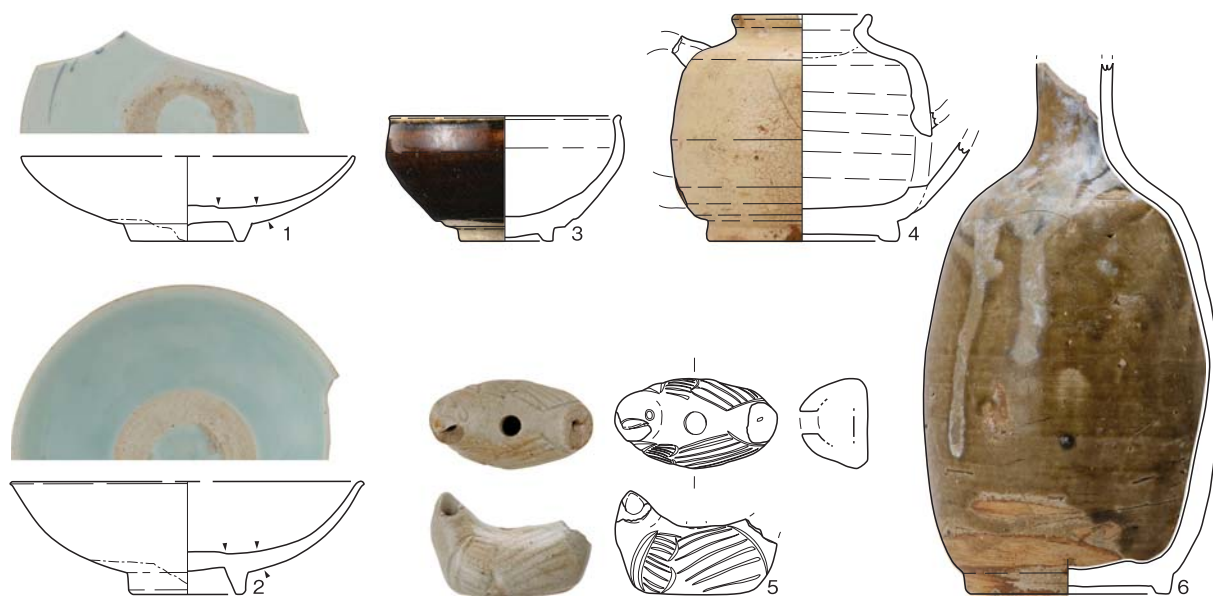
II-13 図 SU1 出土遺物 (8)



II-14 図 SU1 出土遺物 (9)

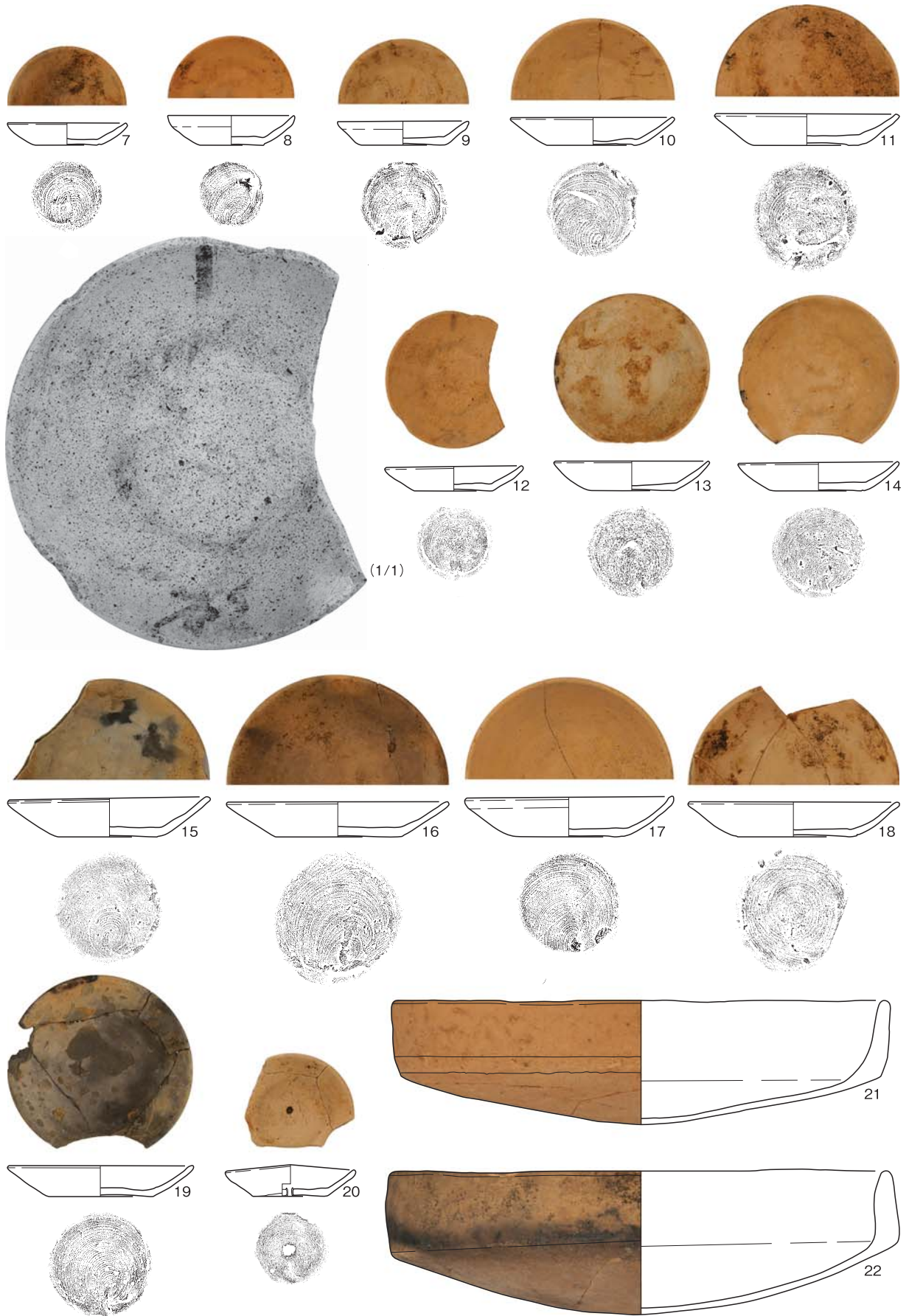


SU1 (10)

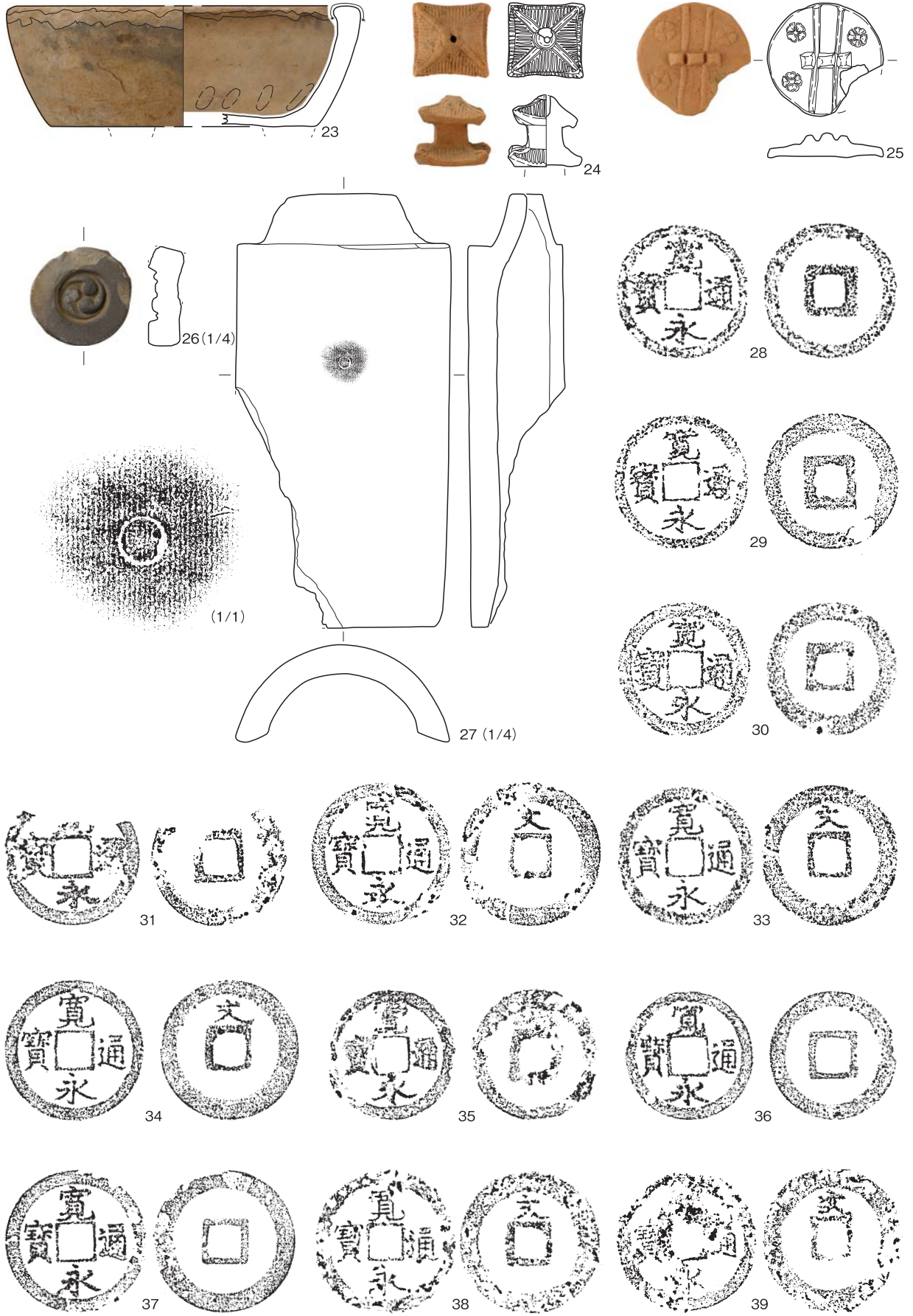


SK2 (1)

II-15 図 SU1 (10)、SK2 (1) 出土遺物



II-16 図 SK2 出土遺物 (2)



(28~39・S=1/1)

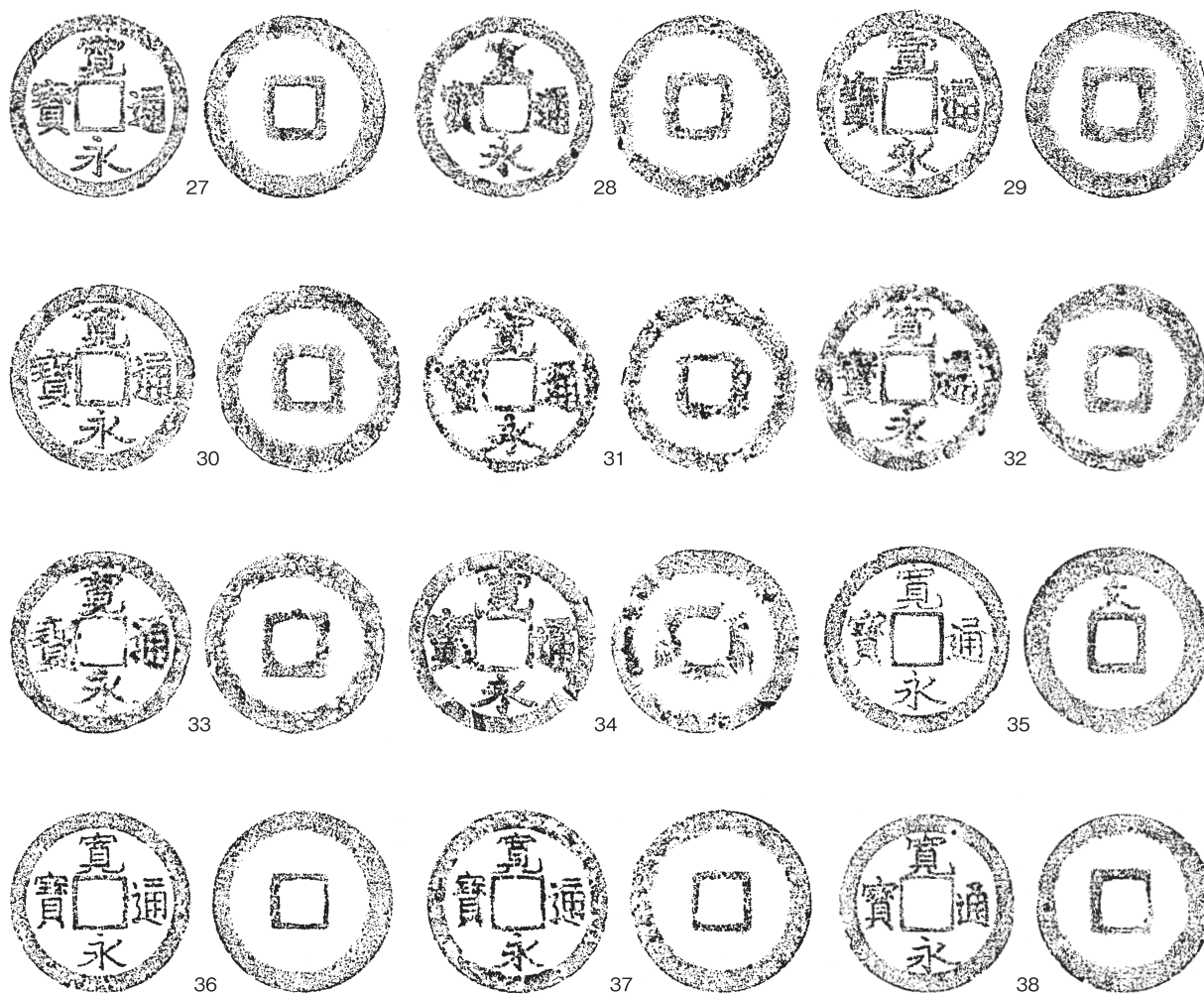
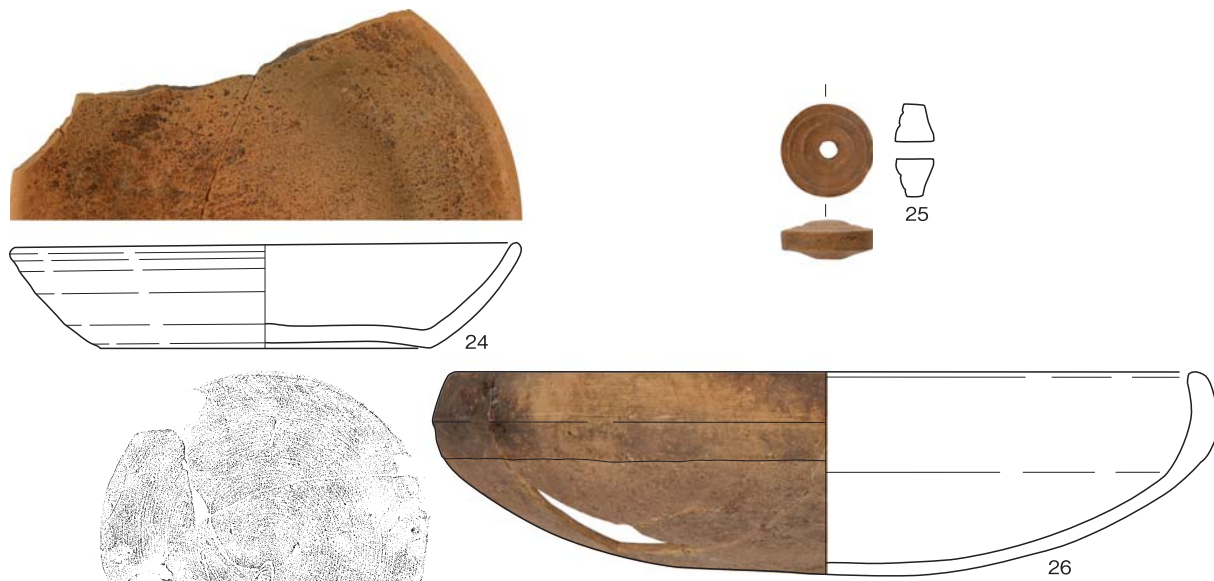
II-17 図 SK2 出土遺物 (3)



II-18 図 SK2 (4)、SU3 (1) 出土遺物

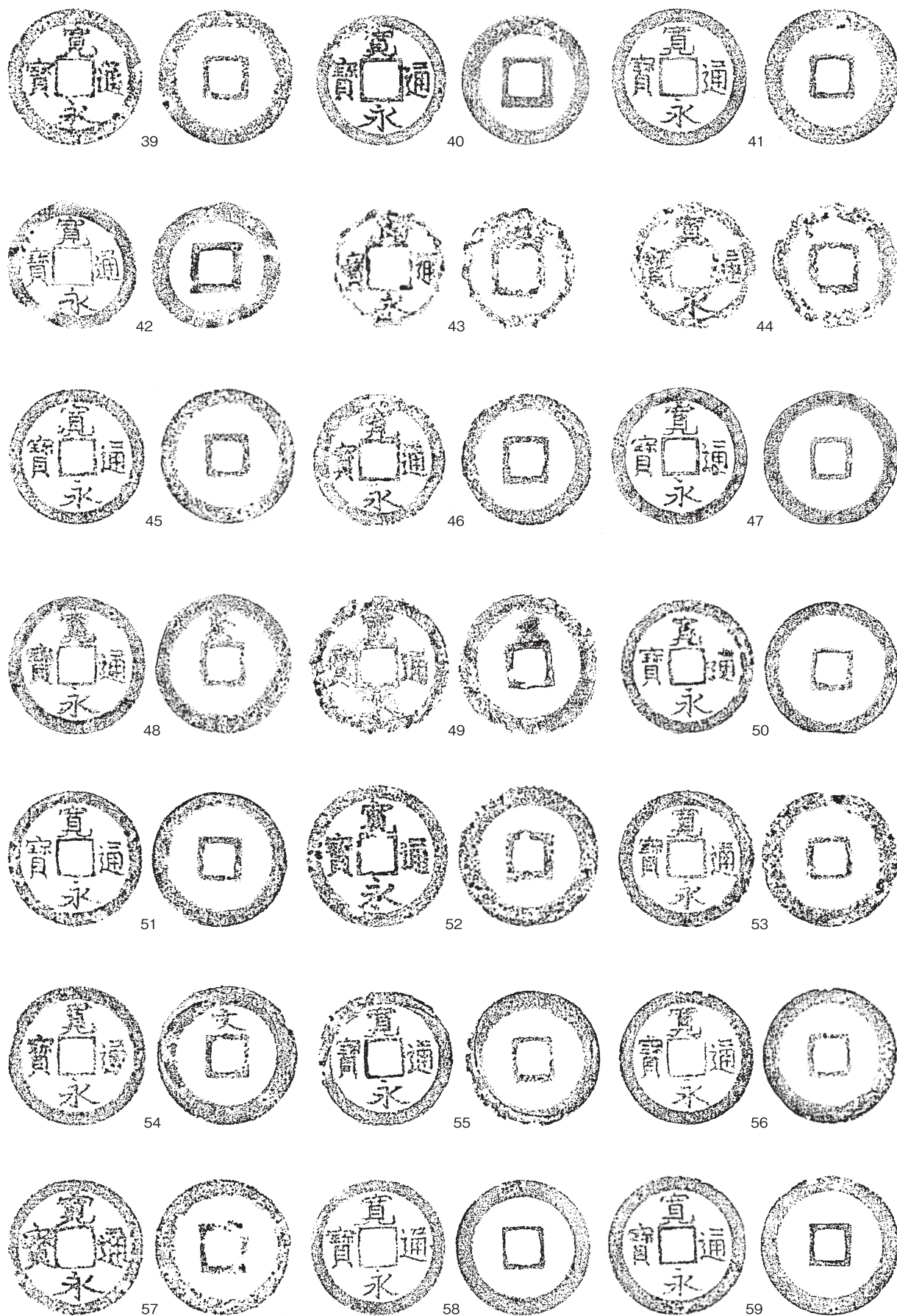


II-19図 SU3 出土遺物 (2)



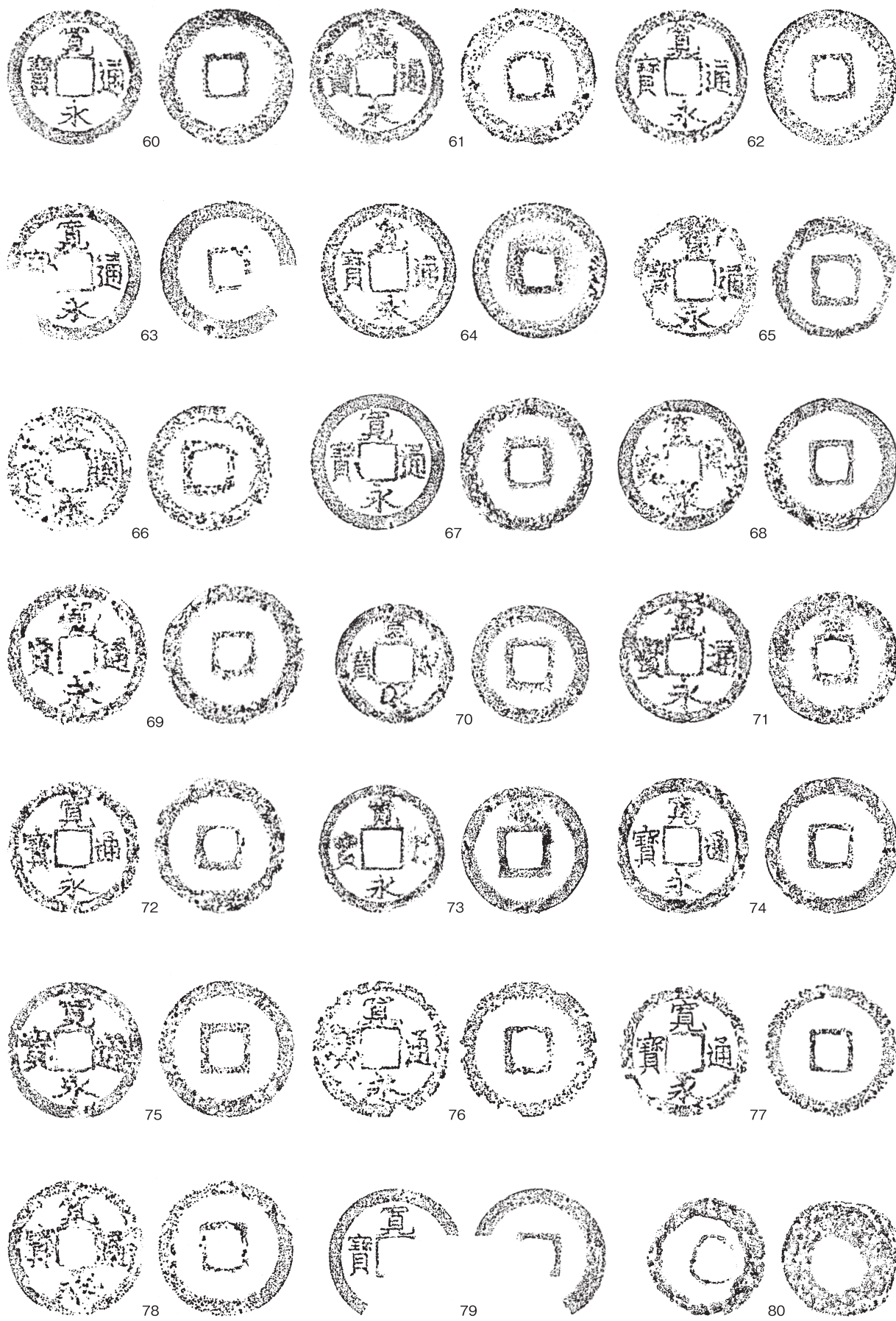
(27~38・S=1/1)

II-20 図 SU3 出土遺物 (3)



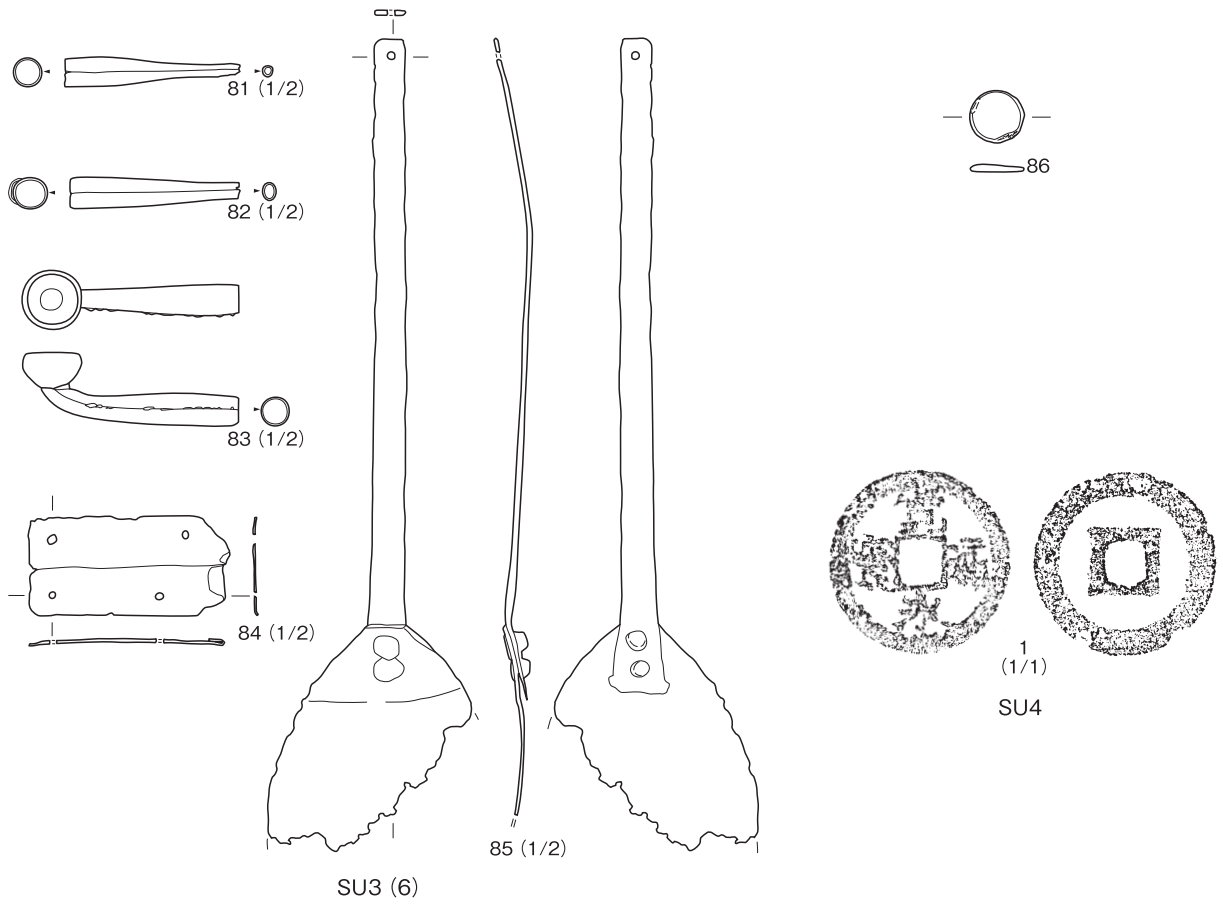
(S=1/1)

II-21 図 SU3 出土遺物 (4)



(S=1/1)

II-22 図 SU3 出土遺物 (5)



II-23 図 SU3 (6)、SU4、SU5 出土遺物



Ⅱ-24 図 遺構外出土遺物

法量単位：cm

出土遺構 No.	器種	分類		法量			器高	慣用名	釉薬	刻印・銘	墨書	被熱	敲打痕	燈心痕	釘書	二次穿孔	備考
		胎土・産地	器種	小器種	口径	底径											
SU 1	1 碗		JB	1	d	11.8	4.2	5.8	白磁								
SU 1	2 碗		JB	1	u	9.8	3.9	5.5	染付								「大明年製」銘
SU 1	3 碗		JB	1	e	9.9	4.1	5.5	小広東								
SU 1	4 碗		JB	1	f	(9.8)	4.2	4.8	染付								漆継ぎ、高台金彩
SU 1	5 碗		JB	1	g	11.2	4.3	6.1	染付								
SU 1	6 碗		JB	1	g	9.9	3.9	5.5	染付	○							馬字状渦福
SU 1	7 碗		JB	1	g	(8.2)	3.4	4.8	染付								
SU 1	8 碗		JB	1	l	7.9	4.2	6.4	筒形碗								
SU 1	9 碗		JB	1	e	8.3	3.4	3.8	染付								
SU 1	10 碗(蓋)		JB	00	e	9.7	4.3	2.7	染付								
SU 1	11 环		JB	6	b	7.4	3.6	4.9	染付	○							「大明年製」銘
SU 1	12 环		JB	6	b	6.8	2.9	4.5	白磁								
SU 1	13 环		JB	6	a	6.0	2.4	3.1	染付								
SU 1	14 皿		JB	2	k	13.0	4.4	3.2	青磁								
SU 1	15 皿		JB	2	m	13.3	7.0	2.9	染付								
SU 1	16 皿		JB	2	e	21.8	12.3	4.5	染付	○							口縁、「成化年製」銘
SU 1	17 皿		JB	2	e	10.4	5.6	2.5	染付								
SU 1	18 鉢		JB	5	b	20.1	8.4	7.6	白磁								陽刻、口縁
SU 1	19 仏飯器		JB	8	c	6.6	3.9	5.8	染付								
SU 1	20 瓶		JB	10	a	-	8.7	(残)24.8	染付								
SU 1	21 油壺		JB	12		3.4	5.9	10.2	色絵								○
SU 1	22 蓋物		JB	13	b	11.0	8.0	8.5	白磁								○
SU 1	23 碗		TD	1		8.3	3.6	5.8	呉須絵								
SU 1	24 碗		TC	1	g	12.5	4.5	5.9	柳茶碗								
SU 1	25 碗		TC	1	s	13.2	5.3	5.8-6.1	刷毛目碗								
SU 1	26 碗		TC	1	n	10.8	3.9	4.1	刷毛目								墨書「やま万」
SU 1	27 皿		TC	2	l	13.1-12.6	7.4	2.3-3.1	縁袖流し								墨書「つるかめ」
SU 1	28 皿		TC	2	e	12.5	7.5	2.6	灰釉鉄絵								摺絵
SU 1	29 皿		TC	2	e	12.5	8.0	3.0	鉄絵								墨書「八」
SU 1	30 皿		TC	2		7.1	3.2	1.7	灰釉								
SU 1	31 皿		TC	2	e	8.4-11.4	5.4	3.2	灰釉、鉄絵								摺絵

II-1 表 陶磁器・土器観察表 (1)

法量単位：cm

出土遺構 図版 No.	器種	分類		法量			慣用名	釉薬	刻印・銘	墨書	被熱	敲打痕	燒継	灯心痕	釘書	二次穿孔	備考
		胎土・産地	器種	小器種	口径	底径											
SU 1	皿		TD	2	14.0	7.0	3.2	褐釉									
SU 1	皿		TC	2	10.7	5.3	2.1	鉄釉									
SU 1	皿		TC	2	7.8	3.9	1.1	鉄釉									
SU 1	鉢		TB	5	22.3	8.3	6.2	京焼風 灰釉具須絵	○								刻印「富永」
SU 1	鉢		TB	5	18.2	6.4	6.0	灰釉									輪剥
SU 1	香炉・火入れ		TC	9	11.6	10.8	7.9	灰釉鉄絵									三足、摺絵
SU 1	香炉・火入れ		TC	9	12.0	9.1	6.6	褐釉									三足、摺絵
SU 1	香炉・火入れ		TD	9	9.4	7.4	8.8	色絵	○								墨書「木」？
SU 1	壺・甕		TC	15	5.6	5.0	7.5	灰釉									二耳、内面鉄付着
SU 1	壺・甕		TC	15	6.2	5.2	5.5	鉄釉うのふ									
SU 1	壺・甕		TC	15	(6.0)	8.0	12.2	柿釉									
SU 1	壺・甕(蓋)		TC	00	7.3	3.6-3.9	1.8	鉄釉化粧掛									
SU 1	香炉・火入れ		TC	9	8.6	5.0	3.9	灰釉									
SU 1	壺・甕		TC	15	22.2	18.2	22.7	柿釉									見込、目跡4個
SU 1	瓶		TC	10	-	-	-	灰釉							○		釘書「長」
SU 1	瓶		TC	10	-	6.4	-	灰釉							○		釘書?、内面鉄付着
SU 1	土瓶		TZ	34	8.4	(9.4)	12.6	褐釉灰釉流し									底部スス付着
SU 1	片口鉢		TC	23	12.0-12.5	6.1	7.1-7.8	灰釉			○						
SU 1	油受け皿		TF	40	7.1-11.6	5.5	2.3	鉄釉									三穴
SU 1	油受け皿		TF	40	6.4-11.2	5.4	3.1	鉄釉		○							墨書「天」？
SU 1	油受け皿		TF	40	5.8-8.9	4.0	2.1	鉄釉									三穴
SU 1	ひょうそく		DZ	44	4.6	3.1	2.7	透明釉									
SU 1	播鉢		TC	29	-	15.6	-	柿釉									
SU 1	かわらけ		DZ	2	8.2	(4.2)	1.9	-			○						
SU 1	かわらけ		DZ	2	9.4	5.2	1.8	-			○						底部火だすき
SU 1	かわらけ		DZ	2	10.6	5.8	2.1	-			○						
SU 1	かわらけ		DZ	2	14.3	7.7	3.0	-			○						
SU 1	かわらけ		DZ	2	11.5	5.9	2.3	-									
SU 1	かわらけ		DZ	2	9.0	4.4	1.6	-									
SU 1	かわらけ		DZ	2	8.0	4.0	1.7	-									
SU 1	かわらけ		DZ	2	10.0	5.0	1.9	-									

II-1 表 陶磁器・土器観察表 (2)

法量単位：cm

出土遺構	図版 No.	器種	分類		法量			慣用名	釉薬	刻印・銘	墨書	被熱	敲打痕	燒継	灯心痕	釘書	二次穿孔	備考
			胎土・産地	器種	小器種	口径	底径											
SU 1	63	かわらけ	DZ	2	b	8.2	4.0	1.6	-						○			
SU 1	64	かわらけ	DZ	2	b	8.2	4.3	1.7	-									
SU 1	65	かわらけ	DZ	2	b	8.2	4.3	1.3	-									
SU 1	66	かわらけ	DZ	2	b	8.0	4.0	1.5	-			○						
SU 1	67	かわらけ	DZ	2	b	8.2	4.0	1.8	-						○			
SU 1	68	かわらけ	DZ	2	b	10.2	5.0	2.1	-						○			
SU 1	69	かわらけ	DZ	2	b	5.5	3.0	1.4	-							○		
SU 1	70	かわらけ	DZ	2	b	5.3	2.7	1.2	-									
SU 1	71	油受け皿	DZ	40	d	8.4-12.0	6.6	2.8	-			○						
SU 1	72	油受け皿	DZ	40	d	5.7-8.6	4.1	2.1	-									
SU 1	73	鈴	DZ	58		2.8	2.7	3.0	-									
SU 1	74	鉢	DZ	5	c	5.2-7.2	4.0	3.1	釜形土製品									
SU 1	75	ほうろく	DZ	47	a	32.4		-	-									
SU 1	76	ほうろく	DZ	47	a	(29.0)	(28.8)	-	-	○								「○」
SU 1	77	ほうろく	DZ	47	a	33.6		7.6	-	○						○		刻印○の中に「一」
SU 1	78	ほうろく	DZ	47	a	32.4		7.9	-	○								刻印○の中に「一」
SU 1	79	壺	DZ	51	r			(6.2)	-	○								刻印「御壺」
SU 1	80	壺(蓋)	DZ	00	c	7.3		2.1	-									
SU 1	81	火鉢	DZ	31	h	(29.4)	26.0	16.8	風炉	-								
SU 1	82	火鉢	DZ	31	a	13.8	9.2	8.4	丸火鉢	-								足欠損
SU 1	83	手焙り	DZ	38			27.0	32.6	ボウズ	-								
SK 2	1	皿	JB	2	k	13.2	4.4	3.4	染付									輪剥
SK 2	2	皿	JB	2	k	14.0	4.3	4.5	青磁									輪剥
SK 2	3	碗	TC	1	a	9.2	3.8	5.0	天目碗									
SK 2	4	水注	TC	27		5.5	7.5	9.0	灰釉									
SK 2	5	水滴	TC	19		幅3.6		4.1	灰釉									
SK 2	6	瓶	TC	10	d	-	8.0	-	うのふ釉									
SK 2	7	かわらけ	DZ	2	b	6.3	3.4	1.1-1.3	-									
SK 2	8	かわらけ	DZ	2	b	6.8	3.4	1.6-1.7	-									
SK 2	9	かわらけ	DZ	2	b	7.0	4.4	1.2-1.4	-									
SK 2	10	かわらけ	DZ	2	b	8.9	4.8	1.4-1.5	-									

II-1 表 陶磁器・土器観察表 (3)

法量単位：cm

出土遺構	図版 No.	器種	分類		法量			器名	釉薬	刻印・銘	墨書	被熱	敲打痕	燒継	灯心痕	釘書	二次穿孔	備考
			胎土・産地	器種	小器種	口径	底径											
SK 2	11	かわらけ	DZ	2	b	9.9	5.8	1.6-1.8	-									
SK 2	12	かわらけ	DZ	2	b	7.4	4.0	1.2-1.4	-		○							墨書不明
SK 2	13	かわらけ	DZ	2	b	8.4	4.4	1.4-1.6	-						○			
SK 2	14	かわらけ	DZ	2	b	8.5	4.5	1.5-1.7	-						○			
SK 2	15	かわらけ	DZ	2	b	10.9	5.6	2.0-2.2	-									
SK 2	16	かわらけ	DZ	2	b	11.9	6.6	1.9-2.0	-									
SK 2	17	かわらけ	DZ	2	b	11.2	5.4	2.1-2.3	-									
SK 2	18	かわらけ	DZ	2	b	11.4	6.0	1.8-2.0	-									
SK 2	19	かわらけ	DZ	2	b	10.0	5.4	1.6-1.7	-									
SK 2	20	かわらけ	DZ	2	b	(7.0)	4.0	1.3-1.7	-							○		
SK 2	21	ほうろく	DZ	47	a	26.0	25.8	6.7	-									
SK 2	22	ほうろく	DZ	47	a	26.5	26.8	7.7	-									
SK 2	23	火鉢	DZ	31	a	(18.0)	(14.2)	(6.5)	-				○					足欠損
SK 2	24	ミニチュア	DZ	61		4.1×4.1		3.8	-									
SK 2	25	ミニチュア	DZ	61		6.2		1.3	-									
SU 3	1	碗	JB	1	v	10.2	4.2	5.4	-						○			
SU 3	2	碗	JB	1	e	9.7	4.7	4.9	-									
SU 3	3	坏	JB	6	a	7.1	3.1	2.9	-									
SU 3	4	坏	JB	6	a	5.3	2.0	2.3-2.5	-									
SU 3	5	碗	TD	1	i	8.5	3.2	4.6	-									
SU 3	6	碗	TD	1	i	9.0	3.0	4.7	-									
SU 3	7	碗	TC	1	l	9.7	3.9	5.0	-									
SU 3	8	碗	TC	1	l	10.0	4.0	4.9	-									
SU 3	9	碗	TC	1	v	10.3	4.3	5.5	-									
SU 3	10	碗	TC	1	q	9.8	4.6	5.6	-									
SU 3	11	碗	TC	1	d	10.2	4.6	6.3	-									
SU 3	12	碗	TC	1	n	11.1	3.7	4.4	-									
SU 3	13	皿	TC	2	e	12.2	5.3	3.1-3.3	-									
SU 3	14	皿	TF	2		7.5	4.0	1.6	-									
SU 3	15	皿	TF	2		7.5	4.2	1.5	-								○	
SU 3	16	瓶	TC	10	e	-	9.8	-	-								○	

II-1 表 陶磁器・土器観察表 (4)

法量単位：cm

出土遺構 図版 No.	器種	分類		法量			慣用名	釉薬	刻印・銘	墨書	被熱	敲打痕	灯心痕	釘書	二次穿孔	備考
		胎土・産地	器種	小器種	口径	底径										
SU 3 17	瓶	TC	10	d	-	7.8	-	灰釉		○					○	墨書「久」
SU 3 18	瓶	TF	10		4.0	12.8	29.8-30.0	鉄釉								
SU 3 19	ひょうそく	DZ	44	e	3.4-5.7	2.9	3.2-3.3	透明釉								
SU 3 20	ミニチュア	DZ	61		5.4	-	2.1	-								
SU 3 21	かわらけ	DZ	2	b	9.8	5.0	1.8-1.9	-				○				
SU 3 22	かわらけ	DZ	2	b	9.6	5.2	1.8-2.0	-								
SU 3 23	かわらけ	DZ	2	b	19.7	17.6	4.0	-								
SU 3 24	かわらけ	DZ	2	b	20.2	13.0	1.0-4.3	-								
SU 3 25		DZ			3.7	-	1.5	-								コマ
SU 3 26	ほうろく	DZ	47	a	29.5		8.1	-								
SK 5 1	碗	JB	1	v	10.6	4.0	5.9	染付								
SK 5 2	碗	JB	1	e	9.8	4.2	5.4	染付	○							渦福銘
SK 5 3	仏飯器	JB	8	b	7.6	4.2	5.6-5.7	染付								
SK 5 4	香炉・火入れ	TC	9	a	10.0	6.8	5.5	灰釉		○						
SK 5 5	泥面子	DZ	55		2.3	2.3	1.0	-								
遺構外 1	碗	JB	1	1	8.0	4.3	6.1	染付								
遺構外 2	蓋物	JB	13	b	8.4	4.6	6.8	褐釉、染付								
遺構外 3	皿	JB	2	e	12.9	8.1	3.1	染付								
遺構外 4	皿	JB	2	1	12.4	4.1	3.7	染付								
遺構外 5	瓶	JB	11	b	1.6	(5.0)	14.8	染付			○					
遺構外 6	坏	TC	6		6.8	3.8	3.1	長石釉								
遺構外 7	碗	TC	1	a	11.6	4.8	6.6	鉄釉								
遺構外 8	皿	TC	2	b	12.8	6.6	2.6-2.8	灰釉								
遺構外 9	鉢	TB	2	d	(18.2)	5.6	5.0	灰釉								見込みと底部に砂目
遺構外 10	片口鉢	TC	23	b	16.1	8.5	9.1-9.6	鉄釉								
遺構外 11	壺・甕(蓋)	TC	00	a	4.4	9.8受	1.6-1.8	柿釉								

Ⅱ-1表 陶磁器・土器観察表(5)

第2部 農学部共同溝地点発掘調査報告

法量単位 (寸法: mm、重量: g)

遺構名	図版 No.	様式※	型	法量				備考
				輪外形縦	郭外幅縦	銭厚	重量	
SU 1	86	I a	太細	24.2	5.3	1.0	2.4	
SU 1	87	I a	仰永	23.6	5.5	0.9	1.9	
SU 1	88	I a		24.5	5.6	1.2	2.4	
SU 1	89	II	文銭	25.5	5.4	1.3	3.5	
SU 1	90	II	文銭	25.5	5.5	1.2	2.8	
SU 1	91	II	文銭	25.5	5.9	1.2	3	
SU 1	92	II	文銭	25.6	5.8	1.3	2.8	
SU 1	93	II	文銭	25.3	5.7	1.3	3.3	
SU 1	94	II	文銭	25.3	5.5	1.3	3.6	
SU 1	95	II	文銭	25.5	5.8	1.2	3.4	
SU 1	96	II	文銭	25.4	5.8	1.3	3.7	
SU 1	97	I a	建仁寺、小字	25.1	5.8	1.5	2.8	
SU 1	98	I a	不草点	25.8	5.6	1.5	2.4	
SU 1	99	V	元文亀戸銭	23.9	6.6	1.0	2.5	
SU 1	100	I a		24.5	5.7	1.0	3.1	
SU 1	101	III a	猿江銭、小字	23.6	6.2	1.0	2.1	
SU 1	102	III a	四ッ宝銭、座寛	21.5	6.7	0.8	1.1	
SU 1	103	III a	四ッ宝銭、広永	23.7	6.3	1.3	3.2	
SU 1	104	III a	猿江銭、正字	22.9	5.5	1.4	2.4	
SU 1	105	V	虎ノ尾寛	23.2	6.2	0.9	1.6	
SU 1	106	I a	不草点?	24.6	5.0	1.5	3.3	
SU 1	107	III a	萩原銭、草点永	23.2	6.6	0.9	1.6	
SU 1	108	III a	四ッ宝銭、勁永	23.5	6.3	1.3	2.1	
SU 1	109	III a	四ッ宝銭、勁永	23.0	6.1	1.1	2.7	
SU 1	110	I a	建仁寺、大字?	25.5	6.5	1.2	2.5	
SU 1	111	III a	四ッ宝銭、俯頭糸	21.8	6.3	6.4	1.9	
SU 1	112	III a	四ッ宝銭、広永	23.8	5.6	1.3	2.8	
SU 1	113	III a	四ッ宝銭、勁永	23.2	6.3	1.0	2.5	
SU 1	114	V	仙台石ノ巻銭、異書進冠	24.7	5.6	1.4	4.1	
SU 1	115	I b	高寛	24.7	5.5	1.5	3.3	
SU 1	116	V	小梅手	23.1	6.8	1.0	1.8	
SU 1	117	I a	水戸銭?	24.6	6.1	1.1	2.2	
SU 1	118	II	文銭	25.6	5.5	1.5	2.7	
SU 1	119	II ?	文銭?	25.4	5.6	1.4	2.8	
SU 1	120	III a	四ッ宝銭、勁永	23.3	6.2	1.1	2.3	
SU 1	121	I a	建仁寺、大字	25.3	5.8	1.3	2.8	
SU 1	122	V ?		22.4	6.1	1.1	1.6	
SU 1	123	III a	猿江銭、小字	23.1	6.6	1.0	2.2	
SU 1	124		元豊通宝	24.8	6.8	1.3	1.5	
SU 1	125		元豊通宝	24.5	6.6	1.2	2.1	
SK 2	28	I a	太細	24.1	5.6	1.0	1.8	
SK 2	29	I a	俯頭永	24.2	5.6	1.2	2.8	
SK 2	30	I a	縮寛	24.2	5.5	1.1	2.9	江戸鑄
SK 2	31	I a	建仁寺、小字?	24.6	5.7	1.3	1.6	
SK 2	32	II	文銭	25.6	5.5	1.4	2.3	
SK 2	33	II	文銭	25.1	5.9	1.2	2.3	
SK 2	34	II	文銭	25.4	5.8	1.3	3.3	
SK 2	35	I a		23.6	5.3	1.2	2.1	
SK 2	36	III a	四ッ宝銭、広永	23.3	6.2	1.1	2.4	

II-2表 銭貨観察表(1)

法量単位（寸法：mm、重量：g）

遺構名	図版 No.	様式※	型	法量				備考
				輪外形縦	郭外幅縦	銭厚	重量	
SK 2	37	Ⅱ b	丸屋銭	25.7	5.8	1.1	2.6	
SK 2	38	Ⅱ	文銭	25.5	5.5	1.2	1.7	
SK 2	39	Ⅱ	文銭	25.1	5.0	1.0	1.5	
SU 3	27	Ⅰ a	太細	24.7	5.3	1.5	3.6	
SU 3	28	Ⅰ a		24.5	5.3	1.3	3.1	
SU 3	29	Ⅰ a	建仁寺、大字	25.2	5.8	1.3	3.5	
SU 3	30	Ⅰ b	正足宝	24.8	5.8	1.0	2.4	
SU 3	31	Ⅰ a		23.9	5.5	1.0	2.1	
SU 3	32	Ⅰ a		25.1	5.4	1.2	2.6	
SU 3	33	Ⅰ b	正足宝？	24.4	5.7	1.2	2.5	
SU 3	34	Ⅰ b	低寛	24.5	6.1	1.3	2.1	
SU 3	35	Ⅱ	文銭	25.2	5.6	1.4	3.4	
SU 3	36	V ?	仙台石ノ巻銭、異書長通	24.5	5.9	1.4	3.1	
SU 3	37	V ?	仙台石ノ巻銭、異書長通	24.3	5.9	1.2	2.7	
SU 3	38	Ⅳ ?	狭目寛	23.9	6.4	1.0	2.2	江戸鑄、不旧手、Ⅲまであがる可能性
SU 3	39	Ⅳ ?	高寛	24.8	5.9	1.1	2.4	江戸鑄、不旧手、Ⅲまであがる可能性
SU 3	40	Ⅲ a	四ッ宝銭、勁永	23.5	6.2	1.1	2.3	
SU 3	41	V ?	仙台石ノ巻銭、異書長通	24.7	5.8	1.1	2.4	
SU 3	42	Ⅲ a	萩原銭、草点永	23.4	6.2	0.9	1.7	
SU 3	43	Ⅲ a	四ッ宝銭、俯頸糸	20.6	6.9	0.7	0.9	
SU 3	44	Ⅲ a ?		22.8	6.6	1.5	1.8	
SU 3	45	V ?	仙台石ノ巻銭、異書斜宝	24.5	5.3	1.3	2.7	
SU 3	46	Ⅳ ?	高寛	23.6	6.2	0.9	1.8	江戸鑄、不旧手、Ⅲまであがる可能性
SU 3	47	V ?	仙台石ノ巻銭、異書長通	24.8	5.5	1.2	2.1	
SU 3	48	Ⅱ	文銭	25.1	6.0	1.5	3.5	
SU 3	49	Ⅱ	文銭、文刮去？	25.3	6.1	1.2	2.5	
SU 3	50	V ?	仙台石ノ巻銭、異書	24.4	5.7	1.3	3.2	
SU 3	51	V ?	仙台石ノ巻銭、異書	24.6	5.6	1.2	2.8	
SU 3	52	Ⅱ b	丸屋銭	25.2	5.6	1.4	3.3	
SU 3	53	V ?	仙台石ノ巻銭、異書	24.7	5.7	1.2	3.1	
SU 3	54	Ⅱ	文銭	25.3	5.8	1.2	3.1	
SU 3	55	V ?	仙台石ノ巻銭、異書	24.6	6.0	1.2	3.3	
SU 3	56	V ?	仙台石ノ巻銭、異書進冠	24.5	5.9	1.5	3.2	
SU 3	57	Ⅰ b	高寛	24.5	6.2	1.1	2	
SU 3	58	Ⅳ ?	仙台石ノ巻銭、重揮通無背	24.4	6.3	1.2	2.8	
SU 3	59	V ?	仙台石ノ巻銭、異書	25.0	5.5	1.3	2.8	
SU 3	60	V ?	仙台石ノ巻銭、異書長通	24.7	6.0	1.3	2.6	
SU 3	61	Ⅱ	文無背	24.8	5.8	1.1	2.5	
SU 3	62	V ?	仙台石ノ巻銭、異書	24.5	5.8	1.4	2.6	
SU 3	63	V ?	仙台石ノ巻銭、異書？	24.5	5.6	1.4	2	
SU 3	64	V ?	仙台石ノ巻銭、異書？	24.4	5.8	1.4	3.2	
SU 3	65	Ⅲ a	四ッ宝銭、広永	22.6	6.6	1.0	1.3	
SU 3	66	？		22.6	6.0	1.2	1.8	
SU 3	67	V ?	仙台石ノ巻銭、異書長通	24.5	6.0	1.3	3.1	
SU 3	68	？		23.9	5.9	1.2	1.9	
SU 3	69	Ⅰ a ?		24.8	5.5	1.3	1.9	
SU 3	70	Ⅲ a	四ッ宝銭	21.9	6.2	1.1	2	
SU 3	71	Ⅰ a	称・水戸銭、湾柱永？	24.0	5.4	1.1	2.6	
SU 3	72	Ⅳ ?	高寛	23.7	6.0	0.8	1.6	江戸鑄、不旧手、Ⅲまであがる可能性

Ⅱ-2表 銭貨観察表(2)

法量単位（寸法：mm、重量：g）

遺構名	図版 No.	様式※	型	法量				備考
				輪外形縦	郭外幅縦	銭厚	重量	
SU 3	73	Ⅲ a	四ッ宝銭、跳永	23.1	6.4	1.1	1.9	
SU 3	74	Ⅳ ?	高寛	24.2	5.9	1.2	2.5	江戸鑄、不旧手、Ⅲまであがる可能性
SU 3	75	Ⅰ b	大字	24.8	6.2	1.1	2.5	
SU 3	76	Ⅳ ?	退永	24.5	6.4	1.4	2.5	京都鑄？不旧手、Ⅲまであがる可能性
SU 3	77	Ⅳ ?	高寛	23.8	6.3	1.1	2	江戸鑄、不旧手、Ⅲまであがる可能性
SU 3	78	?		24.3	6.5	1.0	1.7	
SU 3	79	Ⅴ ?	仙台石ノ巻銭、異書	24.6	-	1.2	1.2	
SU 3	80		雁首銭	20.9	7.1	2.4	3.2	
SU 4	1	Ⅰ a		24.3	5.4	1.3	3.6	
SK 5	7	Ⅰ a		25.3	6.2	1.1	2.9	
SK 5	8	Ⅳ ?		24.3	6.2	1.3	2.2	江戸鑄、不旧手、Ⅲまであがる可能性

Ⅱ-2 表 銭貨観察表 (3)

※ 川根 2001

第Ⅲ章 農学部共同溝地点の成果

1. 農学部共同溝地点出土陶磁器・土器類について — 行人坂火事の一括資料 —

堀内 秀樹

(1) 分析の目的と方法

出土遺物を位置づけるにあたり器種組成、産地組成の分析から①文化相の復元（衣・食・住文化など）、②社会・経済相の復元（流通、階層性など）、③年代相の復元（編年など）を目的とするものである。ここであげた目的である文化史、社会・経済史の復元、時間軸の構築を行う手段として数量的分析法（Assemblage）が極めて有効な分析法であると考えている。

外来診療棟地点出土の陶磁器・土器の整理、分析するにあたって分類可能な遺物全点を分析の対象とし、特に遺構中より出土したものについては一括遺物としてまとまりとしてとらえ、遺構別の把握を行い、以後の定量的分析の基礎資料とした。分析は推定個体数 100 個体以上出土した遺構について行った。カウントとその呈示は最小個体数で行った。分析の方法については、以下のような手順で行った。

- ①出土した陶磁器全般にわたり胎土、施釉技法、成形技法、文様等の特徴で産地の、また主に器形的特徴で器種の分類を行なう。さらに細分可能な器種に関しては細分類を行い、その分類基準となった諸特徴を示す。これについての詳細は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）において既に行った。
- ②遺構一括遺物群における各分類の数量を推定個体数での呈示を行ない、以降の分析の基礎資料とする。カウント法は、例えば、ロクロを用いる器種であれば、底部中央などの個体に 1 箇所しかない特定部位の数量で行った。これは、生産あるいは購入された数量と出土する数量との整合を取るためである。
- ③陶磁器群がほぼ同様の器種組成を示すものについて同時期の廃棄ととらえるとともにその組成が相対年代に位置づけるに際して共通の理解を得られるであろう最小単位の把握を行う。またその組成を明示する。
- ④各最小単位の相対的順序を把握する。遺跡における層序、遺構の切り合いから各期の組列の方向を推定し、段階の古い順にその様相をとらえていく。
- ⑤各期の実年代の推定を行う。推定は出土量も多く、文様・器形等の変化が顕著であり、生産地での研究も進んでいる肥前及び瀬戸・美濃の磁器碗・皿を用いて行った。本分析において分類された器種について、生産地での研究および東京大学本郷構内の遺跡及び他の江戸遺跡における紀年銘資料、災害、土地利用の変遷など遺跡の状況とを判断材料とした。③～④については「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」（堀内 1997）において既に行った。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

- A 1 景德鎮窯系
- A 2 漳州窯系
- A 3 徳化窯系
- A 4 龍泉窯系
- A 5 宜興窯系
- A 6 朝鮮
- A 7 ベトナム
- A 8 ヨーロッパ

E - 備前系

- F - 志戸呂系
- G - 常滑系
- H - 萩系
- I - 万古系
- J - 大堀・相馬系
- K - 丹波系
- L - 堺系
- M - 益子・笠間系
- N - 九谷系
- O - 壺屋系
- P - 淡路系
- Z - 不明

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

○器種

- | | | | | |
|-----------|----------|---------|-----------|-------------|
| 1. 碗 | 2. 皿 | 3. 大皿 | 4. 爛徳利 | 5. 鉢 |
| 6. 坏 | 7. 猪口 | 8. 仏飯器 | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶 |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺 | 13. 蓋物 | 14. 筆立て | 15. 壺・甕 |
| 16. 急須 | 17. 爛鍋 | 18. 合子 | 19. 水滴 | 20. 蓮華 |
| 21. 植木鉢 | 22. 花生 | 23. 片口鉢 | 24. 灰落し | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ | 27. 水注 | 28. 澁瓶 | 29. 搦鉢 | 30. 餌入 |
| 31. 火鉢 | 32. 柄杓 | 33. 鍋 | 34. 土瓶 | 35. 戸車 |
| 36. ちろり | 37. 薬研 | 38. 手焙り | 39. おろし皿 | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利 | 42. 行平鍋 | 43. 十能 | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈 |
| 46. カンテラ | 47. ほうろく | 48. 七輪 | 49. 涼炉 | 50. 五徳 |
| 51. 塩壺 | 52. 燭台 | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉 | 55. 泥面子・芥子面 |
| 56. 碁石形製品 | 57. 玉 | 58. 鈴 | 59. 笛 | 60. 人形 |
| 61. ミニチュア | 62. 面型 | | | 00. 蓋 |

Ⅲ-1 表 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (略)

段	T.1(方石系陶器)			T.1(大瓶・相馬)			T.K(丹波系陶器)			T.L(環系陶器)			T.M(笠形・器)			T.O(源系陶器)			T.Z(生産地不明)			34(牛瓶)										
	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計								
器種	16	34	00	6	0	0	15	29	1	0	0	29	0	0	0	10	13	15	16	17	19	20	21	23	24	27	29	32	33(備)	34(牛瓶)		
小分類																																
SU1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段	42(行平線)			53(OC蓋)			陶器		
	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計
器種	1	0	0	0	0	0	0	0	0
小分類									
SU1	0	1	0	0	0	0	0	0	0

段	D.Z(生産地不明)			5(鉢)			9, 10, 16, 21(楕円鉢)			22, 31(丸鉢)			33(備)			34, 38, 40(卍受け皿)		
	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計
器種	1	61	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小分類																		
SU1	0	61	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段	陶器			45, 46, 47(ほうろく)			48(七輪)			49, 50, 51(瓦器)			62(OC蓋)			61		
	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計
器種	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小分類																		
SU1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段	54, 55, 56, 57, 58, 59(人影)			60(人影)			61			62(OC蓋)			61			62(OC蓋)			61		
	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計	合計	他	小計			
器種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
小分類																					
SU1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			

Ⅲ-2表 陶磁器・土器組成表(2)

(2) SU1 の出土陶磁器様相

① SU1 の様相

SU1 からは、多くの陶磁器・土器類が出土した。最初に本遺構から出土した陶磁器・土器の特徴を指摘したい。

i. 遺物群の年代的位置づけ

本遺構からは出土している磁器碗は、東大分類の JB-1-c、d、e、f、g、l、q、u、磁器皿は JB-2-a、e、g、h、k、m によって構成されている。このうち新しい段階で認められる小器種として JB-1-l (筒形碗)、q (高台が「ハ」の字状を呈する碗、望料碗) などがあり、これらを東大編年と対比するなら、VI 期に該当すると思われる。細かく見ていくと、VII 期は広東碗、VI b 期は小広東碗の出現を持って段階の指標としているが、双方とも出土していない。ただし、JB-1-q (高台が「ハ」の字状を呈する碗、望料碗) が VI a 期の指標遺構である外来診療棟地点 SK152 や SK174 などから出土しておらず、VI b 期の指標である中央診療棟地点 Y34-4、E22-1 などから出土する小器種であり、SU1 からは複数個体出土している状況から本出土遺物群は VI b 期に比定できる。次に陶器の状況では、VI 期に出土する TC-1-g (柳茶碗)、s (刷毛目碗) などが含まれ、VII 期から出土する TC-1-i や j (いわゆる太白碗)、TC-1-r (鎧手碗) などが認められないことからこれらからは年代的齟齬は認められない。また、出土している「御壺塩」銘を持っている塩壺は、隣接する本郷追分の 23 号地下式坑、染井遺跡 (加賀美家地区) 19 号遺構などの類例があるものの、量的には少ない。本郷追分例は肥前系磁器広東碗や小広東碗、染井例は小広東碗が共伴し、共伴資料は本例より新しい。したがって、本遺構出土の遺物群の年代的下限は広東碗出現前の 1760～70 年代に置くことができよう。

これらの遺物群は二次的な火熱を受けた痕跡が確認された資料も多かった。また、遺構の覆土も多く焼土が充填されており、火災の後片付けの様相を呈していた。前述した年代において当該地が被災した事項を確認すると、明和 9 (1772) 年に起こった大火—いわゆる目黒行人坂火事が該当する。『本郷区史』によると、「明和九年二月廿九日に於ける目黒行人坂大圓寺よりの出火は、烈しき西南風に乗じて麻布、芝、廓内、京橋、日本橋、神田、本郷、下谷、浅草寺に延焼し餘焰千住に達し、更に同日日暮本郷丸山より出火は駒込谷中根岸を焼き、翌晦日午の下刻に至って漸く鎮火したが、両者を通じて死傷数千人を生じ、その惨害は其の実に明暦三年以来のことと称せられた。」書かれており、行人坂より出火のものと本郷丸山から出火のものを含めて行人坂火事と称している。また、ここで引用されている『北叟遺言』から追分周辺について書かれている部分を引用すると、「本郷丸山菊坂火元道具屋與八、菊坂両類類焼。… (中略) …。菊坂臺町残らず類焼、植木奉行深谷十次郎、森川宿、本多平八郎、同所永井主膳組屋敷残らず、荒木十太夫組屋敷残らず類焼、松平加賀守前田治脩屋形新宅計類焼、駒込片町御小人御中間組屋敷、丸山町、大御番岡部太郎兵衛・御書院番本間忠左衛門屋敷、仁賀保兵庫組屋敷少し類焼、竹町二而焼留る。駒込追分町両類類焼、水戸様徳川治保御中屋敷計焼、太田駿河組屋敷、同法妙寺・長源寺・浄心寺・駒込三軒屋町、正行寺・正林寺・土物店・植木屋善六ニテ焼留る。」と、駒込追分町、駒込片町、水戸藩駒込邸などが焼けており、当該地も被災したことが確認できる。

以上より、年代的下限が明和 9 年と推定できたが、次に遺物群の集中度をみたい。出土碗、皿のうち新しい段階で出現する JB-1-l (筒形碗)、q (高台が「ハ」の字状を呈する碗、望料碗) などの小器種の他に JB-2-a、h、JB-1-c、d など 17 世紀の製品、あるいは JB-2-k、JB-1-u など 18 世紀前半の製品などが一定量含まれている。また、陶器も肥前京焼風陶器 (35) や内野山の製品 (36) など年代的

にのぼる製品も認められ、下限は18世紀後半にあるものの、年代幅を有する資料であると評価できる。

ii. 胎質組成

カウントできた陶磁器・土器類は252個体で、胎質の内訳は磁器65個体、陶器84個体、土器103個体である。最も多い胎質は土器であるが、その中においてもかわらけが61個体と全体の24.2%を占めている。こうした状況は大聖寺藩邸である中央診療棟地点の当該時期のY34-4（同25.8%）、E22-1（同24.1%）、組屋敷である工学部14号館地点SU18（同36.3%）、SU63（同20.6%）、SU382（同21.6%）などと近似した値を示している一方で、大聖寺藩邸である外来診療棟地点SK152（同8.2%）、組屋敷である工学部14号館地点SK330（同7%）などとは近似していない。かわらけが大きな割合を占める一括資料とそうでない資料とが確認される傾向は、既到大聖寺藩邸出土資料の分析でかわらけの法量差とからめた指摘がなされており（佐々木1990）、それ以外の地域においても同様の傾向が確認されることから、こうした状況は18世紀後半の普遍的な特徴とみることも可能であろう。

iii. 産地組成

確認されている推定生産地は、磁器が中国漳州窯、肥前、陶器が肥前、瀬戸・美濃、京都・信楽、備前、常滑、丹波、志戸呂、堺、江戸在地等が含まれている。陶器は瀬戸・美濃系が最も多く、次いで京都・信楽系陶器が出土している。これらの状況は同じVI b期に比定される外来例などと比較しても大きな齟齬はない。

iv. 器種組成

出土している器種について概観したい。磁器は碗、皿、坏など食膳具がその中心であるが、他に仏飯器、御神酒徳利などが少量含まれる。磁器で注意したいのは、大型の製品の有無と揃いの存在である。また、質的に高い製品の存否などであろう。16や18などやや大型の製品も含まれており、18などは中では高い質の製品と言えようが、これらはいずれも単独で出土している。また、陶器の割合も多く、こうした傾向は大名藩邸の中の詰人空間の様相（堀内2005）に近似している。陶器は最も多い瀬戸・美濃系の製品には食膳具の他に貯蔵具（壺・甕、徳利など）が認められ、京都・信楽系は半球形の碗類などを中心として確認されている。皿の多くは4～5寸の基本サイズの製品で、一汁一菜や一汁二菜など日常的な食事道具が多いと判断される。これを超えるサイズの製品は、16、18、35、36など年代的に古い製品が多いことが指摘でき、18世紀後半になって買い足したものには、良質な製品や大型の製品が少ない。あるいは経済状況の変化に伴うものか？また、鉄分が内面に付着した徳利（47）や遊具（73、74）などの存在は、女性や子供の存在を想起させる。

土器は、かわらけの出土が目につく。口唇部に灯明の痕跡が確認できる製品は少なく、儀式などに使用したものの可能性が考えられる。文献、遺物などから居住者の特定はできなかったが、当該期の居住する階層とを合わせた検証が必要となろう。

②日本橋一丁目遺跡、日本橋二丁目遺跡との対比

日本橋一丁目遺跡と日本橋二丁目遺跡では、それぞれ第4面が目黒行人坂火事で被災している面であることが報じられている。当該面で確認された遺構からは焼土や被災した遺物が出土している。調査面積や検出された遺構数が異なるため、遺構の比較はできにくいことから遺物を中心に概観する。

日本橋一丁目遺跡第4面では、10基の焼土整理土坑の存在が報じられている。このうち176号遺構が比較的多く遺物が掲載されている。出土点数は238点、内容の数量データは掲載されていない。図化されている陶磁器類は磁器18点、陶器24点、土器が6点である。磁器は中国漳州窯系、肥前系

とで構成されている。青磁染付（筒形碗、丸碗、皿）、蛇ノ目凹型高台（皿、鉢）の製品がいくつか確認できる。これらはその他の焼土整理遺構からも確認されている。陶器は瀬戸・美濃系刷毛目碗京都・信楽系半球碗などが、その他からは瀬戸・美濃系柳茶碗や鉄絵染付平碗などが確認されている。土器はかわらけが少ないが、ほうろくは4点図化されており、一定量出土している様子が看取できる。

日本橋二丁目遺跡では第4面の遺構として9基の焼土整理土坑の存在が報じられている。量的に多く遺物が出土している遺構はないが、磁器ではいわゆる梅樹文のくらわんか碗、筒形碗、高台八の字状に開く碗（望料碗）などと160号遺構からは小広東碗が出土している。皿はラフな文様を施文する粗製のもの、蛇ノ目釉剥ぎの製品等が確認される。この中には日本橋一丁目遺跡にみられたような青磁染付や蛇ノ目凹型高台の製品は含まれていない。陶器は瀬戸・美濃系筒形の柳茶碗、鉄絵染付の平碗、腰鏝碗などが確認される。また、灯明具として志戸呂、瀬戸・美濃、施釉された江戸在地系などの製品がみられる。

これら日本橋一丁目遺跡、二丁目遺跡の状況は、年代的下限は同じであるものの、量的に少なく、使用品全てがその地域内に廃棄したか疑問が残る。ただし、年代的には、農学部共同溝例と同じ時代と位置づけられるものの、図化されているものをみると青磁染付や蛇ノ目凹型高台など新しい製品の受容のされ方が「好みの違い」と捉えるのは早急だろうか？今後検証したい。

本調査区や駒込追分町遺跡からは日本橋で確認されているような焼土整理遺構は出土していない。火災などによって出た非日常的な廃棄物処理法が、同じ町屋とはいえ異なることは興味深い。土地の利用密度が異なる事が考えられようが、その後の狭隘な場所内で処理された高崎屋時代の廃棄行為など、低地とは異なる立地が大きく影響していることが推察できよう。

2. 農学部共同溝地点出土の動物遺体

阿部 常樹

はじめに

農学部共同溝地点から 33 分類群の動物遺体が出土した（表 1）。これらの資料は、現場にて肉眼で確認のできたもののみを任意で採集されたものである。

1. 貝類遺体

1 貝種組成（表 2、図 1）

(1) 計数方法

貝種組成は最小個体数で表している。なお、計数方法は以下のとおりである。巻貝類は殻柱が 2 分の 1 以上、アワビ類とキクスズメは殻頂部分が残存している資料を計数対象としている。二枚貝類は、殻頂部分が残存している資料を計数対象としている。それを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数し、そのうち多いほうを最小個体数としている。以上の定義で計数対象とされなかった資料は、「破片」としている。なお、各遺構の分類群内において、計数対象資料が残存せず、「破片」のみである場合は、一括して 1 個体として計算をおこなっている。

シジミ類は、形態からヤマトシジミとマシジミと区別しにくいものが混在していることから、種までの同定はおこなわず、「シジミガイ属」としている。

(2) 分析結果

以上の方法で計数した結果、本調査地点において出土した貝類遺体は、20 分類群 359 個体であった。ハマグリが最も多く、46.6%である。次いでサザエとシジミガイ属で各 14.0%、さらにアカガイが 7.0%出土しており、以上の 4 分類群以外に出土率が 5%を超えるものはない。

SU1 本遺構からは、16 分類群 207 個体の貝類遺体が出土した。ハマグリが最も多く、49.0%である。次いでシジミガイ属が 18.5%、サザエが 11.2%出土しており、以上の 3 分類群以外に 10%を超えるものはない。なお大形貝類では、サザエの他にも、アカニシが 12 個体（5.8%）出土している。

ハイガイは、近世の江戸湾において生息しない種である。実際に、本資料は、全体的に磨耗している（PL2 の 3）。以上のことから、ハイガイは、死殻の状態ではハマグリなどの生息する砂中にあったものが、これらを採集した際に混入したものであると考えられる。また、サルボウガイ、シオフキガイ、カガミガイも 1、2 点と微量であることから、生息域を同じくするハマグリを採集した際に混獲され、そのまま共に持ち込まれたものと推測される。なお、アサリについても、ハマグリが 101 個体であるのに対して、12 個体と比較的少量であることからサルボウガイ等と同様の可能性が想定される。

イタヤガイとホタテガイは、食物残渣ではなく、柄杓や皿などに利用されたものが廃棄されたものであることが想定される。

以上、種類を認識して料理に使用するために持ち込まれた可能性のあるものは、16 分類群中、アワビ類、サザエ、アカニシ、バイ、バテイラ、アカガイ、シジミガイ属、ハマグリ の 8 分類群である。

SK2 本遺構からは、13分類群 78 個体の貝類遺体が出土した。ハマグリが最も多く (59.0%)、全体の約 60% を占めている。次いでアカガイが 14.1% 出土しており、以上の 2 分類群以外に 10% を超えるものはない。その他には、サザエ (6.4%)、バイ、シジミガイ属 (各 3.8%)、アカニシ、ボウシュウボラ (各 2.6%) などが 2 個体以上出土しており、ハマグリやアカガイを除くと、二枚貝類よりも巻貝類の方が比較的多く出土している傾向をうかがうことができる。

キクスズメは、アワビ類やサザエの殻表に着生している種であることから、どちらかの種とともに持ち込まれたものと考えられる。

マガキ、サルボウガイ、マテガイは、各 1 点しか出土しないことから生息域を同じくするハマグリを採集した際に、混獲されてそのまま共に持ち込まれたものと推測される。ミルクイも同様の可能性が想定されるが、本種は大形であり 1 個体でも 1 品の料理として成立しうるものであることから判断しがたい。

シジミガイ属については、3 個体と極めて少ないことから、他所に廃棄されたものが何かしらの要因で本遺構に混入したものである可能性が想定される。

以上、種類を認識して料理に使用するために持ち込まれた可能性のあるものは、13 分類群中、メガイアワビ、サザエ、アカニシ、ボウシュウボラ、バイ、アカガイ、ハマグリ の 7 種、もしくは、ミルクイを加えた 8 種である。

なお、ボウシュウボラ 1 点は、殻高約 220mm と非常に大きい。

SU3 本遺構からは、2 分類群 2 個体の貝類遺体が出土した。内訳は、マガキの破片資料とハマグリ の右殻が含まれている。ハマグリは、殻長 50mm 以上の「大型」のものであると推測される。

北西部ピット 本遺構からは、4 分類群 12 個体の貝類遺体が出土した。アカガイが最も多く、66.7% である。その他に、ハマグリ (16.7%)、アサリ、サルボウガイ (各 8.3%) が出土している。ハマグリは、左殻・右殻各 1 点が殻長 35mm から 45mm ぐらいの「中型」のもの、左殻 1 点が殻長 70mm 程の「大型」のものである。サルボウガイは左殻 1 点で、殻長 40mm 程の中形の個体である。

2 主要貝種のサイズ分析 (表 3～8、図 2～5)

(1) 分析方法

可能なものすべての貝種について、計測作業をおこなった。計測方法は、阿部 (2006) に基づく。なお、二枚貝類に関して、ハマグリ、アサリ、ミルクイに関しては計測法 B、それ以外の分類群に関しては計測法 A によって計測をおこなった。

計測対象資料が 5 個体以上のハマグリ、アサリ、シジミガイ属・アカガイについては、記述統計量とヒストグラムによって、遺構ごとにサイズ組成の傾向を示した (表 3～6、図 2～5)。ハマグリについては、SU1 と SK2 の間の殻長における平均値の差の統計学的な有意性の有無について最小有意差法を用いて検定をおこなった (表 7)。

(2) アカガイ及びハマグリ の殻長の推定

サイズの分析を行うに際して、破損が激しく、各遺構内において、主要部位である殻長をほとんど計測できないこともあることから、回帰・相関分析を用いて比較的残存しやすい部位からの殻長の推定を試みた。本分析をおこなったのは、アカガイとハマグリである。以下に貝種ごとに分析結果を述べ、導出された推定式を提示する。

アカガイ 本種は、鉸歯長からの殻長の推定を試みた。SU1 において計測することのできた資料

が4点と少なかったことから、2基の遺構から出土した資料を併せて分析をおこなった。

分析の結果、ダービンワトソン比が、2.18で一次及び他の多次関数よりも2に近いことから、5次関数による回帰がサイズ推定に有効であると判断された。また、決定係数が0.97であることから、この式の精度が非常に高いことが確認された。さらに、分散分析の結果をみても共に1%水準で有意であった。したがって、この式によって、鉸歯長から殻長を推定することが、有効であることが示された。なお、導出された式は、以下のとおりである。

$$y = 0.0003x^5 - 0.1x^4 + 8.9x^3 - 505.3x^2 + 14313.9x - 161219.0 \quad (y: \text{殻長}, x: \text{鉸歯長})$$

ハマグリ 本種は、外靱帯溝長からの殻長の推定を、遺構ごとに試みた。

分析の結果、まず、SU1は、ダービンワトソン比が、2.13で一次及び他の多次関数よりも2に近いことから、2次関数による回帰がサイズ推定に有効であると判断された。また、決定係数が0.96であることから、この式の精度が非常に高いことが確認された。さらに、分散分析の結果をみても共に1%水準で有意であった。したがって、この式によって、外靱帯溝長から殻長を推定することが、非常に有効であることが示された。なお、導出された式は、以下のとおりである。

$$y = -0.04x^2 + 4.20x - 0.10 \quad (y: \text{殻長}, x: \text{外靱帯溝長})$$

次に、SK2は、ダービンワトソン比が、1.83で多次関数よりも2に近いことから、直線回帰がサイズ推定に有効であると判断された。また、決定係数が0.79であることから、この式の精度が比較的高いことが確認された。さらに、分散分析の結果をみても共に1%水準で有意であった。したがって、この式によって、外靱帯溝長から殻長を推定することが、比較的有効であることが示された。なお、導出された式は、以下のとおりである。

$$y = 2.88x + 9.53 \quad (y: \text{殻長}, x: \text{外靱帯溝長})$$

(3) ハマグリ of 殻長サイズの遺構間の比較 — 分析の結果 — (表6・7、図5)

SU1 平均値は、計測値が41.6mm、推定値が44.9mmである。ヒストグラムの形状は、計測値の場合、殻長30mm以上から35mm未満にピークを持つ単峰型であるのに対して、推定値の場合、殻長35mm以上から40mm未満と60mm以上から65mm未満の2つのピークを有する双峰型である。単峰型を示すSK2の殻長において、変動係数が計測値、推定値共に10%台前半であるのに対して、SU1は共に20%台とほぼ倍である。このことから、サイズにバラエティがあることが示されている。つまり、推定値による結果を基準に考えると、SU1には少なくとも殻長50mm未満のもの以上もので採集された場所もしくは時期などが異なる(阿部2003)、少なくとも2つのグループのものが混在している可能性が推測される。

SK2 平均値は、計測値が43.2mm、推定値が43.4mmである。ヒストグラムの形状は、共に殻長40mm以上45mm未満にピークを持つ単峰型を示す。変動係数は共に10%台前半で比較的サイズにばらつきがないことが示されている。

平均値の差の検定結果(表7) 全てのサイズを対象にした検定の結果では、全てのサンプル間で統計学的に有意な差は認められなかった。しかし、SU1において、殻長50mm以上と以下で背景の

異なるものが含まれている可能性が指摘された。そこで、殻長 50mm 未満のもののみを対象として改めて検定を行なった。その結果、各遺構内の殻長の計測値と推定値との間では有意な差は認められなかったものの、遺構間において、それぞれの間で有意差が認められた。つまり、50mm 未満における平均値が、SU1 の計測値が 38.5mm、推定値が 38.8mm に対して、SK2 の計測値が 42.5mm、推定値が 42.2mm であることから、SK2 の方が SU1 よりも統計学的に有意に大きいことが示された。

まとめ 平均値の差の検定の結果、50mm 未満のものを対象にした場合、計測値、推定値共に SK2 のもののほうが SU1 のものよりも有意に大きいことが示された。さて、ヒストグラムにおける SK2 のピークも、計測値、推定値共に、SU1 の推定値における 2 つのピークのちょうど谷間に当たる 40mm 以上 45mm 未満であることから、これらが購入によって持ち込まれたものであると仮定した場合、SK2 のハマグリは、SU1 に含まれると想定される 2 つのサイズ群何れとも、購入した時期などが異なるものであることが推測される。

2. 魚類遺体

(1) 分析方法

魚類遺体の分析方法は樋泉（2003）に基づく。資料から主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨を抽出して「同定用資料」とし、それ以外の部位は「同定対象外資料」とする。しかし、分類群によって、「同定用資料」以外に同定可能な特徴的な部位を有するものは、それらも適宜、同定に用いる。また、本報告で同定できなかったものに関しては、標本がなかったことなどの要因から同定するに至らなかったものを「未同定」、残存状況が悪く、同定することが不可能であったものは「同定不可」とする。なお、椎骨の中には、分類群が異なるもののタイ科のものの特徴が極めて似ているものがある。そこで、タイ科とその近似する分類群をまとめて、「タイ型」として分類を行なう。本文内の出土数及び出土率は、同定破片数（NISP）を用いる。

(2) 分析結果（表9）

魚類遺体は、9分類群 26 点が出土している（同定対象外資料を除く）。まず、カツオもしくはマグロ属の可能性のあるもの（以下、「カツオ／マグロ類」と表記。なお、より可能性の高いものを前に記載する。）及び「未同定」が各 6 点（23.1%）、マフグ科が各 4 点（15.4%）出土している。次いで、タイ科・タラ科・コチ科が各 2 点（7.7%）出土している。そして、ヒラメ・コイ科・カマス属・マグロ属／カツオが各 1 点（3.8%）出土している。以下に、遺構ごとに組成を概観する。

SU1 5分類群 15 点出土している。その内容は、「未同定」が 6 点、カツオが 4 点、タラ科が 2 点、マフグ科・ヒラメ・タイ科が各 1 点出土している。

SK2 6分類群 10 点出土している。その内容は、マフグ科が 3 点、カツオ／マグロ属とコチ科が各 2 点、カマス属・コイ科・タイ型が各 1 点である。

SU3 マグロ属／カツオの尾椎が、1 点出土している。

(3) SU1 出土の「未同定」とした大型魚類（PL4）

SU1 からは、今回、一致する標本がなく、同定するに至らなかった「未同定」資料が 6 点出土している。これらは、形状や大きさから同一個体のもものと想定され、さらに、スズキ目のものと想定される。また、前上顎骨の頬側に犬歯状の尖った歯列が 1 列、舌側に柔毛状歯帯があったと考えられる歯槽が見られる。これらのことから、フエダイ科、ハタ科、ニベ科などが推測される。その魚のサイ

ズは、全長 1m 前後の大型のものと考えられる。報告者の管見のかぎりでは、近世江戸遺跡において、これらの資料の出土事例はなく、また、先にあげた 3 科に属する魚種は、日本において、比較的、西および南側に生息するものが多い。

「未同定」資料の内、左主上顎骨の上面に包丁によるものと思われる無数の刀傷が見られる (PL4 の 3a・b)。この刀傷は、1mm ~ 3mm 程の深さで、わずかに上面前方から下面後方に向かって入っている。また、上面から観察するとやや左側から右側に後へ傾きをもって傷がつけられている。それぞれの傷の間隔は 2mm ~ 4mm で、後方に行くほどその間隔は開いている。刀傷がもし頭部を解体する前につけられたものであるとすると、上部からほぼ垂直に包丁を入れられたものであり、その箇所は吻部から眼窩前方の間の極めて狭い範囲にあたる。

3. 鳥類遺体

(1) 概要 (表 9・10)

鳥類遺体は、3 分類群 12 点出土している。ニワトリの可能性のあるキジ科が 8 点 (66.7%) で最も多く、その他にキジとコウノトリが各 1 点 (8.3%)、そして、同定不可資料が 2 点 (16.7%) 出土している。

SU1 2 分類群 9 点出土している。キジ科が 8 点、キジの足根中足骨が 1 点、そして、同定することのできない長骨骨幹部分が 1 点出土している。

SK2 コウノトリの左尺骨近位端と、同定することのできない長骨骨幹部分が各 1 点出土している。コウノトリの左尺骨は、肘頭などに切断痕がみられることから、食物残渣であることが推測される。

(2) コウノトリと「鶴」(PL5 の 9a ~ c)

江戸時代において、コウノトリは、「鶴」と混同されていることが多い (菊池 2006) ^(註1)。その一方で、当時の百科事典及び図鑑 (『和漢三才図会』『本朝食鑑』など) では、「かうのとおり」「かう」「かうづる」などコウノトリのみを表す名称や記述がある (菅原・柿澤編著 2005)。おそらく、当時、コウノトリをツル科の一種として認識していたものと想定される (菊池 2006)。

当時、「鶴」は、他の鳥に比べて位が高く、江戸時代において将軍家から大藩に下賜される特別な鳥であった (江後 1999)。さらに、享保年間 (1716 年 ~ 1735 年) において鳥類の捕獲の禁止が出されている中で特に鶴に関しては頻繁に出されており、背景として鶴は「将軍家に結びつく恐れ多い鳥として、軽々しく捕獲し、食用にするものと考えられていなかった」ことが指摘されている (寺島 2006) ^(註2)。つまり、SK2 の廃絶年代が 18 世紀中ごろであることから、その当時の「鶴」は極めて希少且つ特別なものであったと想定される。食べ物としてのコウノトリが、所謂「鶴」として認識されてあつかわれていたかはわからないが、当時、比較的高価であったガン・カモ科 (寺島 2006) に比べて、出土事例が少ないことを鑑みると、比較的、町人には手に入りにくいものであったことは想像される。

4. 哺乳類遺体 (表 9)

哺乳類遺体は、2 分類群 4 点出土している。ウサギ類 2 点、シカ科 1 点、同定不可資料が 1 点出土している。

SK1 ウサギ類が 2 点出土している。部位は左第 3 中足骨と左基節骨が各 1 点出土しており、この 2 点は、同一個体である。

SK2 シカ科の右肩甲骨が1点出土している。これは、ニホンシカのなかで本州では一般的なホンシュウシカのものよりも大きく、エゾシカの標本（国立歴史民俗博物館西本研究室および阿部所蔵標本）とほぼ同じサイズである(PL.6)。エゾシカは、ニホンシカのなかで最も大きい種類である。なお、2点のエゾシカ標本よりも後縁内側の筋肉粗面が著しく発達している。

さて、近世江戸遺跡において、エゾシカに近いサイズのニホンシカ遺体は、千代田区尾張藩麴町邸跡（Ⅲ次調査：加藤建設株式会社 2006）から出土しているのみである。出土した遺構（100号遺構）は、尾張藩が屋敷として拝領する以前の町屋の頃の土坑である。廃絶時期は、17世紀第2四半期の早い時期とされている。

なお、近世において清国などと交易があったことから、アカジカなど大陸から持ち込まれた大型のシカであることも想定する必要がある。そこで、本報告では、「シカ科」としている。

5. まとめ（表11）

本調査地点の動物遺体は、採集方法の関係から必ずしも実際に遺構内に内包していた組成を反映しているとはいえない。しかし、傾向として、SU1の「未同定」大型魚類、SK2のコウノトリと大型のシカ科など、特に脊椎動物遺体に関しては、他の江戸遺跡から出土するものよりも、比較的大形且つ珍しいものが含まれている。また、貝類遺体においても、SK2から殻高約220mmと非常に大きいボウシュウボラが出土している。これらの珍しいものがまとまって出土していることから、単純に町屋で食されたものとは考えにくい。現段階では、遺構内に埋没するまでに、どのような由来をもつ動物遺体群であるかは推測することは難しい。今後、隣接する地点・遺跡における同時期の発掘調査の成果をまっけて検討を加える必要がある。

謝辞

本報告を行うにあたり、国立歴史民俗博物館及び同館の西本豊弘先生、早稲田大学の樋泉岳二氏、鳥取大学の江田真毅氏には有益なご指導と多大なる御協力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表したい。

註

- 1) 日本画においてよく「鶴」が松の木の上に止まっているものがある。しかし、ツル科はそのようなところに止まることはなく、一方でコウノトリは、松の上に巣を作ることからこれらはコウノトリであると考えられている（菊池 2006）。また、兵庫県豊岡市日高町荒川の隆国寺にある県指定重要有形文化財で、弘化3（1846）年に制作したとされる岸連山作の襖絵「芦翹鶴図（あししょうかくず）」に描かれている2羽の「鶴」の内、1羽がコウノトリの特徴を持つ鳥であることが指摘されている（『神戸新聞』2007年11月13日）。
- 2) 一方で、寺島は、「町方で鶴が料理されていたこと」や「江戸では「隠しうてる」」ことが史料に見られることから、「厳格に鶴の捕獲・売買が禁止されていたかどうか」は疑問であるとしている。

【参考文献】

- 阿部常樹 2003「近世遺跡出土の貝類遺体とその採集方法について—東京都新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡を例に—」『奈和』第41号、p.27-48 奈和同人会
- 2006「貝類遺体のサイズに関する計測方法」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』p.438-444 東京大学埋蔵文化財調査室
- 江後迪子 1999『隠居大名の江戸暮らし 年中行事と食生活』吉川弘文館

- 加藤建設株式会社 2006『東京都千代田区尾張藩麹町邸跡Ⅲ』
- 菊池直樹 2006『蘇るコウノトリ 野生復帰から地域再生へ』 東京大学出版会
- 菅原浩・柿澤亮三編著 2005『図説鳥名の由来辞典』 柏書房
- 寺島孝一 2006「鳥」『坂詰秀一先生古稀記念論文集 考古学の諸相Ⅱ』 p.171-184 (株)匠出版
- 樋泉岳二 2003「明石町遺跡の魚類遺体群」『東京都中央区 明石町遺跡』 p.172-180 明石町遺跡調査会

表1 農学部共同溝地点出土動物遺体種名表

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

腹足綱 Class Gastropoda

古腹足目 Order Vetigastropoda

ミミガイ科 Family Haliotidae

メガイアワビ *Halitosis (Nordotis) gigantea*

ニシキウズガイ科 Family Trochidae

バテイラ *Omphalius pfeifferi pfeifferi*

サザエ科 Family Turbinidae

サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*

盤足目 Order Discopoda

スズメガイ科 Family Hipponicidae

キクスズメ *Hipponix conica*

フジツガイ科 Family Ranellidae

ボウシュウボラ *Charonia lampas sauliae*

新腹足目 Order Neogastropoda

アケキガイ科 Family Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

エゾバイ科 Family Buccinidae

バイ *Babyronia japonica*

二枚貝綱 Class Bivalvia

フネガイ目 Order Arcoida

フネガイ科 Family Arcidae

アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*

サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*

ハイガイ *Tegillarca granosa*

カキ目 Order Ostreoida

イタヤガイ科 Family Pectinidae

イタヤガイ *Pecten albicans*

ホタテガイ *Patinopecten yessoensis*

イタボガキ科 Family Ostreidae

マガキ *Crassostrea gigas*

マルスダレガイ目 Order Veneroida

バカガイ科 Family Mactridae

シオフキガイ *Mactra veneriformis*

ミルクイ *Tresus keenae*

マテガイ科 Family Solenidae

マテガイ *Solen strictus*

シジミガイ科 Family Cobalidae

シジミガイ属 *Corbicula* sp.

マルスダレガイ科 Family Veneridae

カガミガイ *Phacosoma japonicum*

アサリ *Tapes (Ruditapes) philippinarum*

ハマグリ *Meretrix lusoria*

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

コイ目 Order Cypriniformes

コイ科 Family Cyprinidae

属種不明 gen. et sp. indet.

タラ目 Order Gadiformes

タラ科 Family Gadidae

属種不明 gen. et sp. indet.

カサゴ目 Order Scorpaeniformes

コチ科 Family Platycephalidae

属種不明 gen. et sp. indet.

スズキ目 Order Perciformes

タイ科 Family Sparidae

属種不明 gen. et sp. indet.

カマス科 Family Sphyraenoidae

カマス属 *Sphyraena* sp.

サバ科 Family Scombridae

カツオ *Katsuwonus pelamis*

マグロ属? *Thunnus* sp. ?

カレイ目 Order Pleuronectiformes

ヒラメ科 Family Paralichthyidae

ヒラメ *Paralichthys olivaceus*

フグ目 Order Tetraodontiformes

マフグ科 Family Tetraodonidae

属種不明 gen. et sp. indet.

鳥綱 Class Aves

キジ目 Order Galliformes

キジ科 Family Phasianidae

属種不明 gen. et sp. indet.

コウノトリ目 Order Ciconiiformes

コウノトリ科 Family Ciconiidae

コウノトリ *Ciconia boyciana*

哺乳綱 Class Mammalia

ウサギ目 Order Lagomorpha

ウサギ科 Family Leporidae

ウサギ類 *Lepus* sp.

偶蹄目 Order Artiodactyla

シカ科 Family Cervidae

ニホンシカ? *Cervus Nippon?*

表3 SU1及びSK2出土アカガイのサイズに関する記述統計量(値単位:mm)

	SU1				SK2			
	殻長		殻高	鉸歯長	殻長		殻高	鉸歯長
	計測値	推定値			計測値	推定値		
サンプル数	2	4	2	4	12	10	10	10
平均値	79.70	84.24	65.81	55.27	86.57	86.74	69.92	56.85
標準偏差		6.40		4.05	8.48	9.12	6.87	5.77
分散		40.95		16.40	71.97	83.26	47.20	33.34
範囲		16.24		10.28	31.02	31.59	20.87	19.99
最小値	77.27	78.49	65.37	51.63	75.79	77.11	63.19	50.76
中央値		81.87		53.77	83.54	85.22	67.34	55.89
最大値	82.12	94.73	66.24	61.91	106.81	108.70	84.06	70.75
尖度		1.75		1.75	1.26	2.21	-0.09	2.21
歪度		1.44		1.44	1.19	1.43	1.09	1.43
標準誤差		3.69		2.34	2.56	3.04	2.29	1.92
変動係数		0.09		0.08	0.10	0.11	0.10	0.11

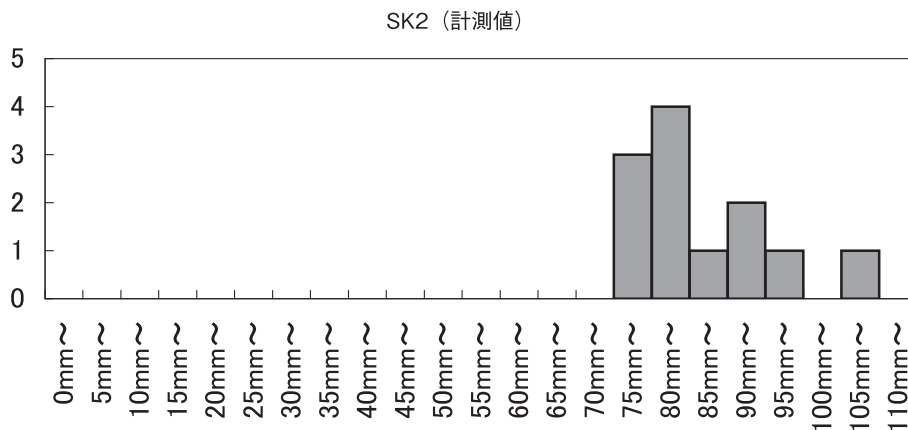
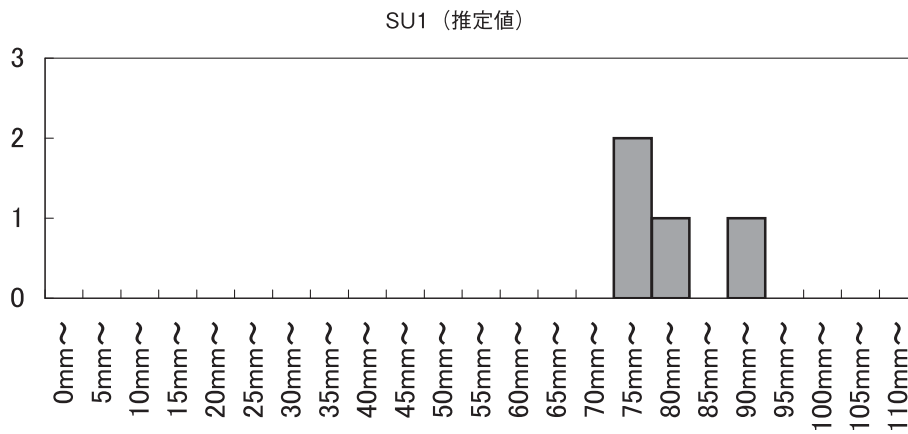


図2 SU1及びSK2出土アカガイの殻長に関するヒストグラム(縦軸:個数,横軸:サイズ)

表4 SU1 及び SK2 出土シジミガイ属のサイズに関する記述統計量 (値単位: mm)

	SU1			SK2		
	殻長	殻高	歯間長	殻長	殻高	歯間長
サンプル数	25	27	29	3	3	2
平均値	20.65	18.42	17.35	21.28	19.52	14.92
標準偏差	2.37	2.01	2.01	4.48	3.53	
分散	5.61	4.03	4.03	20.06	12.47	
最小値	16.39	15.06	13.26	15.81	15.71	12.79
中央値	21.10	18.26	17.52	21.24	18.62	
最大値	25.25	23.24	21.45	26.78	24.22	17.05
尖度	-0.98	-0.37	-0.62			
歪度	-0.09	0.35	-0.09	0.03	0.89	
標準誤差	0.48	0.39	0.38	3.17	2.50	
変動係数	0.12	0.11	0.12	0.26	0.22	

図3 SU1 出土シジミガイ属の殻長に関するヒストグラム (縦軸: 個数, 横軸: サイズ)

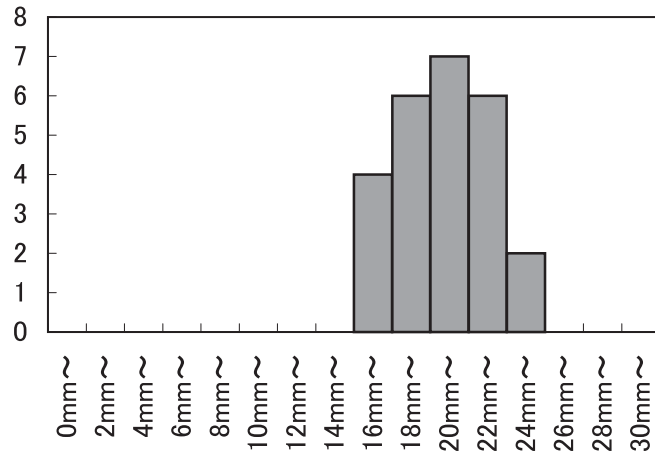


表5 SU1 出土アサリのサイズに関する記述統計量 (値単位: mm)

	殻長	殻高
サンプル数	5	4
平均値	38.37	28.79
標準偏差	4.19	2.94
最小値	32.68	25.36
中央値	37.78	28.24
最大値	45.36	33.31
尖度	0.94	0.54
歪度	0.61	0.83
標準誤差	2.10	1.70
変動係数	0.12	0.12

図4 SU1 出土アサリの殻長に関するヒストグラム (縦軸: 個数, 横軸: サイズ)

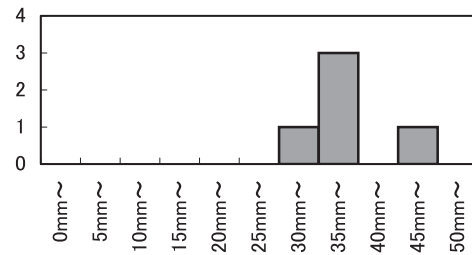


表6 SU1及びSK2出土ハマグリサイズの
に関する記述統計量 (値単位: mm)

	SU1 (右殻)				SK2 (左殻)			
	殻長		殻高	外殻帯 溝長	殻長		殻高	外殻帯 溝長
	計測値	推定値			計測値	推定値		
サンプル数	43	90	55	90	26	45	37	45
平均値	41.55	44.94	36.08	12.07	43.18	43.39	35.07	11.75
標準偏差	9.51	11.66	8.82	3.60	4.21	5.84	4.29	2.03
分散	90.41	135.87	77.77	12.99	17.72	34.15	18.39	4.11
最小値	28.95	28.10	24.62	7.15	31.77	31.23	26.24	7.53
中央値	38.93	41.92	34.36	11.04	43.71	43.94	35.26	11.94
最大値	72.41	75.79	59.11	22.25	51.48	63.01	49.89	18.56
尖度	1.66	-0.29	-0.09	0.02	0.82	2.26	2.78	2.26
歪度	1.27	0.76	0.87	0.90	-0.52	0.60	0.76	0.60
標準誤差	1.47	1.24	1.20	0.38	0.84	0.88	0.71	0.31
変動係数	0.23	0.26	0.25	0.30	0.10	0.14	0.12	0.17

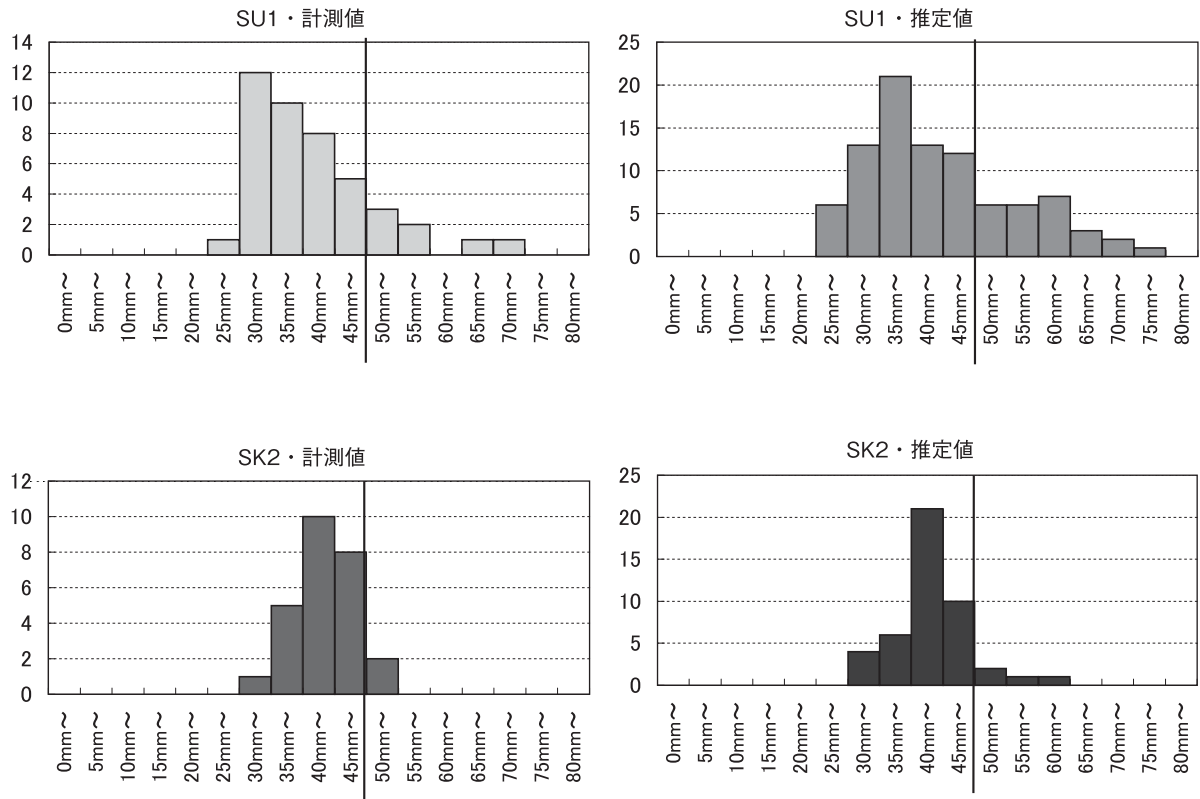
表7 殻長 50mm 未満の資料での検定結果
(最小有意差法)

遺構	部位	平均値 (mm)	SU1		SK2	
			計測値	推定値	計測値	推定値
SU1	計測値	38.3	/	n.s.	**	**
	推定値	38.8	n.s.	/	**	**
SK2	計測値	42.5	**	**	/	n.s.
	推定値	42.2	**	**	n.s.	/

(**:1%有意 *5%有意 n.s.:有意差なし)

※全体及び 50mm 以上はどの組み合わせにおいても有意差は認められなかった

図5 SU1及びSK2出土ハマグリサイズの
に関するヒストグラム (縦軸: 個数, 横軸: サイズ)



二遺構間の推定値に関する比較

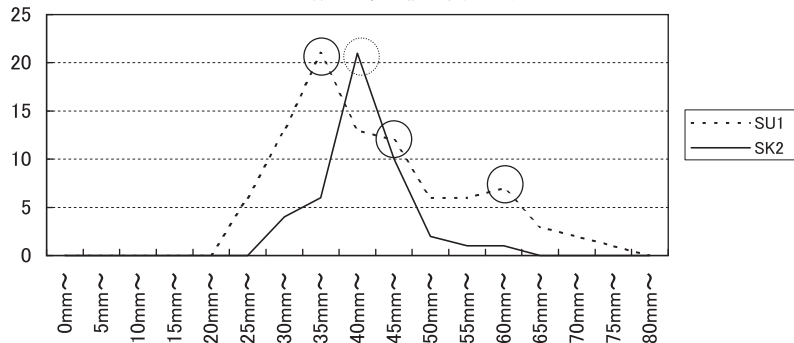


表8 その他の貝種の計測値 (値単位: mm)

サザエ	遺構	殻高	備考
		53.55	
		53.97	
		63.97	
		64.32	
		64.96	
	SU1	65.64	
		66.96	
		69.98	
		70.78	
		91.97	
		96.32	
	SK2	87.75	計測できなかつたもうひとつの個体もほぼ同じ大きさ
		60.94	
		61.67	
		63.96	
		68.06	
		70.31	
		73.32	
		74.63	
		76.96	
		77.51	
		79.33	
		93.06	
		99.75	
		100.29	
		104.73	
		104.76	
		116.95	
	不明		

ボウシユウボラ

遺構	殻高	備考
SK2	172.88	
	211 +	殻頂付近欠損

メガイアワビ

遺構	殻長
SK2	150 ±

アカニシ

遺構	殻高
	113.47
	78.99
SU1	98.47
	99.08
	94.52
	102.37
SK2	125.97
不明	95.38

バイ

遺構	殻高
	60.06
	60.00
SU1	69.94
	55.33
	68.88
SK2	55.04
	68.21
不明	60.83

バテイラ

遺構	殻高	殻径
SU1	40.94	44.39

サルボウガイ

遺構	左右	殻長	殻高	殻歯長
	左	38.25	33.52	24.81
SU1	右	42.02	34.25	27.61
		33.05		19.14
SK2	右	27.68	24.6	17.97
		50.39	42.53	33.45
1m 幅トレンチ北部	左	28.2	22.98	16.89
			32.82	24.12
北西部ピット覆土	右	27.74	22.02	17.35
	左	37.48	30.24	22.52

カガミガイ

遺構	左右	殻長	殻高
SU1	合	60.32	56.64
SU1	右	64.98	60.41

シオフキ

遺構	左右	殻長	殻高	殻歯長
SU1	左	39.37		
不明	合	35.56	31.35	23.01

ミルクイ

遺構	左右	殻長
SK2	右	111.11
	左	100+

表9 農学部共同溝地点出土脊椎動物遺体一覧

遺構	時期	網	種名	部位	左右	数	備考		
SU1	18c 前～中 天井崩壊土下	硬骨魚	(未同定)	主上顎骨	左	1	大形の魚種。上部に無数の刀傷が見られる。全長 98.21mm。		
			マフグ科	前上顎骨	左	1			
			同定対象外資料			0		鱗棘が主体。	
		鳥	キジ科	胸骨	—	1			
			ヒラメ	尾椎	—	1			
			タイ科	擬鎖骨	左	1			
			タラ科	主上顎骨	左	1			
				前鰓蓋骨	左	1			
			カツオ	歯骨	右	1			
				主鰓蓋骨	左	2			
			硬骨魚	主鰓蓋骨	右	1			
				前上顎骨	左	1	大形の魚種。全長 82.29mm。		
				前上顎骨	右	1	大形の魚種。全長 82.43mm。		
				角骨	左	1	大形の魚種。全長 95 ± mm。		
				角骨	右	1	大形の魚種。全長 95 ± mm。		
腹椎	—	1		大型の魚種。椎体横径 31.71mm。					
鳥	同定対象外	上舌骨	左	1	大形の魚種。				
	同定対象外	—	—	◎	鰓蓋骨片、軟状鱗棘中心。カツオ主体？				
	キジ科	肩甲骨	右	1					
	キジ科	上腕骨	左	1	完存。小型。右とは別個体。				
	キジ科	上腕骨	右	1	完存。小型。小型の左のものとは別個体。				
	キジ科	上腕骨	左	1	遠位のみ残存。さらに遠位端外側が切断され、その面と平行する切痕が2条ある。中型。ニワトリ？				
	ニワトリ？	鳥口骨	左	1	ほぼ完存。「キジ」ではない。				
	キジ科	脛足根骨	左	1	完存。小型。右と同一？				
	キジ科	脛足根骨	右	1	両端部欠損。小型。左と同一？				
	キジ科	足根中足骨	左	1	ニワトリではない。				
	同定不可	—	—	1	長骨骨幹部分のみ残存。				
	哺乳	ウサギ類	第3中足骨	左	1	完存。基節骨と同一個体。			
			基節骨	左	1	完存。第3中足骨と同一個体。			
	SU2	18c 前	硬骨魚	カマス属	歯骨	右	1		
				マフグ科	前上顎骨	左	3		
カツオ				主鰓蓋骨	右	1			
コイ科			歯骨	左	1				
			主鰓蓋骨	右	1				
コナ科			角骨	右	1				
			前鰓蓋骨	右	1				
タイ型			尾椎	—	1				
同定対象外資料					0	鰓蓋骨片が主体。			
鳥			コノトリ	尺骨	左	1	近位端のみ残存。肘頭などに切断痕が見られる。		
			同定不可	不明	—	1	長骨骨幹部分。		
哺乳			シカ科	肩甲骨	右	1	背側後縁付近のみ残存。後縁内側の筋肉粗面が発達している。エゾジカ標本に近似している。		
SU3			18c 中	硬骨魚	マクロ風/カツオ	—	1	椎体長 17.0mm とやや小形。	
不明			—	哺乳	同定不可	寛骨	左	1	腸骨体部分のみ残存。ニホンジカ標本に近似。阿部所蔵エゾジカ標本よりはやや小さい。

○：計数可能な資料なし、◎：同様に多数有り

表 10 農学部共同溝地点出土鳥類遺体計測データ (値単位: mm)

遺構	種名	部位	左右	Bp	Dip	GL	Bd	Dd	その他		
SU1	キジ科	肩甲骨	右						関節面最大長 (Dic)		8.36
	キジ科	上腕骨	左	13.76		43.46	11.47				
	キジ科	上腕骨	右	13.80		45.65	11.95				
	ニワトリ?	烏口骨	左						内側長 (Lm)		32.51
	キジ科	脛足根骨	左	14.37	8.66	61.00	8.27	9.13	骨軸長 (La)		58.86
	キジ科	足根中足骨	左	11.22		72.77	12.00				
SK2	コウノトリ	尺骨	左	24.10	28+						

Bp: 近位端最大幅, Dip: 近位端関節面最大幅, GL: 最大長, Bd: 遠位端最大幅, Dd: 遠位端最大厚

表 11 遺構別に見る動物遺体の出土傾向

	貝類				魚類				鳥類				哺乳類							
	分類群	MNI	%		分類群	NISP	%	MNI	%	分類群	NISP	%	MNI	%	分類群	NISP	%	MNI	%	
SU1	ハマグリ	101	48.8%	カツオ/マグロ属	4	26.7%	2	28.6%	キジ科 (キジ or ニワトリ)	8	80.0%	2	50.0%	ウサギ類	2	100.0%	1	100.0%		
	シジミガイ属	38	18.4%	未同定	6	40.0%	1	14.3%	キジ	1	10.0%	1	25.0%							
	サザエ	23	11.1%	クラ科	2	13.3%	1	14.3%												
	アカニシ	12	5.8%	マフク科	1	6.7%	1	14.3%												
	アサリ	12	5.8%	ヒラメ	1	6.7%	1	14.3%												
	アカガイ	5	2.4%	タイ科	1	6.7%	1	14.3%												
	バイ	4	1.9%																	
	アワビ類	3	1.4%																	
	サルボウガイ	2	1.0%																	
	カガミガイ	2	1.0%																	
	ハテイラ	1	0.5%																	
	ハイガイ	1	0.5%																	
	イタヤガイ	1	0.5%																	
	ホタテガイ	1	0.5%																	
	シオフキ	1	0.5%																	
合計	207		合計	15		7		同定不可	1	10.0%	1	25.0%	合計	2		1				
SK2	ハマグリ	46	59.0%	マフク科	3	30.0%	3	37.5%	コウノトリ	1	50.0%	1	50.0%	シカ科	1	100.0%	1	100.0%		
	アカガイ	11	14.1%	カツオ/マグロ属	2	20.0%	1	12.5%												
	サザエ	5	6.4%	コチ科	2	20.0%	1	12.5%												
	バイ	3	3.8%	カマス属	1	10.0%	1	12.5%												
	シジミガイ属	3	3.8%	コイ科	1	10.0%	1	12.5%												
	ボウシュウボラ	2	2.6%	タイ型	1	10.0%	1	12.5%												
	アカニシ	2	2.6%																	
	アワビ類	1	1.3%																	
	キクスズメ	1	1.3%																	
	サルボウガイ	1	1.3%																	
	マガキ	1	1.3%																	
	ミルクイ	1	1.3%																	
	マテガイ	1	1.3%																	
	合計	78		合計	10		8		同定不可	1	50.0%	1	50.0%	合計	1		1			
	SU3	マガキ	1	50.0%	マグロ属/カツオ	1	100.0%	1	100.0%											
ハマグリ		1	50.0%																	
合計		2		合計	1		1													
北西部ピット	アカガイ	8	66.7%																	
	ハマグリ	2	16.7%																	
	サルボウガイ	1	8.3%																	
	アサリ	1	8.3%																	
	合計	12																		
1m幅ピット北側	シジミガイ属	7	43.8%																	
	ハマグリ	4	25.0%																	
	サルボウガイ	3	18.8%																	
	サザエ	1	6.3%																	
	アカガイ	1	6.3%																	
	合計	16																		
不詳	サザエ	21	47.7%											同定不可	1	100.0%	1	100.0%		
	ハマグリ	13	29.5%																	
	アカニシ	3	6.8%																	
	シジミガイ属	2	4.5%																	
	ボウシュウボラ	1	2.3%																	
	バイ	1	2.3%																	
	マガキ	1	2.3%																	
	シオフキ	1	2.3%																	
	アサリ	1	2.3%																	
	合計	44													合計	1		1		
総計	359			26		16				12		6			4		3			



PL.1 農学部共同溝地点出土貝類遺体（巻貝類）

1 メカイアワビ 2 パテイラ 3 サザエ 4 アカニシ 5 パイ 6 ボウシュウボラ (6のみSK2、その他はSU1出土)



PL.2 農学部共同溝地点出土貝類遺体（二枚貝類）

1 アカガイ 2 サルボウ 3 ハイガイ 4 イタヤガイ 5 ホタテガイ 6 シオフキガイ 7 シジミガイ属 8 カガミガイ 9 アサリ 10 ハマグリ 11 マガキ 12 ミルクイ 13 マテガイ
(1～10がSU1、11～13がSK2出土。イタヤガイとハイガイが右殻の他は、すべて左殻)



PL.3 農学部共同溝地点出土魚類遺体

1 コイ科 (右主鰓蓋骨) 2 タラ科 (左左上顎骨) 3・4 コチ科 (3 右角骨 4 右前鰓蓋骨) 5 タイ科 (左擬鎖骨) 6 タイ型 (尾椎) 7 カマス属 (右歯骨) 8・9 カツオ/マグロ属 (8 左歯骨 9 右主鰓蓋骨) 10 マグロ属/カツオ (尾椎) 11 ヒラメ (尾椎) 12 マフグ科 (左左上顎骨)
(2・5・11 は SU1、10 は SK03、その他は SK2 出土)



PL.4 農学部共同溝地点 SU1 出土「未同定」大型魚類遺体

1 右前上顎骨 (a 外側面 b 底面) 2 左上顎骨 3 左上主上顎骨 (a 外側面 b 上面) 4 右角骨 5 左角骨 6 腹椎



PL.5 農学部共同溝地点出土鳥類及び哺乳類遺体

1～8 キジ科 (1 左鳥口骨 2・4 左上腕骨 3 右上腕骨 5 右脛足根骨 6 左脛足根骨 7 左足根中足骨 8 胸骨
 9 コウノトリ (左尺骨: a 内側面 b 外側面 c 上面) 10 不明哺乳類 (左寛骨) 11 ウサギ類 (左第3中足骨及び基節骨)
 (9はSK2、10は出土地不明、その他はSU1)



PL.6 農学部共同溝地点 SK2 出土シカ科右肩甲骨

1. エゾジカ現生標本 (阿部所蔵)・裏側, 2 出土資料 (a 裏側 b 表側)

第IV章 まとめと今後の課題

本調査に関する成果として、SU1が明和9（1772）年の行人坂火事を契機に廃棄された資料であることが推定できたことである。陶磁器類は、年代組成にやや幅が認められたが、胎質組成、産地組成、器種組成などに顕著な特徴などを確認することはできなかった。日常生活の中で使用している製品が被災し、廃棄がなされた状況を示していると推定され、年代的ばらつきも使用期間と見ていいと思われる。これとは対照的に、銭貨については寛永通宝にはいわゆる古寛永、文銭、四ッ宝銭、萩原銭など17～18世紀初めに铸造された銭種が主体的に構成されており、遺構の年代的下限に近い時期の銭種が少ないことが確認された。ライフサイクルの長い胎質との差異であるのかも知れないが、陶磁器・土器類とは異なる様相が確認された。これらの様相が当該期の典型的な生活様相を反映しているかの検証はこれから課題であろう。対比するにあたり、出土遺物の数量呈示が望まれる。

この他、自然遺物が一定量認められた。貝類は量的に多く、SU1ではハマグリ料理による使い分けなどが殻長の分布から想定された。また、珍しい種としてエゾジカなどの入手・廃棄経緯の想定しにくいものもいくつか確認された。これらも今後の課題と言えるだろう。

本調査地点は、面積も小さく土地利用など考古学的に復元することは難しい面もあるが、隣接地点との関連の中でいくつか注意すべき問題点を包含している。

第1点目は、当該地域の土地利用の展開についてである。歴史的環境の中で触れたように文献や絵図の記録では当該地点は寛永期（1624～43）には御小人である牧野金助組の組屋敷であったが、延宝年間（1673～81）には町場が成立しているとされている。本調査区で確認された遺構の廃棄は出土遺物からいずれも18世紀を遡るものはないが、含まれている遺物はSU5の志野の香炉・火入れ（4）や遺構外出土の褐釉・染付の蓋物（2）など17世紀前半まで遡るものも含まれている。また、隣接する本郷追分では遺物は17世紀前半に遡るものが出土しているものの、遺構の廃棄年代が当該期に遡るものは報告されておらず、17世紀の遺物が出土している遺構は15号地下式坑、24号地下式坑などで、これらも17世紀末以前に遡る可能性は少ない。また、駒込追分町遺跡では麴室として報告されている第2号遺構の中に17世紀前～中葉の遺物が多く出土しているが、報文によると調査時の安全のためにあらかじめ空洞部に土の充填を行ったため、遺物はこうした二次堆積土中に含まれていたもので遺構の廃棄年代を反映していないとされているが、重要なことは町場として成立したと推定される延宝年間より古い段階でまとまった遺物群が確認されていることである。これらの状況から文献では元和年間（1615～24）—少なくとも寛永年間には牧野金助組屋敷地として拝領はされているが、本地点、本郷追分、駒込追分町遺跡を含めたエリアの中では元和期から寛永期に遺物・遺構が確認されておらず、空閑地であった可能性が高い。

第2点目は中山道と町場の位置関係であるが、駒込追分町遺跡は、東京メトロ南北線東大前駅建設に際して行われた調査で、現在の本郷通りの下に位置している。こうした関係で南北に長い調査区が設定されているが、調査区全面に遺構が密に展開していることが報文からは看取される。ただし、調査区やや南寄り西側に南北に延びる第17号遺構が日光御成道の東側溝と推定しており、現東大前駅北側出口部分、西側に張り出している調査区で遺構が密集する間のおよそ10m弱の空間域が日光御成道と考えられる。こうした状況は、中山道に沿って約200mほど南に位置する東京大学本郷構内の遺跡工学部14号館地点の調査成果によっても検証できる（成瀬晃司2006）。工学部14号館地点で

は、調査区西側において加賀藩と御先手組屋敷の境が確認されており、御先手組屋敷の地割りの奥行き20間を復元すると現在の本郷通りのほぼセンターライン付近より西側に中山道が通っていたと推定される。

第3点目は高崎屋との関係である。高崎屋は岩淵令治氏によると「開業時期は不詳であるが、菩提寺である谷中本寿寺の「墓籍簿」には、初代長右衛門の没年は安永7(1778)年とある。従って、18世紀後半以降に商売を始めた可能性が強い」としている(岩淵1996)。これは発掘調査で「高サキ」などの屋号の付いた徳利、猪口、坏などが出土する遺構は、いずれも19世紀に年代的下限持つものであり、それ以前には確認できないことから首肯できる。高崎屋の繁栄を物語る資料としては、有名な長谷川雪旦、雪堤が描いた天保13(1842)年の店舗の絵画資料がある。これを見ると高崎屋は日光御成道を挟んで両側に店舗を展開しており、店舗の奥に広大な庭園を持つ瓦葺きの屋敷が連なっている。絵の左上方には根津権現と思われる建物が遠望されることから、構図は日光御成道の西側から東を眺めた風景である可能性が強い。したがって、第I章の歴史的環境で触れたが、幕末から明治初期の段階で道が付け替えられていることが推定でき、高崎屋の絵図で描かれた部分は、現在の高崎屋の真向いのI-10図のA部分、本調査区、本郷追分、駒込追分町遺跡南端部分を含む地域であることが推定される。本調査区では、19世紀に年代的下限を有する遺構が確認されていないことから状況は復元できないが、駒込追分町遺跡の遺構配置は南端域に分布が密であり、特に集中している南端から第30号遺構や第239号遺構などの麴室が位置する部分までの遺構の年代は、いずれも「18世紀後半から19世紀初頭」あるいは「18世紀後半から19世紀前半」と報文に記載されている。特に第216号遺構や第236号遺構からは、「高」が染め付けられている坏や「高サキ」の釘書きを持つ徳利が多く出土している。また、本郷追分では同様の坏や徳利、「高」の家紋瓦、高崎屋関係の墨書陶磁器が多く出土しているほか、18世紀後半から19世紀にかけて膨大な量の遺物が伴う土坑群が確認されている。報文では「大型土坑」と称されている遺構で、例えば1号大型土坑では、1.5tを超える陶磁器・土器類が出土している。これらの遺物群は、おそらく高崎屋に伴うものと推定される。

【引用・参考文献】

- 朝日新聞社 1994『復元 江戸情報地図』
- 岩淵令治 1996「駒込村の歴史の変遷」『春日町遺跡・菊坂下遺跡・駒込追分町遺跡・駒込浅嘉町遺跡・駒込富士前町遺跡』地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会
- 内野 正 2005「出土陶器碗からみた尾張藩市谷邸の画期 — 柳茶碗・御小納戸茶碗・灰釉平碗の分析から —」『東京都埋蔵文化財センター 研究紀要』XXI
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房
- 川根正教 1995、1996「寛永通寶錢の基礎的研究1(上)、(下)」『出土錢貨』5、6 出土錢貨研究会
- 川根正教 2001「寛永通寶銅錢の様式分類」『出土錢貨研究』出土錢貨研究会
- 続群書類従完成会 1967『新訂寛政重修諸家譜』
- 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 1996『春日町遺跡・菊坂下遺跡・駒込追分町遺跡・駒込浅嘉町遺跡・駒込富士前町遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1989『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990a『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1990b『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学構内雨水調整池遺跡調査会 1994『本郷追分』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』
- 長佐古真也 1991「瀬戸美濃産「太白焼」小考」『東京都埋蔵文化財センター 研究紀要』X
- 成瀬晃司 1997「江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷 — 文様、銘款を中心に —」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
- 成瀬晃司 2006「工学部14号館地点の空間構成」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 日本地図センター 1984『参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図』
- 日本橋一丁目遺跡調査会 2003『東京都中央区日本橋一丁目遺跡』
- 日本橋二丁目遺跡調査会 2001『東京都中央区日本橋二丁目遺跡』
- ハドソン・東洋鑄造貨幣研究所 1998『新寛永通寶図会』
- 原 祐一・堀内秀樹 2006「水戸藩駒込邸の土地利用状況 — 発掘調査の成果と文献史料の検討 —」『水戸黄門邸を探る』文京ふるさと歴史館
- 文京区役所 1968『文京区史』巻二
- 堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹 2005「外来診療棟地点出土陶磁器・土器について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』
- 本郷区役所 1937『本郷区史』
- 雄山閣 2002『藩史大事典 第2巻 関東編』

調査報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちようさけんきゆうねんぽう
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報
副書名	
巻次	6
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	堀内秀樹（編） 阿部常樹
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4丁目6番1号 駒場リサーチキャンパス内
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがくほんごう 東京大学本郷 こうない いせき 構内の遺跡 ほんごうだいいせきぐん (本郷台遺跡群) のうがくぶぎょうどうこう 農学部共同溝 ちてん 地点	とうきょうと ぶんきょうく 東京都文京区 やよい 弥生1-1-1	13105	47	35° 42' 59"	139° 45' 32"	1993年 12月6日 ～ 1994年 2月10日	50	東京大学 農学部 共同溝新 設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷 構内の遺跡 (本郷台遺跡群) 農学部共同溝 地点	拝領町屋	近世	土坑、地下室	陶磁器、土器、 金属製品、石製 品、 動物遺体		駒込追分町に おける近世の 地下室・土坑の 調査		

東京大学白山構内の遺跡

総合研究博物館
小石川分館地点発掘調査報告

2008

東京大学埋蔵文化財調査室



SD1 完掘状況



SD1 覆土堆積状況

例 言

1. 本報告は、東京大学総合研究博物館小石川分館（旧東京医学校本館）トイレ増築に伴う埋蔵文化財発掘報告である。
2. 本地点の略称は「K I」とする。
3. 調査地点は東京都文京区白山3丁目7番1号、東京大学総合研究博物館小石川分館内に所在している。
4. 調査面積は30.3㎡であった。
5. 本地点は文京区 No.81「小石川御薬園跡」内に位置している。
6. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査は成瀬晃司、追川吉生が担当した。
7. 調査期間は2000年11月27日から12月4日である。
8. 本報告の編集は成瀬が行った。
9. 遺構写真は成瀬、追川が、遺物写真は青山正昭が撮影した（CD-ROM所収）。
10. 遺物の実測は今井雅子が行い、北島くりかによってデジタル化を行った。
11. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、東京大学柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）内にて保管、運用している。
12. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して敬意を表する。（敬称略）
池田悦夫 加藤元信 古泉 弘 渋谷葉子 西秋良宏 宮崎勝美 加藤建設株式会社 東京大学
施設・資産系 東京大学総合研究博物館 東京大学人文社会系研究科・文学部考古学研究室

発掘調査・整理作業参加者

青山正昭 今井雅子 北島くりか 加藤建設株式会社

凡 例

1. 遺構実測図の縮尺は、各挿図のスケールにて示す。
2. 遺物の実測図は 1/3 で掲載である。
3. 実測図に付けられる記号は以下のことを表している。
 - ・▲は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。
 - ・中心線上下端の破線は、推定口径及び底径を表している。
 - ・本文中で記載した陶磁器・土器分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)』に、遺構一括資料の段階設定は、堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 に基づいている。
4. 遺構番号は 1 から通し番号を付した。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。
SD: 溝 SE: 井戸
5. 遺構断面図に記載された標高は、東京湾平均海面 (T.P.) を基準とし、基標番号「小 (21)」大塚三丁目 32 窪町東公園内 (T.P.: 9.4294m) から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお「小 (21)」の値は、平成 12 年 7 月東京都土木技術研究所刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。

東京大学白山構内の遺跡
総合研究博物館小石川分館地点発掘調査報告

目 次

口 絵
例 言
凡 例
目 次

第 I 章 調査の経緯と概要

第 1 節 調査に至る経緯	159
第 2 節 調査の方法と経緯	159
第 3 節 遺跡の位置と環境	161

第 II 章 江戸時代の遺構と遺物

第 1 節 遺構	165
第 2 節 遺物	170

第 III 章 白山御殿の惣囲いについて	171
----------------------	-----

参考文献

報告書抄録

第 I 章 調査の経緯と概要

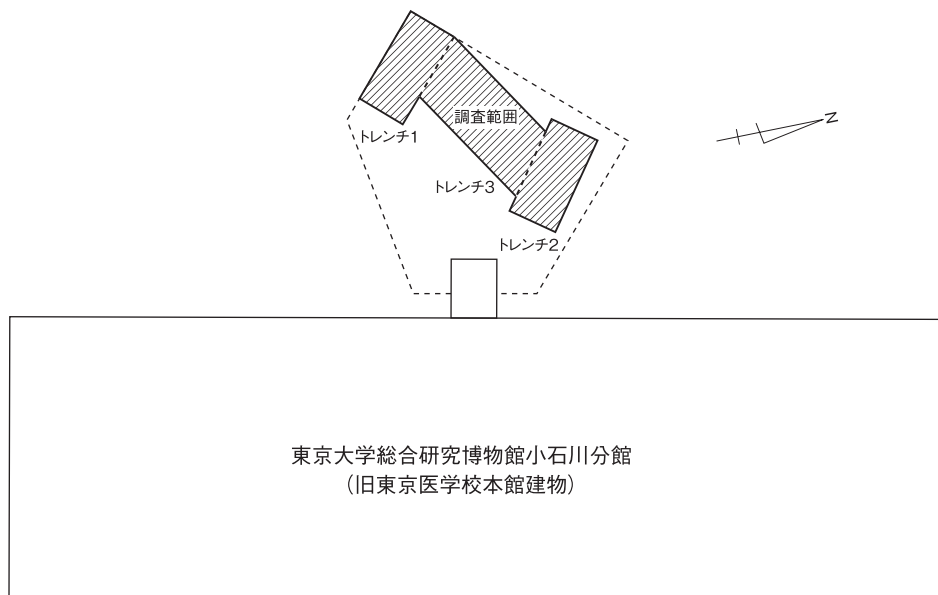
第 1 節 調査に至る経緯

東京大学総合研究博物館では、東京大学白山構内に移築保存され、学術センター分室として利用されていた旧東京医学校本館（重要文化財指定）を博物館施設（小石川分館）として有効活用していくことを決め、建物裏手に便所の増築（45m²）を計画した。構内は、文京区 No.21「小石川植物園内貝塚・原町遺跡」、文京区 No.81「小石川御薬園跡」として遺跡登録されているため、施設部から照会を受けた調査室は、遺跡の遺存状態を確認するために平成 12 年 11 月 27 日に試掘調査を実施した。

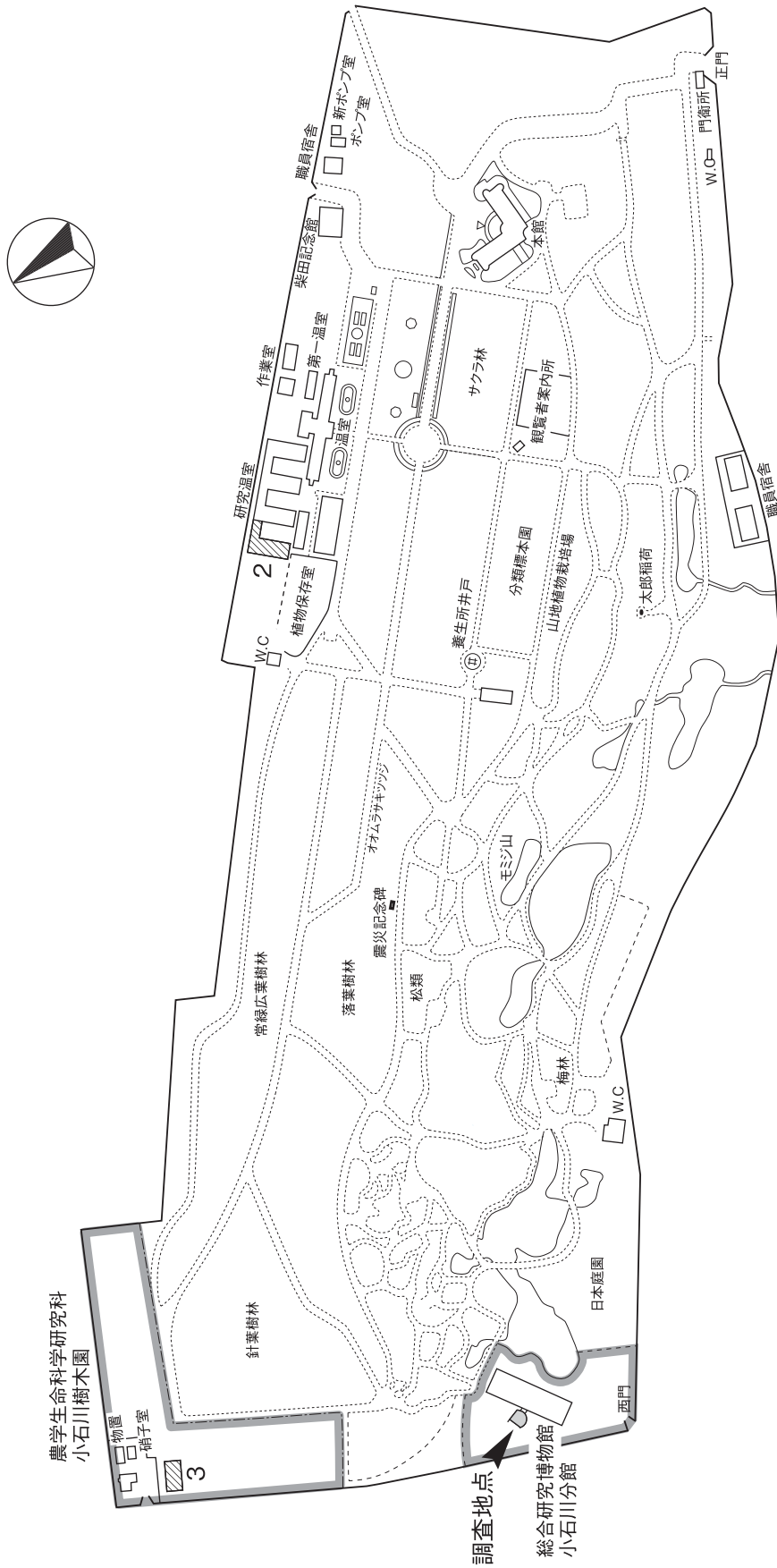
第 2 節 調査の方法と経緯

(1) 調査の方法

調査地点は、旧東京医学校本館の裏手（西側）にあたり、周囲は樹木が茂る斜面地である。調査は遺跡の遺存状態確認のための試掘調査として建物範囲の南北両端付近に東西 4m、南北 2m のトレンチを 2 本設定して行った（トレンチ 1、2）。



I - 1 図 調査範囲位置図 (1/300)



I-2 図 調査地点の位置

2: 理学部附属植物園研究温室地点 3: 農学生命科学研究科小石川樹木園根圏観察室地点

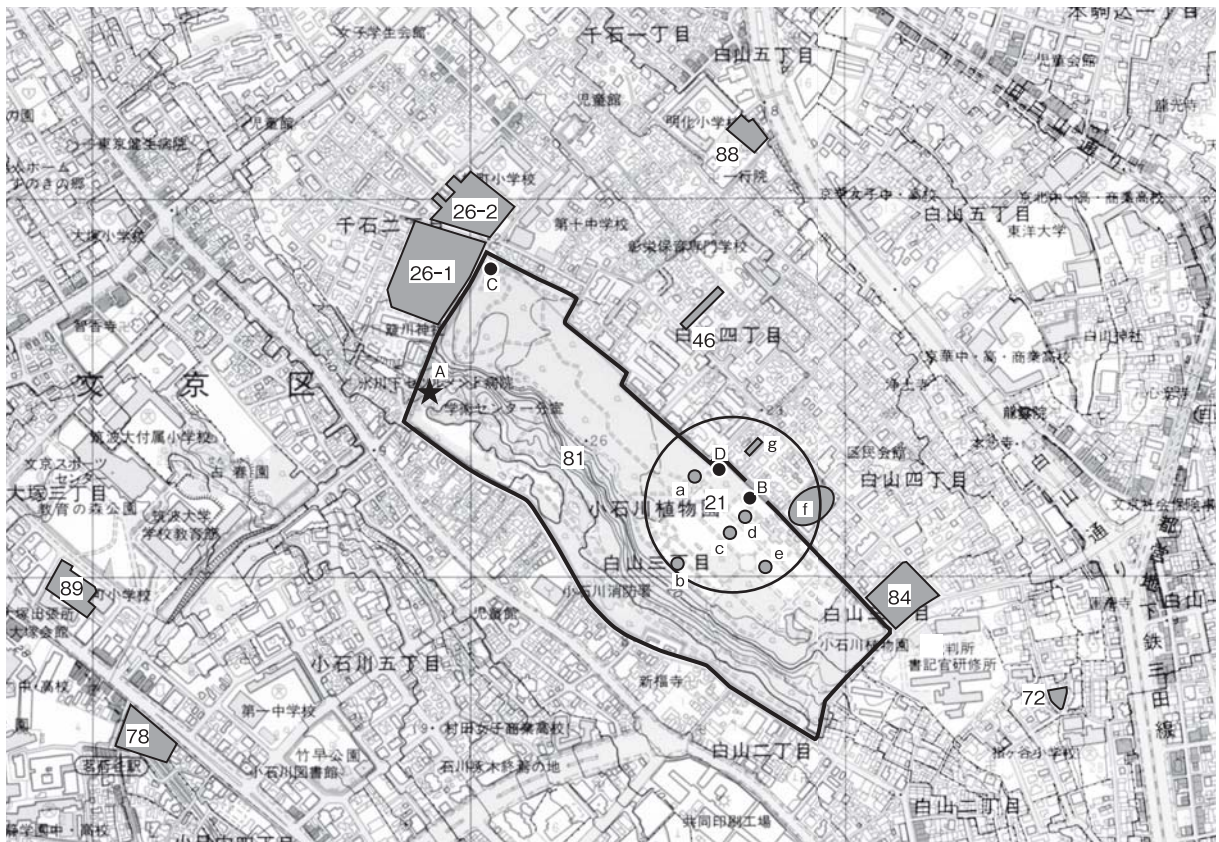
(2) 調査の経緯

トレンチ1では江戸時代の生活面が3面確認されたが、2面目の生活面より北東（トレンチ2）方向へ下る溝状遺構の壁面が検出された。一方トレンチ2では、重機による掘削深度限界まで達しても自然堆積層は確認されず、その堆積土はトレンチ1斜面上の覆土と類似していることが確認された。その結果から、調査地点全体を包含する大形溝状遺構の存在が想定されたため、急遽、事前調査に切り替え、安全確保を行いながら、溝の範囲確認を目的にトレンチ1、2を結ぶトレンチ3を設定し、12月4日まで調査を実施した（I-1図）。

第3節 遺跡の位置と環境

本地点を含む白山構内は、東京都文京区白山3-7-1にあり、白山台地の台頂部から南側の小石川谷までに位置する。本構内には通称小石川植物園の名で知られる理学系研究科附属植物園を中心に、構内北西部の台地上に農学生命科学研究科樹木園、南西部の低地付近に本地点を含む総合研究博物館小石川分館の3研究施設がある（I-2図）。

本構内が位置する白山台地は、本郷台地が小石川谷の支谷である指ヶ谷谷で浸食されて分かれた台地で、両支谷によって挟まれ舌状台地を形成している。指ヶ谷谷に面する北斜面は緩斜面であるのに

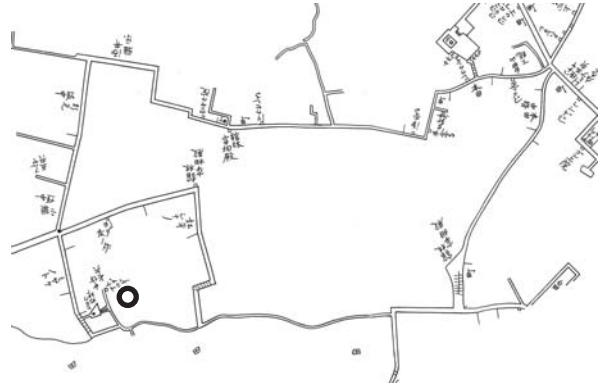


I-3図 周辺の遺跡

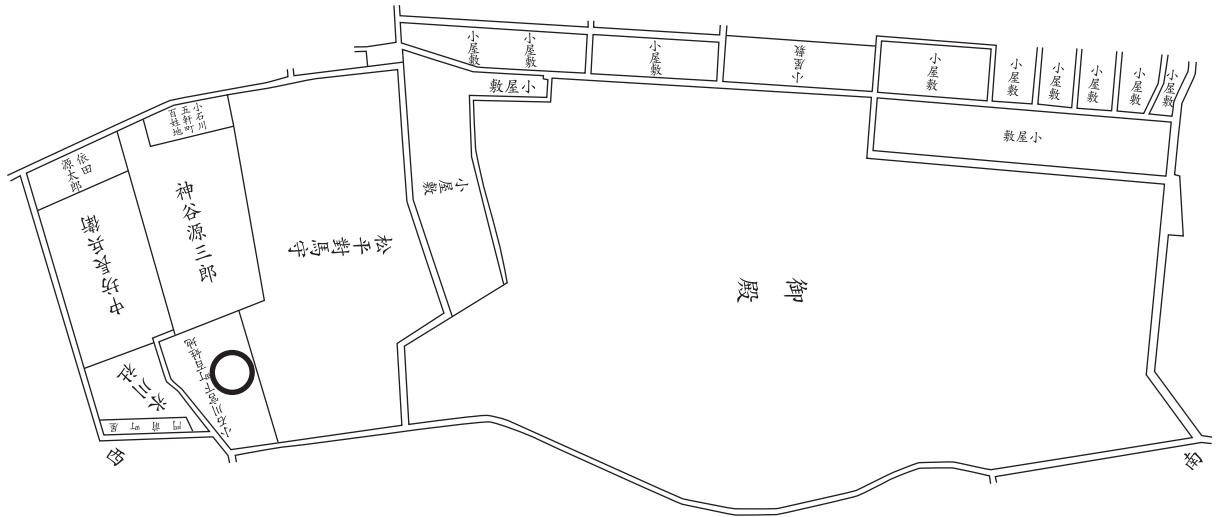
A: 本調査地点 B: 理学系研究科附属植物園研究温室地点 C: 農学生命科学研究科小石川樹木園根圏観察室地点 D: 原町遺跡第Ⅱ地点
 21: 小石川植物園内貝塚・原町 (a～fは貝類等散布地点、gは徳島県職員住宅建設に伴う事前調査) 26-1: 林町第1地点
 26-2: 林町第2地点 46: 白山四丁目 72: 指ヶ谷町 78: 三軒町 81: 小石川御薬園跡 84: 白山御殿跡 88: 一行院跡 89: 大塚窪町
 ※アルファベット大文字は、白山構内での事前調査地点



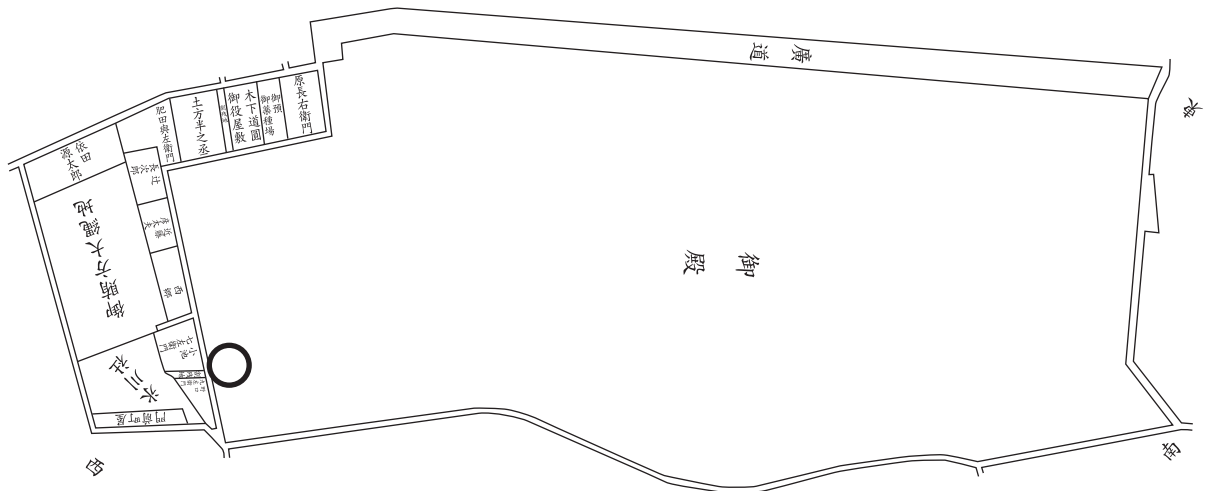
(1) 正保元(1644)年ころ
 (『正保年間江戸絵図』より作成)



(2) 寛文9(1669)年ころ
 (『寛文江戸図』より作成)



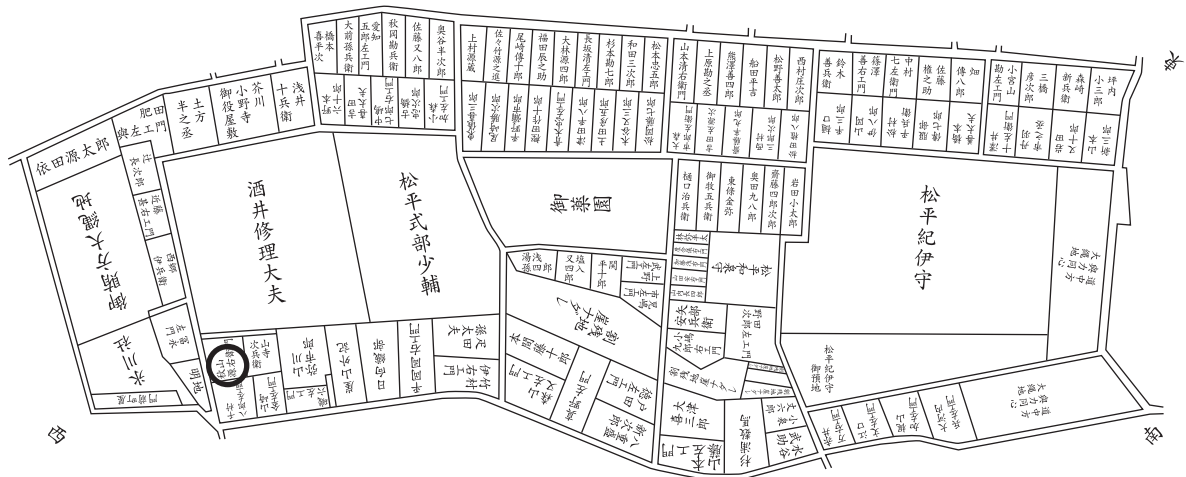
(3) 天和年間(1681~84)
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)



(4) 元禄11(1698)年
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)

I-4 図 調査地点の変遷 (1) (○が調査地点)

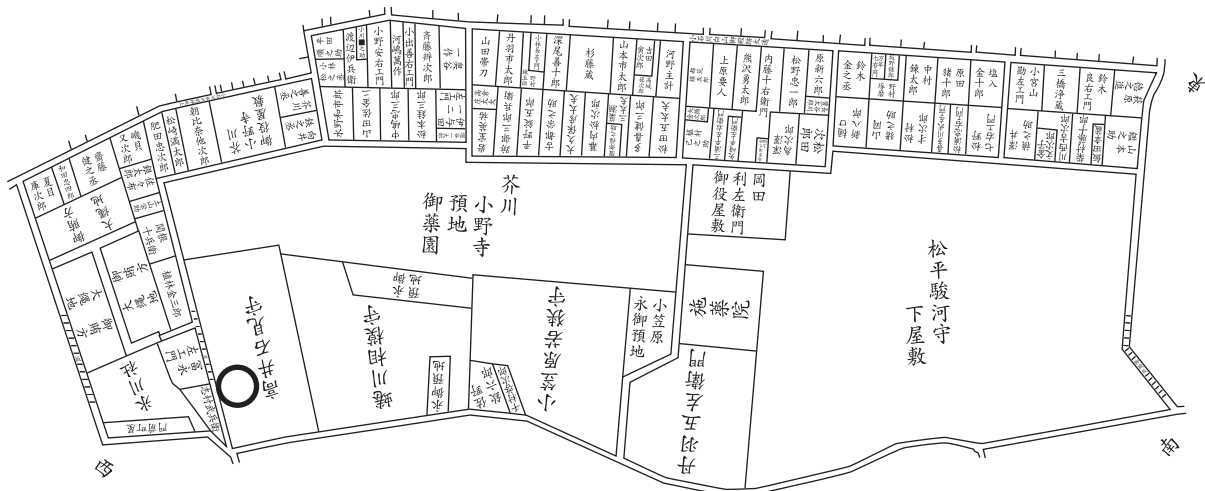
第I章 調査の経緯と概要



(1) 正徳4~6(1714~16)年
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)



(2) 享保7(1722)年
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)



(3) 安政2(1855)年
 (『御府内場末往還其他沿革図書』より作成)

I-5 図 調査地点の変遷 (2) (○が調査地点)

対し、小石川谷に面する南斜面は急崖を呈し、崖下には多くの湧水地が認められる。台頂部付近の標高は約 25m、谷部での標高は約 10m である。調査地点は白山台地南斜面下位に位置している（I-3 図）。

白山構内の遺跡に関する歴史的環境と周辺の遺跡については、理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告において述べているので（東京大学埋蔵文化財調査室 2006）、詳細はそちらを参照されたいが、本地点における検出遺構、出土遺物は全て江戸時代に帰属する資料であることから、該期における本地点周辺の変遷を以下に概観する。

17 世紀前半の土地利用は「正保年間江戸絵図」（正保元（1644）年ころ）から、白山構内の東側は白山社、西側は小石川村の百姓地に比定することができ、西端に位置する本地点は百姓地に該当する（I-4 図（1））。

承応元（1652）年に当時館林藩主だった松平徳松（後の徳川綱吉）が当地を下屋敷として拝領するが、西側区画はしばらく百姓地のままであった。その後武家地への転換が始まり、「寛文江戸図」（寛文 9（1669）年ころ）では、本地点周辺は「トダアワジ（旗本戸田淡路守氏経）」の屋敷地内に比定される（I-4 図（2））。館林藩小石川下屋敷は、綱吉の 5 代將軍襲職を経緯に、天和元～2 年頃に幕府御殿へと転換された。本地点周辺は天和年間には再び、小石川宮下町百姓地となる（I-4 図（3））。元禄 11（1698）年、小石川御殿は西側および北側へ拡張され、本地点周辺も御殿内に取り込まれた（I-4 図（4））。この段階で本構内西側の通称「網干坂」が整備される。

綱吉が没してから 4 年後の正徳 3（1713）年に小石川御殿は廃止され、御殿内の殿舎や多門などの取り壊し、堀の埋め戻しなどが行われた。その跡地は、翌 4 年から大名、幕臣へ下賜され、本地点は正徳 6（1716）年 2 月に下賜された幕臣秋山源右衛門屋敷地付近に該当する（I-5 図（1））。享保 6（1721）年御殿跡地の幕臣屋敷、下屋敷など総坪数 38,481 坪が薬園拡張のため召し上げられ、調査地点周辺は小石川御薬園御花畑御用芥川小野寺元風の預地に含まれることになるが（I-5 図（2））、延享 5（1748）年に薬園地南半部の中央から西部にかけてが武家地に転換され、本地点周辺は高井兵部少輔信房が拝領し、幕末まで踏襲される（I-5 図（3））。

第Ⅱ章 江戸時代の遺構と遺物

第1節 遺構

本地点からは、3枚の生活面が検出された。新しい面から1面とし、以下2面、3面とする。1面は、Ⅱ-2図2層上に該当する。2層の盛土年代は出土遺物より（Ⅱ-4図包含層）19世紀前葉と推定されるが、本生活面に伴う遺構は検出されなかった。2面では本地点のほぼ全域に及ぶSD1が検出された。最下面の3面は灰白色と黄褐色の斑状を呈す粘質土層であり、水性化したローム層と考えられる。Ⅱ-2図SD1断面図の左端部分で36層下の平坦部にあたる。3面からは井戸、ピットなどが検出されたが、2面より掘り込まれたSD1によって大きく削平され、土地利用の詳細は不明である。

第Ⅰ章でも触れたように、江戸時代の本地点は、百姓地→武家地（戸田）→百姓地→白山御殿→武家地（秋山）→御薬園→武家地（高井）の変遷をたどるが、SD1は、後述するように白山御殿拡張後の堀に比定されることから、3面検出遺構は全て白山御殿期以前に帰属する遺構と位置付けられる。

以下、個々の遺構について記載する。

SD1（Ⅱ-1、2図）

本遺構は、本地点ほぼ全域に及ぶ大形溝状遺構で、2面より検出された。調査区内では、溝の西側立ち上がりのみがトレンチ1内で確認できたにすぎず、トレンチ3～2に至るまで遺構覆土が続き、その詳細は不明である。調査区内での規模は幅920cm以上、確認面からの深さ270cm以上を測る。西壁の主軸方位はN-23°-Eで、調査区西側白山構内地境、即ち「網干坂」とほぼ並行である。また、安全を確保しながら可能な限りの覆土掘削を行ったが、確認面下260cm付近で、壁面が粘土層から砂礫層に変化し、地下水が湧出してきたため、溝底を確認することはできなかった。壁面の仰角は約37°を測る。壁面は地山まで掘削した後、化粧掛けと推定される黒褐色土（30層）がほぼ均等の厚さで全面に貼り付けられている。また壁面途中に犬走り状の平坦面が認められる。掘方の壁面は全て粘土質土もしくは水性ロームである。

覆土はロームブロック、粘土ブロック主体層によって東側から埋め戻されている上層（8～16層）と、壁面に沿って堆積している下層（17～26層）とに大別される。特に下層には、砂粒を多量に含み粘性、しまりともに強い水性質の23～26層と、その直上に堆積した有機質が土壌化したと推定される20層（黒褐色土）の様相から、廃絶時には20層上面までが自然的要因によってすでに埋まっていたと推定される。一方、覆土上層には、本遺構の掘方壁面に観られる灰～白色粘土層と同質の粘土ブロックが多量に含まれていること、埋め戻しの方向が東側、即ち敷地内から埋め戻されていることから、溝の掘削による発生土を敷地内で土塁として利用し、屋敷廃絶時にそれを削平して、溝の埋め戻しが行われたことが推定される。

また、溝が完全に埋まった後に、ほぼ水平の整地作業が行われている。

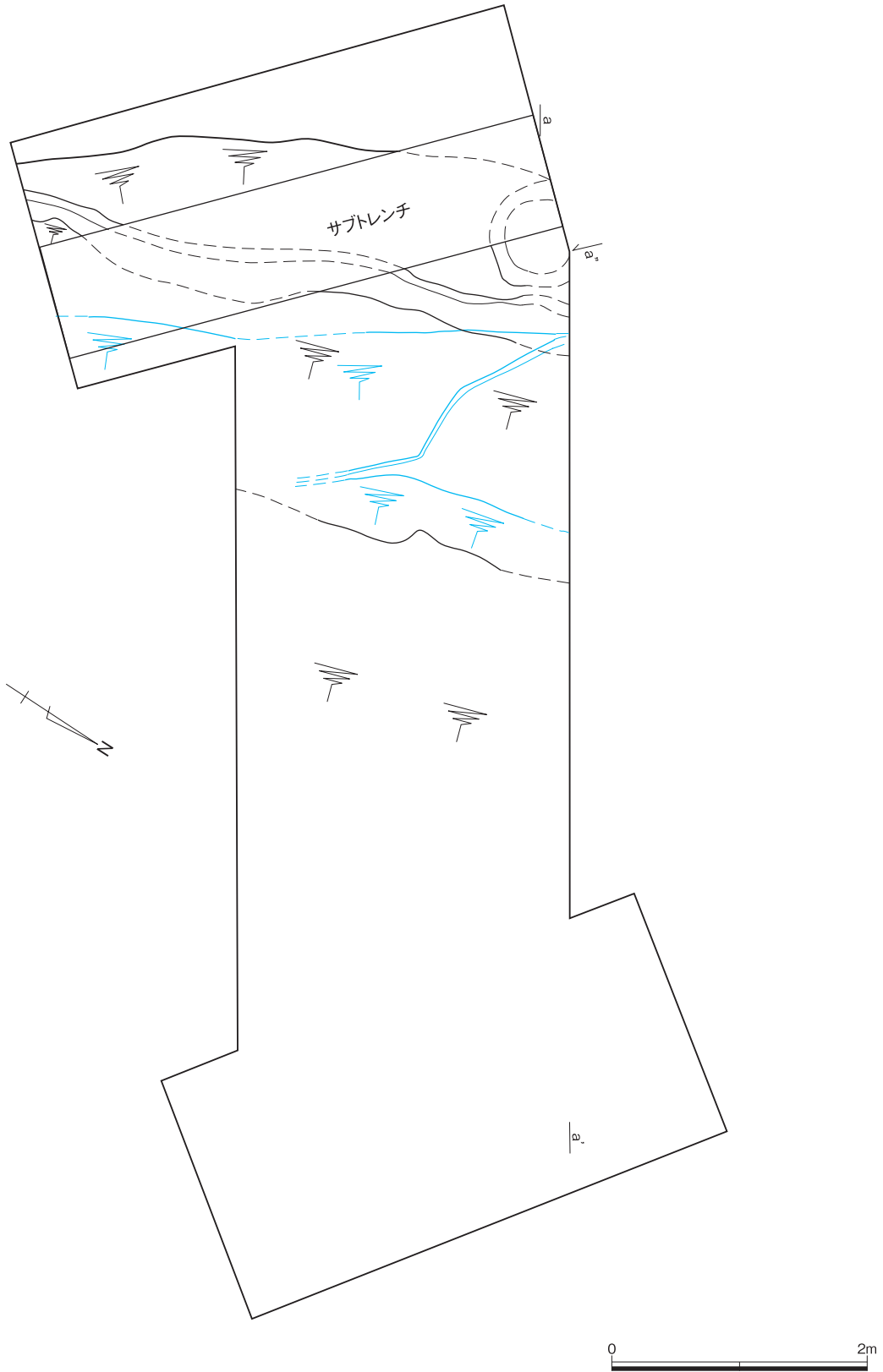
遺物は、17世紀後半～18世紀初頭に位置付けられる陶磁器類が十数点出土したにすぎない。

SE2（Ⅱ-3図）

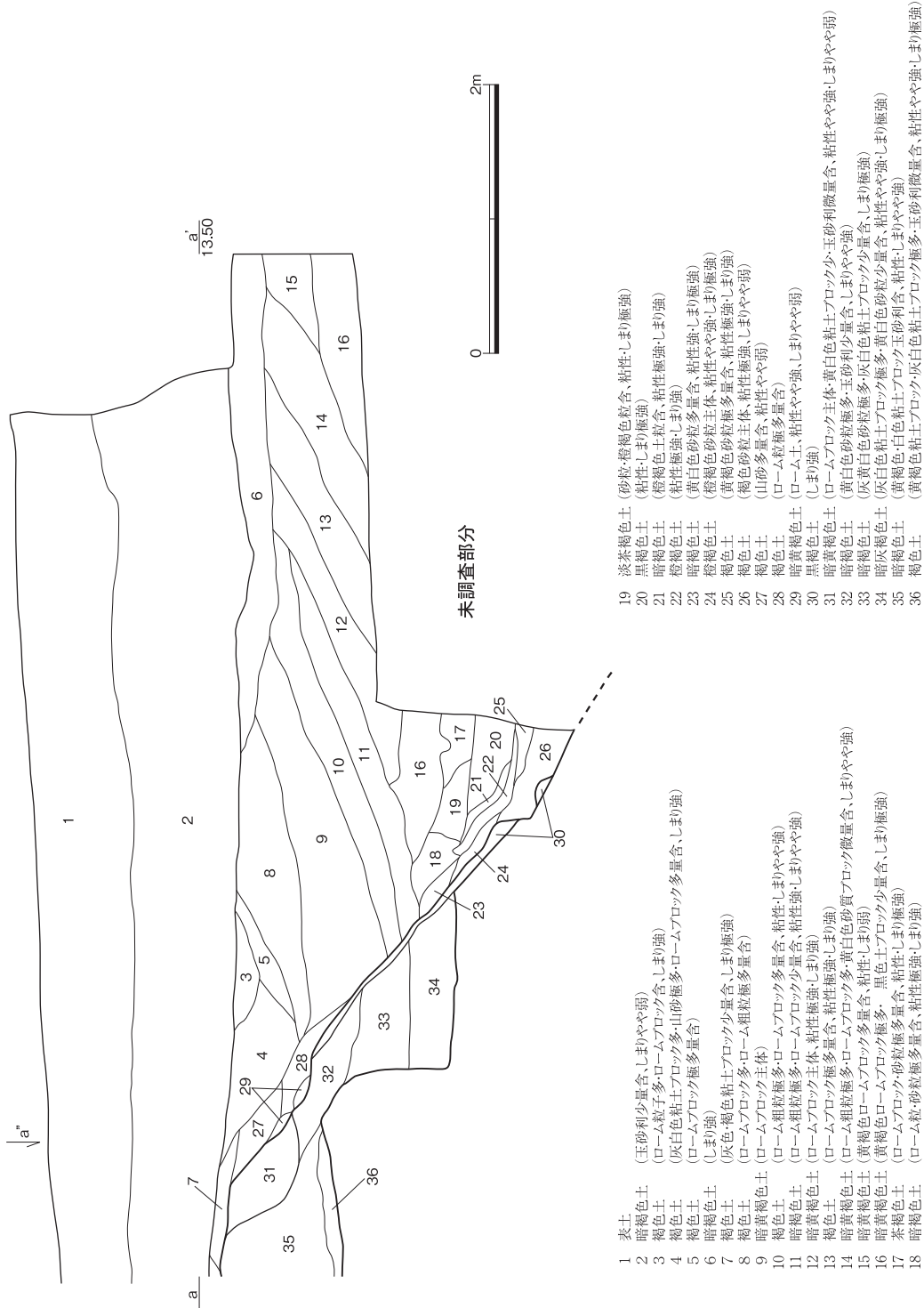
本遺構は、トレンチ1、サブトレンチ内より検出された。SD1の貼り壁によってパックされている

ことより、それより古い段階に位置付けられ、3面に帰属する遺構と考えられる。平面形は不整楕円形を呈し、長軸110cm、短軸(80cm)、確認面からの深さ185cmを測る。壁面は全体的に蛇行しながら立ち上がり、坑底は西寄りに位置する。坑底からは絶え間なく水が滲み出ている状態であった。覆土はほぼ水平堆積を呈し、ロームブロック、砂質粘土などを多量に含む。本遺構の性格は、その様相から井戸の可能性を指摘したい。

遺物はほとんどなく、廃絶年代は不明である。

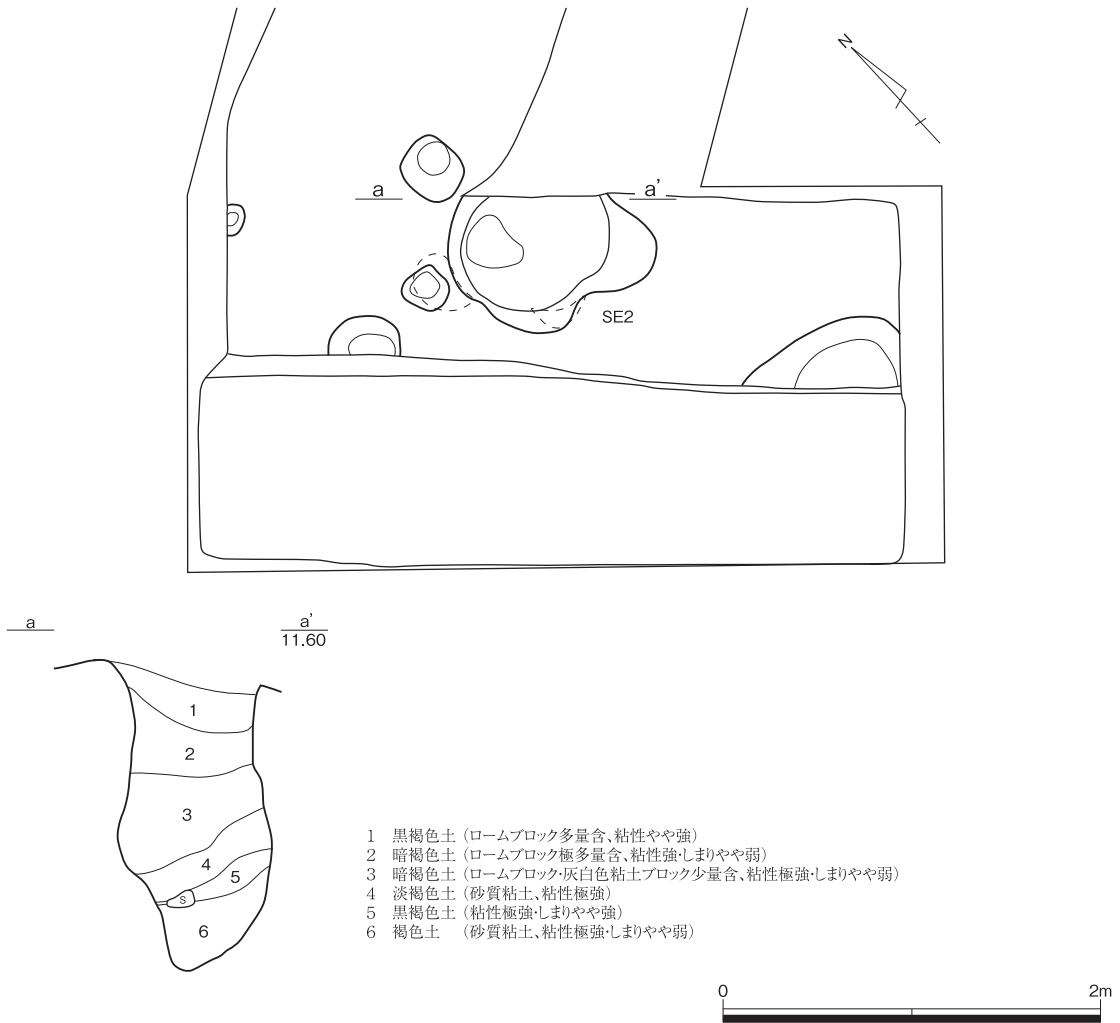


II-1 図 SD1 (1)
(青線は掘方)



- | | | | |
|----------|-----------------------------------|----------|--|
| 1 表土 | (玉砂利少量含、しまりやや弱) | 19 淡茶褐色土 | (砂粒・橙褐色粒含、粘性・しまり極強) |
| 2 暗褐色土 | (ローム粒子多・ロームブロック含、しまり強) | 20 黒褐色土 | (粘性・しまり極強) |
| 3 褐色土 | (灰白色粘土・ローム多・山砂極多・ロームブロック多量含、しまり強) | 21 暗褐色土 | (橙褐色土粒含、粘性極強・しまり強) |
| 4 褐色土 | (ロームブロック極多量含) | 22 暗褐色土 | (粘性極強・しまり強) |
| 5 暗褐色土 | (しまり強) | 23 暗褐色土 | (黄白色砂粒多量含、粘性強・しまり極強) |
| 6 暗褐色土 | (灰色、褐色粘土・ブロック少量含、しまり極強) | 24 暗褐色土 | (橙褐色砂粒主体、粘性やや強・しまり強) |
| 7 暗褐色土 | (ロームブロック多・ローム粗粒極多量含) | 25 褐色土 | (黄褐色砂粒主体、粘性極強・しまり強) |
| 8 暗褐色土 | (ロームブロック主体) | 26 褐色土 | (褐色砂粒主体、粘性極強・しまりやや弱) |
| 9 暗黄褐色土 | (ローム粗粒極多・ロームブロック少量含、粘性・しまりやや強) | 27 褐色土 | (山砂多量含、粘性やや弱) |
| 10 暗褐色土 | (ローム粗粒極多・ロームブロック少量含、粘性強・しまりやや強) | 28 褐色土 | (ローム粗粒極多量含) |
| 11 暗黄褐色土 | (ロームブロック主体、粘性極強・しまり強) | 29 暗黄褐色土 | (ローム土、粘性やや強・しまりやや弱) |
| 12 暗褐色土 | (ローム粗粒極多・ロームブロック少量含、粘性極強・しまり強) | 30 黒褐色土 | (しまり強) |
| 13 暗褐色土 | (ローム粗粒極多・ロームブロック多量含、粘性・しまりやや強) | 31 暗黄褐色土 | (ロームブロック主体・黄白色粘土・ブロック少量、粘性やや強・しまりやや弱) |
| 14 暗黄褐色土 | (黄褐色ロームブロック多量含、粘性・しまり弱) | 32 暗褐色土 | (黄白色砂粒極多・玉砂利少量含、しまり極強) |
| 15 暗黄褐色土 | (黄褐色ロームブロック少量含、粘性・しまり強) | 33 暗褐色土 | (灰黄白色砂粒極多・灰白色粘土・ブロック少量含、しまり極強) |
| 16 暗黄褐色土 | (ロームブロック・砂粒極多量含、粘性・しまり極強) | 34 暗褐色土 | (灰白色粘土・ブロック極多・黄白色砂粒少量含、粘性やや強・しまり極強) |
| 17 茶褐色土 | (ローム粗粒・砂粒極多量含、粘性極強・しまり強) | 35 暗褐色土 | (黄褐色土、白色粘土・ブロック少量、粘性・しまりやや強) |
| 18 暗褐色土 | | 36 褐色土 | (黄褐色粘土・ブロック・灰白色粘土・ブロック極多・玉砂利微量含、粘性やや強・しまり極強) |

II-2 図 SD1 (2)



- 1 黒褐色土 (ロームブロック多量含、粘性やや強)
- 2 暗褐色土 (ロームブロック極多量含、粘性強・しまりやや弱)
- 3 暗褐色土 (ロームブロック・灰白色粘土ブロック少量含、粘性極強・しまりやや弱)
- 4 淡褐色土 (砂質粘土、粘性極強)
- 5 黒褐色土 (粘性極強・しまりやや強)
- 6 褐色土 (砂質粘土、粘性極強・しまりやや弱)

II-3 図 SE2

第2節 遺物

出土遺物の総量は、コンテナ1箱と少なく、大半が1層とした表土、2層とした盛土層、そしてSD1から出土している。

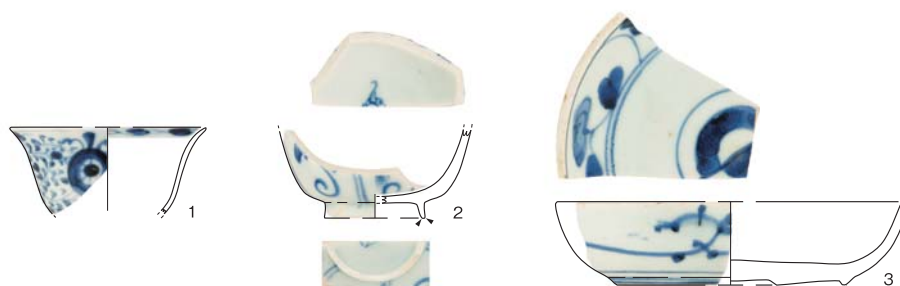
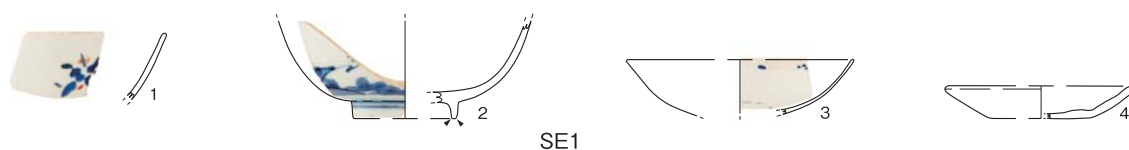
SD1 (II-4図)

前節で述べたように、本遺構の覆土は掘削土の埋め戻しと考えられるローム、粘土主体土で短期間に埋め戻されたと推定されることから、土量に対する出土遺物量は極めて少ない。

1は肥前色絵碗の口縁部片である。文様は黒絵の具で輪郭を描き、その上に青絵の具で枝、葉を塗りつぶしている。また赤絵の具によって蕾が描かれている。その特徴からJB-1-cと考えられる。2は肥前染付碗の底部片で、JB-1-uである。3は肥前色絵小坏で、JB-6である。口縁内側には赤絵の具による帯文が巡り、その中に丸文状の骨書きを施し、青絵の具によって埋められている。また帯文内には金彩が施されているが、ほとんど剥落しており、詳細は不明である。見込みにも骨書きによる丸文が描かれ、青絵の具による列点状の文様が認められるが、剥落が著しく詳細は不明である。4は土師質皿でDZ-2-bである。

包含層 (II-4図)

1～3はトレンチ1の2層から出土した遺物である。2層はSD1埋没後の整地層上の盛土層である。1、2は瀬戸・美濃染付端反碗で、JC-1-dである。1は口縁部片。口縁が強く外反するタイプで、経塚山西窯跡端反碗1A類に該当する(瀬戸市埋蔵文化財センター1993)。文様は外面に草花文、口縁部内側に帯文が巡る。2は底部片。高台はほぼ直立し、高台脇の体部器厚は6mmと厚い。経塚山西窯跡端反碗1B類に該当し、1よりも後出である。3は肥前染付皿で、JB-2-jである。口唇部は平坦に調整されている。見込み文様は中央部に幾何学文、側面に花唐草文が描かれ、その間に無文帯が形成されている。裏文様には唐草文が描かれている。



包含層
II-4図 出土遺物

第Ⅲ章 白山御殿の惣囲いについて

はじめに

第Ⅱ章でも述べたように、本地点からは3枚の生活面が確認されたが、白山台地から小石川谷へ続く斜面上に立地していることに併せ、調査区の大半がSD1に該当しているため、それ以外の土地利用に関してはほとんど手掛かりを得ることができなかった。そこで本章では本地点の主要遺構であるSD1に関し、その形態、規模、覆土の堆積状況などの諸様相を整理し、周辺調査地点での類似遺構との比較、文献、絵図による検討、江戸遺跡にて検出された大形溝、江戸城跡、小田原城跡の近世城郭における堀構造との比較、検討を通して本遺構の構造について考察し、可能な限り景観復元を試みたい。

第1節 SD1と周辺遺構

SD1の様相

SD1は調査区西端部のトレンチ1にて西壁が確認されたものの、それ以東のトレンチ3、2は全てSD1に含まれる大形の溝状遺構である。確認面から壁面に沿って掘り下げ溝底を追ったが、確認面下約260cmで地下水が湧出し始め、また全トレンチにおいてSD1西壁面以外は全てその覆土であることから、それ以上の調査の続行を断念し、溝底を確認することはできなかった。このように西壁面のみが確認された非常に部分的な調査ではあるが、確認できた特徴を以下に列記する(Ⅲ-1図a)。

- ・壁面の勾配は約37°で東側へ傾斜している。
- ・溝上部幅はトレンチ2よりさらに東へ続き、920cm(調査区東西長)以上を測る。壁面勾配が両壁ともに同様であれば、さらに最低200cm以上の幅を有し、最低でも11.2m以上の幅を有すると推定される。
- ・壁面はほぼ平坦に整形されている。
- ・確認面からの深さは260cm以上を測る。
- ・壁面上には厚さ数cmの黒褐色土(Ⅱ-2図30層)がほぼ全面に認められる。この層はしまりが強く、ほぼ均一の厚さで存在していることから、人為的に貼り付けられたと考えられる。
- ・覆土上層(8～16層)は、全体的にロームブロックを主体とした土層で単一方向(東側)から埋め戻されており、層中には粘土ブロックも多く含まれている。その様相から短期間での埋め戻し行為が想定される。
- ・覆土下層(17～26層)は、非常に粘性が強く、水分含有率が高い土層である。不連続堆積や、黒ボク化した部分も認められ、流路として機能していた状況を示している。
- ・出土遺物は少ないが、Ⅱ-4図に示したように18世紀前葉を下限としている。

以上に示したSD1の特徴と共通する遺構事例が本地点周辺より数例報告されており、以下にその検出状況、特徴を列記する。

原町遺跡 整地遺構

本調査地点は植物園の北に位置する（I-3 図 g）。長方形調査区の北側約 1/3 に拡がり、南壁のみが確認された。調査者は当初、埋没谷等の自然地形による落ち込みの整地と考え、その堆積状況の把握のためにサブトレンチを設定し、土層観察を行った。その結果、人為的な削平と結論付けたが、削平後に整地作業を行った「整地遺構」との見解を示すにとどまり、溝としては認識されていない。よって遺構の平面形態を知ることはできないが、断面図および遺構全体図に示された盛土の範囲より以下の特徴が認められる（Ⅲ-1 図 b）。

- ・調査区内において最大幅 970cm 以上を測る。
- ・確認面からの深さは 250cm 以上を測る。
- ・壁面はほぼ平坦に整形されている。
- ・壁面の勾配は 37° を測る。
- ・覆土はロームブロック、ローム粒、炭化物、灰褐色土微粒を含む黄褐色土の単一層（2 層）であり、短期間での埋め戻しが想定される。
- ・壁面直上には厚さ 15～20cm を測る灰褐色土が貼り付けられたように存在する（Ⅲ-1 図 b 網部分）。
- ・本遺構の出土遺物はないが、本遺構覆土中に構築された遺構から 18 世紀中葉の陶磁器類が出土しており、それ以前に埋め戻されたことが確認できる。

白山御殿跡遺跡 1号遺構

本調査地点は植物園の北東に位置する（I-3 図 84）。1号遺構は、ほぼ正方形の調査区の中央を逆 L 字状に伸び、調査区外へ続いている。検出面での幅が約 13m 前後を測る大形遺構のため、残念ながら 5 本のトレンチによる部分調査が行われたのみである。トレンチ調査によって確認された特徴を以下に列記する（Ⅲ-1 図 c、d）。

- ・確認面での溝幅は掲載図面から 13～15m を測る（本文中には 17m 前後と記載されているが、根拠不明）。
- ・確認面からの深さは最大 310cm を測り、全トレンチとも溝底標高は 20.4m とほぼ水平である。
- ・壁面勾配は B トレンチでは北東壁 30°、南西壁 34°、B トレンチの東側で平行する C トレンチでは北東壁 34°、南西壁未調査、D トレンチでは南東壁 37°、北西壁 41°、D トレンチ南側で平行する E トレンチでは北西壁 40°、南東壁未調査という結果となり、両壁ともに調査した B、D トレンチでは、いずれも逆 L 字状プランの内側壁面勾配が外側壁面に比べて高い値を示す。また片壁のみ調査された C、E トレンチの勾配も B、D トレンチの同側壁と近似しており、全体として逆 L 字状プランの内側壁面勾配が高い構造であったことが推定される。
- ・壁面は各トレンチともほぼ平坦に整形されているが、B トレンチ南西壁のみ凹凸が認められる。
- ・覆土は全てのトレンチにおいて、ロームブロック、ローム粒を主体とした黄～暗褐色土層を基本とし、その様相から短期間での埋め戻しが想定される。また各トレンチとも基本的に同一方向から埋め戻されているが、いずれも逆 L 字状プランの内側壁からの行為である。
- ・溝底～壁面直上にかけて 5～10cm とほぼ均一の厚さの堆積層が認められる。堆積状況から人的行為によるものと推定される（Ⅲ-1 図 c、d 網部分）。
- ・B トレンチでは南西壁から溝底にかけて覆土に破碎礫を多く含む礫包含層が認められる。断面図では溝底直上付近を広範囲に拡がっている層位として一括されているが、（Ⅲ-1 図 c 斜線部分）、報告書掲載写真からは、拳大～人頭大程度の破碎礫が南西壁面に集中して流れ込んでいる様子が看取される。

・1号遺構は18世紀代の遺構に切られている。本遺構出土遺物は非常に少ないが、報告書掲載遺物からは18世紀前葉が下限と考えられる。

SD1 と周辺大形溝状遺構の共通点

以上、本地点SD1と周辺遺跡（調査地点）で検出された大形溝状遺構の特徴を抽出した。その結果、以下の共通点を見いだすことができる。

- ・遺構規模（溝幅）はいずれも9mを超え、両壁が検出された白山御殿跡遺跡1号遺構では13mに及ぶ。
- ・確認面からの深さは250cm以上を測り、溝底が確認された白山御殿跡遺跡1号遺構では最大310cmを測る。
- ・壁面は平坦に整形され、勾配は30～40°を測る。
- ・溝底又は壁面直上には粘土の存在が確認される。
- ・遺構廃絶後、一方向から埋め戻されている。その覆土は全体を通し、ローム土を主体とする類似土層が用いられていることから、短期間の行為が想定される。
- ・18世紀代の遺構に切れ、少ないながら出土遺物の年代観が18世紀前葉を下限としている。

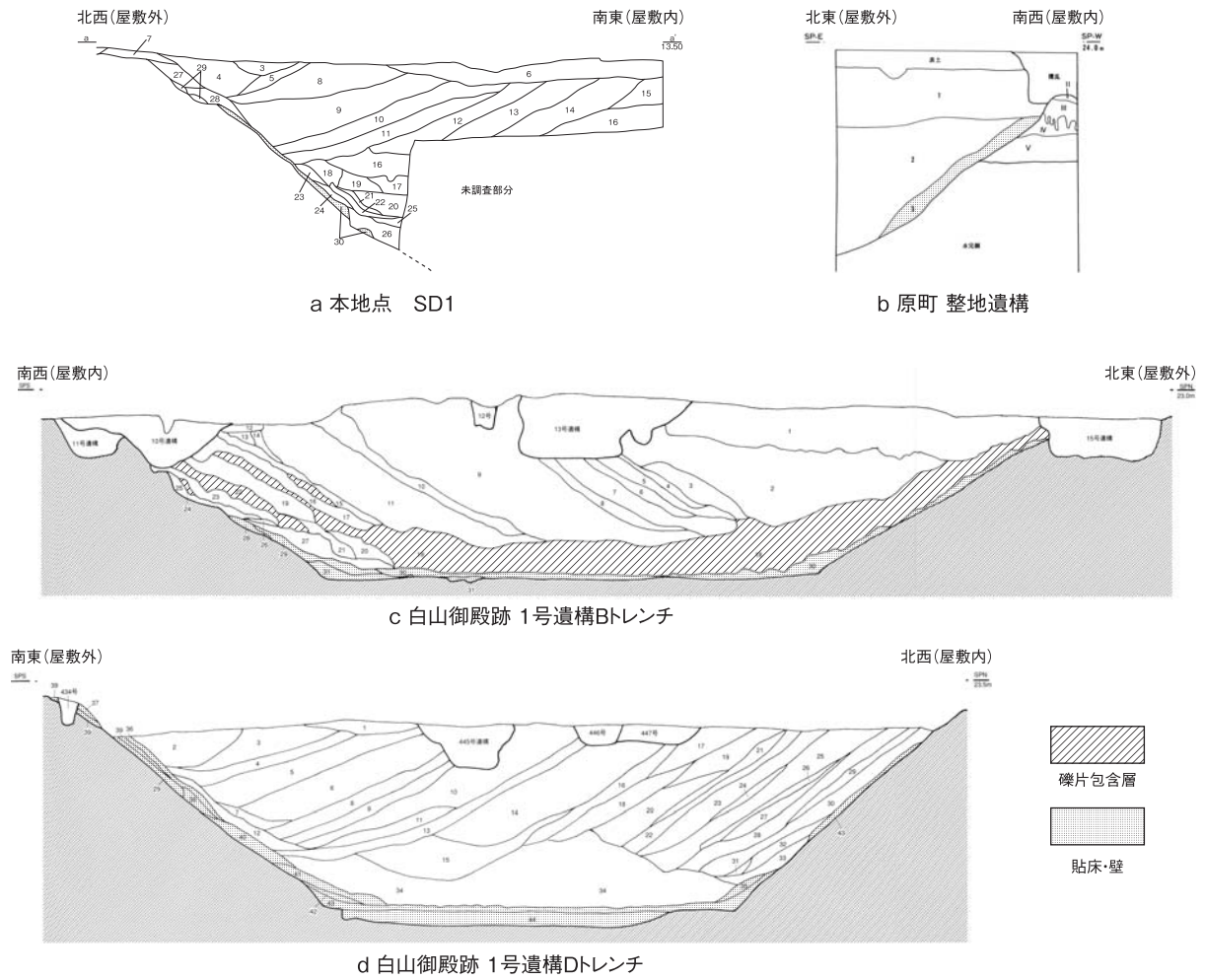
このように形態、規模、覆土の様相、廃絶年代と多くの共通点があることに加え、垣間見られる遺構規模から、これらの遺構は白山御殿跡遺跡の報告書でも推定されているように同一遺構と判断される。

第2節 文献・絵図からみたSD1

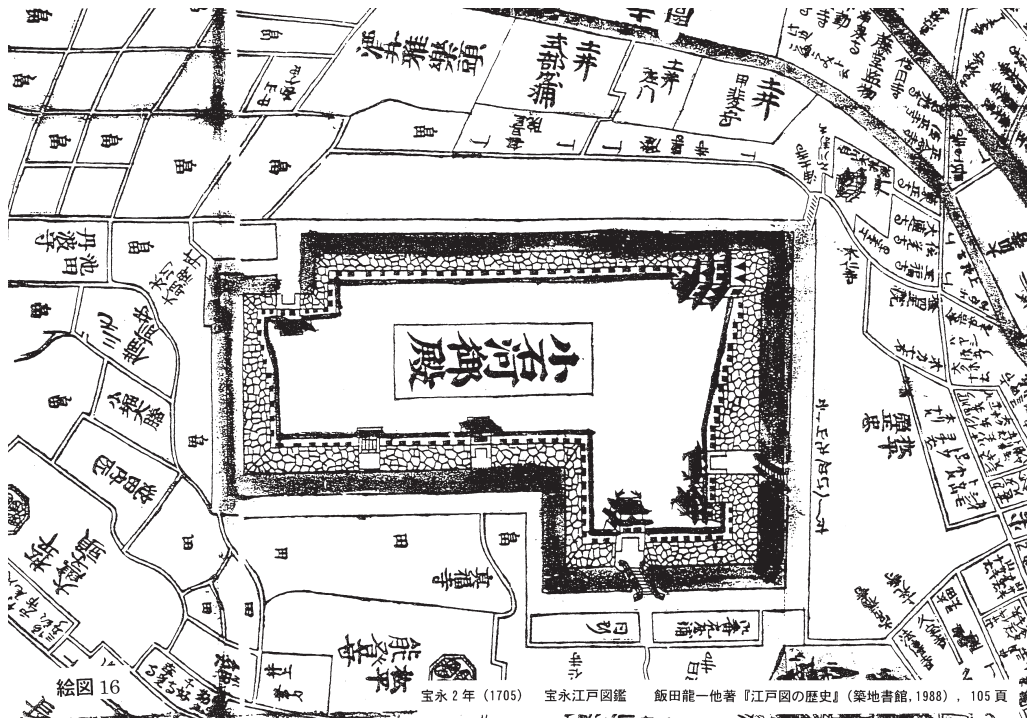
文献、絵図にみる白山御殿

第I章第3節にて本調査地点を含む白山構内区域の歴史的環境を概説したが、その土地利用変遷に18世紀前葉を下限とするSD1を当てはめると、『御府内場末往還沿革図書』（以下、沿革図書）ではI-4図（4）に該当し、白山御殿の西端域に比定されることが分かる。同様に原町遺跡は、御殿北端「廣道」と書かれた東西に伸びる道のほぼ中央部南側に、白山御殿跡遺跡は、御殿北東角に比定され、いずれも白山御殿の屋敷地境に該当する。

ここで、今一度白山御殿に関する記述を整理したい。白山御殿は延宝8（1680）年館林藩主松平綱吉の5代将軍襲職を契機に天和元～2年頃成立したとされる。その時点での御殿範囲は沿革図書I-4図（3）に示したように、旧小石川下屋敷地の南東部に該当する。その後の元禄11（1698）年白山御殿は西側および北側が拡張され沿革図書I-4図（4）に変化する。この時点ではじめて本地点は御殿内に取り込まれる⁽¹⁾。御殿の様子は『御府内備考』によると「（前略）近藤氏随筆に云、白山御殿はもと館林の御屋敷なりしを、常憲院様御治世の頃白山御殿を被為置、御矢倉大手御門番寄合衆五七千石のものかわるかわる大手御門番を相勤め、惣堀へは多摩川の水をかけられ、堀幅八十間程四方あり、坂の内五段の瀧ありて、石垣より落るありさまは絶景也、大手は極楽水町の出はなれなり、御堀の端には桜の大木ありて、春は花盛り也、氷川明神の邊迄のこらず白壁の屏惣堀にて、内には御殿数多あり（後略）」と記されており、幅約十間の堀が巡り、その堀には多摩川（千川上水のことか）から水を引き、坂道と並行する部分には石垣による5段の滝が作られ、堀の上には白壁造りの堀が巡っていることが分かる。また『常憲院贈大相国公実記』元禄11年2月27日条には「廿七日小石川御殿ニ石壁・屏・土手等ヲ修築アリテ、阿波国主松平阿波守綱矩人夫ヲ出ス」、『改正甘露叢』元禄11年5月16日条には「十六日、小石川御殿御堀・土居・角櫓・多門等御普請出来御褒美（後略）」と記載されており（渋谷2006）、元禄11年の拡張事業で石垣、堀、土居、塀、櫓、多門が整備されたこと



Ⅲ-1 図 本地点および周辺遺跡から検出された大形溝断面 (1/100)



Ⅲ-2 図 「宝永江戸図鑑」にみられる小石川御殿 (部分/宝永2年)

が分かり、『御府内備考』に記載された堀、塀、石垣と矛盾しない。

Ⅲ-2 図「宝永江戸図鑑」(宝永2年)は、白山御殿を示した切絵図のうち、元禄11年の拡張事業以降の様子を描いた1枚である。周囲の表現と明らかに区別されて、御殿部分のみ迫力ある表記で描かれている。御殿西側に氷川大明神が隣接して描かれていることから、拡張事業後の描写であることが確認される。

御殿周囲には堀と、その内側には石垣が巡らされている。石垣には北東角に3層の角櫓と、東側の「御殿坂」に面して1箇所、小石川谷方面に面して3箇所、北東角付近に1箇所、門が描かれているが、渋谷の指摘にもあるように、東側の門は枳形構えで、高麗門を抜けた左側に櫓門があり、南側東寄りの門は2層となっている。それらの門の手前には堀に橋が架かっており、堀幅の広さを物語っている。また東西両坂道に沿った石垣は北から南に向けて段数が増しており、傾斜地に対し平坦面を構築した様子と見て取れる。石垣上には白壁の塀が巡っているが、窓と思われる方形の塗りつぶし箇所が並んでいることから多門を描いたものと考えられる。また門が石垣を切っていることから、石垣は本来の生活面よりも高く築かれていたことが読み取れる。

この堀への導水を目的の一つとして開削された千川上水に関しては「一、千川上水 元禄九子年初て小石川御殿、湯島聖堂、東叡山、浅草御殿への上水なり、多摩郡保谷村より玉川上水を引、巢鴨村迄五里五拾四町堀割、巢鴨庚申塚通り本郷湯島浅草へ懸る、(中略)享保七寅年十月止之、江府へは不掛村々田用水に成、又安永九子年より江戸へ掛る、本郷、湯島、下谷、浅草の辺一円に懸り、天明六年十一月また止みて田場用水のみになりたり、」と『上水在絶記』(『御府内備考』所収)に書かれており、拡張事業後の堀にも水が湛えられていたことが分かる。

白山御殿と大形溝状遺構

さて、文献資料の記述を踏まえてあらためてSD1をはじめとする各調査地点の大形溝状遺構をみると、両側壁が確認された白山御殿跡遺跡1号遺構の溝幅は図面上からは最大幅15mであるが、文章中の17mを適用すると、9.4間(1間=180cm)となり、文献上の10間とほぼ一致し、18世紀前葉に廃絶時期を設定した年代的根拠とともに本遺構が白山御殿の惣堀であることは間違いない。Ⅲ-3 図は溝幅を1号遺構に合わせ、遺構検出位置を基準にI-4 図(4)で使用した元禄11年段階の沿革図書との位置関係を復元した図である。惣堀は現況の路地よりも5~10間ほど内側を巡っていることが分かる。

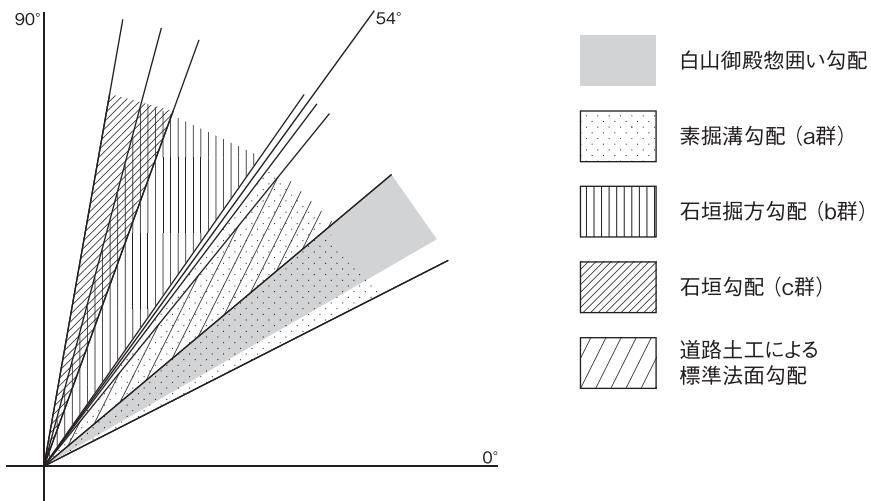
埋め戻された覆土についてみると、Ⅲ-3 図に▲でその方向を示したが、全ての調査箇所ともに御殿内部からの埋め戻し行為によるものである。その状況から堀を埋め戻す土砂は、屋敷内の土を利用したものと考えられる。この行為には当然大量の土が必要とされるが、何度も繰り返すように利用された土砂は部分的に粘土ブロックを混入するローム土を主体とする特徴を持っていることから、地表面を広く削って集められたものではなく、局地的に掘り出された土であることは間違いない。さらに埋め戻し後、即ち御殿が廃止された正徳3(1713)年から4年後の正徳6年には武家地として大名、幕臣への下賜が完了しており、その状況はI-5 図(1)に示したように非常に細かく分割されている。元禄11年の拡張事業に関する文献にも記載されていたように、御殿周囲には土塁が巡らされていたことを考え合わせると、狭小な屋敷地として下賜するためには土塁も全て撤去する必要がある。このように調査所見と文献、絵画資料からの情報を合わせると、本遺構の埋め戻しは、堀の内側に巡らされた土塁の撤去による発生土によって行われたと考えるのが妥当である。また前後するが埋め戻し土の様相から土塁構築に際しても、堀の掘削土がそのまま利用されたものと考えられる。

Ⅲ-1 図に斜線で示した礫片包含層は、図示した白山御殿跡1号遺構Bトレンチのほか、Eトレン



Ⅲ-3 図 白山御殿堀範囲推定図 (1/5000)

A: 本調査地点、B: 原町遺跡、C: 白山御殿跡遺跡 (▶は断面図位置と、覆土の流入方向を示す)



Ⅲ-4 図 大形溝・堀の法面勾配

チ内側壁面付近からも確認されている。Bトレンチにおける包含層は溝底から壁面全体にわたっているが、報告書の掲載写真を見る限り、その密度は内壁側面で圧倒的に高く、報告書本文中に詳細な記載はなかったものの、大量の破碎礫が壁面に沿って流れ込んでいる様相が看取される。礫包含層が溝底、内側壁面に接近していることは、埋め戻しの早い段階で投棄された土砂に該当し、供給元である土塁の表面に近い層と位置付けることができる。即ち、築石こそ確認されなかったが、上述した様相から、石垣構築に裏込めとして詰め込まれた破碎礫が、土塁、石垣の解体に伴い溝内に廃棄されたものと推定される。これを整理すると、屋敷廃絶決定に伴い、屋敷内建物、門、塀などが取り壊される。石垣を解体する。石垣解体に伴い裏込めが堀に廃棄される。外された築石は別所での再利用のため搬出されたのであろう。石垣、多門などの施設が全て解体された後、土塁の解体が始まり、残土は堀の埋立土として利用され、解体と埋立作業が同時に行われたと考えられる。

第3節 法面勾配からみた壁面構造

白山御殿惣囲いの壁面勾配は先述したように外側壁面で30～37°、内側壁面で34～41°を測り、内外両壁面ともに30°台の勾配を想定して普請されたことが理解される。遺構規模に対して資料数が少なく結論づけるのは早急であるが、この様相を踏まえ、白山御殿惣囲いの構造復元を行うために、江戸遺跡内を中心とした他事例との比較を通して壁面形態と勾配の関係を考えたい。比較にあたっては、上部幅5m以上の地境溝が検出された紀尾井町遺跡、染井遺跡と、城郭遺構として江戸城跡、小田原城跡の堀を対象とした(Ⅲ-1表)。

紀尾井町遺跡

SD34は調査区中央部を東西方向に伸びる溝状遺構で、東西端部とも調査区外に伸びるため全長は不明。報告では出羽上山藩土岐家と近江横須賀藩本多家との地境施設として位置付けている。本遺構は西に向けて「羽子板状」に溝幅が広がる平面形を呈し、調査区西端部では上部幅15m、溝底幅10.2m、深さ4mを測る。壁面勾配は南壁53°、北壁75°と北壁の勾配が急である。急勾配の北壁際には間知石による石組と杭列からなるSN38が付随している。石組部分は一段が残存しているが、その状況から上部が抜かれた痕跡が認められ、本来は溝上部まで続く石垣を形成していた可能性が高い。

染井遺跡 — 三菱重工業染井アパート地区 —

2、3、4、151、519、606号遺構の6基が検出された。

2号遺構は調査区の北東から南西へ縦断する溝状遺構で、断面形は箱葉研形を呈する。規模は上部幅6m、溝底幅2.8m、確認面からの深さ2mを測る。壁面は多少のうねりがみられるもののほぼ平坦に整形され、勾配は平均53°を測る。また北西壁面には3.8～7mの間隔でピットが配されている。

3号遺構は、調査区の北東から南西へ縦断する溝状遺構で、三段階の変遷が確認され、各段階において規模、形態、付帯施設の有無に変化が認められた。最も古い構築当初では、上部幅7.8m、溝底幅6.4m、確認面からの深さ0.5mを測る断面箱葉研形の溝で、壁面、溝底ともにほぼ平坦に整形されている。壁面勾配は北西壁が約43°、南東壁が27°を測る。また、調査区南西端部で直角方向に4号遺構と合流する。

151号遺構は調査区の北東から南西へ縦断する溝状遺構で、断面形は箱葉研形を呈する。規模は上部幅7.4m、溝底幅2.9m、確認面からの深さ2.4mを測る。南東側溝底には幅70cm、比高差約10cmの段差を有するテラス状施設が確認されている。壁面は朝顔状で緩やかに外反して立ち上がるが、ほぼ平坦に整形されている。勾配は北西壁が52°、南東壁が45°を測る。本遺構は出土遺物(瓦)が2

号遺構と接合関係にあり、ほぼ同時期に廃絶されたことが窺われるとともに、南西方向の延長線上で519、606号遺構と接続する可能性が指摘されている。

519号遺構は北西から南東方向に伸びる溝状遺構で、断面形は箱薬研形を呈する。規模は上部幅約7m、溝底幅3.4m、確認面からの深さ2.3mを測る。南西側溝底には幅約1m、比高差約10cmの段差を有するテラス状施設が確認されている。壁面は朝顔状に緩やかに外反して立ち上がり、勾配は平均50°を測る。

606号遺構は調査区の北北西から南南東方向へ縦断する溝状遺構で、断面形は箱薬研形を呈する。規模は上部幅6m、溝底幅2m、確認面からの深さ1.6mを測る。壁面は朝顔状に緩やかに外反して立ち上がり、勾配は約50°を測る。

巢鴨遺跡 — 中野組ビル地区 —

1号遺構は調査区の北東から南西方向へ伸びる溝状遺構で、断面形は箱薬研形を呈する。規模は上部幅5.5m、溝底幅2m、確認面からの深さ2.1mを測る。壁は朝顔状に緩やかに外反して立ち上がり、表面には掘削時の工具痕が認められる。壁面勾配は平均52°を測る。

江戸城跡 — 半蔵壕鉢巻石垣 —

江戸城半蔵壕は、「水面に接した水敲きの裾石垣の上に芝土手を構築し、さらにその上に鉢巻石垣と呼ばれる高さ4mの低層な石垣を構築している。」と報告されているように、土手上に構築された石垣である。石垣は65～76°で弓形に立ち上がり上段に向かって急勾配になる。本調査は石垣解体修復工事に伴うもので、鉢巻石垣下の土手部分の勾配、石垣裏込めと掘方の関係についてなどを知ることはできなかった。

江戸城外堀跡 — 牛込御門外橋詰 —

本地点は江戸城外堀に架かる牛込御門外の橋詰土手の法面に築かれた石垣である。石垣の高さは調査区内で6.8～9.5mで、石垣表面の法面勾配は70°を測る。この石垣を法面としている土手は版築によって構築されており、掘方は存在しない。

江戸城外堀跡 — 市谷御門内橋詰・御堀端 —

1号石垣は市ヶ谷土橋西側法面に構築された石垣で、調査区はその北端部に位置する。調査区内における石垣の高さは5.3m、勾配は70°を測る。石垣背面は構築時の盛土層による上層と地山の下層に大別され、地山掘方の勾配は71°を測り、石垣勾配とほぼ一致する。

3～5号トレンチは現在の新見附壕の御堀端土手部分にあたる。寛永13年の外堀普請時の盛土整地と想定されるローム・砂礫で構成された硬質整地層表面の法面勾配は27～40°を測る。

江戸城外堀跡 — 喰違土橋 —

本地点は喰違土橋の北側法面の調査である。旧地形は平坦な台地上に位置し、地山を2段の階段状に掘削して構築され、階段状に垂直掘削された部分を除くと中心部分は基本的に約45°の斜度を形成している。その直上に2期に分けて版築層による法面が構築された。具体的な時間差については不明であるが、2期の版築層間に腐植土とみられる黒色土層が確認されていることから、一定の期間があったことが推定される。版築層下層の平均勾配は約41°、上層の平均勾配は約38°を測る。

丸の内一丁目遺跡 — 第1次調査 —

本遺跡では江戸城外堀内側の石垣が検出された。石垣上部は近代以降の攪乱を受けており、部分的に根石を含む最大4段が残存していた。石垣は基礎を設置するために地山を根切した溝状の掘方を有しており、掘方断面は上方に向かいやや傾斜角が緩やかになる朝顔状を呈している。溝底には土台木が敷設されており、小面側から石尻に向けて緩やかな傾斜が認められるが、断面図を観る限り溝底に

凹凸はない。石垣法面勾配は75～80°、根切りによる掘方法面勾配は65～67°を測る。

丸の内一丁目遺跡 — 第2次調査 —

本地点は第1次調査区の北側に隣接し、それに続く江戸城外堀内側の石垣（01号遺構）が検出された。01号遺構は03号遺構（堀）などの上部に盛土をして構築されている。石垣は近代以降の攪乱のため最大4段が残存しており、石垣勾配は75°を測る。1次調査と同様に幅約3.5～4mの溝状の根切りを行っており、石尻側の法面勾配は60°を測る。断面図を観る限り溝底はほぼ平坦である。01号遺構背後からは同遺構構築以前の堀遺構03号遺構が検出された。

01号遺構に先行する03号遺構は壁面に犬走り状の平坦面を有する堀である。犬走り部分を省いた法面勾配は21°を測り、極めて緩やかな傾斜角である。

江戸城外堀跡 — 文部科学省構内遺跡Ⅱ —

本遺跡は、台地縁辺に位置し、縁辺の傾斜面を利用して江戸城外堀石垣は構築されている。外堀石垣勾配は70°前後。掘方は石垣保存を前提とした調査のため詳細は不明であるが、端部における断面観察では約55°を測る。

小田原城二の丸中堀 — 第8次調査 —

本調査は小田原城跡の二の丸中堀における史跡整備事業の一環として実施された。中堀東壁の石垣復原工事に伴う第8次調査では、中堀東側で逆L字形を呈する馬屋曲輪北西部にあたる西側石垣、北側石垣が対象とされた。そのうち西側石垣の石垣勾配は70°、掘方法面勾配は69°を測る。掘方は根石部分で幅約3.5mの溝状に掘削され、根石直下には土台木が1本敷設されている。溝底は小面方向に向かってやや傾斜しているが、断面図を観る限りほぼ平坦である。掘方法面は緩やかな凹凸を持って立ち上がっている。

小田原城三の丸南堀

三の丸南堀は水敲きに石垣を配するいわゆる腰巻石垣である。第Ⅴ地点では、石垣、堀北側法面、土塁を連続して検出した。石垣は堀底からほぼ垂直に立ち上がり4段が確認された。法面は約35°の勾配で立ち上がり、それに続く土塁は約40°の勾配をもつ。なお本地点においては先行する遺構によって、法面から地山は検出されなかった。

第Ⅵ地点では、石垣、堀北側法面、土塁基部を連続して検出した。法面は地山を掘り込んで構築されて、細かい段を持ちながら立ち上がり、法面勾配は約50°を測る。また中位には犬走り状の緩斜面による一段が設けられている。石垣は堀法面に2～3段検出された。いわゆる腰巻石垣である。石垣勾配は78°を測る。石垣背面の掘方勾配については未調査のため詳細は不明であるが、石垣前面から背面にかけて平坦部が作出されており、また本地点に続く第Ⅱ地点との関連から想定して背面の掘方勾配は、石垣法面勾配に相当することが推定される。

小田原城三の丸東堀 — 第Ⅳ地点 —

三の丸東堀は堀の両側上部に石垣を築く、いわゆる鉢巻石垣の形状を呈しており、第Ⅳ地点の調査では、三の丸東堀の東西両端を形成する石垣（西：1号石垣、東：2号石垣）が検出され、幅約18mの規模を持つ堀の形状が明らかになった。1号石垣手前には幅約4mの犬走りがあり、犬走りの東端を肩に堀底へ落ち込んでいる。堀の法面はほぼ直線状に傾斜し、勾配は20～25°と非常に緩やかである。堀の深さは1号石垣天端より3.9mを測り、両法面には法面崩壊防止用のしがらみが設けられている。西岸の1号石垣は3段の石積みにより構築され、石垣勾配は79°を測る。また背面の掘方勾配は59°を測る。石垣下には並行する2本の土台木が設置され、接続部分にはほぞ穴に杭が打たれ固定されている。

遺跡名	地点・遺構名	最大幅	溝底幅	最大深度	勾配(大)	勾配(小)	覆土の流入方向	付帯施設	備考
紀尾井町	SD35	15	10.2	4	75(石垣背面)	53	版築	柱穴、石組	急勾配側の壁前面に石組配列。
染井遺跡・三菱重工染井アパート地区	2号遺構	6	2.8	2	平均53		交互	柱穴	
染井遺跡・三菱重工染井アパート地区	3号遺構	7.8	6.4	0.5	43	27	レンズ状		
染井遺跡・三菱重工染井アパート地区	151号遺構	7.4	2.9	2.4	52	45	レンズ状		
染井遺跡・三菱重工染井アパート地区	519号遺構	7	3.4	2.3	平均49		偏りのあるレンズ状		
染井遺跡・三菱重工染井アパート地区	606号遺構	6	2	1.6	50		ほぼ水平		
染井遺跡・三菱重工染井アパート地区	1号遺構	5.5	2	2.1	平均52		レンズ状		
巢鴨遺跡・中野組ビル地区					65～76			石垣裏込めとの境？	
江戸城跡・半蔵塚斜巻石垣					70(石垣)			裏は盛土	
牛込御門外橋詰					70(石垣) 71(掘方)			市ヶ谷土橋西側法面	
市ヶ谷御門外橋詰・御堀端	1号石垣							土手法面(寛永13年修築時)	
市ヶ谷御門外橋詰・御堀端	3号トレンチ				35			土手法面(寛永13年修築時)	
市ヶ谷御門外橋詰・御堀端	4号トレンチ				33			土手法面(寛永13年修築時)	
市ヶ谷御門外橋詰・御堀端	6号トレンチ				40			土手法面(寛永13年修築時)	
市ヶ谷御門外橋詰・御堀端	7号トレンチ				27			土手法面(寛永13年修築時)	
市ヶ谷御門外橋詰・御堀端	8号トレンチ				27			土手法面(寛永13年修築時)	
赤坂御門・喰違土橋	喰違土橋法面				45(掘方)			階段状掘方を制して構築。	
丸の内一丁目遺跡	江戸城外堀				80(石垣)	65～67(根切掘方)		上部で開く(くの字状を呈す)。緩やかな凹凸有り。	
丸の内一丁目遺跡II	江戸城外堀(01号遺構)				75(石垣)	60～65(根切掘方)			
丸の内一丁目遺跡II	江戸城外堀(03号遺構)				17～21			寛永13年以前の堀。犬走りを含む継壇状壁面。	
文部科学省省内遺跡	江戸城外堀A地点石垣				68(石垣)	約55(掘方)			
文部科学省省内遺跡	江戸城外堀C地点石垣				75(石垣)				
小田原城・二の丸中堀	中堀東壁				70(石垣) 69(掘方)				
小田原城・三の丸南堀	第V地点			4.6	35(法面)			腰巻石垣・背後に土塁(勾配40°)	
小田原城・三の丸南堀	第VI地点	18		3.8	78(石垣)、50(法面)			腰巻石垣	
小田原城・三の丸東堀	第IV地点	18	3	3.9	79(1号石垣) 20～25(法面)	59		鉢巻石垣	

III-1 表 最大幅5m以上の地境溝・堀一覧表

以上の事例における壁面形態を整理すると、上部幅5m以上を測る溝・堀の壁面は、染井遺跡例、巢鴨遺跡例、紀尾井町遺跡 SD34 南壁、江戸城外堀御堀端土手法面、土橋法面、小田原城三の丸堀法面の素掘面と、紀尾井町遺跡 SD34 北壁、江戸城外堀事例、小田原城事例の石垣面に大別される。さらに石垣面を石垣表面とその掘方に分け、壁面形態による傾斜角の分布をグラフ化したのがⅢ-4 図である。

その結果、素掘面の勾配は 27～53°、石垣掘方面の勾配は 55～75°、石垣表面の勾配は 65～80°に分布域が認められ、各々を a 群、b 群、c 群とする。

b 群の上方域と c 群の下方域は重複し、石垣を構築する際に、その勾配を想定して掘方が掘削された結果の現れと理解できる。一方、a 群は b、c 群ともに分布域が重ならず、その下方域に分布する。近接する b 群との境界域は 54° 前後に認められ、50° 半ばを境に素掘及び石垣構造を想定した法面掘削の勾配基準値が想定されていたことが推定される。

現在、日本道路協会が定めた『道路土工 — のり面工・斜面安定工指針 —』による標準法面勾配は、粘性土⁽²⁾、切土高 10m 以下の場合、高さ：引きの法面勾配は、1：0.8～1：1.2 で、51° 20′ 25″～39° 48′ 20″ が基準内とされ、a 群の上方域に該当する。すなわち、a 群は現在の素掘による法面の安全基準に則した勾配として位置付けられる。

次に地山掘削によって構築された法面という点で、a、b 群の構造について比較したい。石垣(石積)構築を前提として掘削された b 群では、根石を保持するための胴木(土台木)が設置されているが、接続部分には材を固定するために杭が打ち込まれ、掘方には杭痕が存在するという特徴がある。また丸の内一丁目、小田原城二の丸中堀など根石を設置するために溝状の掘り込みを伴う場合も認められる。それに対し a 群では、壁際の杭痕や溝状の施設は認められず、また壁際にも築石が抜き取られたことを示す、裏込め石や構築時の版築といった痕跡など、b 群に認められるような石垣構築に関連する特徴、痕跡がない。このような形態的特徴からも a 群の傾斜角を有する法面は、石垣などの付帯施設を持たない素掘壁面であると判断することができる。

第 4 節 白山御殿惣囲いの構造

素掘と石垣(石積)を伴う溝・堀では、法面勾配や形態に差が認められ、仮に築石、裏込め石が抜き取られていても、その特徴から判断できることが確認された。この結果を踏まえて白山御殿惣囲いの構造について考えたい。

白山御殿惣囲いの各調査地点での壁面勾配は、最小値が外側壁面勾配の 30°、最大値が内側壁面勾配の 41° といずれも a 群の範囲内に収まり、比較対象とした素掘面の法面勾配と同様の値を示す。加えて、その最大値は標準法面勾配よりも低い値を示しており、白山御殿惣囲いの壁面勾配は、現在の基準に則れば、十分な安全基準を満たしているといえ、本遺構壁面が石垣を伴わず素掘のまま地山が露出している状態で使用されていたとしても、崩落などの可能性は低く、十分に法面を保持できる勾配であったといえよう。また形態的にも箱葉研形を呈す断面形態、平滑に調整された壁面と化粧掛けともいえる壁面上の貼り土、根石、裏込め、胴木の痕跡が全く認められないなど、a 群との共通点を有している。このように形態、構造面ともに a 群、即ち素掘壁面の要素を有していることから、本遺構は素掘の堀と位置付けられる。

さて、少なくとも調査された部分において白山御殿は素掘の堀に囲まれていたことが確認された。第 2 節では、文献、絵図資料との関わりから、本遺構が白山御殿惣囲い堀に比定されることを述べ

た。そのなかで、本遺構の覆土は、土質、流入方向などの様相から、堀の廃絶に伴い堀の内側に構築されていた土塁を取り崩した土を利用したと考え、その埋め戻しの早い段階で覆土に混入していた多量の破碎礫を石垣の解体に伴う裏込め石の流入と位置付けた。しかし、本遺構が素掘の堀として位置付けられたことから、堀壁面に石垣が築かれたとは考えられず、これらの破碎礫は、土塁法面における石垣の存在を窺わせるものである。

Ⅲ-2 図に示した「宝永江戸図鑑」では、石垣は堀から直接立ち上がり、全ての門が石垣中に描かれている。その様相から土塁法面に石垣を築いた表現と捉えられ、検出された破碎礫はそれに伴うものと考えられる。すなわち素掘堀上部に石垣を伴う城壁を築き、櫓、多門、塀、門などが設置されたと推定される。このような景観は江戸城半蔵壕などにみられる「鉢巻石垣」に共通する景観である。ただし、文献には東側の御殿坂と並行する堀には石垣による五段の瀧が作られたとの記載があることから、部分的に石垣又は石敷きが存在した可能性があり、将軍別邸としての性格からも、御殿としての威信を表現するために表門側には石垣が付設されていたことも考えられる。

おわりに — 白山御殿惣堀の景観と機能 —

検出された大形溝状遺構の形態から、白山御殿惣堀の景観について述べてきたが、遺構全体規模に対し、調査範囲は狭く、今後の調査によって変更を余儀なくされることもあるだろう。しかし、発掘調査が実施された3遺跡（地点）の堀は、その位置からいずれも元禄11年の御殿拡張に伴って構築された部分であり、堀幅約10間という大規模な素掘の堀を巡らした御殿周囲の様相はイメージできたのではないと思う。そして拡張に伴って修築された石垣、多門、枳形門、角櫓の存在は、城郭建築としての威容を十分に放っていたといえよう。この屋敷拡張と修築を契機に御殿利用に関連する一つの変化が文献資料より見出されたのでそれを最後に付け加えたい。

白山御殿は綱吉がまだ館林藩主だった下屋敷時代より母桂昌院への訪問のため頻繁に訪れていた場所であった。将軍職につき下屋敷から幕府御殿へと転換されてからの御成は天和2年に始まる。その後2年空くが、貞享2（1685）年から年1回のペースで実施されるようになり⁽³⁾、御成の度には毎回饗応が設けられた。ちなみに貞享2年は生類憐れみの令が發布された年であり、御殿内に設置された鳥籠施設などこの政策との関連も指摘される（渋谷2006）。小石川御殿が拡張された元禄11年以降は翌12年に4、5月と2ヶ月続けて行われたが、その後しばらく行われず、3年後の元禄15年閏8月に久しぶりに行われた御成が最後となっている。綱吉の御成に代わるように拡張から3年後の元禄14（1701）年に武芸観覧が3回行われ、特に綱吉が死去し生類憐れみの令が廃止された宝永6（1709）年から白金御殿の花畑を移した正徳元年までは毎年行われた。このように綱吉の御成という断片的な記録によるところであるが、元禄11年の拡張、修築には御殿機能の変化が関係していることが予想される。

白山御殿に関しては、拡張以前の惣堀の様子、千川上水との関連、御殿内の様子など、まだまだ不明点は多く、今後の文献調査を含めた資料の蓄積への期待も含め課題としたい。

【註】

- (1) 御殿の拡張事業に関して渋谷論考を引用すると「御殿の拡張事業は1月から本格化した。まず27日に御殿廻りの普請を担当する奉行ら3名が任命され、阿波徳島藩主蜂須賀綱矩に御手伝が命じられた。翌29日には松平対馬守屋敷の召し上げが決定されており、その他上地の収納も並行したと考えられる。2月19日か

ら3月18日の間に、上地のうち、御殿に囲い込まれなかった部分を屋敷地として再配分していることから、これより前には上地すべてが幕府に掌握されて、御殿の領域も確定したとみられる。囲い込み地を含めた御殿の圍繞施設の建設が、前に選任された御普請奉行などによって進められた結果、5月11日に一連の作業が終了して、小石川御殿は完成をみた。」とほぼ3ヶ月半で拡張事業が実施された様子がわかる(渋谷2006)。

- (2) 粘性土とはシルト、粘土、火山灰質粘性土などを指し、ローム層は日本統一土質分類法によると「粘性土(火山灰質粘性土)」に分類される。
- (3) 貞享年間は3～5月頃、元禄に入ると10、11月に変化した。

【参考文献】

- 飯田龍一ほか 1988『江戸図の歴史』築地書館
- 小田原市教育委員会 1993『史跡小田原城跡 二の丸中堀Ⅰ』
- 小田原市教育委員会 1994『史跡小田原城跡 二の丸中堀Ⅱ』
- 小田原市教育委員会 2000『小田原城三の丸東堀第Ⅳ・第Ⅴ地点』
- 小田原市教育委員会 2002『小田原城三の丸南堀第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ地点』
- 四国城下町研究会 2006『第7回四国城下町研究会 近世の屋敷境とその周辺』
- 渋谷葉子 2006「小石川植物園」の土地利用に関する歴史の変遷『東京大学構内遺跡調査研究年報』5
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1993『経塚山西窯跡』
- 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 1994『江戸城外堀跡 牛込後門外橋詰』
- 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 1995『江戸城外堀跡 赤坂御門・喰違土橋』
- 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 1997『江戸城外堀 市谷御門外橋詰・御堀端』
- 千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988『紀尾井町遺跡調査報告書』
- 千代田区教育委員会 2001『江戸城の考古学』
- 千代田区教育委員会 2001「特別史跡江戸城跡 半蔵壕鉢巻石垣の調査」『江戸城の考古学』
- 千代田区丸の内1-40遺跡調査会 1998『東京都千代田区 丸の内一丁目遺跡』
- 千代田区丸の内一丁目遺跡調査会 2005『東京都千代田区 丸の内一丁目遺跡Ⅱ』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004「総合研究博物館小石川分館地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006「東京大学白山構内の遺跡 理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5
- 豊島区教育委員会 1994『巢鴨Ⅰ』
- 豊島区教育委員会 2001『染井Ⅵ—東京都豊島区・染井遺跡(三菱重工業染井アパート)の発掘調査—』
- (社)日本道路協会 1999『道路土工—のり面工・斜面安定工指針』
- 野中和男編 2007『石垣が語る江戸城』同成社
- 橋口定志 2006「武家屋敷の境界施設のあり方をめぐって」『第7回四国城下町研究会 近世の屋敷境とその周辺』
- 文京区遺跡調査会 1994『原町遺跡—徳島県職員住宅建設に伴う発掘調査—』
- 文京区遺跡調査会 1996『原町遺跡第Ⅱ地点—防火水槽建設に伴う発掘調査報告書—』
- 文京区遺跡調査会 2003『白山御殿跡ほか—集合住宅建設に伴う発掘調査報告書—』
- 文京区教育委員会 1980『文京の坂道』
- 文京区役所 1967『文京区史』巻一

文部科学省構内遺跡調査会 2004『東京都千代田区 文部科学省構内遺跡』

文部科学省構内遺跡調査会 2005『東京都千代田区 文部科学省構内遺跡Ⅱ—史跡江戸城外堀跡発掘調査報告—』

吉田千沙子 2007「発掘された江戸城」『石垣が語る江戸城』 同成社

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぽう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	6							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	成瀬晃司							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成20年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほくさんこうない いせき 白山構内の遺跡 こいしかわおんやくえんあと (小石川御薬園跡) そうごうけんきゅうはくぶつかん 総合研究博物館 こいしかわおんかんちてん 小石川分館地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 ほくさん ちやうめ 白山3丁目 ほん ごう 7番1号	13105	81	35° 43' 06"	139° 44' 40"	平成12年 11月27日～ 12月4日	30.3㎡	総合研究博 物館小石川 分館便所増 築に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
白山構内の遺跡 (小石川御薬園跡) 総合研究博物館 小石川分館地点	白山御殿、大 名屋敷(館林 藩下屋敷)、 幕臣屋敷地・ 薬園跡	近世	堀、井戸	陶器、磁器、土器		白山御殿を取り囲む惣 堀の一部を検出。		

第3部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

2006年度調査室事業概要

東京大学埋蔵文化財調査室における遺跡の公開と保存の実践
医学部附属病院病棟地点 SD1103 築石の活用

2006年度室員活動内容

運営委員会規則

調査室規則

調査室組織表（2006年度）

2006年度調査室事業概要

2006年度に行った事業概要（継続的に行われている室内整理作業を除く）は以下の通りである。

1. 発掘調査（試掘、立会を含む）

1-1 本郷地区

本郷地区においては事前2件、試掘1件、立会2件の調査を行った。

<事前>

- ・2006年3月6日～5月16日 本郷76 ベンチャープラザ地点（担当 追川・堀内）
- ・2006年6月5日～12月8日、2007年2月5日～23日 本郷78 情報学環・福武ホール地点（担当 大成・成瀬・追川）

<試掘>

- ・2007年2月27日～3月1日 本郷81 経済学部学術交流研究棟地点（担当 大成・成瀬）

<立会>

- ・2007年1月16日 本郷79 農学部コイトロン温室地点（担当 成瀬）
- ・2007年2月22日 本郷80 工学部もの作り実験工房地点（担当 成瀬）

1-2 駒場Ⅰ地区

駒場Ⅰ地区においては試掘1件、立会1件の調査を行った。

<試掘>

- ・2006年11月13日～16日 駒場Ⅰ18 教養学部ロッカー棟地点（担当 堀内）

<立会>

- ・2006年10月20日 駒場Ⅰ19 教養学部8号館エレベーター敷設工事（担当 堀内）

2. 修復・保存・分析

木製品の保存処理 2005年3月に報告書を刊行した工学部1号館地点から出土した漆器碗11点の保存処理を（材）京都市埋蔵文化財研究所に委託し、処理を実施した。なお資料の選択に際しては、将来予定される医学部附属病院病棟地点より出土した漆器碗の保存処理の前段階と位置づけ、保存状態の良好な資料の中で、樹種、塗りなどが多岐にわたるよう選択した。

3. 教育・普及

3-1 本学授業での活用

<ベンチャープラザ地点の発掘調査>

・2006年4月12日 文学部 歴史文化学科考古学専修過程 今村啓爾教授「野外考古学（Ⅰ）」

<情報学環・福武ホール地点の発掘調査>

・2006年6月7日 文学部 歴史文化学科考古学専修過程 今村啓爾教授「野外考古学（Ⅰ）」

・2006年7月10日 文学部 歴史文化学科考古学専修過程 今村啓爾教授「考古学概論」

・2006年11月28日 人文社会系研究科 文化資源学研究専攻 Nicole Coolidge ROUSMANIERE
客員教授「陶磁器と日本文化：国際的アプローチ」

<本郷構内遺跡出土資料（近世陶磁器）>

・2007年1月16日 人文社会系研究科 文化資源学研究専攻 Nicole Coolidge ROUSMANIERE
客員教授「陶磁器と日本文化：国際的アプローチ」

3-2 学外授業での利用

<情報学環・福武ホール地点の発掘調査>

・2006年8月2日 足立区立第一中学校の社会科授業の一環として遺跡見学。

4. 資料の活用

年度	貸出先	貸出・掲載目的	貸出・掲載資料
2006	東京国立博物館	常設展示	御殿下記念館地点一 陶磁器ほか 37点
	江戸東京博物館	常設展示	理学部7号館地点一 出土資料ほか 80点
	飯能市郷土館	常設展示	医科学総合研究棟地点 SX207一 陶器 2点
	学校法人香川栄養学園	常設展示『播るーすり鉢』展	農学部家畜病院地点 SK09 出土播鉢ほか 5点
	東京工業大学	古九谷の色分析研究の基礎データとして	医学部附属病院中央診療棟地点一 磁器 8点
	(株)日本標準	『東京の社会・歴史編』（仮題）	加賀藩上屋敷梅之御殿跡一 写真
	(株)メディア・バスターズ	テレビ東京『超歴史ミステリーロマン「大奥」再放送』	『発掘調査報告書4一 山上会館・御殿下記念館地点』
	(株)吉川弘文館	『古伊万里の誕生』	医学部附属病院中央診療棟地点一 九谷色絵皿一 ポジフィルム 1点
	(株)NHK プロモーション	『將軍家への献上<鍋島>一 日本磁器の最高峰』展	大聖寺藩上屋敷跡一 写真 1点
	文京ふるさと歴史館	『徳川御三家江戸屋敷発掘物語一 水戸黄門邸を探る一』展	農学部家畜病院地点一 人形、磁器類 55点
	佐賀県立九州陶磁文化館	『將軍家への献上<鍋島>一 日本磁器の最高峰』展	医学部附属病院中央診療棟地点ほか一 磁器 12点
	千代田区四番町歴史民俗資料館	『徳川御三家江戸屋敷発掘物語一 吉宗も暮した紀伊家上屋敷一』展	総合研究棟地点（文・経・教・社研）、御殿下記念館地点一 金箔瓦 6点
	戸田市立郷土博物館	『時は、弥生から古墳へ』展	武田先端知ビル地点一 弥生式土器 1点、ガラス小玉等 3点、写真 5点
	加納 克己	『日本操り人形史』	医学部附属病院棟地点一 木偶かしら 8点
	(株)東京堂出版	『歴史考古学を知る事典』	医学部附属病院棟地点ほか一 写真 3点
	(財)世界緑茶協会	『緑茶通信』20号	工学部1号館地点一 陶器 1点
	(株)同成社	『石垣が語る江戸城』	総合研究棟（文・経・教・社研）地点一 金箔瓦
たばこと塩の博物館	『川柳と浮世絵で楽しむ江戸散歩』展	工学部14号館ほか一 磁器、陶器、碁石ほか 119点、写真 3点	
兵庫陶芸美術館	『珉平焼』	山上会館、御殿下記念館地点ほか一 陶片（珉平焼） 3点	

東京大学埋蔵文化財調査室における遺跡の公開と保存の実践

原 祐一

はじめに

文化財保護法、第1章に「総則（この法律の目的）第1条「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする」と記述されている。筆者は、この理念に基づき、遺跡の完全公開を行ってきた。遺跡調査は一般に税金で行われており、国民に対し情報を開示する義務がある。当局にすれば、工事が遅れるなどの理由で埋蔵文化財は煙たがれる存在であるが、これまでの、遺跡の公開によって大学の遺跡に対する理解が少しは高まったと考える。また、近隣住民に対する公開の際は町会の存在協力を得ることが大切であることを実感した。見学者の中には、東京大学のアカデミックな研究成果を期待して見学に訪れる方も多く、遺跡を見せるだけでなく、研究成果も織り込んだ解説が必要であることも実感した。考古学は、地域史に貢献できる学問である。まずは発掘をしていることを近隣住民に知っていただく努力をしなければならない。本論では、これまで行った遺跡公開の方法と遺跡の概要について述べる。

1. 浅野地区工学部強風シミュレーション風洞実験室地点 1999年公開

江戸時代の井戸と、近代の遺構、土壙から縄文土器の破片が出土した。遺跡公開の告知は前日にいった。江戸時代の遺物と、隣接する工学部風洞の方形周溝墓から出土した弥生土器を展示した。参加人数は20名であった。遺跡に魅力がなかったのと（現在報告書作成中で、研究の結果、水戸藩中屋敷の土地利用状況を解明する上で重要な遺跡であることがわかった）、告知が前日だったこと、当日の天候が雨で寒かった事も参加人数が少なかった要因であったと考えられる。

2. 浅野地区工学部武田先端知ビル地点 2001年公開

発掘現場の工事堀を透明な堀にし、外から調査が見られるようにした。また、風洞実験室公開の反省から、この地点で発掘をしていることがわかるように、調査の様子をまとめた文章と写真を、カラープリンターで出力し、A3サイズに拡大カラーコピーしたものをビニール袋に入れ、工事堀に貼り付けた。ほぼ毎日貼り付け、最終的には発掘調査速報は42号まで発行、掲示した。

工学部武田先端知ビル地点では、警視庁（局）の巡查等が小銃演習を行った警視庁（局）射的場関連遺構、弥生時代の方形周溝墓を検出した。方形周溝墓からはガラス小玉、弥生土器が出土した。発掘調査速報の効果から、遺跡見学者が後を絶たなかったため、遺跡は常時完全公開とした。現場を終了し、工事堀を閉じたが中に見学者がいたことがあったため、これ以降見学者の安全面には細心の注意を払い、公開時間を明示した。発掘調査速報を御覧になった、地域雑誌谷根千の仰木ひろみ氏から遺跡の取材を受けた。弥生町在住の青木誠氏が、浅野家の明治時代から現在までの土地管理文書を所蔵していることを教えていただき、資料（青木家文書）を閲覧させていただいた。太平洋戦争で東京市関係の文書は失われたと聞くが、明治時代から戦前の土地管理文書が残されていることは貴重であ

る。東京大学史料編纂所の宮崎勝美氏に協力いただき、後日、青木家文書は文京区ふるさと歴史館により目録化された。

遺跡説明会は、2001年7月19日、7月24日、8月3日、12月15日の4回開催した。遺跡説明会開催は、1週間前に弥生町会へ連絡し近隣住民には数日前にビラを配布した。7月19日は400名以上の参加があった。後の公開時の参加人数はカウントできなかったが100名以上の参加があった。8月3日の遺跡説明会では、小泉好延氏に「弥生時代のガラス」をテーマに講演をお願いした。12月15日の遺跡説明会は、農学部弥生ホールで開催した、弥生町遺跡をテーマにした第3回考古科学シンポジウムと連動して行った。考古科学シンポジウム参加者は200名以上で参加者のほとんどが見学に参加したと考えられる。1・2次調査が夏休み中だったこともあり、小学生の参加があった。夏休みの宿題として弥生土器の絵を描きたいとの要望があり現場で即席の体験学習を実施した。広報センター職員の細谷恵子氏が度々見学に訪れていただき、資料をお渡ししていたところ、広報センターに「遺跡コーナー」が出来た。

3. 方形周溝墓の移築保存と公開、土器の修復 2001年移動、2002年公開

武田先端知ビル地点で検出した、方形周溝墓は弥生土器が発見された弥生町貝塚に関連する遺構であり、考古学史にとって重要な遺跡である。弥生二丁目遺跡は国の史跡に指定されており、工学部全径間風洞実験室新営支障ケーブル移設その他地点では、方形周溝墓を検出し、篠原和大氏（現、静岡大学）が追加調査を行い現地保存を行った。浅野地区の弥生時代の遺跡はすべて保存されていること、弥生町会から保存展示の要望があったことから、施設部に武田先端知ビル設計変更による保存を申し出た。しかし、武田先端知ビルの地下にはクリーンルームが建設される予定で、建設変更は出来ないと回答を得た。埋蔵文化財会議で協議を行い、移築による保存を行うことになった。「表面はぎ取り法」による保存を府中工房、武蔵野文化財修復研究所が行った。移築は、2001年12月に行い、駒場Ⅱキャンパス内埋蔵文化財調査室に運搬、2002年5月から6月に仕上げを行った。同時に弥生土器の修復（武蔵野文化財修復研究所）1点を行った。6月6・7日の駒場Ⅱオープンキャンパスで、方形周溝墓の公開を行った。90名の参加があった。

なお、方形周溝墓は現在、工学部柿岡地区の埋蔵文化財調査室遺物保管庫で保存している。出土した弥生土器4点は、修復を行い展示できるよう現在修復中である。

4. 浅野地区農学部総合研究棟地点 2001年公開

農学部総合研究棟地点では、水戸藩駒込邸の切通しを検出した。現在報告書作成中で、他の弥生地区、浅野地区の遺跡の検討と、水戸藩関連文書、『向陵弥生町旧水戸藩邸絵図』（原祐一蔵）を検討した結果、切通しは、ここから南に位置する武田先端知ビルを通り、弥生町の南まで続く道で、殿舎があった区域と長屋があった区域を明確に区画する境界線を兼ねた道であったことが明らかになり、水戸藩駒込邸の土地利用状況を解明する上で重要な遺跡であることがわかった。公開方法は、武田先端知ビル地点と同じである。発掘調査速報を20号発行、掲示した。発掘現場は、農学部の奥まった圃場にあり完全公開としたものの、毎日の見学者は少なかった。大学構内に対する告知を積極的に行わなかったためだが、農学部の事務担当の方には広報誌等に発掘の告知の記事を度々掲載していただいた。2001年6月30日に開催した遺跡説明会では、80名の参加があった。町会への告知を早くから行ったこと、筆者が「江戸時代の真鍮製造」をテーマに講演会を開催した。参加者が多いのは、発掘地点に建設される研究棟の高さが、近隣住宅地の日照権に影響をおよぼす事が近隣住民から指摘さ

れ、建設中止もしくは設計変更の運動が行われていたため、工学部武田先端知ビル地点の遺跡説明会に参加していただいた方々が、リピーターとして参加していただいたが、参加者の興味は遺跡ではなく研究棟建設がどうなるかだった。

5. 本郷地区薬学系総合研究棟 1 期地点 2002 年公開

薬学系総合研究棟 1 期地点は、本部棟の北側に位置し東大病院へ向かうメインストリートとなっていることから特に発掘の告知は行わず、発掘調査速報を発行し、工事堀に貼り付け、遺跡は常時完全公開とした。発掘調査速報は、プラスチックケースに入れて掲示したが、水分が入ってしまい見栄えが悪かった。薬学系総合研究棟 1 期地点は加賀藩邸跡で「長局」関係の遺構、女性が使用したと考えられる化粧道具、ガラス製かんざしが出土した。盛り土と盛り土の間から、宝永 2 年に噴火した富士山の火山灰が降灰したままの状態出土したことから、地震研究所の藤井敏嗣教授に連絡、分析を依頼したところ、東京都内での宝永火山灰の自然堆積を発掘担当者ではなく、火山研究者が確認したのは初めてで、富士山噴火を想定したハザードマップ作成にとって非常に貴重な試料であるということから、新聞社各社、NHK、テレビ東京の取材を受けたため、見学者は後を絶たなかった。しかし、調査区内から医学部の廃棄物が出土したため、廃棄物の掘り出しと処理を行ったため、公開を中止せざるをえなかった。

なお、宝永火山灰は剥ぎ取り資料として処理、展示可能資料とした。

6. 本郷地区薬学系総合研究棟 2 期 1 次地点 2004 年公開

遺跡の公開方法は、薬学系総合研究棟 1 期地点と同様である。発掘調査速報はプラスチックケースに入れて掲示する方法から、発掘調査速報をラミネートフィルムでパウチして掲示した。発掘調査速報は 23 号まで発行、掲示した。しかし、この地点でも調査区内から医学部の廃棄物が出土したため、廃棄物掘り出しと処理を行ったため、公開を中止せざるをえなかった。

7. 本郷地区薬学系総合研究棟 2 期 2 次地点 2004 年公開

遺跡の公開方法は、薬学系総合研究棟 2 期 1 次地点と同様である。当地点は廃棄物が出土した 2 期 1 次地点と隣接すること、掘削深度が 10m を超え、安全面の問題があったため、遺跡の公開は、発掘調査速報の掲示にとどめた。発掘調査速報は 23 号まで発行、掲示した。

なお、薬学系総合研究棟 1 期地点、2 期 1 次地点、2 期 2 次地点の廃棄物処理は、東京都と文京区の指導の元、環境安全研究センターと法律に則って処理を行い、土壌分析の結果、廃棄物が完全に除去されたことが確認された。

8. 駒場 I 地区国際学術交流棟地点 2003 年公開

遺跡の公開方法は、薬学系総合研究棟 2 期 1 次地点と同様である。発掘調査速報は 13 号まで発行、掲示した。遺跡は完全公開としたが、近隣住宅地から離れていることから、告知は学内を中心に行なった。旧石器時代の台形様石器が出土したことから、石器周辺の炭化物の C14 分析を行なった。

教養学部ということで、今村啓爾室長の考古学授業の一環として、学生 70 名を対象に見学会を開催した。一般公開は、2003 年 6 月 24 日に行なった。公開は、学内関係者を対象とした。100 名以上の参加があった。

なお、石器が出土した周辺の土層は剥ぎ取り資料とし、C14 分析結果とあわせて、国際学術交流棟

に展示された。石器はレプリカを作成し展示することが予定されている。

9. 浅野地区の遺跡解説板 2006年設置

2006年3月、浅野地区武田先端知ビルと弥生二丁目遺跡に遺跡解説板が設置されたことから、谷根千工房、文京区ふるさと歴史館、工事を担当した施設環境、広報センター、原子力研究総合センタータンデム（MALT）、RIセンターのメンバー8名に解説を行った。武田先端知ビルの解説は原が担当し、弥生二丁目遺跡の解説版は今村啓爾室長が担当した。浅野地区の解説版に先行して、「弥生土器発掘ゆかりの地」碑南側に、浅野地区と周辺部の歴史について解説した解説版が設置された。原が、文京区教育委員会に設置を要望したもので解説は原が担当した。解説には浅野地区の解説版について触れているが、こちらの解説板が先行して設置されたため、文京区教育委員会に浅野地区に解説板がないとの苦情があったそうである。この解説の目的は、解説板の紹介もあるが、浅野地区に設置されている「向岡記」碑の保存を訴えることであった。

10. 「向岡記」碑の保存と展示 2005年より調査、2008年展示予定

浅野地区工学部10号館の西側に、徳川斉昭が建立した「向岡記」碑が置かれていることを知ったのは、武田先端知ビルの調査を終了してから、5年後の2005年であった。文京区弥生は、弥生土器の由来となった土器が発見された場所である。明治17年（1884）、本郷区向ヶ岡弥生町から出土した土器が、縄文式土器とは違う土器と認識され、後年町名から「弥生式土器」と名づけられ「弥生時代」の時代名が付いた。弥生町名が付いたのは明治5年（1872）で、「向ヶ岡」とは、湯島辺りから北へ連なる台地の呼称で、寛永寺のある忍ヶ岡の向うの岡という意味である。「弥生」とは、水戸藩中屋敷（駒込邸）に置かれた「向岡記」碑の碑文、「文政十萬梨一登勢止移布年能夜余秘能十日」文政十一年（1828）弥生（三月）十日の「夜余秘」（弥生）からとられたとされる。町名を由来とする弥生時代の本家本元は、「向岡記」碑なのである。「向岡記」碑は、茨城産の寒水石製で風化が進行し碑文は失われようとしていた。しかし、浅野地区の職員は誰もこの碑を知らず、「小汚い碑」と認識していたそうである。碑の石質は茨城産の寒水石（大理石）であることもあり風化が進行し碑文は失われようとしていた。筆者は、2006年12月より碑文の保存状況、碑文の内容について調査し、碑の保存運動を行ってきた。2007年、日本石造文化学会の協力を得られたことから、碑文の拓本作成、解説を行うことができた。2006年、東京大学130周年記念事業「知のプロムナード」整備候補となり、筆者が保存、移築、展示のプロジェクトに参加することとなった。2008年、「向岡記」碑は情報基盤センターに設置することになった。

おわりに

筆者は、1999年1月25日、浅野地区工学部風洞実験室の発掘調査から、遺跡の一般公開と研究成果の還元をいかにして行うべきかを試行錯誤しながら実践してきた。浅野地区工学部風洞実験室が最初の遺跡公開であった。公開のきっかけは、浅野地区の原子力総合研究センター MALT（現、工学部原子力国際専攻タンデム加速器 MALT）の共同利用メンバーから、「遺跡は公開する義務がある、公開してほしい」との一言がきっかけであった。浅野地区の事務室に「遺跡公開のお知らせ」のチラシを配り、浅野地区が位置する文京区弥生の現場近くの住宅に、加藤建設の作業員さんに一軒一軒チラシを配ってもらった。蓋を開けてみると、集まったのは20名、ほとんどが浅野地区の共同研究者

であった。大量にコピーした解説資料はほとんど減らなかったが、町会の方も何名か参加していただいていたのでうれしく思った。弥生土器が出土したわけでもなく、配布資料には何の面白みもなく、これでも上々だったのだと思う。この公開以降、まずは、いかに遺跡に足を運んでいただくかがテーマとなった。

謝辞

新宿区遺跡調査会在籍時、遺跡公開の必要性をご教授いただいた、井汲隆夫氏、栩木真氏、谷川章雄氏、に謝辞申し上げます。

これまで、遺跡の公開・保存にあたって以下の方々にお世話になりました。

遺跡公開参加者、弥生町会、向丘町会、青木誠氏（文京区弥生在住）、梶原まゆみ氏（文京区弥生在住）、鈴木徽章工業、仰木ひろみ氏・森まゆみ氏・山崎範子氏（谷根千工房）、山田ひろし氏（谷根千ウロウロ）、宮崎勝美氏（東京大学史料編纂所）、文京区教育委員会、文京ふるさと歴史館、東京大学広報センター、東京大学地震研究所、東京大学施設部、東京大学施設部環境、東京大学原子力国際専攻タンDEM加速器（MALT）、東京大学RI総合研究センター、東京大学農学部、東京大学薬学部、パレオ・ラボ、パリノサーヴェイ、武蔵野文化財修復研究所、府中工房田毎、里、フレンディー

【参考文献】

- 谷根千工房 2001「弥生町の発掘から 遺跡調査で知る古の」地域雑誌『谷中・根津・千駄木』67号、pp.16-18
谷根千工房
- 石原道知・原 祐一 2001「P49 東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点の方形周溝墓の保存と土器の修復」『文化財保存修復学会第24回大会発表要旨集』pp.160-161 文化財保存修復学会
- 弥生町会文化部編集 2001『向ヶ丘弥生町会ニュース』第435号 弥生町会文化部
- 東京大学埋蔵文化財調査室・武蔵野文化財修復研究所・加藤建設株式会社 2001「東京・文京区・弥生町遺跡から検出された方形周溝墓の保存」『文化財発掘情報』2002年11月号、pp.185-187 (株)ジャパン通信情報センター
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002「農学部総合研究棟（仮称）建設予定地の発掘調査」『学内広報』NO.1237、pp.23-24 東京大学広報委員会
- 原 祐一 2003「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部総合研究棟地点（2002年度）出土宝永火山灰の出土状況」『第4回考古科学シンポジウム発表要旨』pp.67-71 考古科学シンポジウム世話人会・國學院大學考古学研究室
- 松崎博之・原 祐一 2003「東大宝永火山灰層前後のC-14年代測定」『第4回考古科学シンポジウム発表要旨』pp.73-75 考古科学シンポジウム世話人会・國學院大學考古学研究室
- 加藤道夫 2004「駒場ファカルティハウス（国際学術交流棟）の完成」『教養学部報』第475号 2004年6月2日 4面 東京大学教養学部
- 原 祐一・小泉好延・森本幹彦・堀江武史・石原道知 2004「東京大学工学部武田先端知ビル地点検出の方形周溝墓— ガラス小玉の材質分析・土器・保存公開・弥生町遺跡と江戸から明治の開発 —」『有限責任中間法人日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』pp.85-88 有限責任中間法人日本考古学協会
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004「国際学術交流棟地点遺跡の研究結果」『学内広報』NO.1292、pp.4-5 東京大学広報委員会
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004「東京大学駒場Iキャンパスで発見された後期旧石器時代前半の遺跡— 国際学術交流棟建設予定地の遺跡調査 —」『学内広報』NO.1279、pp.13-14 東京大学広報委員会
- 原 祐一・小泉好延・中野忠一郎・松崎浩之 2007「武田先端知ビル建設に伴う発掘調査で出土した弥生時代の

ガラスと明治時代の弾丸の PIXE 分析 付編 — 浅野地区の史跡と文京区弥生の歴史」第9回 AMS シンポジウムポスター発表

原 祐一 2006「本郷区向ヶ岡弥生町の開発と向ヶ岡貝塚」『有限責任中間法人日本考古学協会 72 回総会研究発表要旨』 pp.206-209 有限責任中間法人日本考古学協会

原 祐一 2006「向ヶ岡貝塚の土器発見地はどこか 近代史料による推定」『有限責任中間法人日本考古学協会 72 回総会研究発表要旨』 追加資料 有限責任中間法人日本考古学協会

原 祐一 2006「弥生町特集補遺の補遺 向ヶ岡弥生町の歴史 — 弥生時代と明治時代の歴史 —」地域雑誌『谷中・根津・千駄木』84号、pp.38-39 谷根千工房

原 祐一 2007「弥生時代名称由来土器発見場所の推定 — 明治17年本郷区向ヶ岡弥生町の土地利用状況 —」『國學院大學考古学資料館紀要』23 輯

仰木まゆみ 2007「弥生町特集補遺の補遺の補遺 新説弥生土器の発見場所 — 原 祐一さんに聞く」地域雑誌『谷中・根津・千駄木』86号 谷根千工房



武田先端知ビル地点公開 2001年8月3日



武田先端知ビル地点公開 2001年12月19日



武田先端知ビル地点公開 2001年12月19日



武田先端知ビル地点方形周溝墓野外展示



農学部総合研究棟公開 2001年10月16日



薬学系総合研究棟公開 2002年10月3日



国際学術交流棟公開 2003年6月30日



国際学術交流棟室内展示 2004年5月7日

医学部附属病院病棟地点 SD1103 築石の活用

SD1103 は、医学部附属病院病棟建設地点（現、入院棟 A）の調査で検出された石組溝である。病棟地点の大半は本郷邸に比定され、加賀藩邸「黒多門邸」（～天和 2 年）から大聖寺藩上屋敷への変遷を辿る区域である。その北側には富山藩邸が位置し、SD1103 はこの屋敷境を担う石組溝である（図 1）。富山藩邸側にあたる北側の石積は、旧中央病棟建設時の掘削などによって大部分が消失していたが、幸いにも南側の石積は一部に天端石が存在するなど、比較的良好な状態で遺存していた。調査の結果、この石積は度重なる盛土造成の末、享保年間には高さ最大 3.6m まで積み上げられていたことが確認されている（写真 1～3）。

本郷邸内の調査で、これほど良好な石積の検出事例がないことから、石積の部分保存と活用について大学施設部と協議を重ねた。その結果、石積の一部を病棟完成後の外構に利用することで合意し、調査と並行しながら再設置に向けて石材専門業者によるマーキング、解体が行われた。

解体された築石は病院敷地内に仮置きされ、施設部にも調査時の図面（立面図、セクション図）を提出し、復元保存の時期を待つことになった。調査終了後に作成された外構工事設計図面では、病棟南側車輛アプローチの壁面への活用が計画されていたが、平成 12 年 10 月に竣工した外構は、コンクリート壁に設計変更されており、築石は病棟脇に仮置きされた状態のままであった。工事期間中に施設部担当者の交代もあり、十分な調整が取れなかったことが要因であった。再度、経緯を説明し活用を依頼した。しかし復元すると高さ 3m、奥行き 1.1m となる本遺構を設置する場所は、新たに建設中の第 2 中央診療棟においても適所がなく、検討の結果、復元・保存は断念し、外来診療棟から病棟にかけて整備される車道の中央分離帯縁石の一部としてリユースすることで合意した。

築石は、各々の形状をうまく利用して 1～2 段に積み直され、第 2 中央診療棟側の縁石として活用された（写真 4～6）。また附属病院のご厚意で、再利用された築石の由来、特徴を記した解説パネルが、横断歩道脇の中央分離帯内に設置された（図 2）。

本来の建造物の移築・保存とはかけ離れた状態であることは否めないが、江戸時代の技術を現代に活かした技術融合のケーススタディとして、歴史遺産の活用を図ることができたところに意義があると考えられる。

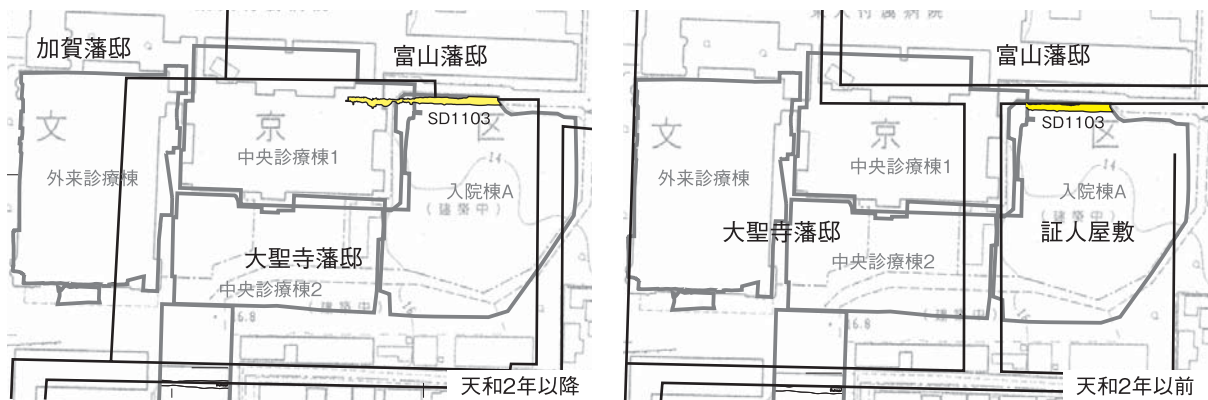


図 1 屋敷割りと調査地点



写真 1 SD1103 検出状況 1



写真 2 SD1103 検出状況 2



写真 3 SD1103 裏込め検出状況



写真 4 築石再利用状況 1



写真 5 築石再利用状況 2



写真 6 解説パネル設置状況

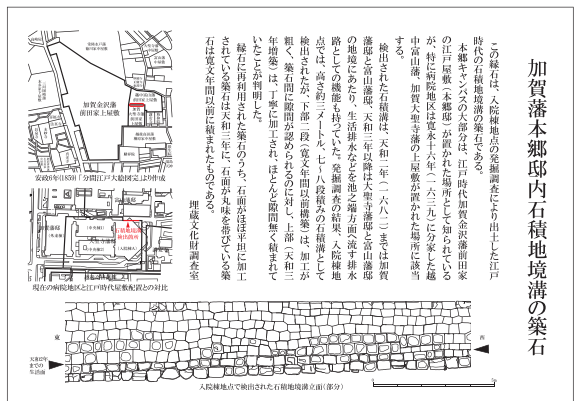


図 2 解説パネル

2006年度室員活動内容

成瀬 晃司

【執筆】

- ・2006年3月31日
「東京大学白山構内の遺跡 理学系研究科附属植物園研究温室地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5（編集）
- ・2006年3月31日
「考古資料からみた研究温室地点の土地利用状況」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5
- ・2006年3月31日
『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』（編集）
- ・2006年3月31日
「工学部14号館地点の空間構成」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』
- ・2006年4月30日
「窯業」、「伊万里」『歴史学事典 第13巻 所有と生産』弘文堂
- ・2006年6月10日
「全国の近世遺跡における屋敷境の検出例」『第7回 四国城下町研究会 近世の屋敷境とその周辺』（共同執筆）
- ・2007年3月
「学問理解おすすめ本」『Knowledge Station』<http://www.gakkou.net/07ksbooks/index.htm>

【研究発表】

- ・2006年11月25日
「加賀藩本郷邸東域の開発」（江戸遺跡研究会第20回大会 『江戸の大名屋敷』）

堀内 秀樹

【執筆】

- ・2006年10月21日
「水戸藩駒込邸の土地利用状況」『徳川御三家江戸屋敷発掘物語水戸黄門邸を掘る』p32-41 文京ふるさと歴史館（原 祐一と共著）

【講演】

- ・2006年5月27日
「川崎に埋もれた江戸時代のやきもの ― やきものの消費と流通 ―」（川崎市民アカデミー 2006年度前期 川崎学Ⅰ）

- ・ 2007年1月27日
「都市江戸の陶磁器消費と柿右衛門」（九州産業大学 COE セミナー）

【研究発表】

- ・ 2006年9月17日
「沈船積載資料とオランダ消費遺跡出土の東洋陶磁」（第27回日本貿易陶磁研究集会 『中世末～近世の貿易陶磁流通の諸問題』 p.37-41 所収）
- ・ 2006年11月11日
「東大出土古九谷色絵磁片の色彩 PIXE 元素分析による八百屋お七の火事での江戸加賀屋敷火災時の温度推定」（第5回 21世紀連合シンポジウム — 科学技術と人間 —）
- ・ 2006年11月26日
「大名藩邸で使用された陶磁器と御殿内の生活」（江戸遺跡研究会第20回大会 『江戸の大名屋敷』 p.129-147 江戸遺跡研究会所収）

原 祐一

【執筆】

- ・ 2006年7月20日
「弥生町特集補遺の補遺 向ヶ岡弥生町の歴史 — 弥生時代と明治時代の歴史 —」地域雑誌『谷中・根津・千駄木』84号、pp.38-39
- ・ 2006年10月26日
「水戸藩駒込邸の土地利用状況 — 発掘調査の成果と文献史料の検討 —」『徳川御三家江戸屋敷水戸黄門邸を探る』 pp.32-41 文京ふるさと歴史館（堀内秀樹と共著）
- ・ 2007年3月31日
「弥生時代名称由来土器発見場所の推定 — 明治17年本郷区向ヶ岡弥生町の土地利用状況 —」『國學院大學考古学資料館紀要』23輯

【研究発表】

- ・ 2006年5月28日
「本郷区向ヶ岡弥生町の開発と向ヶ岡貝塚」有限責任中間法人日本考古学協会72回総会研究発表要旨 pp.206-209
- ・ 2006年5月28日
「向ヶ岡貝塚の土器発見地はどこか 近代史料による推定」有限責任中間法人日本考古学協会72回総会研究発表要旨追加資料
- ・ 2006年10月20・21日
「武田先端知ビル建設に伴う発掘調査で出した弥生時代のガラスと明治時代の弾丸のPIXE分析付編：浅野地区の史跡と文京区弥生の歴史」第9回AMSシンポジウムポスター発表（小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之と共同発表）

【その他】

- ・ 東京大学24期（平成18年度下半期）MALT・RAPID利用研究 D47 E009 「東京大学出土考

古資料の材質分析」

- ・工学部武田先端知ビル地点：ガラス小玉（再分析）、陶磁器染付顔料、金属製品（継続）
- ・工学部強風シミュレーション風洞実験室地点：陶磁器染付顔料
- ・薬学部総合研究棟2期2次調査地点：金属製品、ガラス製品（継続）

大成 可乃

【執筆】

- ・2007年3月31日
『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』
p.133-178（第Ⅲ章共著）
- ・2007年3月31日
「工学部14号館地点出土の磁器・陶器・土器について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』 p.479-502

追川 吉生

【執筆】

- ・2006年3月31日
「17世紀のかわらけ一括廃棄遺構の一様相 — 理学系研究科附属植物園研究温室地点のかわらけ一括廃棄遺構の分析を中心に —」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5
- ・2006年5月20日
「2005年の歴史学界 回顧と展望（考古・歴史時代）」『史学雑誌』115-5、p.33-38

【講演】

- ・2006年11月5日
「掘り出された大名屋敷」（土佐山内家宝物資料館特別展講演、於・高知城ホール）

○東京大学埋蔵文化財運営委員会規則

平成元年7月11日

評議会可決

(設置)

第1条 東京大学に東京大学埋蔵文化財運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任務)

第2条 委員会は、東京大学構内における埋蔵文化財に関する重要事項及び埋蔵文化財調査室の運営等に関し必要な事項を審議することを任務とする。

(組織)

第3条 委員会は、委員長及び委員若干名をもって組織する。

(委員長)

第4条 委員長は、総長特別補佐のうちから総長が指名する。

(委員)

第5条 委員は、次の各号に掲げる者に総長が委嘱する。

- (1) 医学部長、工学部長、文学部長、理学部長、東洋文化研究所長、史料編さん所長及び事務局長
- (2) 埋蔵文化財調査室長
- (3) その他総長が必要と認めた者

2 前項第3号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置く。

2 幹事は、総務部長、経理部長及び施設部長をもってあてる。

(庶務)

第7条 委員会の庶務は、事務局施設部企画課において処理する。

(補則)

第8条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の定めるところによる。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

○埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

(設置)

第1条 東京大学埋蔵文化財運営委員会の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

(業務)

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査(以下「遺跡調査」という。)に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- (1) 遺跡調査に対する総括的指導助言
- (2) 文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- (3) 遺物等の保管及び管理
- (4) 遺跡調査の方法に関する調査研究
- (5) 前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

(室長)

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は助教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

(室員)

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

(庶務)

第5条 調査室の庶務は、事務局総務部総務課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

東京大学埋蔵文化財調査室組織表（2006年度）

室長（人文社会系研究科教授）	今村啓爾
室員（人文社会系研究科准教授）	寺島孝一
室員（人文社会系研究科助教）	成瀬晃司
〃	堀内秀樹
室員（人文社会系研究科助手）	原 祐一
〃	大成可乃
〃	迫川吉生
事務補佐員	安芸毬子
〃	青山正昭
〃	今井雅子
〃	大貫浩子
〃	香取祐一
〃	坂野貞子
〃	阿部常樹（2004年6月～）
〃	北島くりか（2004年7月～）
〃	田中美奈子（2006年4月～）

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 6

東京大学本郷構内の遺跡

薬学系総合研究棟地点（2002年度）で検出した医学部薬局の基礎 SB10
についての考察（原 祐一）

縦長の石製印判の用途（寺島孝一）

東京大学本郷構内の遺跡 薬学系総合研究棟地点（2002年度）で検出した医学部薬局の 基礎 SB10 についての考察

原 祐一

はじめに

東京大学総合研究博物館北側、2007年に新設された懐徳門の両脇に、懐徳館のレンガ基礎と医学部薬局のレンガ基礎が展示された（写真1・2）。この基礎は、東京大学創立130周年記念事業「知のプロムナード」の一環として整備、展示されたもので^(注1)、ともに埋蔵文化財調査室が調査した明治時代の基礎である。この2つの基礎は、ともに明治45年完成であるが、工法の違いは一目瞭然である。医学部薬局の基礎は、以前からこの場所で展示されていた懐徳館の基礎と同年代であることから^(注2)、薬学系総合研究棟地点（2002年度）の調査時、藤井恵介氏によって保存が提案されたものである。調査終了時、現地に移動したままになっていたものが整備された。懐徳門に展示された基礎は、建造物をはじめとする産業遺産では見ることができない地下構造物であり、年代が明確な建築物の建築技術、構造、建築材料を実際に見ることができるという意味で意義がある。本文では、今回保存された、薬学部薬局の基礎の調査経緯、工法、年代等について考察を行う。

1. 薬学系総合研究棟1期地点（2002年度）レンガ基礎SB10の調査

薬学系総合研究棟1期地点（2002年度）からは、調査開始してすぐにレンガ基礎SB10を検出した（写真3）。通常は、重機で粉砕され、産業廃棄物として廃棄されるものであるが、この基礎は、明治45年に完成した医学部薬局の基礎で（図1）、建築年代が明確であることから、明治時代の建築工法、レンガ製造をはじめとする明治時代の産業を解明するために重要な資料であると判断し調査を行った。

2. 医学部薬局の建築年代

東京大学は、明治9年（1876年）、東京医学校の本郷文部省用地へ移転後、明治10年（1877年）4月、東京開成学校と東京医学校を合併し、法理文三学部及び医学部として開校し現在に至る^(注3)。東京大学本郷キャンパスでは、施設部建築課保存 明治13年「東京大学医学部平面図」によって、明治時代から現在までの建築計画を知ることができる。薬局基礎は明治40～41年では点線で記載されるが、明治43～44年北側が塗りつぶされ、南側が点線で記載される。明治44～45年薬局建物は塗りつぶされており、明治45年までには完成したと考えられる。薬局は、昭和8年3月31日まで確認できるが、昭和10年6月20日の図面では、「排球コート」になっている。

3. 基礎の検出状況

基礎に使用されているレンガ基礎の計測、刻印の確認などを行った。レンガ積みは、昭和10年の排球コート硬化面下層から検出した。規模は南北約37.3m、東西約15mを計る。一般にレンガ建造物は外壁、外壁腰部の上部構造、地中基礎の下部構造からなる。検出したレンガ積みは外壁腰部分2段と地中基礎部9段である。レンガを除去した部分の一部で上部構造に使用されたと考えられる漆喰を確認した。建築当時の地表面は標高22mで、地表面から深さ約1.5～1.8m、幅約0.7mの溝を掘削し、溝の中にセメント基礎を張り、その上にイギリス積みでレンガを積んでいる。北側のコンクリート基礎は、砂利に泥を混ぜた上にコンクリートと砂利を混入し固めているのに対し、南側は碎石の上にコンクリートと砂利を混入し固めている。北側と南側のコンクリート基礎の差は、「東京大学平面図」で確認できる点線と塗りつぶしの差で、明治43～44年完成部分と明治44～45年完成部分を示していると考えられる。使用されたレンガはすべて「手抜きレンガ」(型枠に粘土を入れ叩き込む)で、桜の刻印がある小菅収治監製レンガが使用されていた(写真4)^(注4)。ちなみに、懐徳館の基礎には、日本煉瓦製造会社製の機械成型レンガが使用されていた^(注5)。

まとめ

通常、発掘調査の現場では、諸制約から近代遺跡を調査対象とするのは難しい。しかし、東京大学構内から出土する明治時代以降のレンガ基礎から、建築当時の技術水準、設計がいかなる思想や技術で行われたかを知ることができる。つまり、東京大学は明治時代以降の建築史が保存された空間であり、日本建築史にとって貴重な資料空間である。薬学系総合研究棟1期地点(2002年度)では、調査期間等の制約があったが、レンガ基礎の調査を、江戸時代の調査と同時並行で行い、実施可能な必要最低限の記録保存として、平面図と断面図の作成、写真撮影、レンガと工法の検討を行った。

レンガ基礎は、調査期間を圧迫する産業遺産ではなく産業廃棄物で、迷惑なものかもしれない。しかし、「東京大学平面図」から建設年代を決定できるため、東京大学史にとっても重要な遺構であり、レンガ、セメントなどの建築材料の研究、建築史の分野など報告を必要としている学問分野もあるのである。他の学問分野に対してもデータを提供するのも考古学の使命であると考えられる。

追記 レンガ基礎の保存処理

レンガ基礎は、掘り出されてから雨ざらしのままであったため、表面にコケが発生し、草が生えた部分があり、一部崩れが生じている。懐徳館の基礎に配された給排水の鉄管は腐食が進んでいる。早急にコケの除去、撥水処理などの保存処理を行わないと基礎の破損が進んでしまう。早急な対応が望まれる。

謝辞

調査を担当した加藤建設株式会社、レンガの種類と工法についてご教授いただいた、八木司郎氏(産業考古学会)、斉藤和美氏、清野利明氏(日野市教育委員会)、薬学部薬局のレンガ基礎の評価と展示に尽力いただいた藤井恵介氏(東京大学工学部建築学科)に謝辞申し上げます。

【注】

1. 東京大学 2007『東京大学創立 130 周年記念事業 知のプロムナード ナビゲーション・マップ』東京大学 知のプロムナードホームページより引用
2. 堀内秀樹 1997「12 総合研究資料館増築に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1、p.37-38 東京大学埋蔵文化財調査室
3. 藤井恵介 1988「東京大学の誕生」『本郷キャンパスの百年』pp.53-133 東京大学総合研究資料館
4. 原 祐一 2002「東京大学本郷構内の遺跡 東京大学薬学系総合研究棟（2002 年度）医学部薬局の基礎についての考察」『東京大学本郷構内の遺跡 東京大学薬学系総合研究棟（2002 年度）埋蔵文化財調査中間報告書』1 東京大学埋蔵文化財調査室
5. レンガの種類と工法については、八木司郎氏、斉藤和美氏（産業考古学会）、清野利明氏（日野市教育委員会）の教授による。

【参考文献】

- 藤森照信 1993『日本の近代建築（上）— 幕末・明治篇 —』（2007、14 刷）岩波書店
- 八木司郎 1996「(2) 東京砲兵工廠銃砲製造所使用の煉瓦の製造所」『文化財研究紀要別冊第 11 集 東京砲兵工廠銃砲製造所建造物調査報告書』pp.89-93 東京都北区教育委員会
- 清野利明 1998「1. 河野正夫氏の共同住宅建設工事に伴う遺跡の存否確認調査」『日野市埋蔵文化財発掘調査報告』59 日野市教育委員会



写真1 医学部薬局基礎



写真2 前田侯爵邸基礎



写真3 医学部薬局基礎検出状況



写真4 医学部薬局使用レンガ刻印



図1 医学部薬局建築図（明治40～41年）

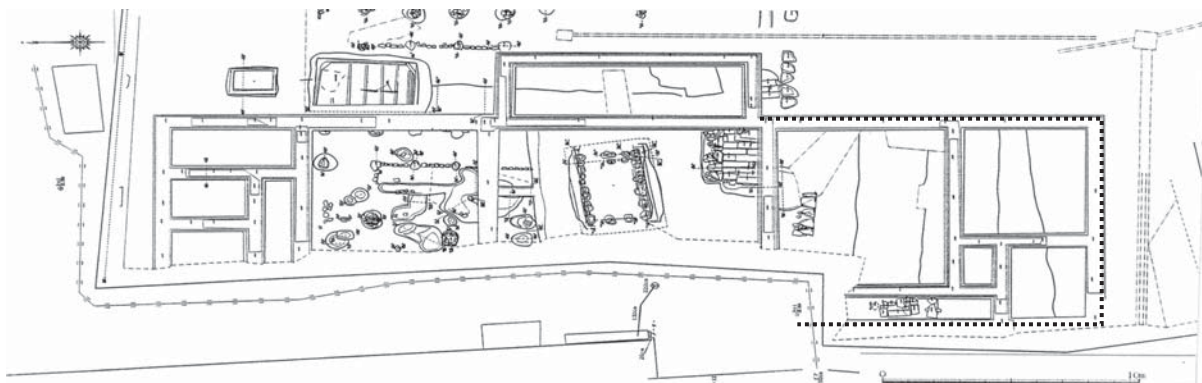


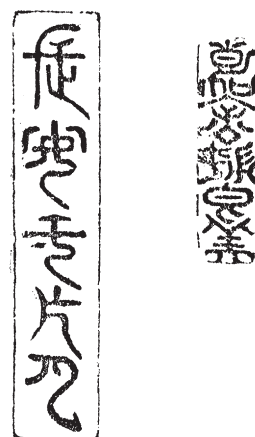
図2 SB10平面図に（図1）の点線部分を示した

縦長の石製印判の用途

寺島 孝一

本郷構内の工学部14号館地点では、種々の石製品とともに、2点の印判が見つかっている。報告書では以下のように記述した。

印章（前略）篆刻による印章と考えられる（「刻」と「印章」は同語反復なので、「篆書による印章」とすべきであった）。東京印章協同組合常務理事技術部長の前田照男氏および同組合技術顧問の岩本博幸氏に判読していただいたところ、「長安无片月」「嘉舎□香美」と刻まれていた。いずれも稚拙で、専門家の手になるものではなからうという御指南をいただいた（第1図）。



第1図 工学部14号館地点で見つかった印判(実大)
左：長安无(無)片月
右：嘉舎□香美(□は判読不能)

その際、この印判の用途については特に御教示はなく、漠然と書画類の落款の一種かと考えていた。ところが発掘調査報告書の刊行後、『雑俳集成』（鈴木勝忠校訂、第一～三期、全36巻）に、この印とよく似かよったものが数多く収録されているのを発見した（第2～4図）。

この「雑俳」という言葉は、懸賞つきの誹諧から柄井川柳一派のものを除外したものであるというほどの意味だろう。江戸時代に流行った誹諧・発句・川柳などの系譜、関係を述べるだけの知識をもたないが、柄井川柳が誹諧点者の一人で、その選択眼の秀逸さと、江戸の住人に歓迎されるであろう「ツボ」を心得ていたこと（破礼句はその典型だろう）から、圧倒的な支持をうけ、「川柳」ということばが、明治時代以降（江戸時代でもその兆候はあったようだが）一点者の人名から一般名詞に「昇格」したことは、御承知の通りである。

いずれにせよ、応募があった句に点数をつけ、高点をとった者を一枚摺や句集に集録し、景品を提供するのが基本的なしくみだったようだ。その際点者がどのように採点し記録していくのか、活字化されたものしか見たことがない私には分からないが、一部図版で示されているものをみると、工学部14号館で見つかった長方形の印判ときわめて似かよっている印形が、採点の過程で使われているのを見てとれる。例えば第2図右下の月瘦の例でみると、五、(点)が「越雪」、七、が「洞庭月」、十、が「一日長安花」などとなっている（十五点以上は私には読めない）。

これを具体的にどのように利用するのかはわからないが、無機的な数字にかえて、「長安花・洞庭月」など「シャレ」た言葉を使ったものかもしれない。発掘で見つかった印判についても、特に有名な詩文が使われているわけでないという御指摘をいただいたが、ここにあげた印についてもそれは共通しているようである。また、刻印の技術が比較的稚拙で、篆刻の専門家あるいはその技術にすぐれた文人によるものでもなさそうだが、という御指摘も頂いているが、この点でも共通する要素があるように見える。

また、図示した『誹諧鑑』十三編のサイズは、縦19センチ横13センチとなっているから、印判の大きさも、見つかったものとほぼ同じといえよう。

勿論、このような印判が他の用途で用いられた可能性も十分にあり、川柳・雑俳などの採点用のみにつくられたものであると断定できるわけではないが、点者が自分で（下手でもそれなりに）点刻を行ったと考えても、さほど強引な推測ではないのではなかろうか。

竹内玄玄一の『俳家奇人談』（文化十三年、雲英末雄校注『俳家奇人談・続俳家奇人談』岩波文庫、1987年）巻之中の「服部嵐雪」の項に、「つねに用ふる所の点印は、門人周竹に授け」とあるから、自らの愛用印を弟子などに譲ることもあったのだろう。

また、同書巻之下「秋色」の項に「師叟終年放蕩にして所定めず、多くは秋色が家を主とす。ゆゑにその没後、しばらく師の点印を借り用ゆ。晩年に及んで湖十へこれを伝与すといふ」とあって、やはり師弟間で点印にうけ渡しがあったようだ。

さらに同書巻之下「桜井吏登」の項には「周竹はその高弟たるがゆゑに、師の没前に、その点印を付与せらるゝといへども、おのれすでに耄れたりとて、すなはちこれを登に譲る。よってこの子をもつて雪中二世とす」とあり、この場合には、点印の贈与をもって、流派の伝承の証としたようにもみえる。

発掘地点は、幕府の御先手組の旗本屋敷跡であり、旗本やその隠居がこのような道楽に浸っていたことも十分に考えられるのではあるまいか？

ところで印は、（中国で）戦国時代頃、権力の象徴の官印として作られはじめ、次第に私印などもつくられるようになったようだ。当初は銅などの鑄造品や鑿印、後には水牛の角や象牙も用いられるようになったが、いずれも専門の職人以外には手の出せるものではなかった。

やがて文人が自ら刻印できる軟質の石が知られるようになり、元の王冕が、浙江省青田県に産する「青田石」を用いて、印を作成したとされる。さらに明の文彭が同種の石材を用いて、姓名字号だけでなく、「雅致のある字句」の刻印を行ない、以後文人らによる印（篆書体を用いることが多いため篆刻とよばれる）の製作が大に行なわれたという。

わが国の篆刻は、明の滅亡にともない、独立・心越らが渡来したのをはじめとするという（独立の渡来は承応二年—1653）。日本人としては、榭原篁洲（1655～1706）や細井広沢（1658～1735）らが初期に手がけた。その後『雲萍雑誌』などで知られる柳沢淇園（柳里恭）や高芙蓉（1722～1784、印聖と呼ばれているらしい）が篆刻の発展に寄与したようだ（以上『篆刻入門—技法とその魅力』季刊墨スペシャル第8号、1991、芸術新聞社などによる）。

また同書によれば、印の種類には、姓名印・雅号・引首印・遊印・堂号印・成語印などがあるようだ。このうち「姓名印・雅号印・引首印」をまとめて「三顆一組」といい、書画が完成するとこれを押印する（落款）。引首印は「書幅の頭初右肩に押印する。多くは長方形・長楕円形で宋以後に始まり、印文は閑雅風流の句を選んで刻す」とある。

ちなみに遊印は「文人の用いる雅印の一種。また書画の下方に押印されるので押脚印ともいう。古璽・漢印の古語に始源するが、現在は好みの詞句・語句を刻り、形式も自由である。とあり、また成語印は「引首印、遊印もこの中に含まれる。詩句名言などを刻するもので、現在作品として表現されるものの大半が、この成語印である」としている。

俳諧の採点に、主として長方形の印形をいつごろから使いはじめたのか私にはわからないが、引首印・遊印・成語印などが、文人たちの間で盛んに作られるようになるにしたがい、このような印が用いられるようになったものかもしれない。

今、書道用品・画材店にゆくと、先に述べた青田石以外に、福建省の寿山石^{じゅざん}、内モンゴルの巴林石^{ぼりん}などが豊富に並んでおり、国産の石の印材は全くみられない。また同書の対談で篆刻の石材について、柔らかくなければ彫れないし、ある程度堅くないと彫った後で崩れますから。そういう石は、世界広しといえど、中国にしかなく、しかもその中国でも、いい印材は全部採り尽くされてしまったというところに、印材の希少価値があるのですね。

私はずいぶんいろいろな所で石を見ているのですが、中国以外にはないですね。中国でも出るのは福建省と浙江省だけです。特に田黄^{でんおう}や鶏血^{けいけつ}のような貴重な石は全部掘り出されて、なくなってしまったというわけなのです。

と語られている。

良いものが掘りつくされていても、やはり印刻の石材は中国に頼っているようだ。昨今、硯は端溪など中国産が珍重され日本国内でも多く出まわっているようだが、江戸時代では近江の高嶋硯や長戸の赤間硯が多く用いられた。現在でも普及品の硯としては、山梨の雨端、秋田の雄勝のもの文具店などで見ることができる。この点、印材と硯とは事情が幾分かちがっているようだ。

発掘でみつかった印判は、2点とも上に述べた青田・寿山・巴林など、現在画材店などで目にするのできるものとは異なっており、国産の石と考えられる。見た目も特に美しくはなく、また彫るのには堅そうに見える。

一部の文人は、中国渡来の田黄・鶏血などの高級印材を入手したのかもしれないが、「普通の」文人は手近にある石材（あるいは木材など）を使って、苦勞して彫刻したのだろうか。

『雑俳集成』に掲載されていた挿図から、確証はないものの発掘で見つかった印判の用途の可能性を示したが、川柳とくらべとり上げられることの少ない「雑俳」にも、『俳諧觸^{けい}』十一編首書に、

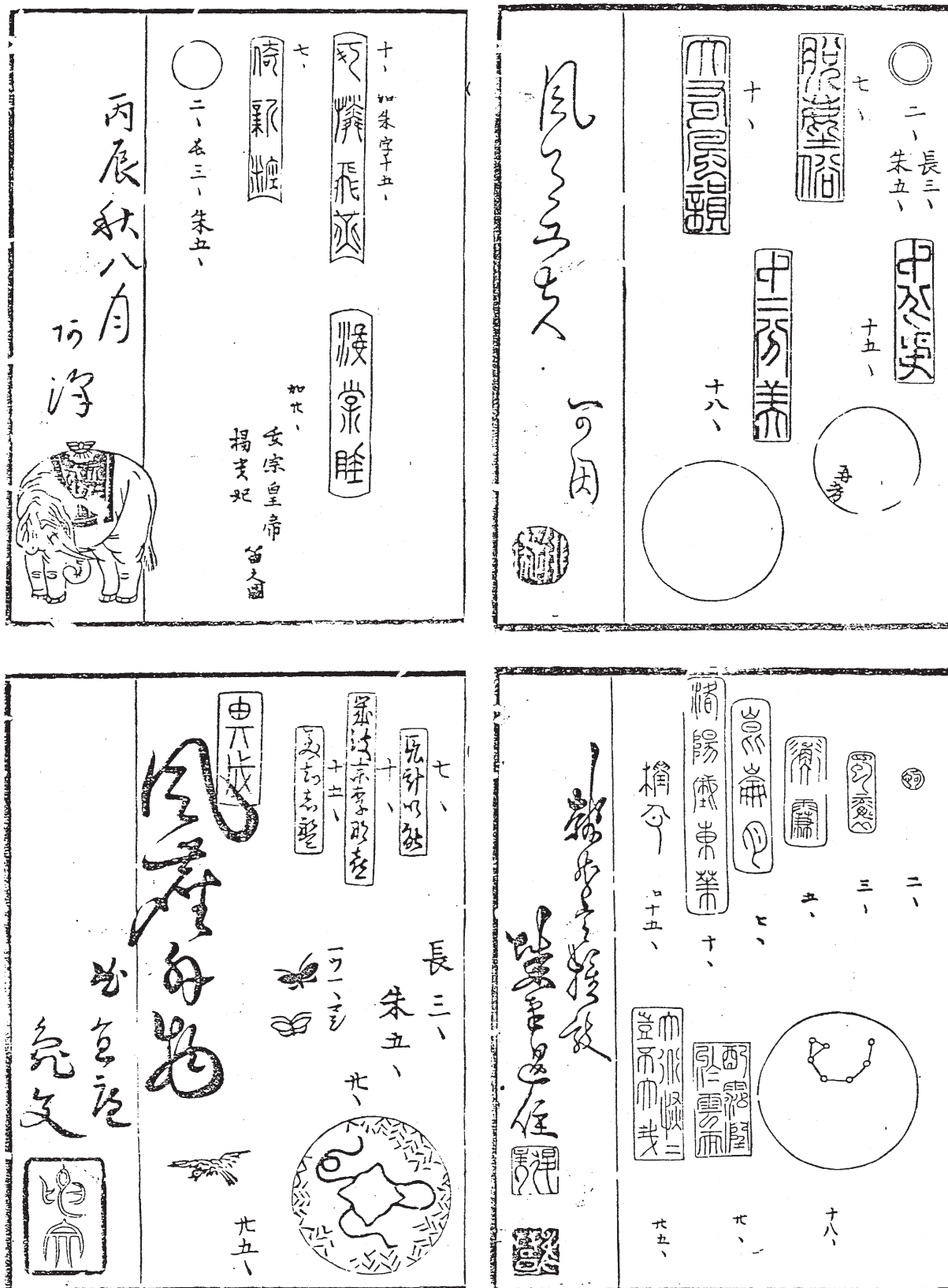
夫今の俳諧てふものは、雲上の君にも耕耨の事までをしらしめし、下萬民は簾の間もるゝ香をしり、人情に通ずるの道なり

とあるように、人々の暮らしに関する多くの示唆が含まれていることがわかった。享保時代にさかんに進められた防火建築のうち、簡易版である蠣殻屋根が、幕末には一般の家屋でほとんど用いられなくなる反面、隠居所など風雅を求めたい小屋^{しょうおく}などに、(昔を偲んで)意識的に用いられたことが推定できたのも、この『雑俳集成』からであった。

川柳に比べて(少なくとも私にとって)面白みが極めて少なく、読み進めてゆくとひどく首・肩の凝るものではあるが、集録された膨大な句によって知ることのできるが多いことを、改めて認識したことであった。



第3図 『誹諧鱸』十三編にみえる点者の印判(2)
 左上：長鶴 右上：秀億 左下：抱一 右下：泰道



第4図 『誹諧鑑』十三編にみえる点者の印判(3)
 左上：阿澤 右上：可因 左下：龜文 右下：退住

東京大学構内遺跡調査研究年報 6
2006 年度

2008 年 3 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4-6-1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>
印刷 中西印刷株式会社
